
花束と犬とヒエラルキー

葉月香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花束と犬とヒエラルキー

【Nコード】

N9948Q

【作者名】

葉月香

【あらすじ】

短いバカンスの時期に出会い、一目惚れした相手を追って、オーヴェルニユの田舎から単身パリに出てきたルネ。その男ローランの手によって磨かれて、彼は普通の男の子から洗練された美貌の秘書に変身するが。愛する上司のために命がけで尽くしぬく敏腕秘書君の恋物語です。

ボーイ ミーツ ボーイ(1)

愛は最高の奉仕だ、微塵も自分の満足を思っではいけない。日本の有名な作家の言葉らしいが、また随分とマゾっぽくはないだろうか。

最初に聞いた時、まさに今の自分の置かれた状況を物語っているようで身につまされると、ルネ・トリユフォーは思ったものだ。

フランス各地にあるシャトー・ホテルとレストランを経営する会社、ルレ・ロスコーのオフィスは、パリ一区にある、もとは古い瀟洒なホテルを改築した五階建ての建物の中にある。

マスコミへの露出度の高い社長のおかげで知名度もぐんと上がった、この会社の実質的な経営者が、副社長のローラン・ヴェルヌであるということは、社の内外で既に周知の事実だ。

そのローランの秘書であるルネは、上司仕込みの洗練された身のこなしで今朝もオフィス・ビルの玄関をくぐった。よく見知った警備員と目が合えば、にこやかに挨拶をし、ホテル時代の面影を残すアンティークなエレベーターに乗り込む。

「すみません、乗ります！」

慌てた様子でエレベーターに駆け込んでくる女の子が2人。

同じ建物に最近入ったファッション誌の社員のようにだ。ルネが素早くドアを押さえてやると、彼女達はルネの顔を間近で見ると一瞬驚き、ぱつと頬を染めた後、『メルシー』と言った。

ルネがここ働くようになって2年近く、いつもと変わらない、朝の日常。

もっともその2年の間に、ルネ自身は以前とは別人のように変わ

ってしまったのだが。

（ねえ、彼つて、一体どつちだと思う…まさか本物の大天使じゃないわよね…？）

（ガブリエル本人はほとんどオフィスには顔を出さないと言うから、やっぱり、そっくりさんの秘書の方でしょうよ。雰囲気は何となく親しみやすいし…）

（ああ、例の『小天使』ね）

ひそひそと小声で囁き交わしている女の子達の声は、ほとんど筒抜けだったが、ルネは顔を壁の方に向けたまま、何も聞こえていないふりをした。

この容姿のせいでいまだに頻繁に発生する勘違いや誤解、たわいない冗談やからかいの種にされることにいちいち目くじらを立てるほど、ルネはもうナイーブではない。

（それでも、小天使なんてあだ名は、ちょっといただけないと思うけれどね）

鏡張りになっているエレベーターの壁面には、蜂蜜色の柔らかそうな髪と空色の瞳をした、ほっそりと優雅な姿が映っている。

ころつと愛嬌のある鼻の形だけは違うが、本物のガブリエルと会ったことのない女の子達が見誤るのも無理はないほど、それは、ルネの直接の上司が愛し敬う、ルレ・ロスコーの社長に酷似していた。だが、パリに来る前は、こうではなかった。かつてのルネは、癖のないブルネットの髪をした純朴なオーヴェルニュの少年にすぎず、適当に買ったノーブランドの टीーシャツとジーンズが普段着だった。あるいは、子供の頃から習っていた空手や柔道の道着姿か。

鏡の中の青年を見る度、いつもながら、これは一体誰なのだろうと不思議な気分になる。

「おはようございます、ルネさん」

「おはよう、オリビエ、今日も早いね」

ルネが五階の副社長室に隣接する秘書室に入ると、一か月前にここに入ったばかりの研修生のオリビエが、人懐っこそうなそばかす

顔を向けて、挨拶してきた。

「副社長室の掃除は済ませておきました。ムツシュ・ヴェルヌのデスクに用意しておく新聞と雑誌は、これでよかったですか…？」

「ああ、大丈夫、間違いないよ」

「では、置いてきます」

「ああ、待つて、そのままじゃ駄目だよ。新聞の折り方だとか、雑誌の並び方だとか、ムツシュの好みがあるから…やっぱり僕がやるよ」

ルネは、ちらつと壁の時計を見やりながら、素早く副社長室に入った。オリビエの掃除と整理整頓の微妙なあらをチェックし修正すると、重厚な木目のデスクの上に、雑誌のタイトルが一目で分かって選びやすいよう綺麗に並べた。

「これで、よしと…」

黒い革張りの椅子の背もたれにそつと手を滑らせ、ルネは一瞬ぼんやりした。

「ローラン…」

秘書室のドアがやや乱暴に開けられる音がし、緊張したオリビエの声が聞こえるのに、ルネは副社長室のドアの方に顔を傾けた。

「ルネ、そこにいるのか？」

低い声が呼ばれるや否や、ルネの視線の先にあるドアが大きく開かれた。

ルネは一瞬のうちに気持ちを切り替えて、有能で信頼できる秘書の顔を作ると、いつも通り慎み深く丁寧な物腰で愛する上司を迎えた。

「おはようございます、ムツシュ・ヴェルヌ」

ローラン・ヴェルヌは鋭く光る翠眼でルネを見据え、その服装や態度が自分の基準に照らして完璧なのを見て取り満足したのだろう、鷹揚に頷き返した。

ローランはまだ30前の若さだが、やり手と名が通っている経営者らしく、いつも自信と覇気に満ち溢れている。ダーク・グレーの

スーツを隙なく着こなした、背筋のすつと伸びた長身の姿は、モデルか俳優だと言っても通りそうなほど決まっっていて、我が上司ながらほればれするほど格好がいい。

しかし、ローランのことなら熟知しているルネの目は、その端正な顔にうつすらと疲労の色が滲んでいることを見て取っていた。

無理もない。ほとんどオフィスに顔を出しもしないで自分の好きな料理研究に血道をあげている社長に代わり、朝から晩まで分刻みのスケジュールで働いているのだ。週末金曜日となれば、さすがに疲れも出てくるのだろう。世の経営者の平均年齢よりはるかに若いとは言っても、やっぱり30前である。

ルネはドアの向こうから恐る恐る顔を出しているオリビエに目配せをし、既にスタンバイしているコーヒー・メーカーのスイッチを入れるよう指示を出した。

15分後には、四階の会議室でミーティングが始まる。その前に、今日一日のスケジュールの確認などを素早くすませなくてはならない。

「…会議が終わった後の今日の予定ですが、10時にホテル・サン・ジオルジュのムッシュ・アルダンがご訪問、その後、人事部のレオンスと採用の件で面談、11時15分に雑誌の取材が一件…」

ローランは渋い顔をして、ルネが読み上げるスケジュールを聞きながら、オリビエが運んできたコーヒーを飲んでいる。

「ルネ」

「はい？」

話を遮られて怪訝そうな眼差しを向けるルネの前に、ローランはデスクから取り出した一枚のカードを投げてよこした。

「後で、ここの花屋に電話をして、正午までに薔薇の花束をオフィスに届けるよう頼んでおいてくれ。大輪の赤いバラを30本…品種はアマダかローテ・ローゼがいいな」

ルネが物言いたげな眼差しを向けると、ローランは黒い革張りの椅子の背もたれに体をもたせかけながら、悪びれもせず言った。

「それから、ムツシュ・サトウとのビジネス・ランチの約束はキャンセルしておいてくれ。代わりに、別の予定をねじ込むからな」

「…分かりました」

ルネは一瞬躊躇った後、さりげなさを装って尋ねてみた。

「念のためにお聞きしますが、代わりの予定というのは…？」

「ガブリルエルとの会食だ。昨夜夕食を共にする約束だったのを、仕事で長引いて遅れたものだから、あいつの機嫌を損ねてな…まあ、薔薇の花共々、その埋め合わせだな」

立派に働いている男を捕まえて、少しくらい夕食の時間に遅れたからといって不機嫌になるとは、一体どういう見だ。のんびりものを食っているだけが能の道楽者のくせに。

大体会社経営など、本来はガブリエルがすべき仕事だろう。そんなに嫌ならさっさとやめてしまって、ローランを社長の座に据えればいいのだ。その方が対外的にも、ルネの心情的にも、よほどすつきりする。

一瞬イラツとしたルネだったが、ローランの絶対的君主に対する批判を口にするわけにはいかず、上品に眉をひそめて見せるだけにした。

「何だ、不満顔だな、ルネ？」

ローランは、ルネの考えていることなどお見通しとばかりに、揶揄するよう聞いてきた。

「僕が不満を覚えているか否かは問題ではないんです、ムツシュ・ヴェルヌ」

ルネは、パリに出てきてから苦勞して覚えたポーカー・フェイスを何とか保つと、ローランの深い緑色の瞳をまっすぐに見返しながら答えた。

「あなたが、あなたの天使の我が儘や無体を容認し、そのなさりように別に何の不満も感じないのであれば、僕もあえて口を差し挟もうとは思いません」

「では、その口は閉じておくべきだろうな、ルネ」

ローランはルネの挑戦的な視線をこともなげに受け流して、にやりと悪そうに笑い、片目を瞑ってみせた。

「ついでに言うなら、もう少しにこやかな顔をしてくれないか、ルネ。朝っぱらから、愛するガブリエルそっくりな顔にむっとりとした機嫌悪そうにされると、何やら胸が痛んで仕方がない」

恥ずかしげもなくよく言う。さすがにちよつと呆れてしまったルネの前で、ローランはおもむろに革張りの椅子から立ち上がった

「それから、もう一つ」

「あ」

いきなり、ローランはルネの腕を掴んで、自分の方に引き寄せた。手にしていたスケジュール帳を取り落としそうになってルネは、慌ててそれを掴みしめる。

「な、何ですか、ムツシュ…?」

ローランに息がかかりそうなほど間近で顔を覗きこまれたルネは、動揺のあまりほとんど素に戻って問い返した。

「俺に出すコーヒーは、おまえが淹れる…研修生に任せて手を抜くなんて、許さんぞ」

低く甘い響きの声に耳朶をなぶられて、はからずも体が震えだすそうになる。

「で、でも、豆を用意したのは僕ですし…いつもの店で買ったあなたの好みのブレンドです。そもそもコーヒー・メーカーを使うなら誰が淹れても同じだと思いますが…?」

「俺は鼻が利くんだ。おまえが淹れたコーヒーの方が断然香りがいいし、口に合う。俺の好みを熟知し、完璧に満足させてくれるのはおまえしかいない…他の誰もおまえの代わりになどなれるものか」

ああ、そうでしょうね、何しろあなた、『犬』だから…心の中で密かに突っ込んだルネだったが、ローランに甘やかすように囁かれ、髪に指をさしこまれて優しく愛撫されると、自然と唇が綻んでしま

う。

(駄目だ…我ながら馬鹿だとは思うけど、僕は、本当にこの人には

甘い。この人が、ガブリルエルに対して盲目的に甘いと同じほど、僕はこの人を盲目的に愛している)

ローランはルネの表情がとろんと蜂蜜のように溶けていくのを満足そうに眺めると、そのふつくらと柔らかな唇に、ちゅっと軽い音を立ててキスを落とす。

「ルネ、おまえは俺の理想に限りなく近い」

ルネはおずおずと手を伸ばして、ローランの頬に触れ、綺麗にかしつけられた艶やかな黒髪に指先を滑らせた。

「ローラン……」

ローランの逞しい腕の中、ふわりと漂う、彼の愛用の『ゴイスト』の香りが鼻腔に広がって、ルネは、朝っぱらから官能的な気分になつた。

(いやいや、始業時間を過ぎてこれはちょっとまずいでしょう……ああ、でも……)

現実的な思いがルネの頭をかすめるが、たちまちかき消されてしまう。

体を密着させてキスを交わしている、この一時、いつもは他の人を見ているローランが自分だけのものになつてくれたかのようで、嬉しい。

「もう……朝からこんなことをされてしまったら、今日一日仕事に集中できなくなりそうです」

ローランの強引な抱擁からやっとの思いで抜け出したルネは、ほろりと甘い息を吐いた。オフィスに在る間は秘書としての節度を保とうとの努力を簡単に打ち壊してくれたローランに恨み事を言いたくなるも、それはぐっと飲み下す。

「おまえは、とても優秀な秘書だから、俺と2人きりでいる時とそうでない時の気持ちの切り替えくらい、何なくできるさ」

ローランは、ルネの頬から唇にかけて指でなぞりながら、そんな無責任な言葉を吐くと、ちらつと壁の時計を確認した。

「あ……そろそろ会議の時間です、ムッシュ」

うつかり本気で忘れるところだったルネは、内心焦りながら、ローランを促す。

「…さて、では俺も、気持ち切り替えることにしよう」

ガブリエルの機嫌取りを最優先させても、ルネとのいちやいちやにかまけて職務を疎かにすることはないらしい。ローランは瞬く間に、仕事モードの厳しい表情に戻って、ルネに事務的な命令を幾つか残した後、足早に部屋を出て行った。

(ほんとに嵐みたい人なんだから…)

いつも自分を振り回す身勝手な愛しい人の背中を、ルネはうつとりと見送った。数分前まで苛々していたのが、あんな口先だけの優しい言葉とキスだけでたちまち上機嫌になるなんて、我ながら単純なことこの上ない。

(何だか、またあの人にいいように丸めこまれてしまったような気もするけれど…まあ、いいか。細かいことには目を瞑って、ローランのしたいようにさせてあげればいいんだ。ガブリエルに対するローランの忠犬っぷりは今に始まったことじゃないだし…愛する主人の満足した顔を見て、あの人が幸せになれるなら、それでいいじゃないか。僕は僕で、ローランの喜ぶ顔を見たいから、つくす訳で…)

ルネは、髪や服の乱れを手早く直し、何事もなかったかのように秘書室に戻っていった。その足取りは、心なしかうきうきと軽い。

「ルネさん、どうしたんですか、顔が赤いです…？」

部屋に戻ると、整理中の書類の束から訳知り顔を覗かせたオリビエが、すかさず声をかけてくる。

ルネがローランの『愛人』だという噂はずっと前から社内に流れていて、もうほとんど公認に等しい。

どうぞ勝手によくやってくれとか、あんな難しい人の相手は大変でしょうというような生温かい励ましの目で見られることが日常化した社内では、まだ新人のオリビエの興味津々の態度はむしろ新鮮なくらいだ。

しかし、お互い独身で何も問題ないとはいえ、経営者とその秘書の恋愛を自らおおっぴらに話題にするほどには、ルネも凶々しくはなれない。だから、一応とぼけてみる。

「空調のせいだよ、きつと…」

ルネはこほんと咳払いをすると、オリビエの意味深な視線避けるようにしてデスクに座った。

念のため、引き出しから鏡を取り出して、自分の顔におかしな点はないかチェックしてみる。

別ににやけた顔にはなっていないが、金髪に染めた髪の毛の生え際に黒い地毛が目立ってきたことに気がついた。

（ああ、明日にでもまた染め直さなきゃ…ローランは僕の外見にもうるさく注文をつけるから）

ローランの望みどおり髪の色まで変えて、彼の愛する者にそっくりな姿となつて、そうまでして、一体、自分は何がしたいのか。

『ルネ、おまえは俺の理想に限りなく近い』

まるで自ら手がけた作品に評価を下すような、この上もなく満足そうなローランの囁きが脳裏によみがえる。

（でも、僕はガブリエルじゃない…いくら姿かたちを似せてみたくて、本当の本物にはなれない。そんなこと、『本物』を見慣れているローランが一番よく知っている。それでも、ローランは僕を選んで傍に置き、自分の好みにあうよう、少しずつ手を加えて磨き上げていった…その結果として、今の僕がある）

ルネはちよつと複雑な気分になつたが、悶々としたものを無理矢理振り払って、彼から預かった店のカードを手元から拾い上げた。

（さて、大輪の赤いバラを30本、正午までに持ってこさせなきゃ）
ガブリエル・ドウ・ロスコーのために花束を電話で注文したり、

あらかじめローランがオーダーしておいた気のきいたプレゼントを店まで受け取りに行ったりしたことが、これまで何度あったらう。

間近で見る機会が増えたためにルネの目も肥えたが、自ら買って身につけようとは思わない贅沢な逸品、1人暮らしのアパルトマン

の部屋ではつきそうな芸術品にも美しい見事な花々、それらはまさに天上人のガブリエルにこそふさわしい。

（ローランに一番愛されて、宝物のように大切に大切に氣遣われていたガブリエルが羨ましくないとはいわないよ。もしも自分がガブリエルのようにローランに尽くされたら、そりゃ天にも昇る心地になるかもしれないな…でも、やっぱり、僕には無理だ。そんなことになったら、きつと背中がこそばゆくて落ちつかなくなるに違いない、向いてないもの…豪華な赤い薔薇が僕向けじゃないように、自分にふさわしくないものを望んだりはしないよ。僕が望むのはただ、大好きなローランが）

ルネは心の中に浮かんだある思いにふつと微笑むと、愛する主人の命を忠実に果たすべく、電話の受話器を取り上げた。

ボーイ ミーツ ボーイ(2)

あれは、まだオーヴェルニュ大学の学生だったルネが、春休みにクレルモン・フェラン郊外の実家に帰っていた時のことだ。

ルネの実家は兄夫婦と共に農家を営んでいて、その手伝いとして、村の近くにあるオーベルジュに新鮮な野菜を届けることが、ルネの日課となっていた。

何でも、このオーベルジュは食通の人々には有名で、交通の不便な山間の村にあるにもかかわらず、遠くパリからも訪れる客で数カ月先まで予約でいっぱいなのだそう。

「…今日の注文分の野菜と卵と…足りないものはないですよ？」

あ、これはおまけで、自家製のリンゴのブランデーです。味見して、気に入れば、また持ってきますよ。」

「うん、いい香りだね。これなら、地元の珍しい物を好むお客にサービスとして出してもいいかな…」

「この間のジャムも気に入ってもらえたようで、母さんが喜んでいましたよ。」

顔なじみのオーナー・シェフは、頭がよくて目端のきくルネを日頃から気に入ってくれているようだった。

だからだろう、こんな依頼を急にしてきたのは。

「な、ルネ君、君を見込んで頼みがあるんだが 今日と明日、予定は空いているかい？ もしよかったら、うちでアルバイトをしてくれないか？」

「これからですか？ 別に今のところは何も用はありませんが…アルバイトって、どういう内容ですか？」

「今ちよつと特別なゲストがうちに泊まっているんだ…いや、正確には泊まるはずだった。ところが、肝心の主賓が急用で来られなくなり、昨夜遅くここに到着したもう1人は、相手がいなくて退屈をもちあまし、せっかくパリからここまで来たのに、もう帰ると言い

出す始末だ」

「…それは、その人の勝手ではないんですか？」

ルネが正直な感想を述べると、オーナーは困ったように顔をしかめた。

「確かにその通りなんだが…うちの仕事上でも大切なゲストなもので、できれば、このオーベルジュに対していい印象を持って帰ってもらいたいんだ。うちは料理が自慢の宿だが、車でちょっと足を伸ばせば、風光明媚な景色や見どころもたくさんある…だから、この辺りに詳しく気の利いた人間をガイドとして雇って、ムツシュの世話を任せたいんだ」

「そう言えば、バカンス客のガイドなら、去年の夏休みにも引き受けたことがありましたねえ。いいですよ、一日二日くらいなら…パリから来た人と話をするのも面白そうだし…」

「そりゃあ、よかった。君なら、安心して、あの人のことを頼めるよ、ルネ…話相手としても楽しいし…いざって時には、ボディーガードにもなってくれそうだしね」

オーナーのほのめかしに、ルネはちよつと苦笑いをした。

「随分な気の使いようですね、そんなに大切なゲストなんですか？でも、パリならともかく、この平和な田舎でボディーガードの必要なんかないですよ、オーナー」

オーナーは、軽い気持ちで引き受けたルネの手をぐつと握り締め、振り返すと、彼には庭の方に出て待っているように言い残し、件のゲストを探しにホテルの奥に入ってしまった。

「うん、今日は天気もいいし、この分だと昼から結構気温も上がりそうだな」

ホテルの裏手にある庭からは、新緑の美しい森と湖、その向こうにそびえるオーヴェルニュ地方の起伏にとんだ山並みが望める。

さわやかな風と共に野生の水仙の甘い香りが、どこからともなく漂ってきて、ぼんやりと庭を散策するルネをうっとりさせた。

可憐な春の花々が顔を覗かせている庭を眺めまわしながら歩く、

ルネの目が、次の瞬間、僅かに見開かれた。

(あ)

庭の中心には大きなマロニエの樹があった。

その下には散策に飽きた人が休めるようベンチが備えてあって、そこで1人の男が昼寝　というには少し早い時間ではあったが　を　していた。

ここに宿泊している客だろう。見知らぬ他人の休息を邪魔する理由もないので、ルネはそのまま通り過ぎるつもりだった。

しかし、なぜか気になって、足音を殺して樹の下まで行くと、長身の体を幾分窮屈そうにベンチに横たえてうたた寝をしている男を見下ろした。

「……………」

ボーイ・ミーツ・ガール…いや、この場合、ボーイ・ミーツ・ボーイか。

ルネは、胸の内で密かにううんと唸った。

更に数歩、大きく広がったマロニエの木立から洩れかかる光を浴びながら眠りこんでいる男との間合いを詰め、改めてじっくりとその姿を観察した。

バカンス客らしく身につけているものはカジュアルでシンプルなデザインだが、胸元の開いた白いシャツにしる、深いカーキ色のジャケットにしる、ものはよさそうだ。

濡れた鴉の羽のように真っ黒な髪。意志の強そうなくつきりと男らしい眉。すつと通った鼻筋と口元の線の端正なことといったらなくて、ルネがこれまで出会った男の中で、文句なしに一番のハンサムだ。

ルネの無遠慮な視線にも一向に気づかず熟睡している所を見ると、よほど疲れているのだろうか。

ベンチの上から半ば投げ出された手の下には、都会のビジネスマンが愛読していそうな経済紙が落ちていた。

ルネは地面からその雑誌を拾い上げ、男の手元にそっと戻してや

った。その間も、どうしても彼の寝顔から視線を離せない。

要するに、物凄くルネのタイプだったわけだ。

精悍さと甘さが丁度いい塩梅で備わった顔立ちも、肩幅の広い、いかにもスポーツで鍛えられたような逞しい体つきも、日ごろ見慣れた村の男達とは一線を画する洗練された雰囲気も。

この頃のルネには一応付き合っている年上の恋人もいたのだが、農業者組合に勤める根っからの農民の彼は、この男と比べるとやはり垢抜けない。

だからだと付き合って三年、今ではほとんど惰性と化した関係だからか、自分のものではなくてもいい男が目の前に現れると気持ちぐらついてしまう。

問題は、ルネがいいなと思っても、大抵の場合、相手が同性には興味がないということだ。

大学に行けば多少状況は改善するかと思っただが、普通に暮らしていて、なかなか同性を好むいい男とは巡り逢えない。

今の彼のの前には、以前通っていた柔道教室に憧れの先輩がいて、ちょっといい雰囲気になり、キスくらい交わしたこともあったが、それ以上発展することはなく、あることをきっかけに振られてしまった。

自分の性向には早くから気付いていたルネだったが、そんな訳で出会いの機会には恵まれず、理想と現実のギャップに日々欲求不満を募らせていたのだ。

(あ、無精髭が生えかけてる…)

いつまで経っても相手が目覚める気配がないことで、次第に大胆になってきたルネは、そつと手を伸ばして男の顎に指先で触れようとした。

その手を、横から伸びてきた別の手が掴み締めた。

「ひっ」

思わず、ルネは悲鳴をあげそうになった。

焦りまくるルネの見る前で、黒髪の男はゆっくりと瞼を上げた。

まだ半ば夢を見ているような、その瞳は、深い森の色をしていた。

「誰かと思えば…おまえか、ガブリエル…」

不審者として糾弾されるかと思いきや、彼は、動揺するルネに向かって優しく微笑みかけてきた。

「あ、あの…僕は」

頬がかつと熱くなるのを覚えながら、必死に言い訳を考えるルネの頭に男の手がかかる。

「えっ…？」

強引に引き寄せられたルネは、気がつけば男の腕の中、戸惑いの声を発しかける口を彼の唇で塞がれていた。

（えっ…えええっ?!）

一瞬かっとなったルネは、男の胸倉を引つ掴んで投げ飛ばしそうになったが、すんでの所でぐっつと堪えた。

素人相手に柔道技を仕掛けて、怪我をさせる訳にはいかない。ルネの理想を絵に描いたような、こんな男にそれで嫌われてしまうのは、もつと嫌だ。

それにしても。

（どうしよう、この人、すごくキスがうまい…）

緊張のあまり固くなってしているルネの体と心を蕩かせるほど、彼のキスは情熱的で、巧みだった。

ルネはつい、戸惑いも恥ずかしさも忘れて、積極的にキスに応えてしまう。

（まるで恋人のように僕を抱きしめて、こんな甘いキスをくれる…
あなたは一体誰…？）

夢見心地のルネの耳に、その時、遠くからオーナーが自分と呼ぶ声が聞こえてきた。

「ルネ、おい、ルネ、どこにいるんだ？」

一気に現実に取り戻されたルネは、男の腕から身を振りほどいて、よろよろとベンチから退いた。

「あっ…あなたは…？」

震える我が身をひしと抱きしめ、息を弾ませながら尋ねるルネの
見る前で、男はゆっくりとベンチから起き上がって、軽く伸びをし
た。

「うん…？」

完全に目を覚ましたらしい男は、胡乱そうにルネを見やった。先
程までの親密さは、その目には微塵も残っていない。

「そうだな、あいつがここにいる訳ないか」

どこか寂しげに、自嘲混じりに漏らした呟き。

「しかし、一瞬俺が見間違うのも無理はない…そっくりだ…」

男はルネの頭のとっぺんからつま先まで遠慮のない眼差しでじろ
じろと眺めまわし、立ち上がった。

「おい、おまえは何者だ？　ここで一体何をしている？」

「あ、あなたこそ、一体何なんですか…いきなり僕にあんなことを
しておいて、その態度はないでしょう！」

先にちよつかいを出したのは自分だという後ろめたさと動揺を隠
すため、ルネはわざと怒ったように口ぶりで抗議したが、男は意に
介した様子もなく、服と髪の流れを手早く直しながら、ずけずけと
言った。

「謝らなければならぬことをしたとは俺は思っていないぞ。喜ん
でいたじゃないか、おまえも…」

「なっ…」

凶星を指されたルネは真っ赤になった。一瞬男に対して殺意を覚
えるが、ここでも、つい繰り出しそうになった鉄拳を必死で抑えこ
んだ。

柔道だけでなく空手でも、達人レベルに達している自分が殴った
ら、大変なことになってしまう。

「ルネ、そこにいたのか」

草を踏みしめる足音と共に、オーナーが木立の向こうから現れた。
彼は、険悪な雰囲気で見つめているルネと黒髪の男の様子に一怯
んだようだが、すぐにこやかな愛想のよい顔になった。

「おお、ムツシュ・ヴェルヌもご一緒でしたか。これは、話が早い」
あきらかに相手の機嫌を窺う態度のオーナーに問いかけるような
眼差しを向けると、彼は神妙な面持ちでルネに目配せした。

「ルネ、この方が、先程お話ししたゲストだ。ムツシュ・ヴェルヌ
…この子が、今日と明日の二日間、あなたのガイドとお世話役を頼
んだルネ・トリュフォーです。とてもよく気がつく、いい子ですか
ら、退屈を紛らわせるにはうってつけの相手になるでしょう」

「えっ？」

それでは、この男が例のパリから来たオーナーの大切なゲストな
のか。一緒に宿泊するはずだった連れ たぶん恋人だろう が急に
来られなくなつて、落胆しているという…？

「別にガイドなど必要はなかったんだが…」

ヴェルヌと呼ばれた男は眉根を寄せて、うつそりと呟いたが、す
ぐに気を変えたようだ。

「そうだな…確かに、退屈のぎにはなつてくれそうだ」
「う…」

意味深な台詞を吐いた後、男はオーナーに向かって鷹揚に頷き返
し、必死に動揺を押し隠しているルネに改めて向き直つた。

「俺は、ローラン・ヴェルヌだ。ルネ、よろしく頼むぞ」

どんな反応をしたらいいのか分からず、ぼかんと口を開けたま固
まっているルネを、ローランは目を細めるようにして眺めた。

おまえの本音などお見通しだぞと言わんばかりの表情に、ルネの
胸の奥の心臓が激しく震える。

そう、ルネはローランに完全に一目ぼれをしていた。

柔らかな木漏れ日を浴びながら、無防備にベンチの上でうたた寝
をしていた彼を一目見た時から 実際目が覚めて動き出すと最初の
印象とは大幅に違う気がしたが、ガイドとして彼と一緒にいられる
かと思うと胸が高鳴りを押さえられない。

（でも、僕には一応付き合っている相手がいるし、たぶん彼にだつ
て恋人くらいいるだろう…それに、どうせすぐにパリに帰ってしま

う人なんだ、別にどうこうなりたいとは思わないよ。でも、それならそれで、この二日間、一生懸命この人に世話役に徹しよう。この人が満足してパリに帰ってくれるなら、僕も嬉しい…きつといい思いい出になるだろうから…)

何とか気持ち奮い立たせたルネは、すつと息を吸い込んで、ローランをまっすぐに見ながら礼儀正しく応えた。

「こちらこそ…さきほどは失礼しました。よろしくお願いします、ムッシュ・ヴェルヌ」

「ローランでいい…」

口元を優しく綻ばせて、どこか親しげに、ローランは言う。

こちらに向けられた彼の目 自分を見ているようで見ていない、遠くにある別のものを追っているかのような に、ルネはふと違和感を覚えたのだが、それが何なのか、この時にはまだ分からなかった。

その後続くローランとの二日間は、ルネの徹底した気配りと機転の良さによって、その終盤近くまでほとんど問題もなく順調に進んだ。

気難しい人かと初めは思われたローランだったが、ルネのガイドでドライブしながら近くにある湖や洞窟、ロマネスク様式の教会を訪れたり、家族経営の小さなワイナリーで地元産のチーズと一緒にワインを試飲したりしながら、終始上機嫌に見えた。

ルネに対しても、二度とホテルの庭で見せたような傲岸不遜な態度を取ることはなく、極めて紳士的。

車から降りる際にドアを押さえてくれたり、重い荷物 農家育ちで力仕事には慣れているルネはこれくらいへっちゃらなのだが を持ってくれたり、とても優しく、うっかり惚れ直しそうになったくらいだ。

(でも、それは駄目駄目、どうせ、すぐに帰っちゃう人だもの…本気で好きになったら、別れるのが辛くなる)

そんな訳で、ローランに対するルネの好感度は上がる一方だった

のだが、変だと思うことが全くなかったわけではない。

ローランは時々、何とも言えない熱っぽい潤んだ瞳で、ルネの姿を注視していることがあった。さすがにちよつと薄気味悪くなってきたルネが問いただと、彼はルネの癖のない濃茶色の髪に手で触れ、不満そうにこんなことを言った。

「おまえが地味で目立たないのは、髪の色のせいかな…？ 金髪に染めてみる、きつと華やかな印象になるぞ」

一体いきなり何を言い出すのかと戸惑うルネに、更には、こんなことまで付け加える始末だ。

「おまえの顔ははつきり言つて俺の好みだ。惜しむらくは、鼻の形が庶民的で可愛らしすぎる点かな」

人様の顔にケチをつけるなどと、失礼極まりない言い草だ。しかし、単純なルネは好みと言われた時点で軽く舞い上がっていたため、愛嬌があつて自分では結構気に入っていた鼻で規格外の評をローランに下されて、たちまち地べたに叩き落とされたように落ち込んだ。「…それで、おまえは大学卒業後、どうするつもりなんだ？」

二日目。湖を眺められるレストランのオープンテラス席でランチを取っていた時に、ローランはふいにルネの進路について尋ねてきた。

思えば、この二日間、ローランは折りにつけ、ルネ個人について、家族や友人関係、大学の専攻から興味関心などを巧みに聞き出していたような気がする。

個人情報を行きずりの旅行者であるローランに明かす必要はなかったのだが、たとえ社交辞令でも彼が自分に関心を示してくれたのが嬉しくて、ルネは包み隠さずに正直に話した。

「そうですね：卒業はもう二カ月後に控えていますけれど、就職先はまだ決まっていないんです。インターン・シップを経験したタイヤ・メーカーに入れるかと少しは期待しているのですが、今年は学生の新規採用は大幅に減らすとかで難しいみたいです。何とかしてクルルモン・フェラン市内で仕事を見つけたとは思っています。こ

んな小さな村に戻った所で、それこそ働く場所は限られますし、実家の農業は既に兄夫婦が共同経営していますからね」

自分の置かれた不安定な状況を口に出して、ルネは改めて憂鬱になった。

あまり景気の良くない昨今、たとえ優秀でも、コネにはあまり恵まれていないルネにとって、自分の希望を通すどころか、ちゃんとした働き口が卒業までに見つかるかどうかも怪しい。

「それは、大変なことだな」

ローランはテーブルの向こうでゆったりと食後のコーヒーを飲みながら、何事か思索している。

「ルネ、おまえは、どうしてもオーヴェルニュから離れたくないのか？」

何の前触れもなく、いきなり、彼は切り出した。

「は？」

「おまえが生まれ育った故郷をとて愛していることは、俺にも察せられるが…田舎を飛び出して、別の世界に飛び込んでみれば、思いもよらないチャンスが掴めるかもしれないぞ？」

想定外の質問に目をパチクリさせるルネが見守る中、ローランはポケットから取り出したビジネス・カードを一枚、テーブルの上に置いた。

「卒業後、気が向いたら、パリまで俺を訪ねてこい。俺はおまえが気に入ったし、ここで出会ったのも何かの縁だろう…悪いようにはしないぞ」

「ええっ?!」

まさに降って湧いたような就職話に、ルネはしばらく返す言葉も見つからず、ローランのどことなく自分の反応を意地悪く楽しんでいるかのような笑顔を、ぽかんと見返すのみだった。

「まあ、まだ時間はあるんだ…俺もすぐに返事は求めんから、ゆっくり考える」

ルネはおずおずと手を伸ばして、ローランのカードをテーブルか

ら拾い上げた。

「ルレ・ロスコー…ホテルとレストラン経営をしている会社なんですか…？　ローランは、そんなにお若いのに副社長なんですか…？」
「親族経営のワンマン会社だからな。ちなみに今年就任したばかりの社長は俺よりもっと若いぞ。あいつを補佐するため、俺は今の役職を賜ったのさ」

社長を『あいつ』呼ばわりするのかとルネは驚いたが、ローランの口ぶりにこもった深い親愛の情には、何かしらはつとさせられた。もしかしたら、ローランと一緒にここを訪れるはずだった人というの。

微かな疑念が頭をもたげるのを意識した時、ローランの携帯電話が鳴った。

ローランはちょっと顔をしかめて、取りだした携帯の表示を確認した。俯いた、その顔が、たちまち日が差したようにぱつと輝くのが分かった。

「…俺だ」

対応に出ながら、ローランはちらつとルネを見やった。察しの良いルネは無言で席を立ち、トイレを借りる態を装ってレストランの奥に入ってしまった。

その背中に、平静を保とうとしても、溢れ出す喜びは隠し切れていない、ローランのうきうきと弾むような声が届く。

「ああ、こっちは天気もいいし、観光には最高の日だぞ。おまえが来られなかったのは惜しいが、俺のことなら気にするな。適当に楽しんでいるからな…」

こんなにも優しく、慕わしげに彼が話しかけているのは、一体誰だろう。

気になる…とても気になる…。

でも、ローランを捕まえて、問いただす権利はルネにはない。

「パリに出て、仕事を探す、か…」

そんなことは今まで考えてみたこともなかった。ルネは、生まれ

てこの方、この地方を出たこともない。

それに噂で聞く限り、パリは、街の雰囲気もそこに暮らす人々の気質も、同じフランスとは言っても、この田舎とは別の国と言ってもいいくらいに異なるらしい。

ルネは、ローランからもらった彼のビジネス・カードに目を落とし、溜息をつきながらポケットに直しこんだ。

「都会暮らしは、きっと僕には合わない。あの人の気まぐれをあてにして、将来設計をする訳にもいかないし……」

実際、ローランは二度とその話を蒸し返すことはなかった。

それどころか、例の電話が入ってからのは彼は、ルネが傍にいても心ここにあらず、車の窓から見える美しい山間の風景にももはや無関心で、気難しげに眉をしかめて黙りこんでいる。

そう、ローランは一刻も早くパリに帰りたくなったのだ。

せつかく都会の喧騒を離れた清々しい自然の中、仕事という日常から隔絶された時間を持つ機会を与えられたというのに、現実を忘れることが出来ないとは、可哀想な人だ。

そこまでの価値が、あの煌びやかな街にはあるのだろうか。

ローランがもう観光気分でなくなったら、ガイドとしての自分も無用だなと落胆しながら、ルネが、疲れたならそろそろホテルまで帰りましょうかと提案すると、彼は迷いもせず、そうしてくれと答えた。

そんな訳で、予定よりも早く、ローランとはあっさり別れることになった。

別に期待はしていなかったが、ローランと特別親しくなれた訳ではない。彼にとって、この短い滞在が、いい思い出として心に残ってくれるのかも分からない。

「それじゃ、ムッシュ、僕はもう行きます。どうか今夜はゆっくり休んでくださいね。帰りの道中もお気をつけて……」

ホテルの玄関で、ルネは最後にローランと言葉を交わした。内心の失望は押し隠して、ルネが明るくにこやかに挨拶すると、意外な

ことに、ローランはちよつとばつが悪そうな表情をした。

「今日は悪かったな、ルネ…せつかく、おまえが張り切つてガイドを務めてくれたのに、途中から、俺は考え事ばかりしていた。こんな所で自分は何をしているのかと落ち着かなくなり、暇つぶしなどさつさとやめてパリに戻りたくなつた」

「ああ…別にいいんですよ、ムツシユ。あなたのための休暇だったんですから、あなたは自分の好きなように振舞つて、それでいいんです。ただのガイドの僕にまで、気を使う必要はありません」

「そうかもしれないが、他人の心遣いを無視して、むつつりと不機嫌な態度を取るなんて、子供じみていた。ちよつと反省している」

「あなたの口から『反省』なんて、あまり似合わない気がしますよ、ローラン」

柄でもなく神妙なことを言うローランに、ルネはつい笑み崩れながら、そう指摘した。

「それにしても…僕は訪れたことがないからよく分からないですけど、一体パリに、束の間のバカンス気分にあえ浸りきれなくさせるほどの何があるというんですか…？」

軽く尋ねたつもりが、自分でもぎくりとするほどのきつい響きが口調にこもっていたことに、ルネは焦つた。

「パリに、一体何があるかだ…？」

ローランは軽く目を見開いた。その顔が束の間空白となり、それから、ふいにぱつと目の前が開けたというような明るさが差すのをルネは認めた。

「面白いことを聞いてくれるな」

自分をまつすぐ睨み据えているルネを見下ろすと、ローランは明るく笑いながら、迷いのない口調で答えた。

「俺にとつての全てがあるのさ、ルネ」

戸惑うルネの頭に手を伸ばしてくしゃりと撫でるローランは、実に幸せそうな顔をしていた。早くも、心はパリにそこにある、彼の大切なものの上に飛んでいるようだ。

休暇中も煩わしい現実を忘れきれないローランを可哀そうな人だと感じたルネだったが、こんなに嬉しそうな顔をして戻って行けるなら、パリでの彼の生活はさぞや幸せで満ち足りたものなのだろう。「元気でな、ルネ」

ローランは悪戯っ子のように片目を瞑って見せると、くるりと背中を向け、足早にホテルの中に入っていった。

「あなたも、お元気で……」

ルネは小さく溜息をつき、バッグを持ち直して、今朝駐車場に止めたきりの自分のバンの方に歩いて行った。

ローランは、自分を訪ねてルネがやってくるのを待っているとは、言ってくれなかった。あの申し出は、やはりその場での軽い思いつきで、カードを手渡しとこともきつと忘れている。

(ローランの縁もこれきり…彼のことは、綺麗さっぱり忘れよう。たぶん二度と会うことはない……)

未練はあっても自分にそう言い聞かせ、ルネは、自分とって当たり前で代わり映えのない日常生活 差し迫った問題は就職だ に戻っていった。

ローランとの縁が切れずに、自分をパリに引き寄せようとしていることにルネが気付いたのは、それから更に四ヶ月後のことだ。

ボーイ ミーツ ボーイ(3)

大学時代を過ごし、慣れ親しんだクレルモン・フェランで就職先を見つけるといふルネの希望は、無残にも打ち砕かれた。

一端正社員として就職してしまえば手厚い福利厚生が受けられるものの、そこにたどり着くまでが大変なのが、この国だ。おまけに何の職業経験もない学生の就職事情は、こと地方都市においては厳しい。

卒業して約二カ月間、実家に頼りながら仕事先を探していたが、ついに万策尽きたルネは、大事に自分の部屋の机の引き出しにしまっておいた、あの男のビジネス・カードを引っ張り出した。

(田舎を飛び出して、別の世界に飛び込んでみれば、思いもよらないチャンスが掴めるかもしれないぞ?)

あの時は戸惑い怪しみながら聞くしかなかったローランの音が、さすがにここまで追いつめられると、天啓めいて胸に蘇ってくる。

(都会暮らしは合わないなんて決めてかかっていた僕だけども……もしかしたら本当に、チャンスが掴めるだろうか……? 未知の世界に出ていけば、仕事だけでなく、きっと新しい出会いだってあるだろうし……)

実は、だらだら付き合っていた彼氏とも卒業後すぐに破局を迎えていたルネは、心機一転、新しい恋を初めてみたい気分にもなっていた。

しかし、こんな田舎で新しい同性の恋人を見つけるのはなかなか難しい。そういう発展場もどこかにあるのかもしれないが、同性愛者だということをおおっぴらにはできない雰囲気も、どちらかと言えば閉鎖的なこの土地にあることも確かだ。今はやりのインターネットを通じて出会いを求めるのも、年の割に古風な所のあるルネには抵抗がある。

(要するに、このままここに暮らしていたら、例え就職先が見つか

つたつて、新しい恋が見つかる可能性はもつと低いつてことなんだ。それつて、すごく不幸なことじゃないか。僕だつて、誰かを好きになつて、その人のために何かしてあげたい…その人に、可愛いとか言つてもらつて、大事にしてもらいたい…ううん、自分で考えていて何だか恥ずかしくなつてきたぞ)

独り身の寂しさのあまりにルネが短絡的に思いついたのが、こういう結論だ。

パリでなら、新しい恋も見つかるかもしれない。

時代の先端に行く大都会ならば、同性愛者だつてたくさん生息していそうだ。人口密度からして田舎とは違つうのだから、好みの男と出会う確立もきつと高いはず。

ルネの理想の頂点に今のところいるのは、短い春の日々に出会つて別れたローランだつたが、田舎からぽつと出てきたルネごとき垢抜けない若者を、彼が本気で相手にしてくれるとは思えない。だから、彼を恋のターゲットにしようなんて、高望みはしない。

(ローランはガイドとしての僕の仕事ぶりを気に入つて、あんな親切な申し出をしてくれたんだ。それを、変なふうに解釈してはいけない。大体、彼が今でも、あのたわいもない約束を覚えていてくれるかも、定かじゃないのに…)

最悪、軽くあしらわれて追いつ返されるのがオチかもしれない。それでも。

(何も行動を起こさないよりは、思い切つて前に出て玉碎した方がまだましだ。昔、柔道教室の先輩がよく言つてたじゃないか、とにかく前に出て勝ちを取りに行けつて…)

まだ高校生だつた頃、淡い恋心を抱いていた兄弟子ことを思い出しかけたルネは、慌てて、その思い出を頭から振り払つた。

初恋の人に振られた経験は、ルネにとって、かなりのトラウマになつてゐる。おかげで自分に対して自信をなくし、恋にも消極的になつてしまつた。

やつと恋人を見つけても、相手に嫌われたくなくて、自分の本当

の気持ちは隠したり、嫌な面はなるべく見せないよう、変に気遣ったりする癖が出来てしまった。

（ローランは…僕が本性見せたら、やっぱり引く方かな…？ ああいう男としてのプライドの高そうな人は、僕みたいなのが自分の傍にいたときつと落ちつかなくなるだろう。だから、やっぱり内緒にして、履歴書にも書かないでおこう）

ルネは、机の傍の棚や壁にずらりと並んだ、格闘家としての自分の輝かしい戦歴を示す、トロフィーや表彰状を複雑な気分で眺めや

った。
十年に一度の逸材だとか騒がれて、世界大会やオリンピックも夢じゃないなんて周りにおだてあげられその気になりかけたこともあったけれど、武道の才能は望むような幸せを自分にもたらしてはくれないのだと気付いた時、その道を極める夢は断念した。

（そうだ、今までの僕はみんなここに置いていこう…過去は忘れて、新しく生まれ変わった気持ちで、パリでの生活を始めるんだ…！）
秋も深まりつつあった頃、無理矢理奮い起した希望と勇気で先行きの見えない不安感を一掃して、ルネはパリへと旅立った。

（えっと、カードに書かれた住所からするとこの辺りのはず…あ、見つけた…！）

友人も親戚もいない大都会に単身出てきたルネは、その足でまっすぐビジネス・カードに書かれた住所を頼りに、ローランが副社長を務める会社『ルレ・ロスコー』に向かった。

この日までに何度かオフィスに電話をかけてアポを取りつけようとしたのだが、応対に出た女性は冷たく取り付く島もない態度で、副社長はお忙しいからと取り次いではくれなかった。しつこく食い下がって伝言を託してはみたけれど、あの雰囲気ではちゃんとローランの耳に入っているかどうかも怪しく、実際、待てど暮らせど連

絡が入ることはなかった。

（ひよつとしたら、僕からの伝言をローランはちゃんと聞いていて、あえて無視しているのかもしいれないけれど…あの時の約束を本気で信じた馬鹿の相手なんか面倒臭いってことなのか。でも、それも、田舎で待っているだけでは確かめようがない）

だから、直接ローランを訪ねて、話をしてみようと決めたのだ。それで駄目なら、諦めもつくだろう。

「ルネ・トリユフォー…？ その名前は、今日の面談の予定には入っていませんねえ」

ビルの受付で確認し、上がっていった最上階。応対に出てきたローランの秘書だという女は、あからさまに見下すような傲慢な態度で、ルネを頭の前からてっぺんまで眺めまわし、つけつけと言った。おしゃれな眼鏡をかけた、なかなかの美人だったが、その嫌みな口調に、間違いない、電話対応をした女だと、ルネには分かった。

「分かっています。それを承知で、何とかムツシュ・ヴェルヌにお会いしたいんです…ほんのわずかな時間でもかまいませんから…」

「ムツシュは大変過密なスケジュールで動いてらっしゃいますから、どの誰とも知れない人との面談を無理矢理入れる訳にはいきません。大体、どうしても面会したいというのならば、予めちゃんとアポを取ってから会社訪問するべきでしょう。いきなりここに押しかけるなんて、迷惑で非常識な行為ですよ？」

「だから…！」

ルネは切れそうになるのをぐつと堪えて、辛抱強く頼み続けた。

「何度も僕はお電話をしました。伝言も残しました…」

「それで何の音沙汰もないのであれば、あなたの面会希望は拒否されたと思うべきではないのかしら…？ この頃多いんですよ、アカデミー・グルマンディーズの大天使がこの社長に就任してから、彼目当ての変な追っかけさんが、就職面談希望って口実で、強引に押し掛けてくるのって…ううん、追っかけならまだしもストーリーカーみたいな人中にはいて、まともに対応しては社の平常業務に

差し支えると、私達は大変迷惑しているの」

「アカデミ…何…?」

何の話かさっぱり分からないルネは、目をぐるぐる回した。

「えっと…僕の目当ては、社長さんじゃなくて、副社長のローラン・ヴェルヌ氏なんですが…?」

「同じことでしょう、あの二人は一心同体なんだからっ」

うんざりしたように秘書の女が吐き捨てた時、部屋のドアが前触れもなく大きく開かれた。

「何の騒ぎだ、ミラ、おまえのキンキン声が廊下にまで届いていたぞ」

「あら、おかえりなさいませ、ムツシュ…随分とお早かったんですね、ご予定ではまだ商談の最中かと…」

「物別れに終わったんで、早くに体が空いたんだ…」

どこか不機嫌そうに、ぶっきらぼうな言葉を紡ぐ、張りのある低い声。

コツコツと固いフローリングの床を叩く靴音が、硬直しているルネの後ろから近づいてくる。

それと共に、ふわりと漂ってきたコロンが、ルネの心を捕えた。

ピリツと引き締まったスパイスの香りの中に、うっとりするような優しい甘さが隠れている…いつか嗅いだ事のある、懐かしい匂いだ。

「ああ、丁度よかったですわ、ムツシュ…困っていましたの。この子がいきなり押しかけてきて、あなたに会いたいとしつこく食い下がるものですから…ルネ・トリュフォーと名乗っていますけれど、ご存知ですか?」

「うん、誰だつて…?」

ルネは反射的に、声のする方を振り返った。

(ローラン…!)

間違いない、ローラン・ヴェルヌが、そこにいた。

しかし、ルネが出会った休暇中のローランとは、少し雰囲気が変わっていた。

着る人を選びそうなピアノブラックのスーツを見事に着こなし、艶やかな黒い髪は綺麗にセットしてあるし、滑らかな顎には無論無精ひげなど残ってない。端正な顔は厳しく引き締まり、覇気に溢れて輝く緑の瞳は見る人を射抜く。ちよつと緩んだオフ・モードのローランもよかつたが、オンの時の彼は、当社比で二割増し、物凄く格好がいい！

(どうして、この人は、こんなに…僕の好みのだ真ん中を突いてくるんだ…！)

思わずふつと気の遠くなりかけたルネの手を、ローランがとつさに掴んで、その体を支えた。

「おい、ルネ、大丈夫か…？」

ローランがちゃんと自分を覚えていてくれたことにも、ルネは感激のあまり、息切れしそうになった。

「すみません、血圧と心拍数が一気に上がって…立ちくらみが…」

「…何か持病でもあるのか？」

言葉にならずふるふると頭を横に振るルネを抱え込むようにしながら、ローランは自分の部屋のドアを開いた。

「おい、ミラ…取りあえず、こいつにミネラル・ウォーターでも持ってきてやってくれ」

「まあ、ムツシュ…暇が出来たからって、そんな若くて可愛い子を昼間から自分の部屋に連れ込むものではありませんわよ」

鼻息混じり、あからさまな嫌みを言うミラを、ローランは憎々しげに睨みつけた。

「馬鹿、誤解を招くような発言をするな。丁度俺の体が空いてよかった…こいつが落ち着いたら、面接をする」

「あら…本当に、面接の約束がありましたね？ でも、今から募集をかける予定の仕事という…」

「そうだ、おまえの後任の秘書職だ！ 分かったら、その毒舌は封印してくれ…産休に入るまでの短い期間に、おまえにはこいつを仕込んでもらわなきゃならんのだからなっ」

「まあ……」

ミラは一瞬絶句して、どこか疑いのこもった眼差しをローランの腕の中でぐったりしているルネに注いだ。

「それが本当なら私も嬉しいですけど、その可愛いらしい男の子に、あなたの秘書が務まるほどの但力が備わっているのかしら……？」

私以外の秘書は皆、最短一日でここから逃げ出して行ったのに……」

ローランはミラの嘲るような声を遮って、苛立たしげに副社長室のドアを叩きつけた。

「すまん、ルネ……あいつは、仕事はできるんだが、人当たりがきつくてな。まあ、あれくらい性格が強くないと俺の秘書は務まらないかもしれない。今まで雇った他の連中は、すぐに辞めていったからな……」

かなりの広さがある黒い革張りのソファに座らされたルネは、やっと人心地ついた気分、前の席に腰を下ろすローランを振り返った。

「いきなり押しかけてきて、こんな騒ぎを起こしてしまって、申し訳ありませんでした、ムツシュ・ヴェルヌ。なかなかあなたと連絡がつかないことに焦って、思い切って、パリまで来てしまいました」

「いや……ミラの奴が、ちゃんと俺におまえのことを伝えなかつたのが悪い。あいつめ、子供が出来て、やっと俺との縁が切れるとでも思ったのか、以前にも増して遠慮なくやりたい放題でな。妊婦を興奮させてはいかんから、俺もあまり厳しくは言えん、許してやってくれ」

ローランはルネをじっと見つめ、懐かしげに笑った。

「あれから四ヶ月か……パリに出てくる決心がつくまでに随分時間がかかったものだな、ルネ。俺はてっきり、おまえは俺の言葉など忘れて、地元で仕事を始めたのだからとばかり思っていたぞ」

「いえ、そのつもりだったんですけど、思った以上に就職事情は厳しくて……ご迷惑かも知れないですけど、あの時のあなたの言葉を信じて、頼ってみる気になったんです」

「そうか…間に合ってよかったな、これ以上決心がつくのが遅れていたら、ミラの後任の秘書は見つかっていて、おまえの入りこむ余地はなくなっていた所だぞ」

「秘書…」

ぼんやりと呟いた時、ミラがミネラル・ウォーターのグラスと一緒にコーヒーを運んできた。ルネに対してした仕打ちに対する後ろめたさなど微塵も見せず、彼女は緊張する彼の前に飲み物を置き、立ち去り際、そつと耳打ちをした。

「あなた、この人の口車に乗せられないで、自分がする仕事について聞くべきことはちゃんと聞いておきなさいよ。秘書なんて、聞こえはいいけれど、大変な仕事なんだから…ムツシュ・ヴェル又はとにかく難しい人ですからね」

ちつと舌打ちしたのは、ローランだ。

「あの…さつきから当たり前のように話が進められていますけれど、これが面接ならば、初めにはつきりさせてください」

ルネはしばらく考え込んだ後、気持ちを引き締め、身を乗り出すようにしてローランに尋ねた。

「あなたが僕に親切にも申し出てくださっている仕事というのは…ミラさんの後を任される、あなたの秘書職なんですか…？」

「ああ、その通りだ。何だ、そんな妙ちくりんな顔をして…」

「あ、いえ…にわかには、信じられなくて…確かにあなたは僕を悪いようにはしないと行ってくださったけれど、たぶん知り合いに任せるとか…この会社に入れたとしても、僕みたいな大学を出たばかりの未経験者に、まさかあなたの秘書なれなんて言われるとは夢にも思ってたんです」

「確かに、おまえは何の経験もなければ、職業訓練も受けてない。だから、当分の間は、見習い…研修生扱いになるな。実務はミラが教え込んでくれるが、その他のことは、おまえが自分の時間を割いてでも学び、身につけてもらわなくてはならない。そうだな、取りあえず、夜間の秘書コースがある専門学校に入ってもらおうか、そ

の学費は社が負担しよう」

「は、はい……」

ルネはあまりに早い話の展開にめまいがしそうになりながらも、必死についていこうとしていた。

「その他に、僕が自分で準備できることは何でしょうか、ムツシュ……？」

「そうだなあ……いずれは、俺に付き合つて、社長、重役クラスの間と接する機会も多くなる。立ち居振る舞いや言葉遣い……お里が知れるような方言は論外だぞ。その場にふさわしいマナーも身につける、それから……」

ローランは腕を組んで、ルネの姿をじっと観察しながら、渋い顔で何事か考えを巡らせている。

「ああ、確かに、おまえには手を加えなければならぬ個所がたくさんあるな。そのまま人前に出せば、俺が恥をかきそうだ」

田舎者と言外に決めつけられたようで、ルネはしょんぼりとうなだれた。

それから、ローランは、より実際的な条件について、あれこれと書類を持ってきて説明した。本当は、こういうことは人事の担当なのだそうだが、ルネの場合は、彼が自分で引つ張ってきたのだから、特別扱いなのだろう。

小一時間ばかりの面接の後、資料や書類をどっさりもらったルネは、取りあえず、オフィスを去ることになった。忙しいローランには、次の予定が控えている。

最悪このままパリからとんぼ返りするつもりだったため、ホテルも取っていなかったルネのために、ローランは近くに宿を取ってくれた。ありがたいことに、宿泊費も会社持ちにしてくれるそうだ。

「本来なら、仕事が終わつたら、食事に連れて行ってやりたいところなんだが、今夜はどうしても外せない約束があつてな。1人で大丈夫か、ルネ？」

「はい、どうかお気遣いなく、ムツシュ……パリには不慣れな僕です

けれど、子供じゃないんだし、1人で食事くらいできますよ。食べ
ることにあまりこだわりはないですから、その辺りのファースト・
フードで適当に済ませるか、デリで何か買ってきてもいいですし…」
ルネの何気ない言葉に、なぜかローランはちよつと不快そうに眉
をしかめたが、その理由は語らなかつた。

「それならいい…今夜は、ゆつくり休んでおけ。明日からは、まず
住む場所を探して、他にも色々必要なものを揃えなければならぬ
だろう…？ それとも、取りあえず、一度実家に帰って必要なもの
を持ってきがてら、家族に就職が決まったことを伝えたいか？」

「あ、いえ…家族には電話で伝えます。荷物も、急いで持ってこな
ければならないものはありませんから、後日送ってもらいます。仕
事に必要なスーツなどはこちらで買い揃えた方がいいと思いますし
…」。

ローランの手にかかると話が進むのがとにかく速くて、田舎で悶
々と就職浪人生活を送っていたのが嘘のようだったが、一方で、ル
ネが深く考えられる余地もなかつた。

「よし、では、明日の土曜日は、おまえの新生活の準備に俺も付き
合おう…アバルトメンは知り合いの不動産屋を紹介してやる」

「えっ、いいんですか？ あなたのプライベートな時間を僕のため
に削っていただいたりして、何だか申し訳ないです」

「俺の言葉を信じて、おまえは勇気を奮い起して故郷を飛び出しこ
こまで来た。その心意気に、報いてやりたいと思うからさ、ルネ。
それに、おまえは俺の秘書になるのだろう？ 『俺のもの』に俺が自
分で手をかけて、何がおかしい…？」

何がそんなに楽しいのかほくそ笑んでいるローランを、素直なル
ネは、何ていい人なんだろうと感謝の気持ちをこめてうつとりと見
つめるばかりだ。

その会話が耳に入ったのか、それまで無視する構えで自分のデス
クに座って黙々と書類の整理をしていたミラがげつと呟き、頭痛を
覚えたかのように額を押さえたのが視界の隅に見えたが、ルネには

その意味が理解できなかった。

そして、翌日 約束通り、ローランはルネを迎えに、車でホテルまでやってきた。

休日なので、ローランもカジユアルダウンした着こなしで、解放感からか、ルネに対する態度も昨日より親密で打ち解けたものになっていた。

（何だか、ローランと出会った、あの短い休日を思い出すな。雇ってもらえて上に、こんなふうに親しく付き合ってもらえるとは思っていなかった）

初めはそんなふうは無邪気に喜んでいたルネだったが、やがて自分の甘さを痛感することになる。

まだちゃんとしたスーツも持っていないルネを、ローランは、最初に紳士物のブランド店に連れて行った。

親切な店員にあれやこれやと勧められても、スーツなど買ったこともないルネが迷っていると、見ていて苛々したのだろう、ローランが代わりに選んだ一着を彼の手に押し付けた。

「スーツひとつ選ぶのに、そんなに時間がかかっていたら、あつという間に日が暮れるぞ」

シャツとネクタイも店員の手からひったくるようにして選び取り、ルネに渡して、さっさと試着してくるよう、彼は命じた。

（うっん、でも、この服ってどれも、結構高いよね。あの人の秘書として仕事をするなら、やっぱりこここういういいものを持っていた方がいいんだろっけれど、大学を出たばかりの僕にはきついかない… スーツだけでなく、靴や小物も必要だし、カード払いにしたとしても…）

試着室に入ったものの、スーツについている値札が気になって下着姿のままルネがぐずぐずしていると、何の前触れもなく、シャツと音を立ててカーテンが開かれた。

「おい、ルネ」

「ムツシュ…な、何…？」

別に下着姿を見られたからといって、女の子のように恥ずかしがることはなかったのかもしれないが、とっさに怯んで、もじもじと体を引つ込めるルネに、ローランは無造作にもう一着スーツを突きつけた。

「これも着てみる」

「は、はい…」

これも高そうだなと頭の中で電卓を叩きながら受け取るルネを見て、呆れたようにローランは呟いた。

「値段のことばかり気になって選べないって様子だな、やれやれ…」
「すみません…しかし、正直言つて、僕にはきついことは確かですよ。あまり貯金もありませんし、新生活を始めて最初のお給料をもらうまで、どうやって乗り切ろうかと考え出すと…」

「なら、ここは俺のカードで払っておくから心配するな。経費扱いという訳にはさすがにいかないが、最低限の支度をさせてやるのは、おまえを故郷から呼び寄せた俺の責任だからな」

「そ、そこまで、あなたにしてもらう訳にはいきませんよ」

当惑するルネの眼前に指を突き出して黙らせると、ローランは面倒くさいとばかり、強引に押し切った。

「その代わり、俺に全部決めさせる。お前の好みがどうこうと言うのは抜きだぞ」

「はあ…僕は、あまり着るものにこだわりはないし、フォーマルなものは特によく分からないので、それは構いませんが…」

「よし」

その答えを聞いて、ローランはやけに嬉しそうに目を細めてにっこりと笑い、ルネの手から先程よこしたスーツを取り戻した。

「なら、もう試着もせんでいいぞ、時間が惜しいからな」

「え、でも…」

「大丈夫だ、おまえのサイズなら、もう分かった」

ローランはルネの下着姿にちらっと目を向け、ちょっと蔑むような表情をした。

「次は、アンダー・ウェアを買いに行くか。おまえな、服の下につけるものにも、少しくらい気を使え。いくら可愛くても、脱がしてみた時にそんな田舎のおっさんみたいな下着だったら、はつきり言つて興醒めだ。萎えるぞ」

田舎のおっさん?! ルネはショツクのあまり返す言葉もなく、試着室のカーテンが素っ気なく閉じられた途端、床にへなへなと座り込んでしまった。

(そうか…下着に凝つたり勝負下着を選んだりというのは女子にのみ許された特権かと思つていたけれど、ち、違うのか…? いや、別に男なんだからいいじゃないか、どうせする時は脱ぐんだから同じじゃないか…! 確かにスーパの安売りで買ったものだし、おまけにそろそろ古くなって捨て時かもしれない…そう言えば、実家の父さんも似たようなのをはいてた…ああ、確かに田舎のおっさんだ…)

タイプの男に馬鹿にされたことでしょげかえってしまったルネは、その後はすっかりおとなしくなつて、ローランの好きなように連れ回され、下着はむろん、靴や腕時計やバッグなど彼の見立てで次々と買い与えられていった。

それらが自分に似合うものかどうか、ルネにはよく分からなかったが、少なくとも、ローランが自分に着せたいと思つものであることは確かだ。彼は予め宣言していたように、ルネの意見を求めることなど一切なく、慣れた態度で店員を手際よく使いながら、次々に欲しいものを見つけ出していく。

(そう言えば、昔テレビで、『プリティ・ウーマン』って映画を見たなあ…ジュリア・ロバーツ演じる、田舎出のどこかうぶなところのあるコール・ガールがリチャード・ギア演じる実業家に拾われて、すぐ洗練されたレディに変身していく…こんなシーンが映画にもあつたっけ。まさか男の身で、ジュリアの立場に立たされるとは思つてもみなかったけれど…)

ちなみにルネは、ジュリアよりむしろリチャード・ギアがタイプ

だったから、映画のことも覚えていたのだ。

ローランが即断即決してくれたおかげで、買い物は予定よりも早く終わったが、彼はまだルネを解放してくれなかった。

カフェで軽いランチを取った後、ローランはルネをこれまた高級そうなヘア・サロンに連れて行った。

何事が始まるのかと不安に思うルネを椅子の上で待たせて、馴染みらしいスタイリストとしばらく相談した後、ローランは戻ってきた。

「ムツシュ、僕：こんな所で髪を切ってもらったことはありません」
待ちかねたように心細さを訴えるルネの頭をローランは宥めるように撫でながら、優しく言い聞かせた。

「そんな情けなそうな顔をするな、ルネ。トニーは腕のいいスタイリストだから、安心して彼に全てを任せて綺麗にしてもらえ：この伸びっぱなしの髪を切って軽くパーマをあて、色も明るくしたら、人目を引く華やかな印象に変わるぞ」

当然のようにかけられたローランの言葉に、ルネは我が耳を疑った。

「ええっ？ カットだけでなく、パーマやカラーもですか？ そ、そんなことまで必要ありませんっ」

動揺して椅子から立ち上がりかけるルネの肩に手を置いて、ローランは、今度は一転、微かな凄みのこもった低い声で囁いた。

「ルネ：ルネ、おまえのコーデイネイトは俺が全部決めるという約束だったろう？ 俺はな、自分の好みに合うものしかもう傍に置きたくないんだ。ミラは仕事ができるからと割りきって使ってきたが、あれは例外だ。まあ、おまえがどうしても拒むというなら、無理強いはできんがな」

「う……」

言葉の裏に秘められた得体のしれない圧力に、ルネは怯んだ。何と言っても、ルネはローランの好意で仕事を世話してもらった弱い立場だ。

（だからって、これじゃあ、まるでパワハラじゃないか。リチャード・ギアは、嫌がるジュリアに髪の色まで変えさせて、自分の好みを押し付けようとはしなかったぞ）

しかし、ここまで来て、せっかく掴みかけた就職のチャンスを逃がしたくはなかったルネは、結局折れた。

「分かりました…奇天烈な髪形にされるのでなければ、もう、何でもいい…好きにしてください！」

「よし、いい子だ」

やけっぱちの気分で叫ぶルネを愉快そうに見下ろして、ローランはあっさり告げた。

「では、俺はひとまず帰るぞ」

「えっ…それじゃあ、僕はどうすれば…？」

つい不安に駆られたルネは、すぎるような目でローランを振り仰いだ。その顎に指をかけ、ローランは穏やかなのに有無を言わせない口調で囁いた。

「おまえの荷物は、俺がホテルまで届けておいてやるから、後は夜までお前の好きにしる。今夜はディナーに連れて行ってやるから…今日買ったものから適当に選んで身につけ、七時にホテルのロビーに下りてこい…いいな？」

「は、はい、七時にロビーですね。…ありがとうございます、ムッシユ」

昨夜は結局部屋でテレビを見ながら近くで買った中華をかつ込んだだけのルネなので、ローランと2人、ゆつくりと会話を楽しみながらの食事ができるのは、これだけ色々な目にあわされた後だというのに、やはり嬉しかった。

その後、三時間ほどかけて、ルネはスタイリストのトニーの手にかかって、カット、カラーにパーマとフルコースを受けさせられた。

床屋の椅子にこんな長時間座った経験などなかったルネは、途中から爆睡していたため、自分の変身の過程はほとんど見ていない。勝手のよく分からない場所にばかり連れ回されて、緊張もしてい

たため、自分で思っていた以上に、ルネは疲れていたのだろう。

ローランという人間自体、所詮のんびりした田舎育ちのルネとは動くスピードが違うのか、一緒にいると何もかもが目まぐるしくて、エネルギーを吸い取られるような気がする。

(…ローランの秘書になつたなら、ずっと、あの人のハイ・ペースに合わせて僕も動かなければならぬということか…今日みたいにぐずぐずと仕事をしていたら、遅いとどやしつけられそうだな。早く僕も慣れないと…この街にも、あの人にも…)

いきなり肩を軽く揺さぶられて、ルネはやっと目を覚ました。

「はい、そろそろ起きてくださいよ、ルネさん…最後の仕上げをするんだから、顔をちゃんと上げて見てくださいね」

「ふ…はあ…」

あくびを噛み殺しながら、やっとルネはまともな目を上げて、正面に据えられた鏡を直視した。

「あれ…?」

見知らぬ美しい人が、こちらを不思議そうに見返している。

柔らかかそうな蜂蜜色の髪に取り巻かれたあまやかな顔立ち、ふつ

くらと官能的な唇、蒼穹を思わせるどこまでも澄んだ青い瞳…。

「誰だあ、こりゃ…?」

思い切り怪しそうに目を眇めて呟くルネの傍らで、腕つききのスタイリスト、トニーが長嘆した。

「お願い…その顔で、オーヴェルニュ訛りはやめて、夢が崩れるわ」
今度こそ完全に覚醒したルネは、大きく息を吸い込んだ。

「これなら、ローランも満足すること請け合いね。本当に、なんて綺麗になったこと…まるで天使ね。ええ、彼の愛する『大天使』そのものよ」

うつとりと、自分の作品に酔いしれながら、トニーは胸に手を置いて溜息をついた。

「嘘…」

ルネは震える手を上げて、自分の髪に触れてみた。すると、鏡の

中の人も、それと同じ動きを追う。

指先に当たるのは、馴染みのあるまっすぐな髪感触ではなかった。柔らかいウェーブの中にすっと溶けるように吸い込まれるのが分かって、ルネは愕然となった。

（おまえが地味で目立たないのは、髪の色がせいかな…？ 金髪に染めてみる、きっと華やかな印象になるぞ）

初めて会った時から、ローランは、ルネに髪の色を変えるよう勧めていた。

彼は正しかったのだろう、確かに、ものすごく綺麗にはなった。

これなら、すれ違った10人が10人とも振り返りそうだと。

しかし。

「駄目だ…こんな無駄に目立つ姿で街を歩くなんて、恥ずかしくて僕には無理、耐えられない」

地味で控え目なルネにとって、天使と見紛うまばゆい美貌は、疲れるばかりの単なるプレッシャーでしかなかった。

7:00 P.M.

ようやくと腹を括ったルネは、ホテルの部屋を出て、ロビーに下りて行った。

ヘア・サロンを出た後、本当はぶらぶらとパリの街を散歩するつもりだったのだが、新しい自分の姿に馴染めず人の視線が気になったため、寄り道もせずタクシーでまっすぐに帰ってきてしまった。

本当はどこにも行きたくなかったのだが、ローランの命令とあれば仕方がない。シャワーを浴びたルネは、言いつけどおり今日買ったものからローランが求めているだろうイメージを想定して服や小物を選び、身につけた。もちろん縁起の悪い『田舎のおっさん下着』も処分して、何から何までローラン仕様だ。

（ローランは、今の僕の姿を見て、何て言うだろう…顔を見た途端

に噴き出して駄目だしされたら、僕はもう、泣きながら田舎に逃げ帰るしかないな)

階下に向かうエレベーターの中でも顔を俯けたまま思いつめていたルネは、ロビーに着いても一瞬分からず、他の客に押されるようにして外に出た。

落ちつかなげにきよるきよると辺りを見回しながら、ルネはロビーを歩き出したが、目当ての相手はすぐに見つかった。

幅広のソファにどっかと座って、煙草をくゆらせながら、難しい顔をして腕時計を確かめているローランの姿が、行き交うホテル客達の向こうに見えたからだ。

「ムツシュ・ヴェルヌ……」

ルネが小走りで近づいていくとローランも気がついたようだ、ゆつくりとソファから立ち上がった。

(わぁ…渋いつ…！)

ディナーのためにピシッと正装してきたローランのいい男ぶりに、またしても目を奪われてしまったルネは、その寸前まで捕らわれていた煩悶などきれいさっぱり忘れ去った。

「すみません、服を選ぶのに悩んだせいで、時間ぎりぎりになってしまいました」

恐縮しながら声をかけようとしたルネは、ローランの様子が、何やらおかしいことに気がついた。

てつきり遅いと叱りつけられると思ったのに、ローランは両手を体の脇にだらりと垂らしたまま、声もなく呆然と立ちつくしている。自分の前に現れた者が一体誰なのか分からないというような、混乱と衝撃を端正な顔に浮かべて。

「ムツシュ…？」

ルネが不思議そうに問いかけながら顔を覗き込むと、ローランは夢から覚めたように目をしばたたき、自嘲するかのごとくふつと笑った。

「どうかなさったんですか？」

ローランは何も言わず、ルネの顔をじっと見下ろしている。あまり熱心に彼が自分を見つめるので、ルネは次第に頬が熱くなり、息苦しくなってきた。

「あの…」

堪りかねて、ルネが言いかけた時、

「動くな」

低い声で、ローランが命じた。その手がおもむろに上がり、硬直しているルネの顔に近づいてくる。

火照った頬をローランの手が包み込むかと思われた、次の瞬間、その指先は微かに肌を掠めて、喉元に下り、ルネのネクタイにかかった。

シュツとシルクのタイが擦れる音がする。

「ネクタイを結ぶのも、もう少しうまくならないとな…」

「は…はい…」

世話が焼けるとでも言いたげに、ローランはルネのネクタイを結びなおして、整えた。その作業中、ローランの顔が息のかかりそうなほど近くにあることに、ルネは自分の心臓の鼓動が相手に聞かれてしまうのではないかとびくびくしていた。

「それにしても、ルネ、見違えたぞ…トニーの腕もいいんだろうが、まさか、おまえがここまで見事に変身するとはな」

「そ、そうですか…？ 僕は、なんだかおかしなコスプレでもしているような心地で落ちつかないんですが…お世辞抜きにして、変じやあないですか…？」

「この俺が、お前に世辞など言っただけです。ほら、ちゃんと顔を上げて、背筋をまっすぐ伸ばさんか、せっかくの美人が台無しだぞ」呆れたように唇をすぼめて、ローランは小さく身を縮めるルネの背中を軽く叩いた。

（美人…美人かあ…男の僕にとって適切な表現であるかは微妙だけど、ローランに褒められたなら、何でもいいや…嬉しい）

ちらっと周囲に目をやるとロビーにいた他の客達の視線が、なぜ

かこちらに集まっているような気がした。たぶん男前で目立つローランを見ているのだろう。

「…行こうか？」

今まで聞いたこともないような、この上もなく優しく甘く響く声で、ローランはルネの耳元で囁き、促すようにそっと肩を抱く。

日中ローランの強引マイ・ペースに引きずり回されたルネは、彼の豹変ぶりに動揺しながら、尋ねてみた。

「ムツシュ・ヴェルヌ…昼間のあなたと何だか態度が違いますよ…？ 一体どうしたんですか…？」

その言葉に、ローランは、ちよつと困ったようなあいまいな顔をした。どんな態度をルネに対して取ったらいいのか、急に分からなくなつたというような。

「おまえが、それだけ魅力的になつたということだろうな」

「は…魅力…的…僕が…？」

ルネの当惑顔を深い緑の瞳の中心に捕えこんだまま、ローランは微笑み、静かな熱情を込めて言った。

「今夜は、ローランと呼んでくれ」

ボーイ ミーツ ボーイ(4)

「お飲み物は何にいたしましたしょう？」

ローランに連れて行かれたレストランで、物腰柔らかな品のいいソムリエに尋ねられて、うっかり『ビール』と言いそうになったルネは、テーブルの下でローランに足を蹴飛ばされ、黙り込んだ。

「俺はシャンパンを、こいつにはビールじゃなくてキールをやってくれ」

この馬鹿者と言いたげにローランはルネをじろりと睨んだが、ルネが緊張しているのを見て取ると、すぐにまた優しげに眦を下げた。「外見はそれだけ見事に化けたのに、中身はやっぱり変わらん。まあ、仕方ないか」

「すみません、こういう格式の高い場所での食事には慣れていないもので…普段友人達と食べに行くのは気の張らないビストロかバーですし、そういう場所で僕が好んで飲むのはビールやシードルみたいなものですから」

汚すのが怖いような真っ白なテーブルクロス、重たげな銀のカトラリー、中で小魚でも飼えそうなクリスタルのグラスを前に、肩で大きく息をつくルネを眺め、ローランは柔らかな微笑みはそのままに、瞳の温度を僅かに下げた。

「慣れる。俺のために」

「は、はい…」

「昨日やったパンフレットをちゃんと読んだのか…？ うちの傘下には、こういう雰囲気のレストランが何件もあるんだぞ。たまに視察に行ったりする度、いちいち怯んでいたら、仕事にならんだろう…？」

噛んで含めるように言うローランに、ルネは素直に頷いた。

「確かにそうですね…場数を踏めば何とかかなると思います、早く慣れるよう努力します」

「それから、好き嫌いは別にして、最低限のワインの知識くらいは身につけておけ。海外からの客をもてなすこともある…フランス人のおまえが、シャトー・ラトゥールの名前も聞いたことがなかったら、失笑ものだぞ」

ラトゥール君か。後でネットで調べてみよう、ルネは頭の中のメモに控えておいた。

「さて、耳の痛い説教はここまでにしよう。俺も、休日の夜にまで仕事モードで眉を吊り上げ、怒ってばかりいたくない…特に、その姿を前にしてはな」

またしてもローランは、あの不可思議な熱っぽい瞳で、ルネを凝視した。見ていて少しも飽きないというかのごとく熱心に、満足そうにほくそ笑んで。

「あの、ローラン…」

落ちつかなくなってきたルネが、思い切って口を開きかけた、その時、何やら焦った足取りで店の奥から飛んできた、黒服の地位の高そうな店員の姿が視界の端に入ってきた。

「ムツシュ・ロスコー、ムツシュ・ヴェルヌ、ようこそおいで下さいました。予約時に一言おっしゃって下ったなら、別室にテーブルをご用意しましたのに…」

ムツシュ・ロスコー？ 店員が口にした、その名前を聞き咎め、ルネは訝しげに眉を寄せながら、その男からローランの方に視線を移した。

「ああ、支配人…いいんだ、今夜はそんなにかしこまった席じゃないからな」

「しかし、せつかくムツシュ・ロスコーが、当店においでくださいましたのに…」

申し訳なさそうな支配人の目がルネに向けられ、それから、おやというような戸惑いの表情を浮かべた。

「紹介しよう…これからもこいつを伴ってこの店に来ることがあるかもしれないからな。俺の新しい秘書のルネ・トリュフォーだ」

「よ、よろしく…」

ぎこちなく微笑むルネの顔を、支配人は、何かしら信じられないものを見るかのごとく眺め、再び恐る恐るローランを振り返った。

「あの…ムッシュ・ヴェルヌ、そ、それでは、この方は…？」

はあっと、ローランが溜息をついた。

「そういうことで、余計な気遣いはなしだ、支配人。悪いが、2人きりにしてもらえないか…？ 俺は、ルネとの会話を楽しんでいた最中なんだ」

ローランが上品に眉を潜めて不興を示しただけで、蛇に睨まれた蛙のようにすくみ上がった支配人は、慌てて謝罪し、退散していった。

「何だっただんですか、今の…」

「気にするな…支配人の勘違いだ。それより、さっき俺に何かを聞きかけただろう、いいの…？」

矛先を軽くかわされたような気はしたが、ルネはひとまず、その釈然としない思いは胸の中にしておくことにして、ずっと気になっていた、別の問いを投げかけた。

「あの…ローラン、どうして、僕にここまでよくしてくださいるんですか？ せっかくの休日を僕のためにわざわざ割いて…昼間の買い物だって最低限の準備どころか必要以上、髪形を変えたことに至っては意味不明ですし、いくらあなたが自分でスカウトしたからって…」

「どうした、嫌だったのか…？」

「嫌とか迷惑だという訳じゃないですよ、ただ理解できなくて…あなたのやることなすこと、戸惑うばかりで…」

「俺はおまえが気に入ったからというだけでは、理由にならないのか？」

ルネの反応こそ、訳が分からないとでもいうかの如く、ローランは瞬きをした。

「あの短い休暇中、おまえを紹介された時から、どうしても気にな

つて、欲しくなつて仕方がなかつた。だから昨日、俺を頼つてパリに出てきたおまえを見た瞬間は、胸の内で快哉を叫んだぞ。ルネ、俺がわざわざ自分でおまえに手をかけたがるのはな、おまえが俺の理想にとても近いところにあるからだ。だからこそ、刺激的なパリに暮らし始めて、そこにある余分なものまで吸収してしまう前に、俺の好みに合うように磨いてみたくなつたんだ」

ぼかんと口を開いて聞き入るばかりのルネに、ローランは悪戯っ子のように笑いながら、片目を瞑つてみせた。

「それにしたつて、ほんの少し手を加えただけで、ここまで化けるとは思わなかつたぞ。今のところは、俺の期待以上の出来だな…しかし、いくら外見を磨きたてた所で、それに内面が伴わなければ、すぐにぼろが出る。さて、お前はこれからどんなふうになつていくのだろうな、ルネ…これでも目は確かなつもりなんだが、どうか俺を失望させてくれるなよ…?」

どくんと、ルネの心臓が胸の内ですく打ち震えた。

（もしかして これは、口説かれてるのだろうか…？ 理想に近いから欲しくなつたとか、好みに合うよう手をかけるとか、直截的ではないけれど…いくら都会の男だつて、仕事の延長で普通は言わないよね…？）

ルネは動転しながら、震える手でキールのグラスを引っ掴み、一息に飲んだ。

（落ち着け…冷静になれ、僕は、確かに就職だけでなく恋のチャンスも掴みたくてパリに出てきたけれど、いきなり、こんな大物を一本釣りだなんて、いくらなんでも話がうますぎる）

ルネはともすれば暗転しそうになる頭を無理にフル稼働させて、必死に考え続けた。これこそ理想の男だと憧れ続けたローランに、こんな嬉しいことを言われて一気に舞い上がらない自分が不思議だつたが、とにかく胸の奥に引っかかりがあつたことは確かだ。

（そうだ、この話、そもその初めから、何かおかしい。そりゃ、僕にとつてとてもありがたい就職話であることには確かだけれど、

ミラさんの代わりに秘書なら、僕みたいな田舎出の未経験者を一から仕込むより、パリで見つけた方が即戦力になるはずだ。ローランは僕を気に入ったと言ってくれたけれど、僕はそこまで目をかけてもらえるような特別な仕事を、あの短い期間中彼に対してした覚えはない。すると僕の外見が気に入ったということか。実際いじくりまわして好みに変えられた気はするけれど、手近な所に愛人めいた相手を囲っておくとか、そういう下心を仕事に持ち込むような人だとは思いたくない)

ルネはすうつと息を吸いこんで気持ちを鎮めると、自分の反応をじつと窺う構えのローランを正面から睨み据えた。

「自分の理想に近いと言ってくださる僕のことを、あなたはどれだけ知っているといるというんです、ローラン？」

挑戦的に問いかけるルネの態度に、ローランの目がほうとでもいうかのように目開かれ、口元が嬉しそうに綻んだが、さすがにそれを斟酌できるほどの余裕はルネにはない。

(ローランがどんなに僕のタイプで、彼に甘い言葉をかけられたらつい有頂天になってしまいそうでも…これだけはちゃんとやっておかなきゃならない。彼が僕にどんな理想像を期待し、押し付けようとしても、僕はそれだけでは収まらない。だって、今でさえ、僕には、この人には知られなくて履歴書にも書かなかった秘密や嫌われたくなくて用心深く隠している別の面がある。そんなことも知らないで、僕を簡単に変えられると思っっているのなら…この人は僕を見損なっている)

ルネはテーブルにばんと両手をついて立ちあがり、負けるものかとばかり、ローランを上から睨みつけながら、叩きつけるように言った。

「馬鹿にしないでください。僕は真面目に就職先を探してパリにまで出てきたんです、あなたの個人的なお相手をするために来たわけじゃありません。それに、あなたの好みにあうようお金で磨きたててくださるのは結構ですけど、どんなに外見が変わったって、僕

は僕です。僕以外に何ものにもなれませんし、僕自身が変わりたいと望まない限り、あなたの思い通りになんか、絶対なりませんからっ」

ああ、言っちゃった。ルネはせっかくの就職も恋のチャンスもこれでふいにしたかなと思っただが、予想に反して、ローランの表情は楽しげで、満足そうだった。

まるで、逆らわれて腹を立てるところか、期待以上の反応をルネがしたこと、むしろ好感度が上がったというような…。

「そんなことは分かっているさ、ルネ…外見の印象や物腰がどんなに変わっても、おまえにはあくまでおまえのままでもらわなければならぬ。見た目だけを真似ようとして失敗した不自然で不細工なコピーなど、俺は求めない、いや…」

ルネがずっと威嚇するように睨んでいるからだろう、ローランは神妙な顔をして、すまなげに付け加えた。

「今のは、俺の言い方が悪かった。許してくれ」

「ローラン…?」

あっさりローランが引き下がったため、ルネはむしろ拍子抜けして、振り上げたこの拳をどうしたものかと迷った。

「まあ、落ちついて…座れ、ルネ、給仕が困っているぞ」

ルネが脇を見やると、確かに料理の皿を手にした給仕が2人、テーブルに近づくとタイミングが見つからずに途方に暮れて立ちつくしていた。

「あ、すみません…」

この場の雰囲気、何となく戦意を喪失したルネが素直に着席し直すと、給仕はすつと滑らかに動いて、テーブルの上に料理の皿を置いた。

「取りあえず、機嫌を直して、食事にしないか…? 料理は温かいうちにいただくものだ」

子供に言い聞かせるような口調で、まだ怒りが収まらずに黙りこんでいるルネをやりわりたしなめて、ローランは優雅にナイフとフ

オークを取り上げた。

それをちらつと見やって、ルネは唇を尖らせた。

(別に、食べ物で誤魔化されるつもりはないんだけれどな)

ルネがはつきり拒絶の意志を示すつもりなら、ここはうやむやにせず、席を立て立ち去るべきなのかもしれない。ローランがこれ以上我を通して、ルネを力で押さえつけようとしたら、間違いなくそうしていただろう。

しかし、物柔らかかに頷かれて謝罪されれば、これ以上ルネが逆らう理由はなくなる。

完全に納得したわけではなかったが、むきになって突っかかるのも子供じみているような気がしたので、ルネは不承不承、ローランにならって、食事を始めることにした。

(まあ、せっかく用意してもらった料理をないがしろにするのは、作ってくれた人に悪いよね…おばあちゃんに叱られちゃう…)

与えてくださった神様と作ってくれた人に感謝しながら、出された料理はちゃんと残さず食べなさい。小さい頃近くに住んでいて、よく可愛がってもらったルネの祖母の口癖だった。

(これ、フォアグラのラビオリとか言ってたっけ。うちでは、フォアグラなんてクリスマスマスにしか食べないけど、薄く切って、それを焼いたパンにのせてがつり食べるのが定番…)

内心これでは食べた気がしないと思いながら、上品に調理されたラビオリの1つを口に入れた途端、ルネは目をまん丸く見開いた。

「あ…これ、美味しいっ…！」

手が込みすぎて見た目では味の想像が出来なかったが、一口食べてみたら、その美味しさに、不機嫌だったルネの顔がぱっと花が咲いたように明るくなる。

「ほお…初めは、こんな食べ付けないものには抵抗がある様子だったのに、口にあったようだな」

「はいっ。こんなに美味しいなら、クリスマスだけと言わず、時々食べたいくらいです」

自分が不機嫌になっていた理由もひとまず脇に押しやって、弾んだ声で正直な感想を述べるルネに、ローランが小さく吹きだした。

「単純な奴だな、おまえ……」

ルネは口をもごもご動かしながら、少し照れた顔をした。

「だって……美味しいものは美味しいですから……」

ルネは急に自分が凄く空腹だったことを思い出したように、夢中になって、その料理を咀嚼し、舌で味わい、飲み込んだ。

ついさっきまであれほど腹を立てていたローランが呆れたように見ていることも気にならず、あまりの美味しさについて顔が綻んでしまう。

「人間は美味しいものを食べる時、一番幸せな顔をするそうだが……お前の顔を見ていると、その通りだとつくづく思うな。俺は、仕事絡むと素直に楽しめないことも多いんだが……」

ローランがそんな感慨を述べる間にも、ルネはもう食べ終わってしまつて、小さく割いたパンで皿に残ったソースをぬぐってはせつせと口に運んでいる。

マナーがいいかはさておき、料理を作った人間にしてみたら、客にこんな喜んでもらえたら本望だと思うに違いない。

そうこうするうちに、先ほどと同じソムリエが恭しく一本のワインを携えてやってきた。

「シャトー・ラトゥール1990年でございます」

あ、噂のラトゥール君か。興味津々ルネが見守る中、ソムリエは細心の注意を払ってワインを抜栓し、ローランのグラスの中に、深い紫の液体を細く注ぎ込んだ。

それだけでふわりと立ち上ってくるすごい香りに、ルネは鼻をひくひくさせた。もともと嗅覚がいいので、ワインに興味はなくとも、匂いには敏感なのだ。

「ルネ、今夜は、おまえに最高峰のワインを体験させてやるからな。これも勉強だと思って……」

テイステイングをした後、このワインについてソムリエに何か尋

ねていたローランが思い出したように声をかけると、もう待ち切れなかったルネは、グラスを持ち上げて口元にまで運んできていた。

「いい匂い……」

ほんのり甘いカシスとベリー……胡桃とスパイス……雨上がりの森の中を歩いた時のような懐かしい香りも……。

うつとりと眼を瞑って、ルネはそのままくいつと一息にワインを飲んだ。

「あ」と、見ていたローランとソムリエが思わず同時に声をあげてしまったくらい、物おじもせず、大胆に。

「嘘おつ。何、これ、物凄く美味しい……感動的……！」

今度は、全身花畑の中にどっぷりつかつたというくらい嬉しそうに笑って、ルネは美味しそうにぐいぐい喉を鳴らして、シャトー・ラトゥールを飲みほした。

「そりゃ、美味いだろうさ……ラトゥールだから……」

ローランは軽い頭痛でも覚えたかのようにこめかみを押さえて、幸せそうにグラスを持って溜息をついているルネを眺めていたが、やがて、おかしそうに肩を揺らして笑いだした。

「あいつと同じ顔でラトゥールを一気飲みしやがった……はは、駄目だ、変な笑いのツボに入ったぞ。ああ、ルネ……せめて、その味と香りはちゃんと記憶に留めておいてくれよ。さすがの俺も、おいそれとおごってやれる代物じゃないからな」

ルネは不思議そうにぱちぱち瞬きして、テーブルに突っ伏してぐつくつと笑い転げているローランを眺めた。

確かに、ラトゥール君は美味しかった。目の前で新しい世界が開けたくらいの衝撃だったが、ルネがもつとショックを受けたのは、後日自分にも買えないかと思ってネットでシャトー・ラトゥールについて調べてみた時のことになる。

「今夜は、御馳走様でした、ローラン。とてもおいしかったです、料理もワインも…ワインについては、おかげで興味も湧いたので、ちよつと勉強してみようと思います。確かに、ラトウールはいいきつかけになりました」

「…肝をつぶすだろうな、きつと」

思い出し笑いを噛み殺し軽く咳払いするローランを、ルネは不思議そうに見上げた。

今、2人は、レストランを出て、徒歩圏内にあるホテルまでぶらぶらと歩きながら戻っている最中だ。タクシーで素早く移動してもよかったのだが、涼しい夜風に当たって酔いを醒ましたと言ったのは、ルネだった。

（だって、もう少しだけ、この人と一緒にいたいから…）

一時は、ローランの人の気持ちを顧みない強引で押しつけがましい態度と言い草に、ルネがつい反発せずにはいられなくなったため、彼との縁もこれで終わってしまうことを覚悟した。けれど、ローランが落ちついた態度で素直に謝ってくれたおかげで、ルネは振り上げた拳を下ろすことが出来たし、後は、美味しい料理とワインの力も借りて、険悪になりかけたことなどなかったように、打ち解けた時間を過ごすことができた。

（本当に、あのまま怒って席を立たなくてよかったな。あそこで帰ってしまったら、その後の楽しい時間はなかった訳だから…）

そして、もう引き下がれなくなったルネは、この就職話はなかったものとして、実家に帰るしかなかった。せつかく思い切ってパリまで出てきたのに、仕事も恋のチャンスも両方ともふいにしたと後悔したことだろう。

（あの時は、ローランの思い通りになつちゃ駄目だと思って、意地になって拒絶した僕だけけど…もしかしたら惜しいことをしたのかもしれないな。いつそ、何も気づかない馬鹿のふりをして、誘惑に乗せられてもよかったなんて思ったりして…ああ、うっかり正直に自分の感情をぶちまけるものじゃない。逃がした魚はやっぱり

大きいぞ)

視界の横を流れていく車のライトに照らし出されるローランの綺麗な横顔をちらちら盗み見ながら、そんなことを考えて、ルネを切ない溜息をつく。

(下心を持って近づくなんて許せないなんて、僕には言えた義理じやないのにね。別に誘惑されなくたって、とっくの昔に惹かれてた。ただ、うっかりこの人に捕まって、逃げられなくなるのは困るって…予防線を張ったんだ)

ルネは絡みついてくる何かを振り払うかの如く頭を振った。

(ああ、何考えてるんだろっ、僕…)

先程からこんなふうに気持ちぐらゆるらとおかしな方向に揺らぐのは、ローランがまどっているコロンのせいだろうか。時間と共に変化して、今はオリエンタルな甘さと共にムスクに似たセクシーな香りが鼻腔をくすぐり、嗅いでいると、何だか怪しい眩暈に捕らわれそうになる。

(それにしても、ローランはこの僕をどんなふうに変えたいんだろっ…? 愛人候補みたいな話は別にしたって、確かに、このままの僕じゃ、彼の傍について仕事をするにしても差し支えはあるのは認めるよ。立ち居振る舞いや言葉遣いひとつ取っても、僕は洗練とは程遠い、田舎出のぱっとしない男の子でしかない。でも、他人を自分の思い通りに作り変えようって発想自体、全くエゴもいいところで、むかつくじゃないか。それでも…ローランの理想がどういうものか、ちよつと興味はある…かな…)

ルネは手を上げて、何気なく自分の髪に触れてみた。ふんわりと柔らかな金髪は、本来ルネが持っていたものではない。初めて見た時は絶対慣れないと思っていたのに、ローランに似合うと言われて嬉しくなっただけからは、うっかりその気になっただけなのか、早くも違和感が薄れてきたような気がする。

(ああ、僕って、他人の言葉に乗せられてその気になったり、流されやすい性質なのかな…? それとも、相手がローランだから、明

らかな無茶や理不尽でも、つい甘くなつて許してしまうんだろうか
…?)

それはちょっと問題だなと先行きに少々不安を覚えた時、ローランが急に足をとめたのに、ぶつかりそうになつたルネは慌てて立ち止つた。

「着いたぞ」

ぶつきらばうな声が告げるのに目を上げると、路地の向こうの明るい大通りに、ルネが泊まっているホテルが見えた

「ああ…」

ルネはついがつかりしたような声を出してしまった。

「今日一日、僕に付き合つて下さつて、ありがとうございます、ローラン…」

そう言えば、彼のことをローランと呼んでいいのも、きっと今宵限りだろう。週が明けて仕事に出るようになれば、上司と部下の間柄のこと、馴れ馴れしい態度は御法度だ。ならば、やはり必要以上にこの人と親しくならなかつたことは、正解だったのかも。

そんな考えに捕らわれているルネの前に、ふいに影が落ちた。

「ローラン…?」

反射的に上げた顔に指がかかつたと思つた、次の瞬間、素早く下りてきたローランの唇がルネの唇を覆つた。

(あ…不意打ち…)

とつさに喘ぐような息を漏らすルネの唇に、ローランは優しく触れ、確かめるように深く口づけた。

途端にがくつと膝から力が抜けて、後ろによるめくルネを追うよう、ローランの手が背中に回り、再び唇が重なる。今度は一転、激しさを増して吸い上げられ、息をつく間も与えず貪られて、ルネは体の芯が甘く痺れるような衝撃に震えた。

戦慄く齒列を割つて潜り込んでくる、舌の熱さ。かかる吐息。

何度も顔の向きを変えて、温かく濡れた唇を重ね、深く味わう、濃厚なキスは次第に噛み突くような荒々しさを増していき、ルネを

翻弄する。

抵抗することなど、思いつく間もなかった。

一気に昂った気持ちに任せて、ルネはローランの体に腕を巻き付け、自ら口を開いて熱のこもったキスを受け入れる。

ローランの手がルネの体を服の上から探っている。布地の下の小刻みに震えている肌の熱さや感触を確かめるかのように、ゆっくりと。

もうすっかり感情の堰が切れたルネは、夢中になって彼の唇に唇を押し付け、舌を差し入れていた。

キスの合間に苦しげに息を継ぎながら、くんと鼻を鳴らして嗅ぎ取ったのは、ウッディーでオリエンタルな香料の中に、ほのかに見える隠れする薔薇…ぞくぞくするようなムスクとバニラの甘さ…。

逃げられないようしっかりと回された腕の中、密着させた体の熱によってローランの愛用のコロロンが香り立って、ルネを包み込みこみ、どこまでも溺れさせようとしていた。

(このうっとりするような香りが好き…あなたがくれる甘くて熱いキスが好き…息がつかまるほどぎゅっと抱きしめてくれるあなたの腕が好き…僕は、ローラン、あなたが大好き…)

体の奥底から湧きあがってきた熱が全身に広がってくるのに、堪らず、ルネが切ない声を上げて、すがりつく手に力を入れようとした時、唐突に、ローランは彼の体を引き離れた。

「えっ?」

すっかり夢中になってキスに応えていたルネは、いきなりの中断に戸惑いながら、ぱっと目を開けた。息を弾ませながら投げかけた問いは、我ながら恥ずかしくなるくらい、甘く掠れていた。

「ローラン、どう…したんですか…?」

当のローランは息一つ乱しておらず、動揺するルネを面白がるように眺めたかと思うと、澄ました顔をして無情にも告げた。

「それじゃあな、ルネ、俺は行くぞ…今夜はぐっすり眠って良い夢を見るよ」

は？ これで終わり？ ルネは愕然となった。

（まさか…嘘でしょ…？）

信じられないように目を見開いて言葉もなく立ちつくしているルネに向かつて、ローランは憎たらしいウイंकを投げてよこすと、本当にさっさと背中を向けて大通り目指して歩き出した。

「ちよつ…と…」

去っていくローランを引き留めようととっさに手を上げ、追いかけてよとしたが、力の入らない体は足から崩れそうになり、ルネは慌てて、傍にあつた街路樹にしがみついた。

恥ずかしいことに、一端昂ってしまった体は、なかなか通常の動作することが困難なようだ。意識していた相手にあれだけ濃厚な接触をされたのだから、ルネが、その気になってしまったとしても仕方ないだろう。

問題は、あんな不埒な行為を仕掛けた本人が、ルネを一方的にかき乱しておいて、無責任にもあつさり立ち去ってしまったことだ。

「一体どういうつもりなんだよ…人をここまで盛り上がらせておいて、いきなり放置だなんて、ひ、酷すぎる…悪魔だ」

一体、あの情熱的なキスと抱擁はどういう意味なのか ルネがレストランで彼の誘惑を拒絶したことへの意趣返しか、それとも単にからかわれただけか。

（なのに、僕は我を忘れて、夢中になって、あの人のキスに応えてた…）

恥ずかしさと悔しさのあまり、ルネの目にはじわりと涙がこみ上げてきた。それと共に、猛烈な怒りが胸の奥底から突き上げてくる。

（あ…駄目だ、僕、切れそう、切れちゃう…頭に来すぎて、もう、くらくらする）

ふつつつと怒りを滾らせるルネの震える手の下で、固く握り締めていた樹の枝がめきつと不穏な音を立てた。

（そうだとも、どうして、この僕が、ここまで他人に弄ばれ、こけにされなければならぬんだ。いくらタイプだからって、一瞬でも

あんな傲慢な男に心を許した自分が、いつぞ憎い！)

ルネは頭をかきむしって一声唸るやしがみついていた樹木からさっと飛びのき、転瞬、体を捻りつつぐんと回転をつけた足蹴りを自分が捕まっていた枝に喰らわせた。

怒りにまかせた回し蹴りの破壊力は、我ながら凄まじい。どかつというような派手な音を共に、大人の腕くらいある枝は見事に裂けて、地面に落ちた。

公共物を壊したりして、見つかったら通報ものかもしれないが、今のルネには、そこまで考える余裕がない。

「愛しさ余って憎さ百倍：どうしてくれよう、ローラン…！」

逆上したルネは、手で涙を振り払い、ホテルの角を曲がって消えたローランを追って走り出した。このままの勢いで本当にルネが追いついていたら、きっと彼もあの街路樹と同じ運命を辿っていたことだろう。

しかし、さつさとタクシーを見つけて乗り込んでしまったのか、ホテルの玄関前の大通りを行きかう人と車の中にあの長身の姿はなく、しばらくうろつろつとその辺りを探しまわってみたのだが、結局ルネには見つけられなかった。

(ローランは帰ってしまったのか：ああ、全く、運のいい人だな。危ういところで、病院送りを免れたぞ)

しばらくホテルの周囲をうろついているうちに、次第にルネの頭も冷え、それと共に戦意も喪失していき、そうするとやはり情けなさど惨めさだけが残った。

(僕は馬鹿だ：きっと、僕のうわついた気持ち顔や態度に出ているから、あの人がそれを見透かして、からかって遊びたくなっただろう。だとすれば、そんな隙を見せた僕のせいなんだ：自業自得じゃないか)

泣くに泣けないどん底気分のルネは、重い足を引きずるようにホテルに入り、頭をうなだれたままエレベーターに乗り込んだ。

激情が去った後の胸の空白は、言いようのない悲しさに満たされ

て、ルネはともすればこぼれそうになる嗚咽を堪えるよう、きゅつと唇を引き結んだ。

(本当に酷い人だ、ローラン…僕をあんなに夢中させて、溺れさせて、いきなりぽいはないじゃないか…本気で好きになりかけたのに…)

目的の階でエレベーターを降りたルネは、しょんぼり肩を落としてながら、スーツのポケットに手を突っ込み、そこに入れておいたはずの部屋のカード・キーを探した。しかし、その指先に固いカード・キーが触れることはなかった。

「あれ…おかしいな、ここに入れておいたはずなんだけれど、どこかで落としたのかな…？」

他のポケットに間違えて入れてないかと焦りながら探しまくっていたルネの脳裏に、ふいに、先程のローランとの熱烈なキスの場面が閃いた。

(あつ、そう言えば、あの時…)

ルネが夢見心地でローランに抱き寄せられていた、あの時、そう言えばポケットの中を探られるような気配がしなかったか…？

(まさか)

ルネは愕然となりながら、何かを探し求めるかのごとく、辺りをゆっくりと見渡した。

すると、ごく仄かな甘い香りが自分の部屋へと続く廊下に漂っていることに気づいて、ルネは鼻をくんと鳴らした。

(ああ…この香り、いつどこで嗅いだものか、僕はもう絶対に忘れない)

呆然となつてしばし視線を廊下の向こうにあてていたルネは、やがて、ゆっくりと確かめるような足取りで歩きだし、少しずつ歩調を早めて、最後はほとんど走り出していた。

香りと共に蘇る甘く艶めいた記憶に、胸の鼓動が速くなり、体も熱くなる。

角を曲がった所で、ルネは前につんのめったように立ち止り、思わ

ず頭を抱えて低く呻いた。

「やっぱり…！」

ルネは続く言葉をなくして立ち尽くし、呆然と廊下の先を眺めた。
（もう、腹が立つやらおかしいやら、何がなんだか訳が分からない
…！）

がつくりと頭をうなだれ、困ったように手で金髪の頭をかき乱しながら、苦笑混じりに呟く。

「何がやっぱりなんだ、ルネ？」

笑いを含んだ低い声が呼びかけてくるのに、ルネは観念したように再び顔を上げた。

「人をからかうのはいい加減にしてくださいよ、ローラン…！」

ルネが恨みを込めて訴える先には、彼の大好きな香りの主が部屋の前に悠然と立ちほだかつていて、指先に挟んだ部屋のカード・キ―をこれ見よがしにひらひらさせていた。ルネと抱き合つてキ―を交わしていた時に、やはりポケットからすり取っていたのだ。

「子供みたいな悪戯はやめてくださいっ！」

ルネが頬を膨らませて怒ると、ローランはますます笑みを深くして、首を僅かに傾げた。

「…それで？」

ルネは、うつと言葉に詰まった。

「それでって…だから」

何を言い淀むことがあるのだろう。馬鹿馬鹿しい真似はやめて、そのキ―を返して下さい、部屋に入れないじゃないですかとでも言い返せばいいのだ。

ルネが本気で怒れば、ローランだって、いつまでも大人げない悪ふざけはしないだろう。いざとなれば実力行使、先程の恨みも込めて、その男前の顔に一発喰らわしてやつてもいい。

（でも、実際の所、僕はどうしたいのだろう…キ―を奪い返して、この人を追い帰したいのか、それとも…？）

部屋のドアにもたれかかりゆったりと腕を組んでルネの答えを待

つ構えのローランを半眼で睨み据えながら、ルネは自問した。

（一瞬前だったら、僕はこの人を見るなり、掴みかかっていただろうけれど、今は何だかそんな気もそがれてしまったし…全く、自分がさり気なく命の綱渡りをしていたことも知らないで、いい気なものだな。僕がその気になれば、いつだって簡単に叩きのめせるのに…）

しかし、自分は絶対にそんなことはしないだろうということも、ルネには分かっていた。どんなに腹が立ってもローランには指一本上げられないし、格闘技の才能を隠し持っていることも知られたくない。

（惚れた弱みってやつかあ…困ったことに…）

ルネは天を仰いで溜息をついた後、腹をくくって、まっすぐローランに近づいて行った。

ルネの顔はまだ固かったが、それでも内心の微妙な変化を感じ取ったのだろうか、ローランはもたれかかっていたドアから離れ、彼を通すような仕草をした。

「あの…ローラン…」

ルネは自分の部屋の前に立つと、勇気を出して、ローランの顔を近々と覗き込んだ。一瞬、その深緑の瞳にどきりとなる。強く意志的で、ねっとりまといつくような、熱い眼差し…。

「へ、部屋の中は、今日の買物荷物が開きっぱなしで、散らかっていますよ。待ち合わせの時間直前に慌てて飛び出してきた、そのままですから…それでもよかったですら、寄って行って下さい」

「ああ」

その言葉に、ローランは満足げに目を細めて微笑み、ルネの差し出した手にカード・キーをそつと乗せた。

（たぶんローランは、今夜僕をみすみす逃がす気なんて、なかったんだろうな。僕が彼のやり方に腹を立てて少しくらい逆らった所で、それも想定範囲内か…さながら、今日一日僕をどこに連れ回し、どういう段取りで手を加えて変身させるか、いかに僕を誘惑して夢

中にさせて…最後の仕上げとばかり、自分のものにしてしまつかま
で、全て予め立てていた筋書き通り…)

ルネが悩ましげに眉を寄せて考え込んでいたからだろう、ローラ
ンは、キーを返した、その手で彼の手を乱暴に握りしめた。

「ルネ、真剣に悩んでいる最中悪いが、俺は気が短いんだ。これ以
上ぐずぐずと待たせるようなら、問答無用で部屋に連れ込んで襲う
ぞ」

「は…はいっ」

獯猛に歯を剥いて凄んでみせるローランに、ルネは慌ててドアに
向き直り、カード・キーを使ってロックを解除した。こんな理不尽
な命令にも、反射的にもう体が動いてしまうあたり、既に彼にしつ
かり手綱も心も掴まれてしまっているような気がする。

(全く、パリに出てきてすぐに仕事も恋も見つかったのはいいけれ
ど、万事がこの調子では、先行きが不安…)

また少し思案の淵に沈み込みかけるルネに痺れを切らしたローラ
ンは、「遅い」と一喝、解錠されたドアを自分で開いて、彼の体を
抱きかかえるようにして部屋の中に強引に押し入った。

「ちょ…ちょっと待って下さい、まだ片付けもしてないし、心の準
備が…」

「うるさい、ベッドさえ空いてりゃいいだろうが…今更生娘みたい
にうるたえるな」

仰天したルネの悲鳴と抗議の声を塞ぐよう、ローランは両腕で彼
を深くと抱きしめながら、キスをする。

たちまちルネは、くたつとおとなくなくなった。

(ああ、さつきと同じだ。僕を抱きしめる腕の強さも熱っぽいキス
も…それに、この香り…あのまま放置じゃなくてよかったと僕は思
うべきなのかな？ 素直に喜ぶには、やり方が酷すぎるけれど…)

先刻路上で交わしたキスと抱擁の続きを、ルネは戸惑い、釈然と
しない思いを抱えながらも、結局は受け入れ、許していった。

(僕は、こんなつもりで、パリに出てきた訳じゃあなかったのにな)

そう、捕まって逃げられなくなるのは困ると予防線を張っていたにも関わらず、気がつけばルネは、ローラン・ヴェルヌにどっぴりはまってしまったのだ。

悪魔のように黒く(1)

週が明けて月曜日。ルネは、ルレ・ロスコーに社員として初出社した。

日曜には、ローランに紹介された不動産屋を通じて、いいアバルトメンを見つけ、早々にホテルを引き払うこともできた。

バリでの新生活の始まりとして、まずは順調な滑り出しと見えた、この記念すべき日だったが、ビルに入っただけで、周囲の空気がおかしいことにルネは気付いた。

ルネと同じように出社してきた社員達は、彼の姿を見るや、ぎよつとしたように立ち止まったり、信じられないものを見たかのごとく振り返ったりする。

乗り込んだエレベーターの中は、何事かと思うくらいに、ざわざわしていた。

目的の5階で降りてみれば、そこで出会った幹部と思しき人達の周章狼狽ぶりに、何となく怖くなったルネは、彼らに捕まる前に走り出し、副社長付きの秘書室に飛び込んだ。

「おはようございます」

ルネが元気よく挨拶をすると、先週末一度ここで会った秘書のミラが、眼鏡を指先でいらいながら振り返った。

ローランに選んでもらったスーツ姿も初々しく、初出社の高揚から頬を赤らめて、ドアの前に立っているルネを見つけたミラは、はっと息を飲んで、デスクから立ち上がった。

「ムツシュ・ロスコー?!」

めったなことでは動じなさそうな気丈な女秘書が、自分を見て動転するのに、ルネの方もと面喰った。

「ミラさん…? どうしたんですか、そんなおかしい顔をして…僕ですよ、ルネ・トリュフォーです」

ルネが人懐っこく笑いながら近づいてくると、ミラの顔に当惑と

不審と広がっていき、ついでまた別の衝撃がうかんだ。

「まあ…まさか、ルネ・トリュフォー…本当に、あなたなのね…？」
「ええ、そうですねよ、この顔をよく見てください。髪形も着ているものも違つし、随分雰囲気は変わってしまったけれど、僕です」
ルネは恥ずかしそうに頭をかきながら、言った。

「土曜日に、ローラ…ムツシュ・ヴェルヌに付き合ってもらって、服とか一式買いそろえたんです。ついでに髪も…これはムツシュの懇意のスタイリストにやってもらったんですけれど、まさかここまですえられるとは思ってなくて、僕もびっくりしました。でも、ムツシュは喜んでくれましたし、見慣れれば、結構似合ってるかなって自分でも思つたりして…」

ミラは瞳を泳がせながら、ルネの打ち明け話を聞いていたが、やがて眩暈でも覚えたかのように頭を押さえ、ふらふらと椅子に座りこんだ。

「だ、大丈夫ですか、ミラさん…？」

彼女が妊娠中だということを思い出したルネは、慌ててデスクに飛んでいって、心配そうにその青ざめた顔を覗き込んだ。

「信じられない…もとからいかれた男だとは思っていたけれど、まさか、ここまでやるなんて…！」

ミラの吐き捨てるような言葉を聞き咎めたルネは、背中をさする手を止め、問いかけた。

「ミラさん、一体、どうしたんですか…？ 僕の格好はそんなに変でしょうか？ そう言えば、さつき秘書室に着く前に、たくさんの人にじろじろ見られたり、重役っぽい人から血相変えて呼び止められそうになったりしたんですけれど、この服装に、社内の規定に引っかかるような問題でもあるのでしょうか…？」

「社内規定上は問題なくても、世の常識には明らかに反するでしょうね」

「は…？」

その時、秘書室のドアが躊躇いがちにノックされ、先程ルネに近

づいて声をかけようとした幹部らしい男が顔をのぞかせた。

「…ミラ、悪いんだが、ちよつと話がある…」

ミラの傍にいるルネを恐る恐る窺う、その顔には、ここでルネを迎えた時のミラの顔に見出したのと同じ、明らかな戸惑いと不審の色があった。

ミラは何か言いたげな眼差しをちらつとルネに投げかけた後、大きな吐息をついて、立ちあがった。

「あなたのせいで、社内が蜂の巣をつついたような騒ぎになってしまったようね。こんな時に限って、ムツシュ・ヴェル又は出張でないんだから、全く腹が立つわ。私が簡単に説明してくるから、ここで待つていなさい、ルネ」

そう言い残して、ひとまず部屋を出ていったミラは、数分後、少々疲れた顔をして、戻ってきた。

「ごめんなさいね、ルネ…あなたのことは、ムツシュ・ヴェルも人事を通じて知らせていたんだけど、その容貌のことまでは伝わってなかったものだから…」

ここに至って、この事態を招いたのは他ならぬ自分の外見なのだという事に思い至ったルネは、単刀直入にミラを問いただした。

「ミラさん…一体、どういうことなんです？ 僕のこの姿が、どうしてそこまでの混乱を社内にも招いたというんですか…？」

ミラはどう説明すべきか悩むようにしばし眉を潜めて考え込んでいたが、おもむろにデスクを離れ、壁際の書類棚の奥を引っ掻きまわすと、何冊かの雑誌や新聞を手に再びルネのもとに戻ってきた。

「この写真をごらん下さい、ルネ、今年早々うちの社長に就任した、ガブリエル・ドウ・ロスコーよ」

「ガブリエル…？」

「ええ、もう一つの顔の方が、世間では有名かしらね…アカデミー・グルマンディーズの若き主宰、通称『大天使』ガブリエル…本当に聞いたことはない？」

はて、美食に関わる団体らしき名称だが、今まで食べることにあ

まり興味のなかったルネには縁のない話題だ。

「はい、残念ながら…グルメとか食べ歩きとか、食に凝る方ではないので…」

「なら、今日から、興味を持ちなさい。何と言っても、うちのトッブは、料理業界のカリスマなんだから」

ルネは、ミラのつけつけした口調に少々おびえながら、デスクの上に彼女が次々に広げていくグルメ雑誌やファッション誌、新聞の記事に視線を落とした。

「えっ…？」

それら記事の中の写真に写った美しい青年の顔に、ルネは瞠目した。

蜂蜜色の柔らかなウェーブを帯びた髪、澄んだ空色の瞳、ふつくと官能的な唇。何もかもが、今のルネと驚くほどによく似ていた。強いて言えば、鼻の形だけが僅かに違うが、生き別れの双子の兄弟だと説明されても、ここまでそっくりなら信じてしまいそうだ。

「こ、この人が、ここの社長なんですか…？ 僕にそっくりじゃないですか、一体どうして…？」

衝撃が強すぎて、事態を正しく呑みこむことも困難なルネを、ミラは冷静に正した。

「違うわ、ガブリエルがあなたにそっくりなのではなく、あなたが彼そっくりになるよう、作り変えられたのよ。ムッシュ・ヴェルヌが、そうさせたのでしょ…？」

ルネの脳裏に、ある夜ローランが自分向けてきた、不可思議で熱っぽい瞳が蘇った。魅力的になったと、変身したルネの姿を見て、彼は満足そうに微笑んでいた。

（ちょ、ちょっと待って…ローランは、僕を磨きたてて自分の理想に近づけようとしたんだよね…？ この髪だって、彼が僕に似合うと思っただら変えさせたわけで…ち、違うのか…？）

一番大きな写真が載っている雑誌を食い入るように見ながら、混乱の極致にある頭で必死に考えているルネに、ミラは心底呆れ果て

たというような口調で話し続けた。

「今現在、社長の地位にありながら、ガブリエルは滅多に社には現れないの。アカデミー・グルマンディーズ主宰としての活動で、忙しいからでしょうね。ここだけの話だけれど、奥にある立派な社長室なんか、半分物置と化しているわよ。そんな社長が何の予告もなしにいきなり1人で現れたものだから、皆、すわ抜き打ちの視察か何かと仰天し、身構えてしまったという訳」

「ガブリエル・ドウ・ロスコー…ムツシュ・ロスコー…その名前、そう言えば、おとついムツシュ・ヴェル又と一緒にいる時に、何度か耳に入ってきました。他に考えることがたくさんあって、追求できなかつたんですけれど…そう言えば、ムツシュ・ヴェル又は親しげに『あいつ』呼ばわりしていた…僕と同じ姿をした、この人のこと…」

「そうね、2人は親戚関係にもあるのだけれど、幼い頃に母親を亡くしたムツシュ・ヴェル又をロスコー家が引き取って、しばらくガブリエルと一緒に育てていたことから、もともとかなり親密な間柄にあるようよ。ともかく、ロスコー・グループの会長であるジル・ドウ・ロスコーが一線を退くにあたって、最愛の孫のガブリエルに彼が創設したアカデミー・グルマンディーズと共に、この会社を譲った。けれど、おそらくあまりビジネスには興味はないらしいガブリエルに代わって、実質的に経営の一切を取り仕切っているのが、ローラン・ヴェル又という訳。世間では、ガブリエルの影とか剣とか呼ばれているわ」

ミラは、深刻な面持ちで押し黙っているルネをちらつと見ると、肩で1つ息をつき、ルネと自分のために濃いめのコーヒーを淹れにかかった。

そうしながら彼女は、この会社のトップ2人について、ルネの疑問を解決する手掛かりになればということだろうが、説明を続けた。

ガブリエルが継ぐ以前、実は、ルレ・ロスコーは親族経営の旧態依然とした体質が仇となって、グループで唯一の赤字事業になり果

て存続の危機に立たされていた。改革を託された前社長も、温厚な人柄からか、老獪な重役連中相手に思い切った手は打てずじまい。

もともとロスコー家所有の物件をホテルなどに転用することから始まった会社であり、会長自身も若い頃に手がけたことから愛着があつたのだが、さすがに事業を縮小するかいつそ畳むかということころまで行つたという。

「…グループが大きくなりすぎて、会長の目が届かなくなつた後、任せた経営陣が好き勝手にやりすぎたのね。高級志向のホテルやレストラン経営で成り立っている会社なのに、肝心の質のチェックが疎かになつたり、明らかに基準に達していない店なのに個人的なコネがあるということ傘下に入れてしまつたり…そんないい加減なことやっているうちに、客がどんどん離れていった訳…このままだと本当につぶれるかもしれないと危機感持つた社員が幹部に訴えても、とにかくプライドだけは高い財閥出身者達だから、聞く耳持たず、そのうち皆諦めてしまったのね」

そんな時に、突然降つて湧いたのが前社長の辞任とガブリエルの新社長就任の話だつた。経営陣は、ロスコー家の若い王子様を歓迎するムードだつたという。世間知らずの若者ならば、取りこみやすく操りやすいと踏んだのだろう。それに、ガブリエルの持つアカデミー・グルマンディーズ主宰という肩書は魅力的だつた。

「アカデミー・グルマンディーズはそれだけでも強力なブランドだから、うまく利用すれば、社のイメージ回復に役立つ。でも、失敗すれば、逆にアカデミーの名声に傷をつけてしまう。この起死回生の賭けみたいな策を提案したのはガブリエル本人らしいのだけれど、社長就任の条件につけたのが、ロスコー・グループの中からローラン・ヴェルヌを引っ張ってきて、副社長として自分に等しい権限を与えるということだつたの。これも、経営陣は二つ返事で飲んだのよ。ローランだつて、彼らにしてみたら自分の息子くらい年の青二才だからと、舐めてかかつたのよね」

しかし、トップ2人が就任してすぐに、経営陣は自分達の考えが

甘かったことを痛感する。懐柔され取りこまれるどころか、明確な目的意識を持つて乗り込んできた2人は、及び腰の前任者がとてもできなかったような強引で思い切った改革を始めた。

「傘下にあるホテルやレストランを見直して、基準に適合しなかった場合には改善命令を出し、従わなければ除名することから始まって…コネでもぐりこんだ二流の店は、これで全部ルレ・ロスコーから弾き出されたわ。これはガブリエルが指揮した改革ね。そして所謂リストラ…それも高い給料をもらいながらろくな仕事をしない年寄やその取り巻き連中を狙いうち…これは、人事権を握ったローランが情け容赦なく切りまくったり、あの手この手で辞任に追い込んだりしていったわ。処刑人なんて渾名されたくらいだから、相当荒っぽい手も使ってたね」

「…抵抗もかなりあったんじゃないですか？ いくら会長の孫だからって、いきなり外部からやってきた人間が思い切った改革なんてやるうとしたら…」

「それはもちろん…でも、経営陣と言ったって、所詮は育ちのいいやんごとない人達ですもの。プライドは高くても、いざ本気で敵と戦って、汗や血を流してまで何かを守るうという気概は持ってなかったのよ。ガブリエルはまだ人当たりはいいけれど、ローランなんてサドっ気たつぷりの猛犬に毎日責め立てられるのに精神的に参ってしまつて、ほとんどが降参してここを去っていったわ。あの人も間違いなく血筋はいいし、ENA出身の超エリートのはずなんだけれど、中身は、権威に対する敬意もへつたくれもない野蛮人だから…」

ここでミラは何を思い出したのか、実に楽しそうな笑みを漏らした。ローランとはあまり折り合いがよくなさそうな彼女だが、旧経営陣を一掃してくれた彼の仕事には大いに感謝しているようだ。

「ともかく、ガブリエルとローランのおかげで邪魔者や余計なお荷物を放り出して、現在我が社は危機的状况を乗り切り、立ち直りつつあるわ。荒療治であったことは確かだし、一部で不満や恨みの火

がくすぶっていない訳でもないけれど、それはむしろ少数派で、大多数の若い社員達は、年齢よりも能力重視、努力次第ですぐに重要ポストに登用してくれる今がチャンスだと活気づいている。ガブリエルはいつの間にか名のみ経営者になってしまったけれど…クセはあっても強い牽引力と行動力を備えたローランに心酔してしまつた幹部は多い。かくいう私も、あの人の秘書になつたばかりの頃は、女に興味がない人と分かつていても、うっかり惚れそうになつたくらいよ。もっとも、夢が破れるのも早かつたけれど…」

ルネはまた少し考え込んだ後、ミラに向かって、おずおずと尋ねた。

「あの、ミラさん…この会社の今の状況や経営者が変わった経緯はよく分かりましたが、ローラン…とガブリエルの関係はまだよく分かりません。ガブリエルがローランをグループのどこから引き抜いて、この会社の大掃除と立て直しを手伝わせた。そして、それがひと段落つくや、自分は他の関心事を求めてどこかに消え、経営は彼に任せっぱなしとなつた。そのくらいなら、初めからローランを社長の座に着けた方が、じっくりくるような気がします。どうも僕には、ローランが名をみの社長の下の地位に甘んじたり、素直に命令に従つたりするタイプだと思えない…何か特別な理由があるのなら、ともかく…」

「それは、やはり愛でしょうね」

間髪いれずミラが答えるのに、ルネは口元に運びかけていたコーヒ―を危うく落としそうになつた。

「実際ローランは、つぶれかけた会社の再建よりも、もっと重要で面白いのある事業をグループの中核にいて任されていたはずなの。でも、祖父の愛着のある会社がこのままなくなるのは忍びないガブリエルのたつての頼みで、そちらの仕事は白紙に戻し、しんどい汚れ役になるのも承知でここに乗り込んできたのよ。誰にも従わない、自尊心の塊のように見えるローランだけれど、ガブリエルの存在は例外どころか、唯一の絶対よ。愛する『大天使』の命令ならば、ど

んな無茶や理不尽でも嬉々として従う…奉仕こそが、最高の愛の表現だともいうかのようにね」

「う、嘘…」

「大げさに聞こえるかもしれないけれど、ローランのガブリエルに対する態度や思い入れの深さが、そんな噂も真実らしく聞こえるくらいに、ただ事じゃないのよ。ああ、間違っても、彼の前でガブリエルに対する批判めいた言葉は口に出さないことね、ルネ」

そんな話信じられるものかと顔を強張らせているルネに、ミラは声を低めて、忠告した。

「いつだったか、ガブリエル宛に、悪質な悪戯めいた脅迫文が届いたことがあったんだけど…封書に細工がしてあって、開封するとカッターの刃が飛び出すようになっていたの。被害にあったのは、ガブリエルじゃなくて実は私だったんだけど、そのことに激怒したローランは、怪しげな男達を数人引き連れて、犯人を追いかけて回した末、袋叩きにしてセー又川に落としたとか…」

「まさか、そこまでやったら犯罪でしょう!」

「まあね…さすがに川に放り込むまではやっていないと思うけれど、相当きついお灸をすえたことは確かよ。結局、背景に何も無い、ただのストーカーだったんだけど、荒っぽい社内改革を推し進めるガブリエルやローランに対する嫌がらせや脅迫が激しかった時期だったから、過剰に反応したんでしょね。自分はともかく、ガブリエルに敵意の矛先が向かうことには我慢ならなかったのよ」

絶句しているルネに、ミラは更に、ローランがいかにかブリエルを溺愛し、そのことを憚りもなく周囲に公言しているかを語って聞かせた。

「…ああまで堂々と愛を語られるとゴシップにもなりやしないわ。呆れ返りながらも、別にトップ2人ができていようがいまいが、ちゃんと仕事さえしてくれたらいいかと半ば既成事実のように受け入れられてしまったのが、私も含めて今の社内の現状…それでも、あなたの姿を見た時は、ああ、あの人の病気はここまで酷かったのか

と愕然としたわよ。いくらガブリエルのが好き過ぎるからって、他人のあなたまで自分の好み通りに作り変えようとする…？」

「そっ…つまり、その…ローランとガブリエルは恋人同士…なんですか…？」

「相思相愛の恋人同士なのは、ガブリエルの気持ち不明だから何とも言えないけれど、ローランが彼を愛していることは、客観的に見て疑いようがないわね。あら…」

ルネが真つ青な顔をして俯いていることに気づいたミラは、眉を潜めて、しばし黙り込んだ。

「ねえ、ルネ…あなた、まさかムツシュ・ヴェル又と何かあった訳…？」

嘘のつけないルネは、びくつと肩を震わせ、今にも消え入りそうな風情で縮こまった。

ミラは、もう手がついたのかと呆れ顔をした後、一転、同情的になつて語りかけた。

「そつね、あなたの顔形をもっとよく見ていたら、こうなることも予想がついたかもしれないけれど、先週会ったばかりのあなたは純朴そうな地味で目立たない子で、とてもあの人が食指を動かすとは思わなかったから…気づいていたら、一言注意してあげたでしょうに、ごめんなさいね」

「いいえ」と、ルネは力なく頭を振った。

「僕が隙を見せたからいけないかったです…別に子供じゃないんだから、そのくらい分かっています。ちゃんと合意の上でのことだったし…拒否しようと思えば、できたはずですよ。ローランだけが悪い訳じゃない」

ぐるぐると視界が回り出したような錯覚に捕らわれながら、ルネは、ぽつりぽつりと漏らした。

「あんな男を庇うことないのよ、ルネ…馬鹿ね…」

「馬鹿か…そうかもしれません、きつとそつです…」

どうにも話がうますぎるとは疑っていたはずなのに、逃げなかつ

た、拒めなかった。

（ローランが僕のことを理想に近いと言ったのは…何だ、彼の好きな人によく似ているってことだったんだ。ああ、確かに嘘はついてないよね…それを、ローランは僕自身に興味を持ってくれたんだと僕が勝手に思い込んだだけで…）

しかし、まさか、こんな種明かしが待ち受けていようとは夢にも思っていなかった。

（いや、いくらなんでも想定外…たまたま見つけた赤の他人が好き
な人に似ていたからって、それを捕まえ、恋人そっくりにコスプレ
させて悦に入るなんて、一体どういう変態プレイなんだか…僕には
ついていられない…！）

一瞬頭かっつと血が上り、今度ローランに会ったらどうしてくれよ
うと物騒なことを考えたものの、先週末彼との間に何があったか思
い出せば、燃え上がりかけた怒りの炎もすぐにしぼんでしまう。

実感が湧かない、他人の口から聞いたくらいでは、素直にそうで
すかと受け入れがたい話だからだろうか。

今の自分が誰の姿をコピーしたものが、突きつけられた事実は明
白だというのに…。

「あなたね、それだけ人としての尊厳を無視されて、まだあの男に
未練があるの？」

ルネの葛藤をしばらく無言で眺めていたミラは、少々うんざりし
てきたらしく、冷たく突き放すような口調で言った。

「確かに外見は完璧だし、あなたみたいな初心な子が熱を上げそう
な魅力はあるんでしょうけれど、それで騙されてはまりこんだら、
ろくな目にはあわないわよ。ルネ、一度だけ忠告しておいてあげる
けれど…神様はね、人間を不完全な存在としてお造りになったのよ。
いいこと、あれだけ見てくれがよくて、仕事もできて、お金持ちの
エリートで、その上に人間性にも優れているなんてできすぎた人が
この世にいるはずないの…むしろ、どこかに重大な欠落があると思
わなきゃ…。」

拳を握り締めて真剣な顔つきで力説するミラに、一体この人口ーランの傍で何を見てきたのだろうと不安に駆られたルネだったが、追及してみるだけの精神的な力は残っていなかった。

（僕はローランに裏切られたんだろうか？ いや、裏切るも何もないかな、一回エツチしただけじゃないか。別にこれから真剣に付き合おうという約束をした訳でもない…むしろ、あれはその場限りの遊びの感覚に近かった。そうだ、あんなゴージャスな男と一夜を共にできたんだから、よかったじゃないか。そう言えば、強引に押しきられた割に、嫌なことは何もされなかったな…むしろすごく優しく、びっくりした。いや、あれは僕に対して優しくった訳じゃない、僕がガブリエルに似ているからだっただけだ）

どんよりと暗い顔をしているルネの前に、ミラは新しく淹れなおした熱いコーヒーを突きだした。

「あ、すみません」

ルネはうつろな目を上げ、機械的にコーヒーのカップを受け取り口に運んだが、味も香りも、感覚がマヒしてしまったかのように、よく分からなかった。

ただ苦いだけだ。

「それで これから、あなた、どうするつもりなの？」

いきなりミラが、核心を突くような問いを投げかけてきた。

「ムツシユの酷い仕打ちにショックを受けて、立ち直れないなら、このままここであの人の顔を見ながら働くなんて無理でしょう？」

今すぐここから出て行きなさい。ムツシユには、私から伝えておくから、いちいち彼が帰ってくるのを待つ必要はないわ。あなたにしてみれば、顔を見るのもむかつくでしょうからね」

ミラの言葉に、ルネははっと息を吸い込み、目を大きく見開いた。「ミラさん、僕は…せつかくいただいた仕事の話を白紙にするとまでは、まだ思いきれてないです…」

「でもね、しばらく我慢して働いたものの、やっぱり無理だと中途半端な所で投げ出されるのが一番困るのよ。あなたに最後までやり

通す強い決意があるのなら、私も喜んで仕事を教えるけれど、いつまでもあんな男のことを引きずって、ぐずぐずとべそをかいてばかり、仕事にも集中できないような甘ったれた人のお守りなんて、まっぴらごめん、時間の無駄よ」

ミラの厳しい意見を聞いて、悄然としたルネの顔に、血の色と共に激しい感情が閃いた。

「僕は、そんないい加減で無責任な人間ではありません！ 一端引き受けた仕事なら、最後までやり遂げます…ええ、ローランのことはあくまで僕の個人的な問題ですから、それを職場に持ち込むつもりは毛頭ありませんと…だからあなたは、産休に入る前に、僕に業務の引き継ぎを滞りなく行ってくればいいんです。僕は絶対ここから泣いて逃げ出したりしませんからっ」

ルネの剣幕にミラは虚を突かれたように、しばし黙り込んだ。彼女は、それでもしばらく怪しむように、決然と唇を引き結び爛々と目を輝かせたルネの顔を凝視していたが、やがて何かを感じ取ったかのような。

「分かったわ、ルネ。それじゃあ、あなたとムツシュ・ヴェルヌの間であったことは、私は聞かなかったことにしますから、あなたもあの人を見て取り乱すことなく、部下として自然にふるまうことを心がけて。その外見だと、社内でおかしな噂はたつたろうし、からかいの種にもされるでしょうけれど、それも我慢するのよ。いっその髪はもとの色に戻したら、どうかしらね？」

一瞬迷ったルネは、柔らかな金髪の髪の一筋を引っ張り、複雑な気分で眺めた。

「いえ…当分の間、これはこのままにしておきます。ローランは僕の外見だけを恋人の似姿に変えたけれど、内面まで変えられた訳じゃない。ガブリエルのコピーになんてならない…僕は僕なんだってことを、あの人がいかに知るまで、この姿のままです。そうすれば、あの人だって…」

ガブリエルの身代わりとしてじゃなく、ちゃんと僕自身を見てく

れるようになるかも うっかり唇から出かかった言葉を、ルネは危うい所で飲み込んだ。

（ああ、やっぱり、僕はまだ諦め切れてないんだ、ローランのこと…でも、ミラさんにも宣言したように、この際個人的な感情は封印しよう。もともと僕は、毎日職場で顔を合わせる上司との恋愛には抵抗があつたんだし、一切何もなかったことにしてしまえばいい。そう、目の前の仕事を機械のように淡々とこなしていけば、そのうち、胸の傷だつて癒えるだろうから…）

そうして、ルネは、初日早々あまりに衝撃的な真実を突きつけられたものの、この会社に留まることを決心した。

自分は何も悪いことをしていないのに、ミラに言われるがまま、泣きながら逃げ出すのも腹立たしいと半ば意地にもなっていたのかもしれない。

別にローランの愛人になりたくて、パリにまでのこのこやってきた訳ではないのだ。仕事だつて、ちゃんとこなせることを証明してやる。

実際、その後のルネは、二度と再び取り乱したり、煩悶に沈み込んだりすることもなく、厳しい教育係のミラの指導を受けながら、黙々と業務をこなしていった。

頭の回転が速くて飲み込みもいいルネは、こんなおかしな状況でなければ、ミラにとっては教えがいのある生徒だつたらう。

実際、続く数日間のルネの仕事に対する打ち込みよう、集中力は異常な程で、明らかに精神的に普通ではなかった。

新人とは思えないほど仕事は素早く正確にこなすので、その点文句のつけようはないのだが、必要なこと以外は話さず、泣きもしない代わりに笑いもしない、人間というより機械のようで、さすがのミラも一緒にいると肩が凝ると思つたくらいだった。

ルネ本人だけが、自分の精神状態に気付いていなかった。

（よかった…一時は駄目だと思うくらいに落ち込んだけれど、意外と平気なものだな。仕事だつてちゃんとできるし、会社帰りに予定

通り専門学校にだって通い始めた。アバルトメンに帰ったら、疲れきって泥のように眠るだけだから、余計なことを考えずにすむ。この調子なら、僕は何とかここで働き続けることができそうだ……）
ルネは肝心のことを忘れていた。というより、考えまいと頭から締め出していた。

今週早々、ローランはボルドー地区で発生したトラブルの収集を兼ねての視察に出かけていたので、しばらくルネは彼と顔を合わせにすんでいた。平静を保てたのは、結局、そのためだったのだ。

そして、金曜日の朝 今日を乗り越えれば、やっと休みに入れると、よく眠ったはずなのに疲労感の残る体に鞭打って、郵便局でミラに頼まれていた所用をすませた後出社したルネは、秘書室に入った途端、何かにぶつかつたように立ち竦んだ。

（あ……）
微かな甘い香りが、部屋の中に漂っている。

それを嗅ぎ取ったルネは、たちまち心臓の鼓動が速くなり、どっと体中から汗が噴き出るのを覚えた。

のろのろと視線を動かし、ずっと主不在だった副社長室の閉ざされたドアを見る。

（そこに……いる……あの人が……）

顔を強張らせて立ちつくしているルネに、ミラが部屋の奥から近づいてきて、その肩を励ますようにぼんと叩いた。

「おはよう、ルネ」

「あ……は、はい……おはようございます」

それではっと我に返ったルネは、じっと自分の反応を窺っているミラの鋭い目を見返した。

「昨夜遅くにパリに戻ってきたのよ、彼……今、一緒に視察に行っていたボルドー地区のマネージャーと中で話しているわ。コーヒーを二つ、持って行ってくれる？」

ミラの口調は穏やかだが、どこかルネを試すような響きがある。それが、一瞬怯みかけたルネの中に、負けん気を蘇らせた。

「は、はい…大丈夫です」

そんなルネを、目を細めるようにして眺めて、ミラはそっと付け加えた。

「あの人も向うではトラブルの收拾に大変だったみたい…ご機嫌斜めだから、気をつけてね」

ルネは無言でうなずいて、ミラから教えてもらっていた手順で、コーヒー・メーカーに豆をセットし、予め温めておいたカップに出来たての熱いコーヒーを入れ、副社長室に向かった。

部屋の前で少しだけためらった後、ルネはドアを軽くノックした。低い応えが、中から返ってくるのに、胸が震える。

深呼吸すると、ルネは勇気を出してドアを開き、この世で一番愛しくて憎らしい男の名前を呼んだ。

「ムッシュ・ヴェルヌ、コーヒーをお持ちしました」

悪魔のように黒く(2)

「へえ…驚いたな、本当にムツシュ・ロスコーによく似ている。よく、こんな子を見つけましたね」

部屋に入って最初にルネに声をかけたのは、ローランと向かい合っ
てソファに座っていた若い男性社員だった。ミラがボルドー地区
の担当マネージャーだと言っていたけれど、ルネともそれほど年が
離れているようには見えない。ローランは邪魔で使えない人間をば
つさり切って捨てた後、若くても才能とやる気のある人間をどん
どん登用していったというが、そのいい例だろう。

「はじめまして、ルネ・トリュフォーです」

ルネが丁寧に挨拶すると、彼も人当たりのいい笑顔で返してくれ
た。

「僕は、アシル・クロード・リュリ。よろしくね、ルネ君」

ローランと言えば、2人の会話が耳に入っているはずなのに目
も上げず、気難しげな顔をして、テーブルの前に広げた書類に目を
通している。

「どうぞ、コーヒーです」

「ああ、ありがとう、丁度熱いコーヒーが飲みたかったところだっ
たんだ。昨夜遅くに帰ってきたものだから、まだちょっと疲れが取
れてなくってね」

人懐っこい性質らしいアシルに少し緊張がほぐれるのを覚えたル
ネは、ローランの前にもコーヒーのカップを置いた。

「どうぞ、ムツシュ・ヴェルヌ」

ローランは他の何かに心を捕らわれているのか、ルネに注意を払
うこともなく、無造作にカップを持ち上げた。温かいコーヒーの香
りがカップの中からふわりと立ち上る。それを嗅いだ彼は、鼻をち
よっと皺めて、口元に運びかけたカップを再び下ろした。

「…淹れなおせ」

「えっ？」

つい聞き直してしまったルネの顔を、ローランはじろりと睨んで、苛立たしげに命じた。

「朝っぱらから、こんなまずいコーヒーなんぞ飲みたくない。さっさと淹れなおしてこい！」

同じコーヒーを飲んでいたアシルが、目をまん丸くして、

「えっ、別に、普通に美味しいですよ…」と呟いたが、ローランは無視だ。

「も、申し訳ありません…すぐに新しいものに変えてきます」

ルネは慌ててカップを取り下げ、逃げるように部屋から飛び出していった。

「あら、ルネ、どうしたの…？」

顔を強張らせたルネが副社長室から出てきたのを見咎めて、ミラがデスクから声をかけてきた。

しかし、それに応えるゆとりもなく、ルネはずんずん部屋を横切つて、先程使用したばかりのコーヒー・メーカーが置いてある小テーブルの所まで戻り、コーヒーを乗せたトレイを置いた。テーブルに両手を置き、気持ちを静めるよう、肩で大きく息をついた。

「まずいから飲めないだつて…？　口もつけていないくせに、よくも、そんな」

ルネは、ずきずきと痛む頭を震える手で押さえた。

ローランの冷たい言葉を聞いた時は、ただ動揺して、そのまま副社長室から飛び出してきたが、今は怒りと悔しさが勝る。

（先週末以来ずっと会っていなかったのに、僕の顔を見るなり、第一声が、あれか？　例えあの夜のことは遊びだったんだとしても、もっと他の言葉をかけてくれたっていいだろう…いや、違う…！）

ルネは自分の女々しさを振り払おうとするかの如く、激しく頭を振った。

「一体どうしたというの、ルネ？」

気遣わしげな声がかけられるのに、ルネが顔を上げると、ミラが

傍らに立っていた。

「ムツシュ・ヴェル又にも、何か言われたの？」

ルネは弱々しく微笑んだ。

「いえ、別に…ただ、僕の出したコーヒーを、まずいから飲めない、淹れなおせと突き返されただけです」

「何ですって？」

ミラは眉をしかめ、コーヒー・メーカーに残っていたコーヒーを新しいカップに注いで、味見をした。

「…別に、まずいなんてないわよ。いつもここで出しているのと同じコーヒーよ。おかしいわねえ、豆だつて変えてないし、コーヒー・メーカーを使うなら、誰が淹れたつて同じ味のはずでしょう。私が淹れても、まずいなんて文句を言われたことはないわよ？ だからつて、別に美味しいと言つてもらつたこともないけど…」

「でも、実際、ムツシュは匂いを嗅いだだけで、駄目だと言つたんです」

「何よ、一口も飲んでいないのに、そんな言いがかりみたいなお話を言つた訳？ それはちよつと酷いわね…私が淹れなおして、代わりに持つていきましようか、ルネ？ 単に機嫌が悪かつただけだと思つわ。あなたが相手だと軽く見て、腹立ち紛れについあつたのかも知れない…」

ミラの言葉に半分耳を傾けながら、一方でルネは、必死に考え続けていた。

（僕の淹れたコーヒーをまずいとあの人は言つた…でも、実際舌で味わつた訳じゃない。カップから立ち上る香りを嗅いだだけだ…匂い…コーヒーの匂いだけで、受け付けなかつた）

ルネははたと思いついたかのように頭を巡らせ、カップやグラス類と一緒にコーヒー豆の缶が収納されている棚を見上げた。小型の冷蔵庫が入っているキャビネットの上に置かれた細長い棚の上部には、同じコーヒーの未開封のストックが入っているから、缶の中身がなくなつたら、それを開封して使うようにとミラから教えられて

いた。

何気なく目を上げると、天井に据え付けられている空調機に気がついた。

ルネが、コーヒー缶を出そうと上げた手を棚の上部にまで持っていき、かざしてみると、空調から出る温かい風が手にあたった。ここ数日急に冷え込んだため、いつの間にか暖房に切り替わっている（ふうん…コーヒー豆をストックしている棚に直接エアコンの風があたる訳か…ああ、何となく原因が分かってきたような…）

ルネは棚を開いて、先程使ったコーヒーの缶を取り出し、蓋を開けた。

「豆が原因だと思うの？ でも、ルネ、ここで使っているコーヒーは、ルレ・ロスコー系列のレストランに卸しているのと同じものよ。アラビカ種の上質なものを使っているから、品質的に問題はないはずよ」

確かにミラの言う通り、予め細挽きにしてあるコーヒーは、ルネが学生時代一人暮らしのアパルトメントで暮らしていた頃に使っていたような、スーパーで買うものと比較にならないほど上質だと思っていた。けれど。

「普通の人は気付かず、満足できるレベルだと思うんですけどね…でも、あの人は…」

ルネは蓋を外した缶を鼻の近くに持って行って、中のコーヒーの匂いを嗅いでみた。

（うん、やっぱりいい豆を使っている。この甘くてフルーティーな香り…スーパーのコーヒーとは比べ物にならないや。でも、注意してみると、心地よい芳香の中に微かな異臭が混じっている。何だろ、古くなった油のような…酸化した臭い…）

先程このコーヒーを出した時のローランの反応が、閉じた瞼の裏に浮かぶ。鼻腔に入ってくる香りに、我慢できないとばかりに顔を背け、コーヒーを運んできたルネを苛立たしげに睨みつけてきた。

（そう言えば、出勤途中に前を通るカフェ…とても美味しいコーヒ

ーを出す」と評判だったな。いつもたくさんの人で混み合っていて、なかなか立ち寄る機会がなかったけれど、いつかあそこのコーヒーを飲んでみたいと思うような、とても素敵な香りが漂っていて…確か、焙煎した豆の販売もしていたような…)

はたと目を開けたルネは、コーヒー缶をもとの場所に戻しながら、腕を組んで自分の様子を窺っていたミラを振り返った。

「ミラさん、すみません、ちょっと出かけてきます」

「え？」

「ムツシュがこのコーヒーを駄目だと言った理由がどうやら分かったんで、代わりのコーヒーを調達してきます」

やけにやる気になっているルネの様子に、ミラは呆れたように目を丸くした。

「あの人の我儘のために、わざわざ外にコーヒー豆を買い出かけることはないと思うけれど？」

「それは、そうかもしれないですけど…やっぱり、行ってきます。あんな言い方されたら、何だか僕もむきになっちゃって…そんなに遠い場所じゃないし、20分以内に帰れると思いますので、後はよろしく願います」

賛同しかねるといった表情のミラに、にこっと笑って頷き返したルネは、時間が惜しいとばかり、そのまま部屋から飛び出していった。

「全く、何をそんなに一生懸命になるのだから…」

ミラの溜息混じりの呟きなど、何が何でもローランを満足させるコーヒーを淹れてやるという意地と使命感に駆り立てられている、今のルネには届かなかった。

それにしても、本人は気付いていなかったかもしれないが、この数日人形のような無表情で淡々と仕事をこなしていたのが嘘のように、今のルネは生き生きしている。ローランに怒鳴りつけられたことが、劇薬のようにほど効いたのか。しかし、ルネを失意のどん底に叩きこんだ元凶であるローランが戻ってきた途端、腹を立てた

り、悔しがったり、笑ったりという人間らしい感情を、ルネが取り戻したのは、思えば不思議な話だった。

そして、約20分後、小さな紙袋を片手に引っ搦んだルネが、息を弾ませ、オフィスに帰ってきた。

「ミラさん、ミルは確かありましたよね？」

「え…ええ、コーヒー・メーカーと一緒に買ったのがあつたはず…面倒だから、この頃は使わなくなっていたのだけれど…あら、豆のまままで買ってきたの？」

「はい、カフェの人と相談して、挽いた状態より、この方が少しでも劣化しにくいだろうということでしたので」

それがどうしたのだと言いたげなミラに探し出してもらったミルを使って、買ってきた豆を挽いてみる。それだけで、ふわりとコーヒーの良い香りがたつのに、ルネは目を細めた。

「ここのカフェ、豆は自家焙煎なんですって…これも今朝火を入れただけで、僕も香りを確かめさせてもらったんですけれど、鮮度なら文句のつけようのないくらいのもんです」

「鮮度が問題だったって…？ ここにあるコーヒーだって、取り寄せてから、まだそんなに経ってはいないと思うけれど…」

「確かに、あれを古くなつたと処分してしまうのはもったいないと思います。たぶん、普通の人なら気にならないほどの微妙な変化でしょうね。僕も、こんなものかと思えば、まあ、普通に美味しく飲めますし…ただ、本当に新鮮ないいものと比較してしまうと、ああ、やっぱり違うなって分かってしまう」

ミラに説明する間も、ルネはてきぱきと動いて、先程と同じコーヒー・メーカーを使って、同じ分量のコーヒーを作った。

「豆の量もお湯の温度も同じ…ブレンドの配合もこのストックに近いものを選んできました。これで駄目だと突っ返されるようなら、僕にできることはもうありません。正直に、僕はコーヒー職人じゃないので無理です、あなたの口に合う美味しいコーヒーを飲みたいなら、どうぞ外で飲んでくださいって、言ってます」

「あら…」

やれるだけのことをやったルネは、ミラに向かつてはつきりと宣言した後、コーヒーのカップをトレイに乗せて、再び副社長室に向かった。

「失礼します」

ルネは軽くノックした後、ドアを開いた。

「遅くなって申し訳ありません、ムッシュ・ヴェルヌ、コーヒーを淹れなおしてきました」

落ちついた声音で呼びかけながら、ルネが素早く目を上げ確認すると、アシルは既に退席した後のようで、部屋にはローランが1人、デスクに座って、分厚い書類の束に目を通してしている。

（まだ低気圧は去っていないみたいだな）

顔を上げてルネを見やる気配もなく、眉間に皺を寄せて、目の前の仕事に集中しているローランを注意深く観察しながら、ルネは滑らかに動いた。

そうしてローランの傍に立ったルネは、ごく低い声で話しかけながら、デスクの上にそっとコーヒーのカップを置いた。

「どうぞ、熱いうちに召し上がってください」

真っ白なカップの中で揺れるコーヒーに目を落しながら、ルネはふと、この黒い液体の味と香りに魅せられた、昔のある政治家が残した言葉を思い出した。

（確か、ナポレオンに仕えた人だったな…よいコーヒーというのは、悪魔のように黒く、地獄のように熱く…とか言ったんだ。その後、どう続いたんだっけ…？）

カップから立ち上る芳香の素晴らしさに惹かれたのは、ルネだけではなかったようだ。ローランが黙々と仕事を進める手を置いて、ちらりと目の前のカップに視線を向けた。

（ローラン、今度は味見くらいしてくださいよ。でないと僕、さすがに切れて、そのコーヒーを頭からぶっかけちゃいますよ…？）

ルネが固唾飲んで見守る中、ローランはカップを持ち上げ、口元

に運んだ。そのまま、立ち上る香りを確かめるよう、しばし手を止めた後、彼は、ルネが思案の末に用意したコーヒーに口をつけ、その一口を深く味わうよう、ゆっくりと飲んだ。

（あつ、笑った…！）

その厳しく寄せられた眉が和らぎ、口元が僅かに綻んだのを見た時には、ルネは、嬉しさのあまり、やったと叫んで飛び上がりそうになった。

「…確か、タレーランだったな」

ローランはもう一口、コーヒーを味わった後、満足そうに微笑みながら、こんなことを呟いた。

「良いコーヒーというのは、悪魔ように黒く、地獄のように熱く…と言ったのは…」

さつき自分が思い出しかけていた言葉をローランが口に出したのに、ルネはどきりとなった。

「そ、それから…？」

続きが知りたくて、思わずルネが催促すると、ローランはもう少しこの香りに浸っていたいというように目を閉じて、言った。

「…天使のように純粹で、そして、愛のように甘い、だ」

「ああ、そうでした…思い出して、すつきりした」

美食家としても有名な敏腕政治家のタレーランが、美味しいコーヒーを口にした際の賞賛として伝えられているこの名言は、今でも度々良いコーヒーを語るのに用いられる。

（この言葉を引き合いに出したということは…ローランは、僕の淹れたコーヒーを美味しいと思ってくれたんだ）

苦労が報われたルネは、肩から力が抜けるのと同時に、無性に嬉しくてたまらなくなってきた。ローランに酷いことを言われて、悔しさのあまり泣きそうになったことも忘れ去るほどに。

「…やっと人心地ついた気がするな。ボルドーでは、出された食事もコーヒーも最悪だった…毒を盛られなかっただけ、まだまだが

」

ボルドーのホテルでトラブルが起こったとミラが話していたのを、ルネは思い出した。新しいトップ2人に対して批判的な保守派の間はまだ残っていて、その急先鋒がボルドー地区にある古いホテルなのだそう。マネージャーの手に負えず、副社長のローランが直々に出て行った程なのだから、相当にもめたのだろう。

「お疲れのようですね」

「今回は穏便にすませるつもりだったんだがな…結局うまくいかず、ホテルの支配人と他何かを処分した。中にはできれば残しておきたかった有能な人材もいたんだが、こちらの気持ちは通じなかったようだ。人でなしの悪魔だと散々に罵られぞ。やれやれ、面罵されるのにも大概慣れたつもりだが、今回ばかりは、少々疲れた」

嫌なことを思い出したのだろう、ローランは再び眉をしかめ、カッパに残っていたコーヒーを一息に飲み干した。

「人の上に立つ人間は、舐められたら終わりだ。そのくらいなら、悪魔のように恐れられた方がいい」

「でも…人の上に立つ人間は、部下に憎悪されるようなことも避けるべきではないですか…？」

つい口を挟んでしまったルネは、これでまたローランの機嫌を損ねるのではないかと一瞬恐れたが、彼が気にした様子はなかった。

「ああ、そうだな…その辺り、今回の相手は、どこかで扱いを間違ったんだろう。しかし、憎まれることを恐れているのは、大きな変革はなしえない。だから、何かあった時は、俺が憎まれ役を引き受けることになっている。そのためのスーツトップ体勢だ…社長のガブリエルのイメージは、あくまで綺麗なまま守られなければならないからな」

ガブリエルの名前をローランの口から聞いた途端、思い出したくないことを思い出してしまったルネは、顔を強張らせた。

「まあ、ボルドーでの一件はもう終わったことだ。それよりも、ルネ、美味しいコーヒーをありがとう」

ローランは椅子の背にもたれかかりながら、デスクの傍に立ちつ

くしているルネに向かつて、柔らかに微笑みかけてきた。

「さつきは酷いことを言つて、悪かつたな」

「い、いえ…」

職場では鬼みたいに眉を吊り上げてばかりいるのかと思つていたら、突然こんな優しい目を向けてくるなんてずるいと、ルネは密かに唇をかんだ。

(うつん、それより何より、僕に嘘をついて騙しておきながら、何食わぬ顔をして親しげに話しかけ、僕の心をかき乱すことが許せない…)

突然胸の奥からこみ上げてきた、怒りと悲しみがありませんになつた感情に、ルネは唇を震わせる。

すると、ローランは怪訝そうに瞬きをして、椅子から僅かに身を乗り出した。

「ルネ、どうした…何だか、顔色が悪いぞ。おまえこそ、随分疲れしているんじゃないのか…？」

ああ？ 一体誰のせいなんだ、誰の？！

口から飛び出しそうになる罵詈雑言をぐつと飲み下して、ルネは空になったコーヒー・カップを素早くトレイに乗せると、くるりとローランに背中を向けた。

「失礼しました」

「おい…」

ローランが何か言いかけるのを拒絶して、ルネはそのまま逃げるように部屋から飛び出していった。

(駄目だ…やつぱり僕は、ローランを前にして平静でなんていられない。裏切られたと思ひ知つたのに、まだ、あの人のことが好きなんだ…ああ、最悪…)

副社長室のドアにもたれかかったまま悄然と肩を落としているルネに、ミラが近づいてきた。

「何よ、今度もうまくいかなかったの？」

「い、いえ…コーヒーはうまくいきました。美味しいと言って、ち

「やんと全部飲んでくれましたよ」

「それなら、どうして、そんな浮かない顔をしているのよ…?」

「別に…ただちよっと緊張が途切れて、脱力していただけです」

ミラの手前強がってみせたルネは、本当に何事もなかったかのような自然な態度を心がけながら、残ったコーヒーを彼女と一緒に味見した。

「確かに、美味しいわねえ」

「そうですね、悪魔のように黒く、地獄のように熱く、天使のように純粹で、愛のように甘いかどうかは分からないけど…」

「え?」

「いいえ、何でもありません。えっと、ミラさん、説明しますね…ムツシユが最初に僕が淹れていったコーヒーを駄目だと言ったのは、たぶん、エアコンの暖かい風にあたり続けたコーヒーの香りの劣化に気付いたからです。あそこの棚はコーヒーの保管場所としては適切ではないので、他の場所に変えましょう」

ミラは、ルネが指差したエアコンの位置を目で確認しながら、なるほどというように呟いた。

「そうだったのね…一か月ほど前に部屋の模様替えをして、その時にあの棚の場所も変えたのよ。それがエアコンの近くになっていたことが、悪かった訳ね」

「それから、コーヒー自体は、今までと同じ豆で十分ですが、なるべく少量ずつ、こまめに新しいものを購入するようにすること。そして密閉できる容器に入れて冷凍保存するか、でなければ豆のままで保管して、使うたびにミルで挽いてからコーヒーを淹れるようにする…こうすることで少しでも鮮度を長く保てると、カフェの店員さんに教えてもらいました」

「うっん、いちいち豆を挽くのは面倒だわねえ…忙しい時にそんな注文されたら、私なら、切れちゃうわよ?」

「でも、ムツシユは外出されることも多いようだし、日に何回もコーヒーを淹れる訳じゃないでしょう…? 来客のあった時も含めて

数回程度なら、僕がご用意します」

ミラは白々とした冷たい目で、ルネの真面目な顔をじいっと見つめた。

「あなたって、馬鹿ね」

「は？」

「私に言わせれば、あなたはムツシユの我が侂を聞き入れるべきではなかった。大体、私相手なら、今までそんな文句をつけたことはなかったのよ。それを、あなたが一度許してしまったために、今後もずっと、同じ要求を叶え続けなければなくなってしまった。それに、あなたなら多少の無理はしても解決策を見つけてくると分かった以上、あの人はまたいつか、別の難題を突き付けてくるでしょう。あなたはそれでよかったの、ルネ？」

「そ、それは…」

ミラの鋭い指摘に、ルネはぐつと言葉に詰まった。

「コーヒーくらいなら別にいいですけど、何でもかんでも僕が聞き入れると思われるのは…ちょっと…」

もしかしてまずいことをしたのかと後悔しかけたルネだったが、その時ふと、自分の淹れたコーヒーを美味いと言って飲んでいたら、ローランの柔らかな笑顔を思い出した。

(ミラさんの言う通りだとは思っけれど、あんな顔をされちゃったら…やっぱり僕は許してしまうんだろうなあ…ほんと、ずるい人だ…)

ルネは観念したように肩を落として、小さく笑った。

「仕方ないですね。ムツシユにまた何か難しい注文を突きつけられたら、その時はその時、僕は今日と同じように自分のできる限りのことをしてみるだけです」

これもまた惚れた弱みというやつだ。この弱みに付け込まれること自体、それほど嫌ではないルネだったが、惚れた相手の心が自分ものではないということとは、どうにもならないくらいに辛い。

「ほんとに馬鹿な子…がんばりすぎて壊れないよう、気をつけなさ

い

ミラは諦めたように、溜息混じりの忠告を残して、自分のデスクに戻っていった。

(がんばりすぎて壊れないように、か)

コーヒー豆の保管場所を冷蔵庫に移し、片づけものをしながら、ルネはぼんやりと思った。

(でも、僕は一体どう気をつければ、壊れないですむのかな？ どうすれば、あの人がすぐ傍にいる状態で、これ以上平静を保ち続けることができるのかも分からない…本当は、今にも砕け散ってしまいたいそうなのに…)

ローランが戻ってきた金曜日。今日一日を乗り切れば、明日は休みだから何とかなると言い聞かせながら、ルネは黙々と仕事に打ち込み続けた。

しかし、そうやって自分の殻に閉じこもることで副社長室にいるローランの存在を忘れようとしても、結局、そんなことは無理だと思えばかりのルネだった。

悪魔のように黒く(3)

夕方、6時を少し回った頃、外出していたローランがオフィスに戻ってきた。

「ルネは、もう帰ったのか？」

「ええ、ついさっき、オフィスを飛び出して行きましたよ。これから秘書の学校ですって…今週は、仕事だけでも新しいことを覚えるのに大変だったでしょうに、学校にも休むことなく通って…真面目な子ですね」

帰り支度をしていた手を止めて、ミラは何か言いたげな眼差しをローランに向けてくる。

「ムツシュ・ヴェルヌ、ルネのことで少しお話があるのですが、よろしいですか？」

「ああ…俺も、この一週間のあいつの様子を、君に確認しておきたかった。時間は大丈夫なのか？」

「もちろん、きちんと残業時間としてつけさせていただきますので、御心配なく」

副社長室の自分のデスクに身を落ちつけたローランは、両手を胸の前で組み合わせながら、無感情を装って目の前に立つミラを面白そうに眺めやった。

「それで、教育係として、あいつの仕事ぶりをどう思う？ お前の後任として使えそうか？」

「ルネは、とても頭のいい子ですわ。今までここに入ってはすぐに辞めていった人達と比較にならないくらい、物覚えはいいし、すぐに応用できるし、機転も利く…その点、あなたが自分でスカウトしただけはありますわね」

「そりゃあ、よかった」

ローランはにっと笑って、ポケットから取り出した煙草に火をつけた。

「他人の評価に厳しい君がそこまで褒めるなら、あいつは、そこそこできるんだろう。引き継ぎさえちゃんとできていれば、君がいなくなっただ後も大丈夫そうだな。優秀な秘書の君がいなくなるとは、俺としては残念至極、心細い限りだったんだが？」

ローランのすつとぼけた態度がだんだん我慢ならなくなってきたのだらう、ミラの柳眉が僅かに逆立った。

「そんなことより…あの子をムツシュ・ロスコーそっくりに変身させるなんて、一体どういうつもりですか？ おかげであの子の初出社の時は、社内がひっくり返るほどの大騒ぎでしたのよ。私だって、まさかあんな姿になっているなんて聞いていませんでしたし、どう皆さんに説明したらいいのか、困り果てました」

「ほう、そんなに皆が皆、驚き騒いだのか」

「ええ、さすがの私も、ルネのあの姿を見た時には、ショックのあまり、危うく産気づくかと思いましたが」

ミラのどぎつい言葉に、ローランは煙草にむせて咳込んだ。

「いくらムツシュ・ロスコーがあなたにとって特別な人だからといって、何も知らないルネを、他人そっくりに作り変えてしまうなんて、あの子の人権を無視した酷い話ではないですか。可哀そうに、ルネは随分ショックを受けていましたよ…あなたに個人的な感情を抱いてしまった後に、自分は他人の身代りに過ぎないと分かっちゃった訳ですからね」

「成程：あいつの変身ぶりを見せつけられれば、他人はそういう解釈をする訳か。俺がガブリエルの不在の寂しさを紛らわせるために、同じ顔をしたスペアを傍に侍らせることにしたと…ははっ、そりゃ、大した変態だな」

飄々としたローランの口ぶりに、ミラは顔をしかめながら、指先で眉間を軽く押さえた。

「ご自分で言わないでください…ああ、また頭が痛くなってきました」
「そういう解釈で皆が納得するなら、そのままにしておくさ。しかし、ミラ…君は本当に、ルネとガブリエルが見分けがつかないほど

そつくりだと今でも思っているのか？」

ローランは、ふいに今までとは違う真面目な顔になると、上体を前に傾けながら、まっすぐミラに問いかけてきた。

「今は別に、それほどまでとは……」

ミラは戸惑いながら、ローランの問いかけを吟味するよう、考え込んだ。

「確かに、最初は見間違えましたけれど、私も『大天使』と間近で話したことならば何度もありますからね。他の社員達も、本物と会ったことさえあれば、ルネはやはり別人なのだと言っただけで済んでしまう。ルネは普通の可愛い男の子ですけど、ムツシュ・ロスコーはやはり存在自体が特別ですもの。実際、今となってはルネの存在自体に慣れて、誰も騒ぎたてなくなりました」

「つまり、ガブリエル本人を直接知らない人間にとっては、ルネは充分その身代りになりうるが、あいつを見知っている人間の目を誤魔化すことはできないというわけだ」

煙草をふかしながら、したり顔でふつと微笑むローランを、ミラは思い切り胡散臭げに凝視した。

「ガブリエルを身近でよく知っている人間……その筆頭は、あなたですわね。すると、あなたにとつて、ルネがいくらムツシュ・ロスコーを真似て装うとも、その身代りにはならない……それでは、一体、あの子の外見を変えさせたことには、どういう意味がありますの？」

「さて、どうだろうな……別に深い意味はないのかもしれないぞ。たまたま旅先で出会ったガイドがガブリエルによく似ていて、しかもなかなか頭も切れる上、俺の傍に置いてもいいかなと思うくらいに可愛かった……実際それだけのことなのかな？」

「もう、肝心な話となると、そうやってはぐらかす……あなたが何を企もつが、私の知ったことではありませんけれど、せめてルネにだけは、本当のことを打ち明けて、誤解を解いてあげてもいいんじゃないありませんか？ てつきりあなたに騙されて、ガブリエルの身代わりとして弄ばれたと思っ込んでいます。ここから逃げ出さな

ったのはあの子なりの意地なんでしょうけれど、無理をしていることは傍目からも明らかですわ。ゾンビのように心を殺して黙々と仕事をこなし続ける、あんな不自然な状態が、いつまでも続くはずがありません。近いうちにきつと大爆発してしまうでしょう。御自分で見つけて引つ張ってきた大事な秘書を、このまま壊してしまってもいいんですの？」

鉄の女も、最後の方は、つい感情的になってしまったようだ。デスクに両手をつけて身を乗り出すようにしながら、ミラは激しい口調でローランに訴えた。

しかし、ローランは特に感銘を受けたふうもなく、腹が立つくらいに冷静な態度で、そんなミラを軽くないした。

「何をそんなにむきになっている、ミラ…どうやら君はルネのことが気に入って、珍しくも感情移入したらしいな。素直で真面目で健気な上、仕事をやらせても優秀な後輩の先行きが心配か？　しかし、他人の問題に首を突っ込むなんて、君らしくないぞ」

「ムツシュ…！」

「分かったから、興奮するな、腹の子に障るぞ。なあ、ミラ、君はもうすぐ産休に入る身だろう…自分が去った後のことまで、あれこれと気を回して心配する必要はないんじゃないか？　大体、下手に関わっても、その結果について君は何の責任も負えないわけじゃないか、そうだろう？　君の意見は一応聞いておくが、今の所俺は、ルネに俺の腹の内にあることを打ち明けて説明してやるつもりはない。あいつが本当にのっぴきならない所まで追いつめられて、自分で俺を問い正そうとするなら、話は別だがな」

口調は柔らかだが、言っている内容は冷徹そのもののローランは、ルネに対しするミラの情を一蹴すると、全く悪びれもせずにつけ加えた。

「大体、その必要もないのに、他人に自分の手の内全てを明かしてたまるか。あいつはなかなか使えそうな奴だが、今の所、俺にとつては大勢いる部下の一人に過ぎない。特別な感情があるうがなかる

うが、あいつが部下として俺の下にいる限り、俺のやり方に従ってもらう」

ミラが唇を噛みしめて睨みつける中、ローランは煙草を灰皿でもみ消して、椅子の背にもたれかかった。

「ルネの精神状態については、俺も今、君の話を聞いて、どうにかケアしてやらんと駄目だなと考えているところだ。確かに、あいつが不安定になったのは、言い訳のしようもなく、百パーセント俺の責任だからな。そういう訳で、これ以上、俺のルネに対するやり方に、君はあれこれ口をはさむな。あいつは俺のものだからな…どう扱おうと俺の勝手だろう？」

ローランは、これで話は終わったとばかり、両手を軽く上げてみせる。

するとミラも、もうこれ以上何を訴えても無駄と悟ったのだろう、くるりと踵を返し、苛立たしげにドアを叩きつけるようにして部屋から出て行った。

「ああ、妊婦を興奮させたくはないんだがなあ」

その後ろを見送って苦笑混じりに呟いた後、ローランはしばらく椅子に身を預けたまま、何事か思案にふけていた。

「身代りだなんて、真面目なだけに、あいつにはショックが大きすぎたか…さて、どうしたものかな…」

そして、ふと思いついたようにポケットから携帯電話を取り出した彼は、迷わず、一番よく連絡を取り合っている相手に電話をかけた。

「…ガブリエル、俺だ。いや、ボルドーの件なら、明日会った時に詳しく報告する。実は別件で、おまえにちょっと相談したいことがあるんだが…」

夜10時前、専門学校の秘書コースのクラスを終えたルネは、疲れ切った体を引きずるようにして、自分のアバルトメンに戻った。

仕事を終えて社を出る時に既に疲労は感じていたのだが、無理をしてクラスにも出た後に、この1週間の疲れが一気に襲ってきたようだ。

（そう言えば、この所、人間らしい生活をしていなかったからなあ。忙しい方が気が紛れるからと昼間は必死に働いて、その後で学校の授業にも出て…アバルトメンに帰ったら、食事もそこにベッドに倒れ込むように眠って…そう言えば、昨日何を食べたっけ？ 冷蔵庫にまだ何か食べられるものは残ってたかな…）

昼間にカフェでサンドイッチを食べたきり、何も口に入れていなかったのも、今更のようにルネはひどい空腹を感じながら、ポケットから取り出した鍵でアバルトメンのドアを開け、よろよろと中に入った。

「これで1週間が終わったあ…はあっ、疲れたよお…」

テキストが入った重い革のバッグを床に落とし、スーツもその辺りに脱ぎ散らかしながら、ルネはまっすぐにキッチンに向かい、冷蔵庫を開けた。

「あはは…食べられるものが何もない…帰りに何か買って帰ればよかったな…」

ビールの缶だけがぎっしり入った冷蔵庫の中身を覗きこんで、乾いた笑い声をたてたルネは、取りあえず喉も渴いていたので、その中の一本を取り出し、冷蔵庫にもたれかかったまま、一気に飲んだ。「はあっ…」

一息に空けた後、ルネはそのまま床に座り込んだ。当たり前のことだが、空きっ腹にアルコールはよく回る。

（どうしよう…お腹はすいたけど、外に食べに出かけるだけの元気はもうないや…お酒も回って、ふらふらしてきたし、このまま朝まで寝てしまおうかな…）

ルネはくすんと鼻を鳴らして、床にごろりと横になった。

（おかしいなあ…体力ならあるはずなのに、どうして、こんなに疲れているんだろう…やっぱり、慣れない都会暮らしと仕事のせいで、精神的なストレスが大きいのかな）

それにしても、ここまで心身ともに追い込まれたのは初めての経験だった。我ながら、一体どうしたのだろうと恐くなるほどに、日常生活が破綻寸前になっていることは、冷蔵庫の中身を見るまでもなく薄々分かっていった。

（やっぱり、このままここに踏みとどまって仕事を続けるなんて、僕には無理なのかもしれないな。今日ローランに会って分かった…僕は今でもあの人が好きだし、諦めることなんてできそうにない…）
一時は、ローランとの間であったことは一夜の遊びと割り切って忘れてしまおう、個人的な感情を仕事に持ち込まないことが大人のやり方だと自分を納得させようとした。しかし。

（僕は、そんなにあっさりと自分の気持ちを切り替えてしまえるようなタイプじゃない。たった一回えっちしただけで別に恋人面するつもりはないけど、好きになっちゃったんだから、仕方ないじゃないか！ クールに遊ぶのが都会に住む大人の男のスマートなやり方なのかもしれないけど、僕はどうせ田舎者だし、いきなりそんな物分かりのいい大人になかなれないよーっ！）

感情が一気に高まったルネは、キッチンの床に倒れ伏したまま、めめそと泣きだした。

（ローランの馬鹿…本当に悪魔みたいな酷い人…）

アルコールが頭にまで回ったせいか、服を半分脱ぎかけただらしない恰好のまま、ルネは本当に床でうとうとし始めた。

他人がこんな自分を見たら、何かの発作でも起こして倒れたのではないかと、さぞや肝をつぶすだろう。そんなことをぼんやり思いながらも、動く気にはなれず、一体どのくらいの時間が経ったのか。遠くでアバルトメンのブザーが鳴ったような気がしたが、こんな時間に来客があるはずもなく、夢だろうと思ってルネが放置していると、そのうち今度は、鍵を使って玄関のドアを開けるような音が

した。

(あれ、おかしいな…誰かが、部屋に入ってくる…?)

朦朧とした意識の片隅で、ルネは玄関から入ってきた足音が、キッチンに近づいてくるのを聞いていた。

(夢だよね…それとも本当に泥棒とかだったりして…)

それでもまだ起き上がって確かめる気になれずじつとしていたら、その侵入者は、半裸のまま冷蔵庫の前に倒れ伏しているルネを発見したようだ。はっと息を飲んだきり、しばし固まった。

ついで、切羽詰まったような足取りで歩み寄って、ルネを見下ろす。

(あれ、何だろう…プールみたいな臭いがする…)

次の瞬間、その侵入者が、動揺を滲んだ声でぼそつと呟いた。

「き…救急車…」

その低い声を聞いた途端、ルネはぱつと目を見開いて、自分の顔のすぐ傍にあった、その男の足首をとっさに掴み締めた。

「そんなもの呼ばないで…別に死んでないから…」

びくつと震えた足が誰のものなのか、ルネにはもう分かっていた。のろのろと頭を上げると、やはり、携帯電話を握り締めたまま凍りついているローランと目があった。

「ムツシュ・ヴェルヌ…ど、どうして、あなたがここに…?’

不法侵入という言葉がルネの頭を過ったが、ローランは別に後ろめたい素振りも見せず、ルネが持っているのと同じ鍵を堂々と目の前に示した。

「この部屋のスペア・キーだ。今夜ジム仲間のマティアスに会った時、預かったんだ。帰りにお前のアバルトメンに立ち寄るつもりだったから、ついでに渡そうと思ってな」

「マティアス…ああ、あの不動産屋さんの…」

「スペア・キーができれば、仕事の帰りに取りに行くという話になっていたそうだな。おまえがいつまで経っても事務所に現れず、留守番電話にメッセージも残していたのに連絡もないが、どうしてい

るんだらうと心配していたぞ」

「ああ、そうでした…取りに行くの、すっかり忘れてたし、留守番電話なんて、この所確認してもいなかった」

一瞬ローランが自分に無断でスペア・キーを作ったのではと疑ったルネは、ほっと胸を撫で下ろした。

「やれやれ、それにしても想像以上にひどい有様だな。この部屋も、おまえ自身も…」

ローランはキッチンのテーブルの上に持ってきた荷物を置いて、再びルネの所に戻ってきた。

「おい、いつまでそんな所で寝ているつもりだ。気分が悪いなら、ベッドで休め。キッチンの床で寝たりしたら、健康な人間でも風邪をひくぞ」

そう優しく声をかけながら、ローランは上体を起こそうともがいているルネの傍に膝をついた。

「何だかまだ目が回る…ビールのせいかな…」

吐き気を堪えるよう口を押さえるルネの頭を抱き寄せ、もう片方の手で、ローランは目の前の冷蔵庫のドアを開けた。

「…ビール以外は見事に空だな。俺の家の冷蔵庫よりひどいぞ。差し入れを買ってきて、正解だった」

呆れたように呟くローランの声を聞きながら、ルネは抱き寄せられた胸におずおずと頬を寄せていったが、大好きなあの匂いがしないことに顔をしかめて、手で押し返した。

「ふにゃー…嫌だ、塩素臭いっ…!」

ルネの反応に、ローランも気になつたらしく、持ち上げた腕に鼻を押し付けるようにして臭いをかいた。

「仕事帰りにジムに寄って、1時間ほどプールで泳いできたからな…今夜はやけに消毒薬の臭いがきついと気になって、シャワーでよく洗ったんだが、まだ残っていたか。それにしても、犬並みに鼻が利く奴だな」

「…あなたに言われたくはありません」

力なく言い返すも、まだ動くのも辛そうなルネを見かねたのだらう、ローランは、その体の下に腕を回して持ち上げようとした。

「あっ、駄目です、ムッシュ…！」

ルネが慌てて制止の声をあげたのには訳がある。

案の定、ルネの体重の目算を誤ったローランはよろめき、とつさに冷蔵庫にもたれかかって体を支えた。

「…おまえ、意外と重いな…？」

ローランに怪しむような目を向けられたルネは、耳まで真っ赤になつて、焦りながら、その腕から逃げ出した。

「す、すみませんっ…そういう体質なんです。体脂肪が極端に少なくて、見かけよりも重くて…」

要するに、筋肉は重いということだ。すっきりとスリムにまとまったこの体は、実はぎゅっとなんて気を起さないよう、自力でふきこまれたら、きつと底まで沈んで二度と浮かび上がってこないだろう。

そんなことをローランに知られたくないルネは、間違つても、彼がもう一度自分を抱き上げようなんて気を起さないよう、自力でふらふらと歩いて寝室に逃げ込み、ベッドの上にあつた部屋着に着替えた。そうして、再びキッチンに戻つて、テーブルの前の椅子に腰を下ろす。

「あ、いい匂い」

テーブルの上に置かれた紙袋の中にはケータリング用のパックが幾つも入っていて、そこから漂ってくる食欲を誘う匂いに、ルネはすぐに反応した。

「今日、社でお前と会つた時、やけに顔色が悪いのが気になつてな。どうせ、この1週間ろくなものを食べていなかったんだらう。元気がなくとも、おまえが喜んで食べられそうなものを探して買ってき…と言つても、おまえは何が好きかまで分からなかったんだが、オーヴェルニユの家庭料理なら、気取つたレストランでの食事や油の回つた中華のケータリングよりも食べやすいだらう…？」

ローランはそんなことを言いながら、紙袋から取り出した料理のパックを開いて、テーブルに並べていった。

ジャガイモ入りのチーズのお焼き、豚肉とレンズ豆の煮込み、プルーンと野菜のテリーヌ……ルネの実家の料理とは微妙に違うけれど、確かに、どこか懐かしいような料理であることは間違いない。

「このレストランは普段ケータリングなどしていないんだが、おまえのために、特別に頼み込んで作ってもらったんだぞ。モンドール出身の夫婦が2人でやっている小さな店だが、味はいいと評判でパリに移り住んだオーヴェルニュ地方出身者が常連になっているぞうだ」

ちゃんと保温のできるパックに入っていたので、料理はまだ温かく、いかにも美味しそうで、ルネは早速手を伸ばして、ジャガイモとチーズのお焼きを口に運んだ。

「美味しい……これなら、食べられそうです」

「それを聞いて、安心したぞ」

フォークを持ち直して本格的に食べ始めるルネの様子に目を細め、ローランは、別の袋から取り出したボトルをテーブルの上に置いた。

「あれ、シードルですか……？」

「おまえ、好きだと言っていただろう……？　しかし、調子が悪いなら、アルコールは控えた方がいいかな」

「気持ち悪いのはもう治ったみたいですから、少しだけいただきます」

自分の好みをローランが覚えていてくれたことが意外であると同時に嬉しくて、ルネは気がつけば、彼に向って微笑みかけていた。

「うーん、やっぱり、俺には少し甘過ぎるな。ルネ、冷蔵庫のビールを1本もらうぞ」

ローランはまだ食器もほとんど揃っていない食器棚から探し出してきたグラスにシードルを注いで味見をしたが、すぐに顔をしかめて、グラスを置いた。代わりに、冷蔵庫から缶ビールを持ってきて、ルネの前の席に腰を下ろす。

「あれ、ローラン、あなたでもビールなんか飲むんですか…？」
「俺だって、別に毎晩高いワインばかり飲んでる訳じゃないさ」
自分のアバルトメンの小さなダイニング・キッチンで、こんなふうにローランと向き合ってケータリングの料理をつつきながら、打ち解けた雰囲気で言葉を交わしあっていることが、ルネは不思議だった。

本来なら、こんなふうに気安く人の部屋に上がりこんで一緒に食事をするなどと、ルネは彼に許すはずもない。

（ローランが来てくれなかったら、僕は今夜食事にもありつけず、あのままキッチンの床で泣きながら眠り込んで、きつと風邪をひいていた訳で…確かに、この人のおかげで助かったのかもしれないな。でも、そんなことで誤魔化される程、僕は馬鹿じゃない…それともやっぱり馬鹿なんだろうか？ 困ったことに、僕は今、ローランとこうしていられることが心地よいと感じている）

会社での彼は近づきがたく余所余所しい感じがしたが、今はごく自然にくつろいで、ルネに対する態度も親密で気遣いに満ちているからだろうか。

（どうしよう…こんなふうに優しくされると、うっかりまた勝手に思いこんで、信じてしまいそうだ。この人が僕のことを好きだなんて…）

差し入れのシールドを飲みながら、ルネは、ローランが豚肉とレズ豆の料理を頼張って、なかなかいけるなと自分に向かって話しかけてくるのを見守っていた。

（ローランがくれた、このシールド…甘酸っぱくて、切ない味がする）

ルネの複雑な心情を、ローランはどこまで斟酌しているのだろうか。それとも本当に無頓着なのか。

「この料理が気に入ったなら、今度は一緒に食べに行こう。出来たての方が、うまいに決まっているからな」

「え、ええ…それにしても、こんな素朴な家庭料理の店なんて、あ

あなたがよく知っていましたね」

「実は、ガブリエルに教えてもらったんだ」

臆面もなくローランが打ち明けたのに、ルネは料理をつつく手をとめた。

「さすがはアカデミー・グルマンディーズ主宰と言うべきかな。パリにあるレストランの情報なら、最新のグルメ情報誌よりもほど正確で信頼できる。美味いものに関しては、特別なアンテナが働くんだろうな…実際よく一人で食べ歩いているらしいが、あんな下町の小さな食堂まで網羅しているんだから、全く驚きだ」

ルネはシードルのグラスをぐつと握り締めながら、一気に早くなつた心臓の鼓動を鎮めようと努力していた。

（ガブリエル…雑誌の中で見た、僕にそっくりな人…ローランがこの世で最も愛しているという『大天使』…）

ルネは顔を俯けてしばし煩悶した後、思い切つたように目を上げ、ローランに向かって訴えかけた。

「あのローラン…ムツシュ・ロスコー…ガブリエルって、一体どんな人なんですか…？」

ルネの思いつめた顔を見たローランは、缶ビールを口に運びかけていた手を止めると、極めて真面目な顔つきになって、こつ切り返した。

「おまえが聞きたいというのなら、話してやるが…ガブリエルについて俺に語らせると、とてつもなく長い話になるぞ。本当に聞きたいのか？」

「う…」

ルネはとつさに怯んで、自分の反応をじつと窺う構えのローランの鋭い緑の目を見返した。

「い…いいです、やっぱり…今は聞きたくありませんっ」

がっくりと肩を落として、力なく頭を振りながら、ルネは答えた。そんな壮大な好きな人語りをローランの口から聞かされたら、せっかく持ち直しかけている心が、今度こそぼつきり折れてしまいそ

うだ。

「そんな情けなそうな顔をしなくても、そのうち分かるさ、ルネ」
分かりたいような分かりたくないような、もやもやとした気持ち
を持って余しているルネの頭にローランは手を伸ばし、柔らかな髪
の中に指を差し入れて優しく撫でた。

（僕はどうしたらいいんだろう…見せかけだけかもしれない優しさ
に、不覚にも、すがりついて泣きだしたい自分がここにいる）

ルネはグラスに残っているシールドを飲みほして、テーブルの上
に置いた。

「ご馳走様でした。ありがとうございます、ローラン、おかげで飢
え死にしなくてすみえました。人間、やっぱりちゃんと食べるものを
食べておかないと駄目ですね。もう二度とこんな恥ずかしいところ
をあなたに見せずにすむよう、気をつけます」

ローランはルネの生真面目な顔を見て、何も言わずに微笑むと、
おもむろに立ち上がった。

「あっ…ローラン…」

一瞬もう帰ってしまったのかと思ったルネは、ついそれを追うよう
に立ち上がって、伸ばした手で彼の腕を掴んだ。

「何だ？」

ルネは顔を赤らめながら、すぐに手を離して、ごまかすようそれ
をばたばたさせた。

「い、いえ…あの…」

ローランは笑いを含んだ目で、そんなルネをじつと見下ろしてい
る。

「あの…まだ帰らないでください…急いでいるのでなければ、もう
少し僕と一緒にいてくれませんか？ その…たぶん僕はホーム・
シックなんです。独りでいることが何だか心細くて…」

一体自分は何をやっているのだろうとルネは思った。ホーム・シ
ックだなんて白々しい言い訳をしてまで、ローラン引き留めようと
したりして、どうするつもりなのか。

「駄目ですか…?」

「こんな馬鹿な真似はやめようと思いながらも、つい、今にも泣きだしそうな潤んだ目でローランを見上げてしまう。」

「…帰るだなんて、一言も言っていないぞ」

ローランがぶっきらぼうな口調で答えたのに、ルネはぱつと顔を輝かせた。

「食後にコーヒーか何か欲しいな…どこに置いてある、ルネ？ 俺が淹れるから、おまえはそこで座っている」

コーヒーと聞くとついオフィスでの苦労を思い出してしまうルネは、慌ててローランの後を追い、テーブルを離れた。

「すみません、コーヒーはまだインスタントしか置いてないんです。ええっと、ハーブ・ティーか緑茶はどうですか？ といっても、どちらもティー・バックですが…」

インスタントのコーヒーよりは無難な食後のお茶を用意して、リビングに移動した後、2人はテレビの前のソファに身を落ちつけて、適当につけた番組を見るともなく見ながら、取り留めもない話を続けた。

そう言えば、ローランと2人きり、こんなふうにくつろいで過ごしたのは先週末以来のことだった。

特別何をするでもなく、ただ寄り添い合っているだけで、温かさが胸の奥から体中にじんわりと広がっていくような心地よさに、ルネは、自分がよほど彼を恋しがっていたことに気付かされた。

（そうかあ…僕はやっぱり、この人のいないパリで、独りぼっちでいるのが心細くて寂しかったんだ。ローランがいないなら、冷たくて余所余所しい都会になんか、僕はそもそも移り住もうとは思わなかった。そのローランに裏切られて、心の拠り所がなくなってしまったから、こんなにも心が不安定になっていたんだ。この人が僕にしたことを簡単に許す訳にはいかないけれど、でも）

深く考えだすとどっぷりはまって抜けられなくなりそうな煩悶は、取りあえず脇に置いておいて、現在傍にあるささやかな幸せに浸っ

ていたい ルネは、隣り合って座っているローランの脚にぴたつと自分の脚をくつつけて、思いつくまま、甘えかかるような口調で彼に話しかけた。

「ねえ、ローラン、さっき、ここに来る前にジムに立ち寄ったって言っていましたよね。よく行くんですか、仕事帰りにジムなんて…？」
「ああ、出張や他の約束がない時は、ほとんど毎日かな。ストレスの発散と体の維持管理のため…」

ローランは、なかなか色の出ない緑茶のティー・パックをマグカップの中でぐるぐるさせながら、答える。

「ふうん…仕事だけでハードなのに、毎日はずごいですね」

「一種の強迫観念だな。俺が仕事の席で会うのは、それなりの年齢の管理職の連中が多いんだが、どいつもこいつも、言っちゃなんだが、でつぶりと肥えた親父ばかりなんだ。そういう奴らに、ムツシユ・ヴェル又は若くてスタイルもいいから羨ましいなどとでかい腹をさすりながら言われ続けると、おまえも年をとったらこうなるぞと脅されているような気分になってきてな。俺は、いくら年を食っても、醜く腹が出るのだけはごめんだ。そのくらいなら潔く早死にしてやる」

何を思い出したのか、ローランは渋い顔をして、緑茶をぐいっと飲んだ。

「ああ、それで水泳ですか。スタイル・キープには適していますものね。ナルシストっぽいとは思ってたけど、やっぱり…」

「何が、やっぱり、なんだ？」

ルネはローランに軽く小突かれながら、カモミール・ティーの力ツプを手に、くすくす笑った。

「いいえ、僕は泳ぎは苦手なんで、羨ましいなって…水泳の他には、何をするんですか？」

「時間がなくてジムで泳がない時でも、筋トレとバイクくらいはするようになっているぞ。簡単なマシーンなら、家に幾つか置いてあるんだ。もっとも、家だといついが緩んで、バイクをこぎながら居眠

りしそうになるから困る。それから、体の完全に空いた休日には、乗馬やテニスだな…よかつたら今度連れて行ってやるうか？」

「あ、乗馬は楽しそうですね。僕も子供の頃、家の近所の牧場で馬に乗せてもらったことあります。そういう気晴らしを何か持つことが、日頃ストレスを溜めこまないコツかもしれないですね」

「おまえも、俺のようにジムに通えとは言わないが、仕事以外に何か気分転換になる趣味や関心を見つけることだな。そうすれば、それを通じて新しい仲間や友人も見つけられる。自分の居場所を作ることができれば、今は余所余所しくて冷たく感じられるパリの街も、案外住みやすいということが分かるさ」

今自分が感じている所在なさをローランに見抜かれたような気がして、ルネは少しはっとした。

「仕事以外に僕が興味を持ってそうなことですか。今は、そこまで考える余裕もないですけど…」

カップから立ち上るハーブの心安らく香りに目を細め、ルネはふと、今通っている秘書の学校の近くで見かけた、柔道教室の看板を思い出した。

(…一緒に空手も教えているみたいだったな。本格的にまたやり始めるつもりは全くないけど、息抜き程度なら…今度、ちょっと中を覗いてみようか)

都会の人は取っつきにくそうでも、格闘技を通じてなら、すぐに分かりあえて、友達だってできるかもしれない。

そもそも確固たる自分を持つていないから、周りの環境が変わったくらいですぐに動じて、心が揺れやすくなるのだ。失恋したくらいで、この世の終わりのように落ち込むのだ。しかし、これが自分の在り処だと胸を張って言えるものなら、ルネもかつては持っていた(ああ、でも、僕は格闘技の世界からは足を洗ったはずだ。いくら強くなったって、僕は幸せにはなれないと分かったから…それに、もしローランが、僕が道場に通いだしたことを知ったら何て思うか、やっぱり怖い…)

密かにぐるぐると思い悩んでいるルネの肩を、その時ローランの手が包み込み、そっと抱き寄せた。

ルネは素直に甘えるよう、ローランの胸に頭を預けて、目を閉じた。

（ローラン、今のあなた、昼間とは別人のようですよ。いつもこんなふうだったらしいのに…ううん、四六時中優しくされたら、また僕は甘い期待を抱いてしまいそうで、困るかな）

下りてきたローランの唇がルネの額に触れ、それから瞼の上にと押しあてられる。髪を優しく梳いているしなやかな指先が快く、ルネはうつとりとなつて、思わず喉を鳴らした。

（柔道教室、ローランに知られなきゃ、別にいいかな…こんなふうには大人しく従順に抱かれている僕が実は黒帯持ちだなんて、いくらローランだって夢にも思わないはずだ。そう、えっちの最中に寝技をかけちゃうなんてことがなければ、きっと大丈夫…ばれない、ばれない）

微かな笑みをつかべているルネの顔を見下ろしながら、ローランは甘く低い声で囁きかけた。

「何を笑っている…？」

ルネは薄っすらと目を開けて、怪訝そうな面持ちのローランを悪戯っぽく見上げた。

「秘密です」

ルネは腕を伸ばしてローランの首に巻き付け、焦れたように、自分の方に軽く引つ張った。これも柔道の絞め技に簡単に持っていきそうな体勢だが、無論、そんなことはしない。

「今夜の俺は塩素臭いけど、いいのか…？」

「別にもう気になりません。それに、あなただったら、たとえニンニク臭くても、僕は大丈夫です」

「…それは、俺が嫌だな」

ルネが再び目を閉じてときどきしながら待っていると、ローランの唇が今度は唇に触れた。

(ローラン…今のあなたは、キスまで優しい…)

それは、いつかの夜に交わした、ルネの全てを食いつくそうとするような性急で荒々しいキスではなかった。こうして触れ合うことで、互いの存在を確かめあおうとするような優しさに満ちたもので、弱くなっている今のルネには、むしろ好ましいと感じられた。

(そう言えば、初めてこの人と寝た時も…どうせ一夜の遊びだからと半分覚悟していたのに、意外なくらい優しく、僕はびっくりしたんだ)

ルネはローランと唇を軽く擦り合わせ、漏れる吐息を絡めあいながら、ぼんやりと思った。

(いかにも遊び慣れてそうな都会の男だもの、終わったらきつと手の平返したように素っ気なくなるんじゃないかって疑ったけど、全然そんなこともなくて…ローランの胸に抱かれていると、すごく温かくて安心できて、いつまでもこの人と一緒にいたい、離れたくないって思った。だから、僕は…何も知らない、この人のことを、それでも信じてみようという気になったんだ)

背中をゆっくりと確かめるように撫でていたローランが、ふいにその手をとめ、またしても自分を抱き上げようと試みるのに、我に返ったルネは、慌ててソファから飛び起きた。

「駄目です、ローラン!」

「ど、どうして…?」

ルネは瞳をぐるっと回して、苦しい言い訳をした。

「…さ、先に、寢室を片付けさせてください。ベッドなんか、今朝起きたままの状態でぐちゃぐちゃだし、せめてシーツくらい変えないと…僕が呼ぶまで、ちよつとの間待ってくださいっ」

せつかく気分が盛り上がってきたところで中断かよと、ローランは鼻白んだ顔をしたが、捕まえようと伸びてきた彼の手を軽くかわして、ルネは寢室の方に飛んで行った。

「はあっ…ぼうつとしてるとあの人に正体ばれるぞ。気をつけないとなあ」

立てこもった寢室のドアに背中を押しつけ、ルネは紅くなった頬を両手で挟んで冷やしながら、考え込んだ。

（そうだ、僕はあの時、ローランについていこうと決めた。腹の中に一物も二物もありそうなクセのある人だけれど、僕の胸に伝わってくる彼の優しさは紛れもない本物だったから…あれが嘘なら、僕がこの世に信じられるものなんか、もう何もなくなる）

一時はこれ以上傷ついたら心がもたないと実家に逃げ帰ることを本気で考えていたルネだったが、もう少しパリの街に留まってがんばってみようと、この時思いなおした。

（だって、僕はまだ、ローランのことをほとんど何も知らないもの…鬼か悪魔のような顔で人を怒鳴りつけるかと思ったら、心を蕩かすような優しい笑顔を向けてくる。自信家で傲慢なナルシストのくせに、好きな人のためなら粉骨砕身尽くしてしまう…彼をもう少し理解できるようになって、それでも僕は傍にいたいと思えるだろうか。そうだ、三行半を叩きつけてローランのもとを去るのは、それからでも遅くないはずだ）

気持ちの整理がついたというか、むしろ開き直ったと言うべきか、ルネの胸に涼しい風が吹き抜けていくような清々しさが広がっていく。

（うん、僕がローランに愛想尽かしてここから出て行く時には、それまで受けた心の痛みを倍にできっちり返してもらおう。自分が拾った可愛い犬が実はどんな猛犬だったのかを、死ぬほど思い知らせてやればいい）

そんな物騒なことを心の片隅で考えながら、ルネは手早く寢室を掃除し、ベッドのシーツも新しいものに取り換えた。

（ローラン、それまであなたは、僕が命がけて愛し尽くそうと思う、この世で一番大切な人です）

寢室のドアを大きく開いたルネは、すうつと息を吸い込み、とびきり甘くて可愛い声で、じりじりしながら待っているだろう愛しい人と呼んだ。

「お待たせしました、ローラン…ね、早くここに来て下さいよ」

錆びたワイン（1）

明るい照明と華やかな色彩のディスプレイで飾られたパートの化粧品売り場。

友人との待ち合わせの時間まで時間潰しに立ち寄ってみたルネは、かねてから気になっていた男性用のコロンを探しだすと、試しに自分の手首に吹きかけ匂いを嗅いでみた。

「やっぱり好きな香りだけど…うーん、どうしようかな」

シヤネルのエゴイスト。ローランが愛用しているコロンのので、以前から気になっていたのだが、奮発して買うべきかどうか、ルネは悩んでいた。

（ローランだったら、まさにこの香りをまとうために生まれてきたっていうくらいにしっくりくるけど、僕だと香りに負けちゃうんだよね）

ルネががっかりしながらボトルをもとの場所に戻すと、カウンタ―から出てきた綺麗な店員が、愛想よく笑いながら声をかけてきた。「良い香りでしょう？ 発売されてもう20年以上になりますが、ずっと人気のあるコロンですよ。あなたがお使いになりますの？ それとも贈り物をお探しで？」

「い、いえ…僕の職場の人がこのコロンを使っていて、すごく似合っていたものだから、気になっていました。でも、僕みたいな大卒出たての若い男の子向けの香りじゃないですね、残念ながら…これが似合う大人の男になるには、十年くらいかかるかな」

「確かにちよつと、まとう人を選ぶ香りかもしれませんわねえ。よほど素敵な方なんでしょうね、あなたの職場のその人は…」

「はいっ」

恥ずかしげもなく笑顔で即答してしまったルネに、一瞬店員は怯んだようだ。しかし、そこはプロらしく、すぐににこやかな営業向けの顔に戻って、まだ迷っている彼に他にも幾つかコロンを勧めた。

「あなたのような、若い方が日常お使いになるのでしたら…柑橘系の爽やかな香りのこちらのコロンなどいかがでしょうか？」

「あ、本当にいい匂い…グレープフルーツにベルガモット…ちょっとピリムスクの香りやペッパーみたいなスパイシーさもある」

「あら、とても嗅覚が鋭い方ですね。もしかして香りに関わるお仕事をなさっていますの…？」

「いいえ、普通のオフィス勤務ですよ。あ、こちらのコロンもいいですね…」

実際彼女の見立てのそれらのコロンの方が、ルネがつけても無理がない、使いやすそうなものだったが、悩んだ挙句、彼は結局ローラン愛用のエゴイストを購入した。

（ああ、お給料前にまた余計な出費をしちゃったな。まさかローランのいる職場で、彼と同じコロンをまとうわけにもいかない。下手したら、家で1人である時にこっそりつけてみるだけになりそうなの…）

ルネは手首に残る、先程試したコロンをそっと嗅いで、体温で温まった香りの微妙に変化にうっとりした。

（それも、いいかな…たとえば夜、ベッドで眠る時に軽くつけてみたら、ローランが傍にいてくれるみたいで安心して眠れそう…それとも、興奮して眠れないかのどっちかな）

そんな想像をしてついにやけそうになったルネは、慌てて頬を引き締めると、怪訝そうな顔をする店員から商品の入った小さな紙袋を受け取り、足取りも軽くデパートを後にした。

ルネがルレ・ロスコーで働き始めて、ひと月近くが飛ぶように過ぎさった。

まだ秘書の学校に通いながらではあるが、物覚えのよいルネは、

日常業務は難なくこなせるようになり、この様子なら1人でも大丈夫だろうと、ミラは予定を早めて来週末から産休に入ることにした。

ローランの勧めもあって、気分転換にと密かに通い始めた道場では、気の合う友人や仲間ができ、おかげで精神的にも安定している。当初はどうなることかと思われたが、絶対馴染めないと敬遠していた大都会パリでの生活に、ルネは少しずつ慣れてきていた。

もっとも全く不満がない訳でもなく、こんな暮らしをいつまでも続けたいかというと、ルネは素直に頷くこともできなかった。

いくら他に気を紛らわせられる趣味を見つけ、愚痴や悩みを話せる友人ができたところで、ルネの一番の関心は、相も変わらず本心の読めないローランだった。

彼との関係は、表向きはあくまでただの上司と部下であり、普段ローランはルネに特別な感情を抱いている気ぶりも見せない。ルネも、ただでさえこの容姿のおかげで色眼鏡をかけて見られるのに、この上変な噂をたてられるのは嫌だったので、オフィスでは自分の感情に封印し、ローランと話す時も控え目で抑制のきいた態度に徹していた。

しかし、恋心というものは、隠そうとしてもなかなか隠しきれないもの。ルネの目は無意識のうちにローランの動きを追ってしまったり、他の人と話している彼の声に、つい耳をそばだててしまう。仕事がつまらなくなって褒められたりするとたちまち舞い上がって笑み崩れてしまい、ミラに、恋する乙女みたいな顔になっていると注意されることもしばしばだ。

職場では、そんな具合で欲求不満を抱えたまま。かと言って、仕事を離れたプライベートでも、ローランとの恋に何ら進展があった訳ではない。

パリで暮らし始めた当初、心身ともに壊れそうになっていたルネを訪ねてきた夜以来、ローランが再び彼のアパートメンに来ることはなかったし、2人きりで食事に出かけたことも、ましてや、休日

を共に過ごしたこともない。

今度一緒に食事に行こうとか乗馬に連れて行ってやるとか誘われた記憶はあったけれど、別にちゃんと約束を交わした訳ではなかったから、ルネはローランを責めることはできなかったが、やはりちよっぴり寂しかった。

「全く、じれったいわねえ。そんなに彼のことが好きなら、自分から誘ってみたらいいじゃないの！ 厳しい先輩の目が気になるなら、メモに今度食事に行きませんかとか書いて、こっそり渡すとか？」
仕事が終わった後、いつものカフェで、女友達のキアラ相手に、ルネは互いの恋の悩みを含むたわいのないおしゃべりに花を咲かせている。

キアラとは、秘書の学校の近くで見つけた道場で知り合った。会ったその日に意気投合し、今では、何でも打ち明け合える一番の友達だ。

「考えたことがない訳でもないけど…オフィスでのローランは、そんなに気安く近づける雰囲気じゃないし…それに、僕の方にも抵抗があるのかな。上司との恋愛関係にはまりこんだりすると仕事やりにくくなるって…」

「もう、また、そんな言い訳して逃げるんだからっ」

女子部では、柔道でも空手でも一二を争うくらいに強いキアラは勝ち気な性格で、恋に関しても積極的だ。ルネの恋ばなは面白いと興味津津聞いてくれるが、苛々することもあるようで、時々こんなふうには叱られる。

「しょうがないわねえ…結局、ルネ、肝心のあなたがいつまでも恋に対して臆病なことが一番の問題なのよ。全く、情けないったら、ありゃしないわ」

「だって、ローランには他に最愛の人がいるって分かっているのに、なかなか積極的に迫ったりはできないよ」

ルネは困ったように唇を尖らせながら、言い返す。

「その人に僕が似ているから気に入ったって、即行手を出したような人でなしなんだよ。そんな酷い人に惚れちゃう僕も馬鹿なんだけど、これ以上あの人にとって都合のいい存在になんてなりたくないよ。あなたが好きなんです、身代りでも何でもいいから付き合ってくださいなんて、僕がうっかり漏らしたりしたら、本当に、あの人のお想い人のスペア品として扱われるよ。そんなことまで許してしまつたら、この恋、確実に僕の負けじゃないか」

「うわ、それって最悪…でもさ、好きな人の代わりとして傍に置いてくれじゃなくて、どうせなら、彼の心を自分に振り向かせてみせる、ガブリエルから奪ってやるって気持ちにならないの？」

「ええっ、奪う?!」

そう切り返されるとは思っていなかったルネは、思わず、カフエの他の客達が振り返るくらい、すっ頓狂な声をあげていた。

「何をびっくりしてるのよ。好きなら、たとえ相手に今付き合っている人がいようが構わず押せ押せで迫って、自分の恋人にしちゃうのよ、当然じゃない」

「もう、キアラってば、無責任な煽りかたして…」

苦笑いしながら、ルネはコーヒを一口飲み、ふと考え込んだ。

（そう言えば、ローランがガブリエルをどんなふうに使っているのか、結局僕は恐くて聞けないでいる。たまに、あの人の話の中でガブリエルに触れる時には、とても深い愛情のこもった口ぶりになるから、ああ、やっぱり好きなんだなあとは感じるけれど…一度問い詰めて、はっきりさせておいた方がいいんだろうか）

いまだ顔を見たこともないガブリエルのことを考えると、ルネの胸は嫉妬の小さな火でちりちりと焼かれた。

（ああ、でも、ローランの本当の気持ちを聞いて、それで僕には何の望みもないと思い知ってしまったら…僕はもうあの子の傍にい続

けることはさすがにできなくなるだろうな。ローランの傍を離れる
しかなくなる…それは嫌だ…)

結局、玉碎覚悟でローランの本心を確かめる勇氣も、キアラのよ
うに積極的に迫って彼の心を自分のものにしようとするだけの自信
も、ルネには持てなかった。

(確かにキアラの言う通りだ。新しい恋を見つけたくてパリまで出
てきて、ローランを好きになって…その彼の傍で毎日働くことができ
るんだ。チャンスならいくらでもあるはずなのに、いざとなると
怯んでしまう。こんな調子だと、いつまで待っても恋が叶うことな
んかあるものか。ああ、軽く自己嫌悪に陥りそうだな)

ルネが悲しそうに目を伏せて溜息をつくのを見、可愛そうなものを
見るかのような目つきで眺めていたキアラが、ふいに、こんなこと
を言った。

「いつそ、他の相手を探してみたらどう？」

「え？」

「だってさ、大本命のローランとの恋は早くも行き詰っているんで
しょう？ それなら、そっちは取りあえず置いて、他の出会い
を求めてみるのよ」

「他の…出会い…？」

「初めて会った時、あなた、言っただじゃない。自分の住んでいた
田舎では、同性愛者どころか、下手すれば家畜や野生動物の生息数
の方が人口より多いくらいなんだ。そんな所にいつまでいても素敵
な恋人は得られそうにないけど、人口密度の遥かに高いパリでなら、
理想の男性が見つかる確率も高いはずだと思っただって…真面目な顔
して面白いこと考える子ねえって、私、感心したのよ」

「…酔った勢いで話したことを、いつまでも覚えてないでよ。恥ず
かしいなあ」

「あはは…でもさ、真面目な話、このまま片思いを続けるよりは、
もっと他に目を向けてみた方が、あなたの場合、いいような気がす
るな。どうせあなたのことだから、ローラン一筋で、他の男を意識

して見てみたこともないんでしょう？　せつかくパリにまで出てきたんじゃない、もっと視野を広げてみたら？」

「で、でも…僕はローランが好きなのに、他の人なんて」

「別に恋人同士って訳じゃないでしょ、あなたとローランって？　義理立てすることはないんじゃない？」

キアラに痛い所を突かれて、ルネはぐつと言葉に詰まった。

「そうよ、その気になってちゃんと探せば、他に好きな人のいるローランより、もっと優しくあなたを大切にしてくれる、素敵な人が見つかるかもよ？」

キアラの言うことの方がたぶん正論なんだろうと思いつつも認めたくなくて、ルネは唇を尖らせ、言い返した。

「ローランより素敵な人なんて、そう簡単に見つからないよ。確かにパリの男の人は、田舎に比べたら垢抜けてるなって思うけど、先にあの人を知っちゃったら、その辺りの普通の男なんか、皆マルシエに並んでいる野菜にしか見えなくなってくる…」

「あなたも結構ひどいこい言うわねえ！　面食いなのは分かったけど、ルネ、あなたの理想の男って、一体どんな人なわけ？」

理想？　ルネは首を捻って、ちよつと考え込んだ。

「そうだね、強い人、かな…この人には何をやっても敵わないって、僕が思えるくらい、強い人が好き」

「あら、いきなりハードル高いわね。うちの道場でも既に向かうところ敵なしのあなたより強い男となると、それこそ、プロの格闘家レベルになりそうじゃない。あ、トマなんかどう？　残念ながら腕っ節はちよつと劣るけれど、あなたにぶん投げられて完敗して以来、あなたに随分惚れ込んでしまった様子じゃない？」

柔道教室に見学に行った初日に手合わせをして簡単に一本勝ちして以来、ルネを『師匠』と呼んで慕ってくる大男のトマを思いだし、彼は唇をすばめた。

「トマはいい子だと思うけど、僕はゴリ・マッチョはタイプじゃないなあ…いや、そういうことじゃなくね、僕が求めるのは腕っ節の

強さ以上の何かなんだよ。存在そのものに僕を圧倒するようなすごい力があって、有無を言わず、ぐいぐい引つ張っていかれそうな人なんだ」

「ローランがそういうタイプなんだ？」

「うん。もちろん、本気で喧嘩したら、僕が勝つと思うんだけど…あの人から発散されるオーラはとても強くて、傍にいただけで、逆らう気持ちを根こそぎなくしてしまうんだ」

「ふうん…惚れた男だから、そう思うのかもかもしれないけどねえ。ローランの前では、柔道やつてる時の気迫の片鱗も見せず、しおらしげにしているあなたが目に浮かぶわ。ところで、ルネ、そもそもローランはあなたが格闘技をやっていることを知っているの？」

ルネは、またしてもキアラに痛い所を突かれて、ぎくりとした。

「知らない…よ…僕も、あの人には黙っているつもりだし…」

「黙っているって、どうして？」

「だって、ほら、僕の腕があんまりたち過ぎることを知られたら、どん引きされそうだから…自分の強さを自覚している男って、より強い男をライバル視はするけれど、恋人として好きにはなってくれないもの」

「あら…ローランに嫌われるのが怖くて、本当の自分を隠しているってわけ？ まあ、気持ちは分からないでもないけど…女の子の場合特に、強くなるほど彼氏には打ち明けにくいって、よく聞く話よ。でも、あなたは」

「勘のいいキアラは、ルネの口ぶりに何か引つかかりを覚えたようだが、これ以上追求される前に、ルネはこの話を打ち切ろうとした。」「ともかく僕は、やっぱりローラン以外の誰かと付き合おうという気持ちにはなれないから…」

「しょうがないわねえ。せっかく、あなたにお勧めの店を見つけてきてあげたのに…」

「店？」

思ったより頑固なルネを説得することは諦めたのか、キアラはや

れやれというように肩をすくめ、バッグの中から一枚のカードを取り出して、テーブルに置いた。

「ゲイの知り合いに、あなたのことを相談してみたのよ。それで、やっぱりローランだけって初めから思いこまずに、色んな人に会って見た方がいいんじゃないかって話になって…それで、このワイン・バーなんだけれど、最近パリのおしゃれなゲイの社交場になっているんだって。雑誌でも何度か紹介されたことがあるみたいよ。別に同性愛者ばかりって訳でもないし、雰囲気もよくなって入りやすいから、あなた向けじゃないかなと思ったのよ」

「あ…」

「まあ、どうしてもその気になれないなら仕方ないけどね。一応そのカードは渡しておくわ」

ルネが目の前に置かれたカードを凝視しながら考え込んでいるうちに、キアラは腕時計をちらつと確認して、言った。

「私、そろそろ行くわね、ルネ…これから彼と一緒に映画を見に行くことになっているの」

ルネははっと我に返って、テーブルから立ち上がるキアラに向かって、慌てて声をかけた。

「キアラ、あの…ありがとう、僕を心配して色々考えてくれてたんだね」

「ルネってば、何、そんなすまなそうな顔してるのよ。当然じゃない、私達、友達でしょ？」

キアラは屈託のない笑顔で答えると、バッグを肩に引っかけ、颯爽とした足取りでカフェを出て行った。

（都会の人は冷たくて取っつきにくいなんて、とんだ偏見だったんだな。キアラみたいに、親身になって僕のことを考えてくれる人もいる）

ほっこりと胸が温まるような気分になりながら、ルネはキアラからもらった店のカードを手にとった。親切なことに、雑誌に載っていた写真入りの記事まで、彼女は添えてくれていた。

（あ、ほんとに、若者向けのおしゃれなワイン・バーみたい…気軽に
入れそうな雰囲気だけれど、ワイン・リストは充実してるか…ふ
うん、ここなら普通にちょっと立ち寄って、美味しいワインを飲ん
でみたいかも…）

ローランに奢ってもらったシャトー・ラトゥールで開眼して以来、
ルネはワインにも興味を持って、少しずつ嗜むようになっていた。
ネットでラトゥールを買えないかと思って調べてみた時は、その
値段のあり得なさにパソコンの前で腰を抜かしそうになったものだ
が、たかが飲み物にここまで価値が認められる、ワインの世界の
不可思議には余計に好奇心をかきたてられた。もともと勉強熱心で、
関心を覚えたことはとことんまで追求して自分のものにしたがる傾
向のあるルネだ。これも秘書の仕事の役に立つだろうと、ワイン関
係の書物に手を出して、時間がある時は読みふけている、この頃
だった。

（でも、本で得た知識だけじゃ物足りないって思ってたところなん
だよな。こういう店では、どんなワインを出すのだろう…グラスで
色々試してみたい気がするな）

せっかくキアラが探してくれた店なのだし、一度くらい行ってみ
てもいいような気に、ルネはなりかけていた。

（そうだ…いつそ、思いきってローランを誘ってみようかな…？）
自分からローランに対して積極的に出ることを躊躇っていたルネ
だが、キアラに教えてもらったこのバーを口実に、行動に出てみよ
うかという方に気持ちが大きく傾いた。

（この間ご馳走になったお礼に、僕に奢らせて下さい…いや、駄目
だ、ラトゥールに見合うワインなんか奢ったら、僕が破産しちゃう。
正直に、友達に教えてもらったワイン・バーなんですけれど、1人
だと入りにくいので、よかつたら付き合ってくれませんか？とお願
いすればいいんだ。他に約束がなければ、きつと断られたりはしな
いよね…？ ううん、もう余計な心配はなしにしよう。このまま何
の進展もなしに悪戯に日々を過ごすよりは、ローランとちゃんと話

して、彼の気持ちを確かめてみたい)

友達の心遣いに背中を押される形で、ルネはやっと気持ちを固めることができた。

(善は急げというし、僕の気持ちがまたしぼんでしまう前に、明日にでもローランに声をかけてみよう。今週末の予定は空いてますか…？ ミラさんがいるから露骨にはできないけど、隙を見て彼を捕まえるか、メモを渡すくらいなら、なんとかできるかな)

そんなことを想像しながら、ルネは妙にうきうきと弾んだ気分になっていた。

結局、大好きなローランが傍にいるのに、自分の感情に封印をし続けている今の状況を変えるきっかけを求めていたのは、他ならぬルネ自身だったようだ。

翌日、ルネは朝からそわそわと落ち着きがなく、一度はミラに何か心配ごとでもあるのかと鋭い質問をされたくらいだった。しかし、ミラも来週にはここを去る身であり、他に手を取られることがあったためか、それ以上深く追求してやることはなかった。

短い時間でもいいから、何とかローランと2人きりになれるチャンスを探っていたルネだが、こんな時に限って、コーヒーを淹れてくれと頼まれることもない。

改めてローランのスケジュールを確認し、会議が終わって副社長室に戻ってきたタイミングにでも、無理矢理コーヒーを持ってもらう。その時に今週末の予定を聞いてみよう、ルネはひたすら待ち構えていた。

(友達に教えてもらったワイン・バーなんですけれど、もしよかつたら明日の金曜日、一緒に行きませんか…なんて、うまく誘えるかなあ。そもそも、彼に先約があったら…ううん、その時は、来週の

予定を確認してみればいい。よし、がんばるぞ)

ぶつぶつと口の中で誘い文句のシミュレーションをしながら、ルネが秘書室を出て、コピー用紙の補充を事務員に頼みがてら下の会議室の様子を見に行こうとした時、エレベーターから丁度出てきたローランと鉢合わせをした。

「えっ、ムツシュ・ヴェルヌ？」

まだ会議が終わる予定の時間にはなっておらず、何の心の準備もしていなかったルネは思わず、その場に立ちつくした。

「ルネ」

ローランは直前まで誰かと携帯で話していたらしく、切ったばかりのそれをスーツのポケットに入れながら、足早にこちらに近づいて来た。

「もう会議は終わっただんですか？ 随分お早かったですね」

ルネは瞬きもせず、気難しげに眉間に皺を寄せて何かを心に捕らわれているようではあるが、いつ見てもつくづくハンサムなローランの顔をじっと見つめた。

人間は好きなものを見る時には瞳孔が開くというが、おそらく今のルネの瞳孔は限界MAXまで開ききって、キラキラと輝いていることだろう。

しかし、ローランは、ルネが向けてくる熱っぽい眼差しに気付いた様子もなく、素っ気ない口調で言った。

「会議は途中で取りやめだ。緊急で出かけなければならぬ用事が出来たんでな」

「は？ 急用…ですか？」

ローランの口から出た意外な答えに、ルネは当惑しながら、聞き直した。

「ガブリエルからの緊急コールがあったんだ。あいつの身边で何か問題が発生したらしくてな。今からちよつと様子を見に行ってくる。今日は社に戻るかも分からんから、この後の予定は全てキャンセルにしておいてくれ」

「ムツシュ・ロスコーの所に…え、今から行かれるんですか？」

ガブリエルの名前をローランの口から聞いて、ルネは頭から冷水を浴びせられたように、甘い気分も一気に消し飛んでしまった。

何が起こったか知らないが、仮にもこの会社の統括責任者が仕事の予定は全てキャンセルなどとただ事ではない。いや、そんなに簡単にこの男を呼びだすなんて、非常識ではないか。まともな社会人ならば必死で働いている真っ最中の時間だ。

そんな反感を、ルネは、噂で聞くばかりのここの道楽社長について覚えてしまう。

（どうしてこんな時にまたガブリエルが出てくるんだ。自分の好きなことをするためにローランにこの会社を押し付けた張本人のくせに、この上彼の仕事の邪魔をするなんて）

それとも、ルネが腹を立てているのはローランのためではなく、1人で勝手につまらない計画をたてて昨日からずっと胸をときめかせていた、馬鹿な自分のためだろうか。

体の脇でぎゅっと拳を握りしめ感情を抑えようと努力しているルネの脇を、ローランが急いだ様子で通り過ぎて行くこととする。

「ローラン…！」

とつさにファースト・ネームで呼んでしまい、慌てて口を手で押さえるルネを、ローランが怪訝そうに肩越しに眺めやった。

「あ、あの…」

「何だ？ 俺は今忙しいんだ。用があるなら、早く言え」

ルネはぐつと言葉に詰まった。用ならあつたけれど、完全にガブリエルのもとに心が飛んでいる今のローラン相手に話せるような内容ではない。

「いえ…大したことはありません。今日の予定は全てキャンセルですね…ムツシュ・ペロンとの会合も、それでは延期ということをお願いしておきます」

「ああ、俺が2人いればよかったんだが、すまないな…先方によく謝っておいてくれ」

じつと押し黙っているルネの硬い表情を見て、ローランは苦笑しながら、その肩を叩いた。

「頼むぞ」

「…はい」

ルネは目を伏せながら忠実に答えたが、胸の内には穏やかでない感情が渦巻いていた。

（どんな問題が発生したのか知らないけれど、ガブリエルからの電話があっただけで、あなたは、大切な仕事もあなたの下で一生懸命働いている部下も放り出して駆けつけるんだ。職場ではいつも鬼のように厳しいあなたは、たとえ僕が事故にあったって、会議を中断して駆けつけてくれるとは思えない。でも、ガブリエルだけは特別なんですか？）

その後すぐローランは、コートを引つ掴んで文字通り社を飛び出していった。パリ郊外にあるロスコー家のシャトーがガブリエルの住まう邸宅であり、アカデミー・グルマンディーズの本部も兼ねているそうだが、そこに向かうらしい。

「…そうしょっちゅうという訳ではないけれど、たまにあるのよ。ガブリエルからの緊急コールがかかれば、ムツシュ・ヴェル又はフランス中どこにいても、必ず応えるし、用件の内容によっては、可及的速やかに自ら駆けつける」

ローランがいなくなるなり、腹の虫が治まらないルネはミラにかみついた。

「でも、この会社の事実上のトップとしての責任よりもガブリエル個人の頼みが優先だなんて、僕には納得できません」

「ガブリエル個人としてなのか、ルレ・ロスコー社長としての頼みなのか、その点私達には追及しようもないから、ああ、もう仕方がないと割り切って、あの人の不在で業務に差し障りが出ないよう、フォローに回ることが習慣化してしまったのよ。あれさえなければ、ムツシュ・ヴェル又は完璧な経営者ですからね」

「そ、それで、いいんですか？」

仕事に対していつもはシビアなミラまでも、ローランの間違った優先順位の付け方に関しては諦めモードなのが信じられなくて、ルネはますますむきになって食い下がった。

「では、あなたがムツシュに直訴してみたら、どう？ 無駄だと思っけれど、あなたの言葉ならば、あの人も一応耳は傾けるかも…でも、それで何か変わるなどと期待しては駄目よ、ルネ。ガブリエルの命令は、ムツシュ・ヴェルヌにとって神の声に等しい、最優先事項なんだから…」

「そんな…そこまでガブリエルが好きなんて…」
ガブリエルが仕事より何より大切なのだとしたら、ローランにとって、もしかしたらルネの重要度はほとんどなきに等しいのではないだろうか。

打ちひしがれて、がっくりと肩を落とすルネに、ミラは慰めにもならない慰めの言葉をかけてきた。

「ガブリエルと張り合おうなんて思わないことよ、ルネ…たとえムツシュ・ヴェルヌの一番大切な人にはなれなくとも、一番近くにいる必要とされるような存在には、あなたならなれるかもしれない。私がいなくなつた後のことまであれこれ口出しできないけれど…強く生きるのよ」

ミラが産休に入れば、ローラン付きの秘書は他にいない以上、ルネが彼の仕事に一層深く関わり、フォローする部分も増えるだろう。少し前までは張り切っていたルネだったが、今は、果たして彼とうまくやっていけるのか、自信をなくしかけていた。

（僕が一生懸命尽くしても、ガブリエルから一本電話が入れば何もかもうつちゃって飛んでいく、あの人を僕は許し続けることが出来るだろうか…？）

ローランをワイン・バーに誘うという試みも、ガブリエルの乱入で果たせなかったルネは、悲しい気分で自分のデスクに戻り、引き出しの中からキアラにもらった店のカードを取り出した。

もともとこの店は、ローランとの恋に行き詰っているルネに、も

つといい出会いのチャンスを見つけ場として、キアラが勧めてくれたものだった。

（その気になってちゃんと探せば、他に好きな人のいるローランより、もつと優しくてあなたを大切にしてくれる、素敵な人が見つかるかもよ？）

ローランしか好きになれないと反射的に拒否したルネだったが、何だかもう、所詮ガブリエルの忠犬でしかない彼に固執するのも馬鹿馬鹿しくなってきた。

（そうだ、キアラの言う通りだ：この世に男は何もローラン1人じゃないんだ。初心に戻って新しい恋を探しにいけば、案外これほど思うようないい物件が見つかるかも：少なくともローランよりは誠実で、何を考えているのかすぐに分かる、常識的な人ならたくさんいるはずだ）

人の気持ちというものは、何かきっかけがあれば一気に、それまでとは百八十度変わってしまうものだ。

どこまでもガブリエルを優先させるローランに対する腹いせに、ルネは1人で例のワイン・バーに出かけて、いい男を捕まえることに決めた。

（自信家のあの人は、僕が自分を裏切るとは絶対ないと高をくくっていそうだけれど、そんなことないって、素敵な恋人を見つけることで思い知らせてやる！ その時になって後悔したって知らないからな、ローランの馬鹿！）

ローランは結局、その日再び社に戻ってくることはなかった。きつとガブリエルの傍にいて、問題解決のためにかかりつきりになっているのだろう。そう考えると、ルネの中で彼に対する憎さがいや増してくる。

その夜ルネは、デパートで衝動買いしたコロンを腹立ち紛れに流しに捨てて、そのままベッドでふて寝を試みた。しかし、部屋の中に漂う、どうしてもローランを思い出させる香りに、胸の中のもの狂おしさはつのるばかり、まんじりともせずに一晩過ごしてしまっ

た。

（ずっと好きだったこの香りだけど、今から嫌いになる。僕はもうローランを追いかけてたりなんかしない…！）

そうして心を硬化させたまま、ルネは週末、金曜日を迎えることになった。

錆びたワイン（2）

金曜日、ローランは何食わぬ顔で普通に会社に出てきていた。

昨日ガブリエルのもとで何がどうなったのか、説明は一言もなく、ルネもあえて尋ねなかった。

（今更、一体どんな用件だったんですか、仕事を放り出して駆けつけるほどの緊急性があったんですかと追及するのも、僕が妬いてるみたいじゃないか。大体ローランがどこで何をしようが、僕にはもう関係ないことなんだから、別に気にしてませんって顔をして、彼のことなんか無視だ、無視）

ルネは努めて冷静に、事務的なクールさで仕事に徹し、ローランに接する時も不機嫌な顔をしまいと気をつけていた。

しかし、彼が昨日の一件でかなり気分を害して怒っていることは、その身にまとう雰囲気で伝わるのだろう。

いつも傍若無人マイペースのローランもさすがに気になったらしく、仏頂面で黙々と仕事をしているルネをちらちらと目で追ったり、コーヒーを頼んだ際に声をかけようとしたりした。しかし、いずれの場合も、ルネの方からさりげなく避けるようにして、ローランの言い訳など一切聞くまいと拒否し続けた。

（もつとも、ローランのことだから、下手な言い訳なんかしないかな。ガブリエルが最優先なのはもとからなんだから、僕の方こそ、それは我慢しろみたいな話になりそうだ。全く、人を馬鹿にしてる！）

2人の間にどことなくピリピリとした空気が漂っていることは、傍から見てもよく分かったらしい。間に挟まれて一日しんどい思いをしたミラだけでなく、ローランに呼び出されて副社長室にやってきたアシルも心配して、『あの2人、何かあったの？』と隙を見て彼女にこっそり尋ねていた。

そんな状態でも仕事だけはミスもなくきちんやり遂げたのは、

真面目なルネの意地のよなものだった。しかし、やはり緊張はしていたので、やっと終業の6時が来ると、心底ほっとして肩の力を抜いた。

（さて、バーで飲みながらそれっぽい人を探すには、まだ早い時間だよな。先に秘書の学校のクラスを受けてからなら、丁度いい頃合いになるかな）

ルネはデスクの引き出しから、キアラにもらったカードを取り出し、店の営業時間と場所を確認した。

その時、測っていたようなタイムミングで副社長室からローランが出てきて、まっすぐルネのデスクにやってきた。

「ルネ、もう帰るのか？」

「あ、はい……」

ルネは一瞬救いを求めるように、帰り支度をしていたミラを眺めやったが、彼女はこれ以上面倒に巻き込まれるのはごめんだとばかり、冷たい一瞥をルネに投げかけると、『お先に』と素っ気ない一言を残して出ていった。

観念したルネはデスクに座ったまま、すぐ傍らにポケットに手を突っ込んで立っているローランを見返し、落ち着いた声音で言った
「そろそろ僕も失礼します。これから秘書の学校がありますので」
ローランは首を僅かに傾げながら、ルネの生真面目さを軽く揶揄するように言った。

「そうか…：そうだったな、せつかくの週末も休まず勉強か。全く、ドイツ人並みに真面目な奴だな、おまえは」

「当然です。そういう条件で、僕はここに雇ってもらった訳ですから」

ルネの答えはにべもない。

「また、随分棘のある言い方だな。今日は一日中ずっとその調子だったか…：ルネ、俺に言いたいことがあるなら、はっきり言ったらどうだ？」

「職場であなたと修羅場を演じるような非常識も悪趣味も、僕は持

ち合わせていませんから、別にいいです」

全身堅い殻に覆われたようなルネを攻めあぐねたのだろう、ローランは、肩を落としてはあっと溜息をついた。しかし、一瞬で気持ちを切り変えたらしく、その強い瞳でまっすぐルネを見据え、こう言った。

「成程。職場を離れた方が本音で話しやすいのなら、そうしよう。ルネ、学校が終わるのは何時だ？ 適当に時間を潰した後で迎えに行くから、どこかゆっくりと話せるバーにでも行こう。それとも、おまえのアバルトメンの方が、周りに遠慮せず俺に怒鳴り散らせるから都合がいいか？」

「か、勝手に話を進めないでくださいっ」

黙っているとローランのペースにはまって、有無を言わせず、彼の前に座らされたまま、胸にたまった鬱憤を洗いざらい白状させられそう、ルネは焦った。

「おまえが黙っているからだ。それとも、おまえに何か、こうしたいという具体的な考えがあるのか？」

「考え…っ…」

ローランの容赦ない追及に思わず動揺したルネは、デスクの上に置きっぱなしにしていた例のワイン・バーのカードをちらりと見下ろした。

「何だ、そのカード…？」

ルネがとめるより早く、ローランの指先がそのカードを取り上げた。

「ああ、この店なら、知っているぞ。以前、何度かガブリエルと一緒にワインを飲みに行ったことがあったな。オーナーが変わってからは、足が遠のいてしまったが、昔はいい店だった…どうして、おまえがこんなカードを持っている？」

ルネは顔を真っ赤にして、ローランの手からそのカードをひったくった。

「あ、あなたには関係ないでしょう…」

「ルネ…？」

鳩が豆鉄砲を食らったような顔で瞬きするローランを、ルネは思い切り睨みつけた。ばくばくいつている心臓の鼓動を意識しながら、彼は慌ててデスクから立ち上がり、テキストが入ってずっしり重いバッグを持ち上げた。

「学校に遅れそうなので、僕はもう行きます。お疲れ様でした！」

ローランに呼び止められるのが怖くて、ルネは返事も待たずに、ドアに向かって突進した。

「おい、ルネ…タ」

呆気にとられるローランが見る前で、ルネは風のように秘書室から飛び出していき、乱暴に閉じられたドアがばたんと大きな音をたてた。

「…イムカード…切り忘れるほど、一体何をそんなに慌てているんだか」

ローランはルネの消えて行ったドアに苦笑の含んだ眼差しをしやし向け、それから、彼の代わりに、忘れ去られたタイム・カードを切ってやった。

「全く、つくづく考えていることのがかりやすい奴だな。まあ、そこが可愛いんだが…」

そんなローランの独り言を聞いたら、今のルネなら人を馬鹿にしてと怒っただろうか。

もつとも既に彼はここにはいなかったし、よって、ローランが自分を語る口調にこもる存外に優しく愛しげな響きに気付くこともなかったのだ。

「…今度は、このワインをどうぞ。先程と同じ造り手グラムノンのもので、樹齢100年以上の樹から収穫された葡萄から造られるん

ですよ」

「100年！ それはまたすごいおばあちゃんのワインなんですね」
「はは…まさにその通り。亡くなった前のオーナーが、畑から収穫される葡萄のことを愛情込めてメメ（おばあちゃん）と呼んだことから、このワインにもメメという名がつけられているんです」

秘書の学校を終えた後、ルネは1人で例のワイン・バーを訪れていた。

店の中は、週末ということもあり結構混み合っていたが、カウンターに座ったルネに対応してくれたバルマンは親切だった。

どうせなら本でもしばしば名前が出てくるグランヴァンのワインを試してみようかと迷うルネに、この値段ならもつとお勧めのワインがありますよと彼が出してくれたグラスは、どれも美味しかった。
「…最近、雑誌で見たと言ってやってくる新しいお客さんが多いので、そういう方の求める有名ワインもグラスで提供しているんですが、飲みごろかというと微妙なんですよ。所謂グランヴァンのワインは、本来なら、10年くらい寝かしてから飲みたいところですからね」

「はあ…そういうものですかあ。奮発して買ってみても、飲み頃になるまで10年も待たないといけないなんて、気の遠くなる話ですね」

「どうしても飲みたい時は、デキャンタで無理矢理開かせることもありますよ、超熟タイプのワインとなると、なかなかどうして手強いんですよ。あんまり無理をさせるのも、ワインが可哀そうですし…」

バルマンのワインに関する蘊蓄は面白くてもっと聞きたかったが若いギャルソンが助けを求めにやってきたので、彼はカウンターを離れてテーブル席に向かった。

「…『おばあちゃん』なんて聞いたせいかな、何だか懐かしいような優しい味がする」

ルネはワインのテイスティングにすっかりはまってしまっていて、い

い男を物色するという本来の目的はなおざりになっていた。しかし、実際の所、周囲を見渡しても、自分から進んで声をかけてみようという気になれる男がいなかったのも確かだ。

（頭の中で、ついローランと比較しちゃうのかな。ああ、駄目駄目、この期に及んで彼のことなんか考えるのはよそう。とにかく、顔は劣ってもいいから、優しそうで打ち解けやすそうな雰囲気の人を探してみよう）

ルネがそんなことを考えていると、近くのテーブル席の方から、幾分苛立った調子の英語が聞こえてきた。

「…ああ、もう、いちいちフランス語の説明を聞くのなんか面倒くさい。何でもいいから、この店で一番高いワインを持ってこい！」

何の騒ぎかと思いつながら、ルネが声のした方を振り返ると、先程のバルマンが、若いギャルソンと一緒にテーブル席の男性客三人を相手にしながら、困った顔をしていた。

「高いワインと言われましても…それが果たしてお客様の好みに合うものか、分かりませんが…」

バルマンは少しくらい英語を使えるのかもしれないが、そんな彼のたどたどしい説明に耳を傾げるだけの辛抱を、その客達は持ち合わせていないようだ。

「お、ワイン・リストにシャトー・ル・パンが載っているな。ニューヨークでも、マニアの間で高値で売り買いされている奴だ。よし、これにしないか？」

バルマンは何か言いたげな顔をしたが、高飛車で、そもそも人の話を聞こうともしない客の態度に疲れたのだらう、結局押し切られる形でオーダーをそのまま通した。

「ル・パン君かあ…確かに高そう。ビンテージはいつのだらう」

読み漁っているワイン本の中によく出てくる幻のカルト・ワインの名前に興味をそられたルネは、体を捻って、斜め後ろにあるそのテーブルを眺めた。

そこにいる客達は、身なりのいい、いかにも外国人風の30歳前

後の男ばかり3人連れだった。先程の英語の発音から、アメリカ人、やけに羽振りのいい様子なので、ニューヨークの大手の会社に勤めるエリート・ビジネスマンというところか。

ルネがそんな推測を巡らせているうちに、男達の中の1人が彼の視線に気づいたようだ。他の仲間の腕をつついて知らせると、皆一斉にこちらを興味津津々見返した。

(うわっ…)

焦ったルネは慌てて顔を背けるが、もう遅かった。彼らはしつかりルネに関心を覚えてしまったらしい。

「おい、あの金髪の子、可愛かったな」

「どうする…？ 英語は分からないかもしれないけど、声かけてみるか？」

彼らが仲間内で囁き交わす声は全て英語だったが、ルネは結構語学には堪能だったので、その内容はよく理解できた。

「せっかく休暇を取ってパリにまで来たんだから、フランス美人とも親しくなっておかないと、何しに来たか分からないぞ」

本当に一体何をしにきたんだよと心の中で密かに突っ込みを入れながらも、『美人』という言葉について反応したルネは、性懲りもなくもう一度そちらを見てしまった。

すると、陽気なアメリカ人達はおおっと大げさにどよめき、ルネに向かって笑顔で手を振ったり、ウイंकを投げて寄こしたりしてきた。

(ああ、駄目：あのノリにはついていけない)

げんなりしながら、ルネは再びカウンターに向き直り、彼らを無視する構えでワイン・グラスを唇に運んだ。

そうするうちに、ギャルソンが抜栓したワインをテーブルに運んできた。彼らがオーダーしたシャトー・ル・パンだ。

(あ、ル・パン君だ！ に、匂いだけでも、分からないかな…？)

ネットのオークションで見たのは、確か1982年ものだったか。自分には一生かかっても無理と思ったワインなだけに、せめて匂い

だけでもお相伴に与れないかと、ルネは鼻をひくひくさせながら、そちらのテーブルを眺めやった。

すると、初めにルネを見つけた男とまたしても目があつた。

「あの子、またこつちを見ているぜ」

「これはやつぱり脈があるんじゃないかな。おまえ、誘つてこいよ」
慌ててルネは背中を向けたが、二度も思わせぶりの視線を向けてしまったのだから、彼らをその気にさせたのは彼の責任だつた。

「ボン・ソワール…お一人ですか…？」

肩越しにたどたどしいフランス語で声をかけられた時は嘆息しそうになつたが、『フランス語の分からない外国人に話しかけられたら無視する』すかしたフランス野郎ではないルネは、躊躇いながらも誠実に答えた。

「英語なら、多少分かりますから、大丈夫ですよ」

すると、男は嬉しそうにぱつと顔を輝かせて、微笑んだ。

「そうなんだ、よかつた。僕達は、フランス語はあまり得意でないんで、ガイド・ブックにお勧めと載っていたから入つてみたこの店だけれど、オーダー一つ通すにも苦労していたところだつたんだ」

フランス語が苦手でも、あの親切なバルマンの話をちゃんと聞く姿勢があればさほど苦労はしなかつたろうにと思つても、顔には出さず、ルネは礼儀正しく答えた。

「慣れない街で言葉が不自由だと、色々不便でしょうね。どちらからいらしたんですか？」

「ニューヨークだよ。僕達は大学時代からの悪友同士でね…運よく同じ時期に休暇が取れたものだから、一緒にパリに来て、羽を伸ばして楽しんでいるところさ」

案の定彼が出したビジネス・カードは、ルネも聞いたことのある大手の証券会社のものだつたし、他の2人も大手銀行や法律事務所に勤める弁護士という肩書だつた。ついでに言うなら、彼らは皆ゲイで、その結束があるから、これまで長い付き合いが続いているらしかつた。

「もしかして誰かと待ち合わせかい？ 気安く声をかけたりしたら、まずいのかな？」

「いえ…そういう訳ではないですよ」

ルネはどう応えようかと迷いながら、相手の顔を凝然と見つめた。見た目はそんなに悪くない。並みの上か上の下くらい。屈託なく笑った表情は好感が持てるものだったが、口から覗いた歯は不自然な程真っ白で、もしかしたらホワイトニング処置でも受けているのではないかと疑ってしまう。

「それなら、僕達のテーブルに来て、一緒に飲まないか？ 大勢で飲む方が楽しいし、今夜はパリ滞在の記念にとっておきのワインを頼んだんだ」

「ワインを…一緒に…？」

えっ、シャトー・ル・パンを飲ませてもらえるの？ 意地汚くも、その一言でルネの気持ちは固まった。

「…別にいいですよ。僕もちよっと退屈していたところだったんです」

ルネが男の目をじっと見つめながら思い切り魅力的な笑顔で応えると、彼はぱつと頬を赤らめた。

ノリの軽いナンパ野郎だが、こういう顔をするちよっと可愛いかなど思わないでもない。

「ありがとう、僕はポール」
「ルネです」

得意げなポールに伴われたルネがテーブルにやってくると、他の2人もにこやかに席を空けて彼を歓迎した。

とにかく皆フレンドリーで、こうして近くで接してみるとそんなに悪い人達ではないのかもという気がしてくる。

「それにしても、こんなに綺麗な子が1人きりでワインを飲んでいなんて信じられないな。思いきって声をかけてみたけれど、絶対誰かと待ち合わせだろうって、振られることは覚悟してたんだ」

「ねえ、本当に恋人とかいないのかい？ 君くらい魅力的なら、す

ごくゴージャスな恋人がいても不思議じゃないし、大体周りが放っておかないだろうに……」

「こらこら、初対面なのに、あんまり不躰なことを聞くなよ。ルネ君、ごめんね、騒がしくて……仕事から離れた休暇となるとついタガが緩んでしまふみたいなんだ。そう言いながら、俺も、君みたいな素敵なフランス美人と知り合えてラッキーだとは思ってるけど……」

「こら、抜け駆けするなよ、エド」

男達にちやほやと持ち上げられて、初めは戸惑っていたルネだったが、次第にまんざらでもないような気持ちになってきた。

この姿に変身する前は、地味で目立たなかったルネは、自分の美しさや魅力をこんなふうに関人に褒めそやされるようなことはなかった。

ローランの趣味で磨かれた今の自分がどうやら美しいということはあるが、それにしただって、ガブリエルの贋作ではないのなら、ルネにとって無価値に等しい。大体肝心のローランが、この所ルネに対して他人行儀で、綺麗だとか可愛いとかいう言葉をちっともかけてくれないのだから、彼の自己評価は下がる一方だったのだ。(ううん、ちよつと優しくされたくらいで気安く打ち解けてしまうのもどうかと思うけれど……なかなかどうして、結構いける男達にもてまくりのこの状況は……気持ちいいかも……)

ルネが充分にくつろいで、代わる代わる話しかけてくる男達に微笑み返すようになった頃、ついにポールが例のワインのボトルを取り上げて、廠かに告げた。

「それじゃあ、そろそろ、このワインを試してみようか。シャトー・ル・パン2006年だ」

「ああ、そうだったな……つい、ルネ君の美貌に目がくらんで、ワインの存在を忘れる所だった」

「だったら、おまえは忘れたままでいるよ、ダン。俺達3人でこのワインは楽しむからさ」

ポールは意地悪く言いながらもボトルを取り上げ、なかなか慣れ

た手つきで、並べられた大きなボルドー型グラスに濃いガーネット色のワインを注いでいった。

(あ…れ…?)

テールブルに身を乗り出すようにして香りが立つのを待ち構えていたルネは、次の瞬間鼻腔に感じた匂いに戸惑いを覚えた。

(何…この香り…?)

ルネは改めて、目の前まで持ってきたグラスから立ち上ってくる香りを嗅いでみたが、違和感が増すばかりだ。

「乾杯！」

一方のポール達は何の疑問も覚えずグラスを掲げ、口元に持ってきては、香りを思い切り吸い込み、神妙な顔で頷いている。

「やっぱり、ル・パンだけはあるな、この豊かな香り…」

「おお、すごくうまいぞ、これ！ やはり高値で取引されているだけはある」

そんな単純な称賛を聞き流しながら、ルネはグラスにはまだ口をつけず、その香りを一心に嗅いでいた。

(ル・パンと言えば、確か葡萄の品種はメルロー百パーセント…ああ、ヴァニラのような独特の樽香もあるな。熟したブラックベリーのような香りにチョコレート…確かに、本で読んだイメージの香りはグラスの中から上がってくるのに、それを邪魔する嫌な臭いが混じっている。どこかで嗅いだ事があるんだけど、何だったかな…?)

ルネは、おずおずとグラスに唇をつけ、一口ワインを口に含み、舌の上で転がすようにしながらゆっくりと味わってみた。

(うーん…どうなんだろ、鼻に抜けるワインの香りそのものにも伸びがない気がするし…それに、やっぱり、これって異臭だよなあ。ワインって、腐ったりすることあるのかなあ)

しかし、他の3人の様子を眺めてみれば、皆満足した顔で美味しいと言っているのだから、単に高いワインを飲みつけていない自分の感覚に問題があるのかもしれない。

（これも、こういうものだと思えば、まあまあ美味しいのかもしれないな。ル・パンだと期待しすぎたのがいけなかったのだろうか。でも）

ローランに奢ってもらったラトゥールは、ワインにさほど興味がなかったルネの目を大きく開かせるほど、衝撃的な美味しさだった。噂に高いル・パンならば、いくら好みの問題はあるとはいえ、また別のめくるめく恍惚感に自分を包んでくれそうなものではないか（これ、奢ってもらったワインでよかったな…もしも割り勘だったりしたら、僕はきつと逆上して、よくもこんなすかワインを掴ませたなって店の人を締め上げちゃうところだよ）

密かな落胆と失望感を噛みしめながらも、まだ納得しきれないルネは、ボトルを手元に引き寄せ、本当に正真正銘のル・パンなのか、エチケットをチェックしてみた。

（間違いない…セカンドとか紛らわしいものでもないな。ビンテージは2006年か…もしかして、まだ飲み頃が来ていないとか、そういう問題なんだろうか…？）

ルネがグラスの中のワインの大半を残したまま、難しい顔でボトルをためつすがめつ眺めているのを怪訝に思ったのか、ポールが声をかけてきた。

「このワインはどうだい、ルネ？」

「は、はい、おいしいです。これが有名なル・パンなんです…貴重なワインを味見させてくださって、ありがとうございます」

「そんなに堅苦しい言葉遣いはよせよ、ルネ…君になら、ル・パンを奢っても惜しいとは思わないよ」

「はあ…それはどうも…」

思ったよりも美味しくないという正直な感想はとても言えないなと思いつながら、ルネは先程のバルマンの姿を目で探した。彼に、このワインはこういうものなのかどうか、確認してみようと思ったのだ。

店内をぐるりと見渡したルネは、その時丁度バーに入ってきた長

身の男の姿を入口近くに見つけるや、つい大声をあげそうになった。

(えっ…嘘、ローラン?!)

ゆったりとした足取りで誰かを探すように奥に入ってくるのは、間違いなく、ローランだった。

(ど、どうしてローランがここに…? あ、そう言えば、社を出る前にこの店のカードをうつかり見せてしまったけれど…僕がここにいてってことを予想して、わざわざ探しに来たってこと…?)

パニック状態に陥りながらも、ルネがぼかんと口を開けてローランの姿を目で追っていると、先程のバルマンが現れ、彼のもとに飛ぶように近づいて行った。

バルマンは恐縮した様子でローランに声をかけ、それに向かって、彼は微笑みながら鷹揚に頷き返している。

そう言えば、ローランは以前このバーに何度か足を運んだと言っていたが、あのバルマンとも面識があったのだろうか。

ローランが何かを尋ねたのだらう、バルマンはちよっと考え込むような仕草をした後、ルネのいるテーブル席の方を振り返った。それに倣って、ローランの眼光鋭い翠眼が、ルネを捉える。

「うわっ…」

ルネは手で顔の前を遮りながら、ローランの視線から逃げるよう、ポールの陰に隠れて縮こまった。

「どうしたんだい、ルネ？」

「ポ、ポール…」

ルネは青ざめた顔で、自分を訝しげに見下ろすポールの顔を見上げ、それから、恐る恐る身を起して後ろを眺めやった。

(うっ)

やはり、ローランの炯眼から隠れることなどできなかった。彼は先程の位置に腕を組んで立ったまま、ルネのいるテーブルの様子をじっと観察している。その端正な顔には何の感情もつかんでいなかったが、それだけに一層恐かった。

別にルネには今夜の行動を後ろめたく思う理由はなかったはずだ

が、ローランの目の前で、これ以上行きずりの男達と楽しくワインを飲むことなどできそうにない。

「ポール、ごめんなさい、僕…急用を思い出したんで、帰ります…！」

動揺しながら席を立とうとするルネに、ポールは当惑した。

「ルネ、一体どうしたんだよ、急に…」

「本当にごめんなさい、でも、僕…これ以上ここにいられない…」

ローランの視線が背中に突き刺さるのを感じて焦るルネは、とにかくこの場から逃げ出したい一心で、呆気に取られるポール達に謝りながらテーブルから離れようとした。そんな彼の手を、とっさにダンが掴み占めた。

「ちよつと待てよ、ルネ…せつかく盛り上がってきた所なのに、いきなり帰るはないだろう。1人寂しく飲んでいたのを親切に誘ってやった、俺達に何か不満でもあるっていつのか…？」

気持ちが急いでいたルネは、しつこく引き留めるダンをいらつとした目で睨んでしまった。

「親切に誘ってやったなんて言われる筋合いは、僕にはないですよ、ダン。…とにかく、お願いだから離して下さいっ」

ルネの怒りを感じたからか、男達を取りまく空気が瞬間的に変わった。

「離すなよ、ダン」と低い声で言ったのは、それまで無害で優しいような顔をしていたポールだ。

「ルネ、いいから座って、僕達に付き合えよ。シャトー・ル・パンなんて、君には一生縁がないような最高のワインに見合うだけの付き合いはしてもらっぜ。それとも、割り勘にしようか…？」

「はあ？」

おいおい、誘ったのはそっちにくせにいきなり割り勘はないだろうと、給料日前でお金のことにはうるさいルネは、本気で殺気立った。

「ほら、大人しく言うことを聞けよ、ルネ…」

強引に引き寄せようとしたダンの手を、ルネは無言で掴んで、軽く擦じった。たちまちダンは顔を赤くして、苦鳴を漏らしながら彼の手首を離れた。

「だから、離して下さいって言ったんですよ」

ルネはもう一度肩越しに後ろを振り返った。今のは死角になっていたからローランには見えていないはずだが、やはり気になったのだ。

するとローランは、酸っぱいものでも口に含んだかのようなしめ面をしていた。ポール達に絡まれているルネの有様を見てのことだろう。

ふいにローランは、傍に控えていたバルマンに何事か耳打ちして、財布から取り出した紙幣を素早く彼の手の内に押し込んだ。バルマンは、ローランの目を見て真剣な顔で頷いた後、目立たぬようそつとチップをポケットに入れ、静かに身を引いた。

(何をやっているんだろう、ローラン…)

バルマンとの間でそんな不審なやり取りをした後、ローランは改めてこちらに向き直った。

たちまち、ぞくりとルネの肌が泡立つ。

ローランは、大勢の客達が談笑するテーブル席の間を、迷いのない足取りでこちらに近づいて来たかと思うと、逃げることも忘れて立ちつくしているルネの前に立った。

「ルネ、待たせたな」

ローランはすつと細めた双眸でルネの視線をしつかりと捕えこみながら、実に堂々たる態度で声をかけてきた。

「仕事が長引いて、約束の時間に遅れたのは悪かった。そんな怖い顔で睨んでないで、機嫌を直してくれないか？」

「えっ…え…？」

当惑して目をぱちぱちさせるルネに向かって深々と頷きかけながら、自信たっぷり微笑むローランは、今更な気もするけれど、水際立っていい男だった。

今の今まで結構いいかもと思いつながら一緒にワインを飲んで楽しんでた、アメリカ男三人組の存在が一気に霞んでしまうほど、ローランの放つオーラは強烈で、どうしても目が離せない。ポール達だって、肩書を見る限り、高給取りの優秀なエリートのはずだが、ローランとは男としての格が違う。

「お、おい…一体、何なんだよ、急に割りこんでくるなんて、失礼じゃないか」

ローランの迫力に圧倒されてしばし声も出なかったポールが、ようやく我に返って絡んできたが、ローランは完全無視、ルネだけを見つめている。

「あ、あの、ローラン、一体何を言ってる…？」

正直に問い返そうするルネを手で制し、『フランス語の分からない外国人に話しかけられたら無視する』すかしたフランス人代表は、怒りを募らせている3人はスルーしたまま、低い声で囁いた。

「ルネ、今は余計なことは何も言わず、俺と一緒にここを離れる。これ以上、こんな下らない連中の相手をしてやる必要はない」

ローランの早口のフランス語は聞き取れなくても、何となく自分達の悪口を言われたことは察したのだろうか、ポールがすくと席から立ちあがって、彼の腕を掴んだ。

「おい、その子は今まで僕達と一緒に楽しく飲んでいたんだぞ。それを突然現れて勝手に連れていくななんて、許さないからな」

ローランは上品に眉をしかめて、自分の腕の掴むポールの手を嫌そうに払いのけた。

もともと酔いの回っていたポールの顔が、怒りのあまり一層赤くなっていた。

「さっき離れた場所からこいつの様子を観察していたが、とても楽しそうにしているようには見えなかったぞ。帰りがっているのをしつこく絡んで無理に引き留めようとするのが、アメリカ人のやり方か？ どの国に行っても自分流で突っ走るのは結構だが、少しは空気読めよ」

ローランの口から出たのは、完璧なまでに流暢な英語だったが、ルネが思わず青ざめたくらい挑発的で喧嘩腰、これで怒らない人間はいないだろう。

凍りつく男達を冷やかに眺めまわしながら、皮肉っぽく唇を歪めて、彼は笑った。

「ああ、失礼：素生の悪い言語を使うと、つい言葉遣いばかりか態度までも乱暴になってしまうな」

母国語でもあなたは充分荒っぽいですよと、ローラン寄りのルネでさえ、心の中で思わず突っ込まずにはいらなかった。

「全く、ワインのこともろくに知らない連中と一緒に飲んで、適当に話を合わせるのも疲れるだけさ。大体、そんなまずいワイン、誰が飲みたいものか…！」

ローランは、テーブルの上に置かれたル・パンのボトルのちらりと目をやり、辺りに漂う匂いを嗅ぐと、露骨に不快そうに顔をしかめた。

「ロ、ローラン、そのワイン」

何かしらはっとなって問いかけようとするルネに、ローランは素っ気ない口調で手短に言った。

「ルネ、お前も気づいたはずだ。そのワインは飲むに値しない…ブシヨネだ」

「えっ…？」

ついに我慢に限界に達した三人組は、荒々しくテーブルから離れ、ローランとルネを取り囲もうとした。

「もう、我慢できん、この鼻持ちならぬすかし野郎を叩きのめしてやる」

「俺達がこの子に飲ませてやったのは、ル・パンだぞ。まずい訳がないだろうが！」

殺気立つ3人を見て、ルネはいつでも応戦できるよう身構えたが、そんな彼の前にローランが素早く立ち上がった。

(えっ…?)

自分をさり気なく後ろに隠しているローランの広い背中を、ルネは信じられないものを見たかのように、ぽかんと口を開けて眺めた。
(もしかして、ローラン…僕を庇ってくれている…?)

故郷では武道の達人として少しは知られていたルネは、自分よりも強い人間に庇ってもらったという経験がそもそもない。前の彼氏に至っては、夜道で酔漢に絡まれた際、ルネを前に押し出して、自分はずつさと逃げてしまっただけくらいだ。

(ああ、好きな人に大事に守ってもらえるのはか弱い女子にのみ許された特権かと思っていたけれど…男の僕でも、やっぱり嬉しいものなんだあ)

こんな緊迫した状況で不謹慎ではあったが、感動のあまり、ルネの胸はきゅんとなった。

ルネがローランの背中に隠れて、つい緩みそうになる顔を両手で挟んで身悶えしている間、ローランはじりじりと間合いを詰めてこようとする三人を鋭い目で威嚇していた。その手が、おもむく伸ばされ、テーブルの上からワインのボトルを取り上げた。

「シャトー・ル・パンか…ふん、そんなに気に入ったのなら、そら存分に味わいやがれ！」

いきなり言い放つや、ローランはまだボトルの中に半分ほど残されていたワインを男達に向かって、勢いよくぶちまけた。

「うわあつ、ル・パンが…！」

「くそ、昨日買ったばかりのアルマーニのスーツが台無しだ」

「この野郎、よくもやりやがったな！」

色めき立った三人は、ワインを浴びて血まみれのようになってしまった服を気にし、口々に罵りながら、こちらに向かって突進してこようとした。

しかし、それより素早く動いたローランの手がテーブル席の椅子を掴み、なだれ込んでくる彼らの前に倒した。

「わあつ」

椅子に躓いたりワインで濡れた床に足を滑らせたりして転倒する

3人を尻目に、ローランは呆然となつているルネに向かつて、悪戯小僧のような顔でウインクを投げかけた。

「ぼつととするな、ルネ、この隙に逃げるぞ」

「ええっ?!」

喧嘩を吹っ掛けておいて、もう退散かよ。ルネは一瞬拍子抜けした。

しかしローランは問答無用で彼の手首を掴み、騒ぎを聞き付け飛んできた店員や何事かと思物に来る客達の間を縫うように、足早に立ち去ろうとした。

「この野郎！」

怒りに満ちた声を聞いたルネが後ろを振り返ると、床から半身を起したポールが、腹立ち紛れに手に掴んだボトルをローランに向かって思い切り投げつけたところだった。

「！」

ルネは、反射的に動いた。繰り出した手刀で、ローランの頭を直撃しそうになったボトルを叩き落とし、彼を守るよう身構えたまま、その背後にびたりとついた。

「どうした？」

あまりの早業に、何が起こったのかまでは察知できなくても気配は分かったのだろう、怪訝そうに振り向くローランを、ルネは慌てて誤魔化した。

「な、何でもありません」

ルネは顔を赤らめて、ローランを救った自分の右手をちらつと見下ろした。

（僕の手で、今、ローランを助けることができた。いくら武道の腕を上げたって、実生活で役に立ったことは今までなかったけれど……ああ、空手をやってよかったなあ）

しみじみと感慨を噛みしめているルネを、ローランは一瞬追求したいような表情をしたが、ここでぐずぐずする訳にもいかなかったので、そのまま彼を急かして大騒ぎの店内から脱け出した。

「立ち止まるな、ルネ、奴らを完全にまくまでこのまま走るぞ！」
「は、はい！」

何が何だかよく分からないまま、ルネは反射的に叫んで、ローラ
ンと一緒に駆け出した。

店の近くにいた通行人達が、一体何事だろうと、走り抜けていく
彼らを不思議そうに振り返っていく。

（僕のせいで、あの店には大変な迷惑をかけてしまったな…せつか
く素敵なワイン・バーを見つけたと思ったのに、こんな騒ぎを引き
起こしてしまったら、もう二度と行けないや。ああ、ポール達が、
あれ以上店の中で暴れることがなければいいけれど…でも）

あの親切で感じのいいバルマンのことを心の端で気にかけてながら
も、ルネの胸を圧倒的に占めているのは、また別の感情だった。

（一体どうしたんだろう、いつも僕なら、大変なことをしてしまっ
たともつと後悔や反省をしそうなものなのに、むしろ今は、すごく
気分がいい…）

胸の鼓動が速くなり、やけに頬が熱いのは、必死に走っているた
めばかりではなさそうだ。

仄明るい街灯に所々照らされた細い路地をローランに手を取られ
て夢中でさ迷いながら、ルネは不可解な喜びをじつと噛みしめてい
た。

取り返し思い出されるのは、さつき、店の中でポールがローラン
を狙って投げたワインボトルを手刀で叩き落としたことだ。

（物凄く些細なことだけれど、自分の力でローランを守れて嬉しい
…さつき彼に庇ってもらった時の嬉しさとはまた違う、現実にはあ
まり役に立たない僕の才能がちゃんと活かせたという満足感がある。
おかしいな、前の彼氏に僕の腕っ節を頼りにされて、喧嘩となると
当然のように押し付けられていた時には、すごく嫌だったのに…）

ルネは夢見心地の気分のまま、ローランに従って走り続けた。ど
こまで行くのか知らないが、このままずっと、息がとまるまで彼と
一緒に走り続けられたら本望だろう。そんなたわいもないことを考

えていた。

錆びたワイン(3)

「この馬鹿野郎！」

胸を占めるあまやかな幸福感も一瞬で消し飛ぶような怒号と共に、ルネは堅い石壁に背中を叩き付けられた。

どこをどう突っ走って辿りついたのか、人気のないセーヌの河岸にさ迷い出た直後のことだ。

「ロ、ローラン…いきなり何…？」

痛さに顔をしかめながら問い返すルネの鼻先に指を突きつけ、ローランは、まだ怒りが静まらないかのような荒々しい口調で続けた。「全く、ワイン・バーで男漁りなんて慣れない真似をするから、あんなしようもない連中に捕まって困らされることになるんだ！俺に対するあてつけにしたって、もう少しましな相手を選べなかったのか。阿保のアメリカ野郎どもなどにくれてやるために、俺はお前を磨いた訳じゃないぞ！」

しばし呆気にと取られていたルネだったが、ローランの理不尽な言い草に、庇ってもらった時の感動も忘れて、つかつかとなった。

「な、何ですか…僕をあなたの所有物のように言うのはやめてください！仕事を離れたプライベートで、僕が何をしようが自由のはずでしょう？あの人達だって…あなたが現れるまでは別に何の問題もなく、楽しい雰囲気飲んでいたんです。それをぶち壊したのはあなたじゃないですか！」

「ほう…すると、おまえは本気であんな奴らをいいと思った訳か？」

「え…ええ、いい人達でしたよ。皆明るくて親切で、あなたよりもよっぽど優しくしてくれました」

ローランは軽蔑しきったような冷たい目をして、ルネの訴えを鼻先でせせら笑った。

「優しくだ？ どうせ見え透いたお世辞と親切そうな笑顔でちやほやされて、ちょっといい気分になっていただけだろうが。それを自

分はもてるなんておかしい勘違いをするなよ、ルネ。あんな雑魚どもにいくら餌をばらまいたところで意味などあるか、本物のいい男の1人、2人にでも本気で惚れられて、初めてもてるって言うんだ」
相も変わらずの傲岸不遜、思い切り人を見下した態度で堂々と言い放たれたルネは、反論しようとしたものの、結局力負けした気分で黙り込んだ。

先程のバーでの顛末で、ルネはほとんど彼に惚れ直しかけていたというのに、ガブリエルのために仕事を放り出して駆けつけたことも大目に見てもいいような気になりかけていたのに、どうして、こゝろの気持ち逆撫でするような暴言を吐くのだ。

「…ほんとに、もう…嫌な人…っ…」

ルネは熱くなった額を手で押さえ、おさまりきらない怒りを持って余しながら、小さく吐き捨てた。

そんなルネをしばし見据えた後、ローランは怒らせていた肩を落とし、冷静になると苦労しているかのような様子で語りかけた。た。

「もしも、おまえと一緒にテーブルにいたのがもう少しまともな男で、おまえが本当に楽しそうな顔で笑っていたら…俺は声をかけずに帰るつもりだった。確かに、おまえのプライベートにまで、上司の俺が干渉はできんからな」

ローランは、いかにも不承不承といった固い口調で言い終えると、ポケットから取り出した煙草に火をつけ、ルネが背中を押しつけている石壁に自分ももたれかかった。

「ローラン…」

無言のまま紫煙が上がるのを目で追っているローランは、苦いものを無理矢理飲み下そうとするかのような、不機嫌な顔をしていた。上司である自分がルネの自由を縛ることはできないなんて台詞をローランの口から聞いたのが、ルネは意外だった。

（僕のプライバシーなんかお構いなしに、自分の都合で振り回して、それを当然と考えているのかとばかり思っていたけれど、尊重しよ

うという気持ちも少しはあったのかな…?)

ローランが黙りこんでいるので、ルネもやはり黙ったまま、彼が言いにくそうに言った言葉を反芻していた。

(確かに僕とローランは上司と部下だけれど、それだけじゃない…かと云って、はっきり恋人同士とも言えない微妙な間柄だ。どこまでなら相手の懐に入っても許されるのか、秘書としての顔と僕自身の本音をどう使い分けたいのか、線引きに悩んでいたのは僕だけかと思っていたけれど…ローランでも同じような迷いを覚えることがあるんだろうか)

その時ふいに頭の中に閃いた考えに、ルネは聡明な目を瞬いた。

(そう言えば、今夜の彼の行動は、僕の上司としてのものだったんだろうか…自分が目をかけている可愛い部下の危機を救ってくれたとか…? それにしちゃあ、度を越していたというか、私情が漲りすぎだったような気がするけど…)

ふつと口元がほころびそうになるのを堪えて、ルネは隣にいるローランに遠慮がちに尋ねてみた。

「…ローラン、あなたのプライベートな時間を費やしてまで、わざわざ僕を探しに来たのはどうしてですか…?」

ローランはルネを見もせず、むっつりとした口調で言った。

「俺のプライベートな時間をどう使おうが、俺の勝手だ」

「答えになってませんよ、それ…」

ルネは、もう少しローランをつついてみるべきかどうか迷った。どうして自分を助けるためにあんな無茶をしたのか。そもそも、どうして、そんなに怒っているのか。

「あっ」

「どうした?」

「いえ、そう言えば、さっきのバーで…僕が捕まっていたテーブルに来る前に、あなた、バルマンに何か指示を与えていましたよね。チップにしては高額な紙幣を渡して…」

「おまえも目敏いな。バルマンのベルナールは、オーナーが代わる

前から店にいる古株でな、俺もよく知っている男なんだ。客あしらいにも慣れていて、信頼できる奴だから、事情を説明した上で、これから起こす騒ぎの後始末を頼んだんだ。チップの他に、店に与えた損害については、後日俺に請求してくれとも言い含めてある」

あの3人に対して露骨に挑発的な態度で喧嘩を売る前に、そんな周到な準備をしてきたのかと、ルネは目をまん丸くした。

「あいつらがおとなしくおまえを解放してくれるようには見えなかったし、俺自身、多少むかついていたのは確かだが、後先を考えずに店の中で本気で大喧嘩を繰り広げる訳にはいかない。あいつらに怪我をさせて、後で会社の方に損害賠償だのと騒ぎたてられるのは面倒だ。それに万が一、俺の身に何かあれば、社の業務に支障をきたす。だから、ギリギリの所で衝突するのは回避して、お前を連れて、あの店から脱出する必要があった」

「万が一の事態…?」

ルネはローランの言葉を頭の中でしばらく咀嚼した後、はっと息を吸い込んだ。

ああ、そうだった。この人は、本来ならば、あんな無分別な行動に走るべきではない重要な立場にいたのだった。

「ローラン…いえ、ムツシュ・ヴェルヌ、申し訳ありませんでした」
姿勢を正し、神妙な面持ちでいきなり謝罪などするルネに、ローランは面喰ったようだ。

「何だ、藪から棒に…今はプライベートな時間だから、俺に対して畏まる必要はないぞ」

「いえ、仕事中等であるとかないとかの問題ではないんです。ルレ・ロスコアの統括責任者であるあなたが怪我をして入院することにもなったら、社の運営に支障をきたす所でした。そういう意味では、明らかに、今回のことは僕の失態です。僕は、あなたにあんな無茶をさせるべきではなかったのに、あなたをとめることもなく、庇われることの心地よさに浸って…いい、いえ、そんなことより何より、個人的なトラブルにあなたを巻き込んでしまうなんて、あなたの秘

書として、してはならないことでした」

いつの間にかここまで身に付けたのか、礼儀正しく節度のきいた言葉遣いで、秘書としての立場から申し分のない意見を述べるルネは、これが仕事ならローランが完璧だと太鼓判を押したことだろう。

「今後は、あなたに迷惑をかけるかもしれない軽はずみな行動は、たとえ仕事を離れていても差し控えるようにします。もしも、また同じ失敗を僕がすることがあれば、その時はばつさりクビにしてください」

今の状況でいきなり仕事モードに切り替わられたら相手は困るだろうということも分かっていても、自分の職務上の失態を見逃すことができないのもまたルネだった。

「いや…これは、おまえのせいじゃないぞ、ルネ。自分の立場も忘れた軽はずみな行動を取ったのは、むしろ俺の方だ。本社にいた時とは違うんだから、慎重に行動しようと思っただけ、かつとなる」とつい地が出てしまう…困ったことにな」

ルネの思いつめた顔を眺めながら、ローランは本当に困ったように指先で頬のあたりを引っ掻いた。

「大体、好き好んでトラブルを招いた訳じゃないだろうに、そこまですべて自分を責める必要はないぞ。別におまえは、24時間俺の秘書だという訳じゃないんだ。俺に対する不満や鬱憤が溜まりに溜まって、他の場所で発散したくなつたとしても当然だ…まあ、今夜は、相手をちよつと選り間違えたようだがな」

大分腹の虫はおさまったのか、ローランの表情は和らいで、ルネにかける言葉も優しくなっていた。

「もちろん、僕個人としては、あなたに対する不満はまだ山ほど抱えていますよ。あなたのやり方をどうしても認められないこともあれば、あなたの本音をとことん問い詰めてやりたくなる衝動にかられることもあります」

ルネは秘書としての顔から、ふいにまた本来の自分の顔に戻って、少し拗ねたような甘えた目つきでローランを睨んだ。

その変化は、ローランをむしろほつとさせたようだ。

「ふうん…それじゃあ、場所を変えて、これから一戦交えるか？俺に対して言いたいことをぶちまけて、それでおまえがすつきりするというのがなら、そうしよう」

ローランのある意味潔い提案に、しかし、ルネは悩ましげに眉を寄せた。一度彼とはとことん話し合って、その気持ちを確かめたいとは思っていたけれど、今夜そうしたいかということ、ルネの気持ちは微妙だった。

（僕がローランに対して腹を立てていたのは、いつもガブリエルを優先させるこの人に、自分は見捨てられたような気分になったからだ。でも、少なくとも今夜のローランは、僕をわざわざ探しにあそこまで来てくれた、男達に絡まれているのを助けようとしてくれた、僕に怪我させまいと庇ってくれた…）

全てを許した訳ではないけれど、今更口論をしかけて、ローランの口から無理矢理答えを引き出そうとするより、彼が見せてくれた行動だけで今は十分な気がした。

「それも、いいかもしれませんが…でも、今夜はもうお腹がいっぱいみたいです、僕…その代わり、一つだけ質問させてください。それにちゃんと答えてくれたら、今夜はこれ以上うるさいことを言うのはやめにします」

「何だ？」

ルネは、訝しげに問い返すローランの前に回り込み、その顔を下からじつと覗きこんだ。

「もしも 僕と一緒にワインを飲んでいたのが、あなたの目から見てもいい男で、僕も満足して幸せそうに笑っていたら、あなたは本当に、あのまま何もせずパーから立ち去ったんですか？」

ローランの眉間に深い皺が寄り、鮮烈な印象の緑の瞳が微かに揺らいだ。

「うーん…そうだな…」

いつもと違って歯切れの悪いローランは、新しい煙草に火をつけ

る態を装って、ルネの顔からさりげなく目をそらした。それを逃がすまいというように、ルネは体を傾け、更にせつついた。

「ね、どっちです？」

「……………」

ローランは目を閉じて煙草を深々と吸いながらしばし考え込んでいたが、ふいにまた目を開いて、じりじりしながら答えを待っているルネを正面から見据えた。

「いや…相手がどんな奴だろうが、俺はやっぱり手ぶらで帰るなんてことはしなかっただろうさ。前言撤回だ、あの時の俺は、どうあつてもお前を連れ戻すつもりだった」

やけに清々しい顔で笑ったローランは、手を伸ばして、ルネの頬に優しく触れた。

「ローラン」

直接肌に触れられたせいか、自分を見つめる瞳に灯る熱のせいか、ルネは頬を赤らめた。

（ローラン、やっぱりあなたは僕のことを少しは好きでいてくれた…？ 他の誰にも渡したくはないと思って、ポール達から強引に取り返そうとしてくれたんだ…？）

もしもここでそういう言質が取れたら、ルネはもう仕事でもプライベートでも、この先ずっと彼に全身全霊で尽くしていこうと誓ったかもしれない。しかし、そんな甘い期待は、ローランの次の台詞で呆気なく打ち砕かれた。

「大体、この俺よりいい男なんて、そう滅多にいるものじゃないからな。誰よりもおまえ自身がそう思っているくせに、そいつは聞くだけ無駄な質問じゃないのか？」

「しゃあしゃあと言い放って片目を瞑って見せるローランに、ルネは啞然となった後、真つ赤な顔をして食ってかかった。

「僕がそう思っているなんて、何であなたに分かるんですかっ」

「いや、普通に分かるぞ、おまえの反応を見れば」

「思いつかないでください！ あなたなんか、いくら外見がよく

「だって、性格は最悪じゃないですか、そう最悪……」

「ふうん、すると、お前は悪い男が好きなんだ？」

「違います、僕が好きなのは ええっと……」

適当な答えが見つからずに、ルネは黙り込んだ。強い人が好きだとキアラに言った覚えはあるけれど、それ以上どんな男が理想なのか、頭に何も浮かばないのだ。

（ローランに出会ってから、自分の理想がどんなだったかなんて、すっかり忘れてしまったみたいだ。今夜バーで声をかけられたのがポール達じゃなくても、どんなに優しく、親切で、僕を大切にしてくれる素敵な人が現れたとしても、今の僕はきつと受け付けないような気がする）

思い至った考えに、ルネは何かしら呆然となった。

（視野を広げるために、無理して他の出会いを求めてみたけれど、結局僕が戻ってくるのは、この男なのか。ああ、こんなに身勝手に傲慢で、意地が悪くて、おまけに僕より好きな人がいる……どう考えたって、理想の恋人と呼ぶには程遠いんだけれどなあ）

ルネが眉根を寄せた難しい顔でいつまでもぐるぐると思い悩んでいるので、ローランは焦れたらしい、今度は両手で彼の顔をはさんで自分の方に向けさせた。

「ルネ？」

「うわあ、びっくりした。ええっと、その……僕は、別に悪い人が好きな訳じゃあないですよ、僕は」

動揺のあまり、しどろもどろになつて必死に何か言おうとしている、ルネにあてられた緑の目が愛しげに微笑んだ。

「……可愛い」

ルネは目を剥いた。ローランの口からは、ものすごく久しぶりに聞いた気がする、この言葉。ポール達からは似たような賛辞を惜しげもなく注がれてもまんざらでもないと思わなかったのに、衝撃のあまり一瞬息が止まるかと思つた。

（そつだ、僕は悪い人が好きな訳じゃない……僕は、ローラン、あな

たが好きなんです)

ローランは、瞬きするのも忘れたまま、すっかり固まってしまっているルネの上に身を屈め、その唇にちゅっとキスをした。

「全く、目くらい瞑れよ…キスの仕方も忘れたのか？」

「す…すみません…ああ、でも、本当にキスの仕方は忘れてたかも…だって、あなたとこんなに接近したのは、今夜できっかり21日ぶりですよ…？」

「指を折って数えるな。しかし、そうか あれから3週間も経っていたのか。社では毎日顔を合わせているから、気がつかなかった。長い間構ってやれなくて、悪かったな」

ローランの腕が背中に戻ってそっと引き寄せるのに、ルネは素直に身を任せた。

この優しい胸に抱かれるのも、きっかり3週間ぶりだ。大好きな手触りと匂いを確かめようと、ルネは、ローランのスーツの質のいい布地に手を滑らせ、シャツの上に頬を押し付けた。

「…臭い」

どんよりと暗いルネの呟きに、ローランの体が軽く硬直した。

「えっ、また…？」

塩素臭いとダメだししたのはきっかり3週間前だったが、今夜は違う、ルネはローランのスーツの襟を両手で思い切りくつろげて、シャツに紅い染みが残っているのを発見した。

「あ、さっきのワイン…」

「ああ、思い切り染みになっているな…やれやれ…」

ローランはポケットからハンカチを取り出して、シャツについたワインを拭き取ろうとしたが、その手をルネが押さえた。

「…待って、この嫌な臭い…どこかで嗅いだことがあるって、バーでワインを飲んだ時に気になったんです。もう少しで思い出せそうなんですけれど…動かないでくださいね」

「ル、ルネ…？」

困惑するローランには構わず、ルネは彼のシャツに鼻先を押し付

け、クンクン、クンクン…それほどこの臭いのことが気になっていったわけだが、男の胸にへばりつき顔を擦り寄せごそごそするのは、いかなものだろうか。

「そ…それで、何か分かったのか…？」

ルネがやつと身を引いた時には、ローランは少しばかり息を乱していて、動揺を押し隠しつつ、ぎこちない動きでポケットからまた新しい煙草を取り出した。

「ええ…ローランは、確か、あのワインのことをブシヨネだと言いましたよね。それって、変質したワインのことでしたっけ…？」

「正確には、コルクの変質によつて、ワインの味や香りにダメージを受けているものことだ。さすがのシャトー・ル・パンも、ブシヨネになってしまったら、本来の味わいからは程遠い別物になってしまう。初めて飲んだル・パンがブシヨネだったなんて、全くついてなかつたな、おまえも…それとも、あんな奴らにただで飲ませてもらおうなんて意地汚く思ったから、罰があたつたか…？」

「そのことはもう言わないでくださいよ、意地悪ですね。でも、原因が分かつて、何だか腑に落ちました。僕には、あのワインが美味しいとは思えなかつた。ポール達は満足そうに飲んでいただけ、僕はどうしても、あの異臭が鼻について…天下のル・パン君を捕まえて、何だか言うつのも申し訳ないんですが、あれは、古くなった雑巾の臭いにまさしくそっくりだったんです。雑巾汁だなんて想像したら、いくら高いワインだって、飲む気をなくしてしまいます」

ルネの身も蓋もない感想を聞いたローランは、たちまち煙草にむせて、咳込んだ。

「古くなった雑巾の臭いがどんなものか、俺は知らんが…そうか、ブシヨネの臭いは雑巾か。おまえの表現は面白いな、ルネ…ぷぷつ、今度ガブリエルに話してやろう」

変な笑いのツボに入ったらしい、お腹を押さえてくつくつ笑っているローランを、ルネは不思議そうに見つめた。

「それにしても、ブシヨネになっていたワインをそのまま客に出す

って、どうなんでしょう…？ あのバルマンなら、気づいていたら、そもそも提供しないと思うんですけど。」

「そうだなあ…ル・パンのように高価なワインを頼む客は、味だけでなく、その付加価値も含めた『ル・パン』そのものに大枚を払う客が気づきもしない、ごく軽い劣化であるならば、そのまま出すケースもあるだろう。もしもル・パンを一本そのまま廃棄することになったら、店にとっては大きな損害だ。実際、あの阿呆のアメリカ人は劣化に気付かず満足していたわけだろう。しかし、お前のような敏感な客にあれを出してしまったって、高いル・パンを飲んだけれど、思ったほど美味しくなかったという感想を抱かせたなら、店の犯した罪は重いぞ。それに、まかり間違ってガブリエルにでも、あのワインをうっかり出してみる。怒り狂ったあいつに、散々な酷評を雑誌で書きながら、店を潰されるところだ。そこまでのリスクを考えた上で、あの客達だからこそブシヨネのワインを出したのか、それとも若いギャルソンが確認もせずにボトルをテーブルに運んだのか、おそらく、後者だろうな。あのワイン・バーは、ベルナールを残して、他の店員はごっそり入れ替わっているようだった。人件費を抑えて、ワインのことなどろくに分らないようなアルバイトにサービスを任せるあたり、今のオーナーの経営方針が透けて見える。ベルナールがいなくなったら、それこそ、あの店は終わらさるうな。」

ルネはふと顔を曇らせ、呟いた。

「もしも劣化したワインを出したというクレームが客から出れば、その責任はたぶんベルナールさんが被るんでしょうね。何だか、気の毒な話です。」

「ベルナールには以前一度、よかつたらルレ・ロスコー系列の店に来ないかと誘いをかけたことがある。それ程彼のサービスはよかつたんだ。その時は、愛着のある今の店を辞める気にはなれないという返事だったが…もう一度声をかけてみてほしいな。今夜彼に世話になった礼として、俺もそれくらいしてもいいと思っっている。」

「ああ…それを聞いて、何だかほっとしました。もしも、あのバルマンがうちの系列の店に来てくれたら、僕も折に触れて、彼からワインの話聞いて知識を深めることができそうですし…」

「いつの間に、そんなワインに興味を持つようになったんだ？」

ローランの問いかけに、ルネは楽しげに笑いながら言った。

「あなたに奢ってもらったラトゥール君が、それだけ『いい男』だったからですよ。おかげさまで、もうすっかりワインにはまっていますました」

「そうか…」

ルネの答えにローランは満足そうに微笑み、それから首を傾げて、ちよつと考え込んだ。

「シャトー・ル・パンか…確か、家のワイン・セラーに一本眠っていたな。ビンテージは今夜のものとは違うが、おまえが興味あるというのなら、今から飲みに来るか…？」

「ええっ、本当ですかっ?!」

ローランの気前のいい申し出に、ルネは軽く飛び上がった。

「ああ、生まれて初めて飲んだル・パンがブシヨネじゃ、おまえが哀れだからな。ラトゥールとル・パンとどちらがおまえのタイプなのか、何なら飲み比べて試してみたらいいさ」

「え…そ、それって、冗談じゃないですよね…？」

さすがに信じられなくなったルネが用心深く問い返すと、ローランは面倒くさそうな顔をした。

「あんまりくどくど言つと気が変わるぞ。どうするんだ、俺の家に来るのか、来ないのか？」

コートの乱れを手早く直し、腕時計を確認しながら、ローランはルネを試すような口ぶりと言った。

こちらをちらりと眺めやる、その瞳の奥に垣間見えたのは、素っ気ない口ぶりとは裏腹な熱さで、ルネの胸を突いた。

（あ、そうか…そう言えば、僕がローランの家に招かれるのは初めてだ。こんな遅い時間に、彼の家までわざわざ行って、ワインだけ

飲んで終わりってことは、たぶんないよね…？)

ルネの顔がじわじわと汗ばみ、熟れたトマトのように赤くなってくるのを見るに忍びなかったのだろう、ローランは待ちくたびれた態を装って背中を向けると、規則正しい間隔で街路樹の植えられている河沿いの道を歩き出した。

(あ、行かないで…ローラン、僕はやっぱりあなたが…！)

ローランのことなど忘れようと一度は決めたはずなのに、そんなことはどうやらルネには無理らしい。

次第に遠くなっていく背中を見ながら、ルネはすうつと息を吸い込んだ。

「ま、待って下さい、ローラン…行きます、行かせてください！

ル・パンとラトゥールの飲み比べなんて贅沢、僕のお給料じゃ絶対に無理ですからっ」

見え見えかもしれないが、取りあえずワインを口実にして、ルネは開きかけたローランとの距離を縮めるべく、一気に駆け出した。

愛とスーパの法則（1）

ローラン・ヴェル又は確かにハンサムだ。

俳優かモデルと言っても充分通りそうなほど顔とスタイルは完璧だし、服のセンスもいい。

しかし、映画のトップスターだって、撮影前に徹底的に体を絞り込むことでベストな自分を世間に向けて公開するものの、仕事が終わるとたちまち気持ちと共に体も緩んでしまうのはよくある話だ。俳優でもモデルでもない一般人が常時このレベルをキープするには、涙ぐましい努力が必要なのだとということ、この頃になってルネは思い知らされるようになっていた。

「ムツシュ・ヴェルヌ、急いでください。先方との約束の時間まで後10分です！」

パリ郊外のラ・デフランス。真新しい高層ビルが林立するこの地区は、古い建造物を多く残した、伝統的な風情を残す市内とは違って現代的な景観だ。

その高層ビルの一つに最近引っ越した取引先を訪ねる際、エレベーターではなく階段を使うとローランが言い出したのは、いつもの習慣からくる軽い気持ちだったのだろうが、今は激しく後悔しているに違いない。

35階建てのモダンなビルの27階が目的地だが、20階を超えるときさすがにローランの息も切れ、足元もふらついてきた。

この辺りでそろそろエレベーターを使いませんかと提案したいのは山々だが、変な所で意地っ張りのローランにそれを言ってもますますむきにさせるだけだろう。上司の傾向と対策をわきまえているルネは、タイムリミットを知らせて励ますだけに留めていた。

「…一体どこのどいつが、パリの美観にそぐわない、こんなくそ高いビルなんか建てやがったんだ…ニューヨークや東京じゃあるまいし…」

「35階じゃまだ序の口ですよ。再開発ラツシユのこの地区ですからね。近々建つ予定の商業ビルは92階建てだとか…完成したら、試しに最上階まで階段で登ってみますか？ きつといいトレーニングになりますよ？」

ルネは冗談めかして軽い調子で尋ねたが、それに対するローランの返事はなかった。

自分で一度決めたことは最後までやり通す根性は、それでも立派と褒めるべきなのだろうか。ローランはそれ以上弱音も愚痴も吐くこともなく、ついには自分の足で27階まで辿りついた。

「何とか約束の時間には間に合いそうだな…はあ…」

非常用階段の壁にもたれかかって、せいぜい言いながら額の汗を拭っているローランのために、ルネは素早くバッグからタオルとよく冷えたミネラル・ウォーターのボトルを取り出した。

「そんな汗だくの格好で先方のオフィスを訪ねて行ったら、一体何事かと思われまますよ。まだ5分ありますから、一息ついてください」
ローランは素直にルネの助言に従って、汗を拭き拭き水分補給。

その間ルネは、こんな時のためにと持ち歩いている日本の扇子を使って風を送ってやった。竹材と和紙で作られているため軽くてコンパクトな上、意外と丈夫、この間市内のデパートで開催されていた日本フェアで購入した優れものだ。

「…おまえは、あまり息を乱してないな、ルネ」

27階までローランと一緒に上っても涼しい顔をしているルネに、ローランは怪しむような目を向けてきた。

しかし、所詮一般人のあなたとは鍛え方が違うなどとは口が裂けても言う訳にはいかない。ルネは、目をぐるっと回して、苦し紛れに答えた。

「ええつと…ムツシユより僕の方がまだ若いですからっ」

これも、あまりよくできた回答ではなかったか。

ローランはむっとしたように口をへの字に引き結ぶと、扇子をばたばたさせているルネの手を押しつけ、壁から身を起こした。そう

して無言のまま、手早く髪の毛の乱れを直し、シャツを整え、ネクタイを締め直した。

（あ、ちよつと不機嫌になっちゃった…普段はいかにもできる大人の男って顔しているくせに、時々子供みたいな怒り方をする人だなあ）

それでもルネの意見を求めるよう、ちらつと目を向けるローランに、ルネは慎ましく微笑みながら頷き返した。

「大丈夫、どこから見ても完璧です、ムツシュ・ヴェルヌ」

それでちよつと安心したらしい、ローランは目の前のドアを開いてフロアーに出ると、とても非常階段を27階踏破したばかりとは思えない涼しげな顔をして、堂々取り先のオフィスへと向かった。

一歩下がってその後ろに忠実につき従いながらも、ルネは、心の中で苦笑混じりに呟いていた。

（ナルシストの意地って、ここまでくると馬鹿馬鹿しいのを通り越して感心するよ。そのフォローに必死で回るのも秘書の務めなんだとすれば、僕はよくやっている方だよな）

ミラが出産のために社を去ったので、今ではルネがただ1人のローラン付きの個人秘書だ。

近頃ローランは、取引先にもルネを頻繁に連れていくようになってきた。ルネにしてみれば、大好きなローランにべったりくっついていれる時間が増えた訳で、大いに歓迎すべき状況なはずだが、同時に、これまでは気付かなかった上司の意外な一面を否応もなく目の当たりにし、戸惑うこともしばしばだ。

ローランがスタイル・キープのためにジムに通うなど地道な努力をしていることは知っていたが、忙しい管理職にある彼のこと、過密なスケジュールの中でエクササイズに十分な時間を割くことは難しい。

一方で、これはガブリエルの血縁の業だろうか、美食の快楽はしっかり味わいたいのだから、仕事の合間のちよつとした時間を利用して、とにかく少しでもカロリーを消費しようとする。例えば、徒

歩圏内の移動ならばなるべく車は使わないとか、取引先のオフィスが入っている高層ビルに意地でも階段使って登ってみるとか…。

「あるいは、オフィスでも仕事の合間に可愛い秘書を捕まえて、軽いえっちで食べた分のカロリーを使っちゃうとかね…あはは、ルネつてば、何真つ赤になつてるのよ」

ランチ・タイムに社の近くまで来ていたキアラと待ち合わせ、一緒に昼食を取りながら、ルネはいつものように恋ばなに花を咲かせていた。

「あのね、僕とローランは仕事におかしなことはしてないから…ミラさんがいなくなつたつて、その辺りは、きちんとケジメつけてるんだからね」

ルネは、テーブルの上に頬杖をついて悪戯っぽく笑っているキアラを軽く睨みつけながら、唇を尖らせ反論した。

「本当に真面目な子ねえ…別に、上司と部下で恋人同士だからつて、2人とも独身だし、ゲイだつて公言もしているなら何も問題ないでしょうに…」

「別に不倫じゃなくても、公私混同、職場で上司とあからさまにべたべたするのは、僕は嫌なんだつて…大体えっちしたのだつて、パリに出てきてすぐあの人に押し倒されたのも含めて、たつたの3回ぼつちだよ、3回！これで本当に恋人同士と言いつけるのか、僕には自信ないよっ」

「分かつたから、ルネ…興奮しないで…」

つい声が大きくなっていったことに気付いたルネは、慌てて振り上げていた手を下ろし、付近のテーブルから向けられる冷たい視線を避けるよう、身を縮めた。

「それで、他に何か、私に聞かせたいようなローランの奇行つてある？」

キアラは取り繕うようにグラスの水を一口飲んで、ルネに話の続きを促した。

「奇行だなんて、失礼な言い方しないでよ。ちょっと変わつてるっ

でだけなんだから…」

そのローランの奇行をいちいち報告して、キアラと一緒に笑ったり嘆いたりしていた張本人はルネのはずだが、他人の口から彼を揶揄されるのは嫌なのだから、どうしようもない。

「そうだねえ…この間、仕事が終わった後だったんだけど、どうしてもローランを捕まえて確認しなきゃいけないことがあってね。

携帯が繋がらないものだから、きつといつものジムに行っているんだろって探しに行ったんだ」

ルネは、混み合うテーブル席を忙しく動き回るギャルソン達の動きを目で追いながら、ふつと思出し笑いをした。

「有名人も利用するような高級クラブで、かなり遅い時間まで営業しているんだけど…そこで見つけたローランってば、なんとバイクをこぎながら頭を揺らして居眠りしているんだよ」

「あらまあ、あの素敵なハンサムが…それはあまり想像したくない光景だわねえ」

ルネが入社する前の話だが、女性向けの雑誌などに載ったルネ・ロスコーの広告に、ガブリエルと共にローランもモデルとして起用されたことがあり、『フランスで最も美しい経営者達』と当時話題になったため、キアラもローランの外見のよさについては認知していた。

「まっすぐ起こしに行きたかったんだけど、そうすると、あの人の変に高いプライドを傷つけそうだし、かと言ってあのまま放置したら、バイクから転がり落ちそうで危ない…どうしたらいいんだろって真剣に悩んだよ。結局たまたま近くを通りかかったスタッフにさり気なく声をかけてもらって、あの人が完全に目を覚ましたのを見計らってから改めて近づいて行ったんだけどね。最近ローランがオーバーワーク気味なのは分かっていたけれど、ああいう緩んだ姿を外で見せるなんて、これまでは考えられなかったんだけどな。ていうか、疲れているなら、無理してジムなんかに行つてないで、とつと家に帰って寝ればいいじゃないか。いくら醜く腹が出

るのは嫌だからって、どうして、あそこまでやらないといけな
かなあ…ほんと、度を越してるんだからっ」

ルネが高ぶる気持ちを鎮めようと肩を大きく上下させた時、注文の料理がテーブルに運ばれてきた。ルネはサーモンのスパゲッティを、ダイエツト中のキアラはサラダを頼んでいた。

「でもさ、最初の頃は、あなたのローランって全方位から見
つない完璧ないい男だったのに、あなたの話を聞く限り、最近にな
って化けの皮が剥がれてきたというか、突っ込みどころが続々出て
きた印象ね。まあ、ローラン・ヴェルヌも所詮は生身の男だったと
いうことかしら。ねえ、ローランにぞっこん夢中なあなたでも、さ
すがに幻滅して、恋の熱も冷めてきたんじゃない…？」

「ううん…それが意外とそうでもないんだよね」

ちよつとゆで過ぎた感じのスパゲッティをフォークに絡めたもの
の、すぐには口に運ばないまま、ルネは言った。

「天敵に等しいミラさんがいなくなつて、傍にるのが僕だけだ
ついで気が緩むんだらうかって苛々することはあるけれど、逆に僕
だとローランは安心するのかなと思えば、嬉しいような気もしない
でもないし…たぶん、最初の頃のイメージそのままの完全無欠なロ
ーランなら、そもそも他人の助けなど必要とすることもなく、僕は
いづか無力感に捕らわれて、自分の仕事に対する熱意を失つてしま
いそうな気がする。そのくらいなら、少しくらい抜けていて、僕が
フォローできる余地がある方がいいんじゃないか…尽くしがいがある
相手の方が、どうやら僕には合ってるみたいなんだよね」

キアラは呆れたような目つきで、照れくさそうに笑いながら、
スパゲッティをフォークの先でつついているルネを見た。

「あなただって、どうやら自分から苦勞を引き受けたがる性分
みたいねえ。それとも、ローランのためだと思えば、どんなに馬鹿馬鹿
しくて面倒なことでも、苦にならないのかしらね…？」

「うん、それはあるだらうね。他の人のために、同じ苦勞はでき
ないよ。やっぱりローランじゃなきゃ、僕は駄目なんだ」

「はあ…それはそれは御馳走様」

「恋人としてならまたちょっと話は変わってくるけれど…少なくとも上司としてのローランに僕が求めるのは、大所高所に立って物事を見据え、僕達社員を牽引して欲しいということ、その点概ねあの人は満足できる上司だから、他の面で多少のあらが目について許せるんだよ」

白々とした表情のキアラの前で、堂々胸を張って上司自慢するルネだったが、ふいに、その顔が心もとなげに曇った。

「ただ、まあ…それも限度というものは確かにあるんだけれど…」

ルネは一口スパゲッティを食べたものの、やはりあまり美味しくなかったのも、残念そうに顔をしかめた。

（そうだ、きちんと仕事さえこなしてくれば、もともとローランに甘い僕は、彼が何をしても大目に見てあげようという優しい気持ちは持っている。しかし、いくらなんでも限度というものがあるよ。特にこの一週間は、僕が見てもひどいと思うくらい、ローランってば、集中力が途切れることが多い。会議とか取引先の人と会っている時には出さないけれど、ちょっと緊張が緩むとぼんやりしたり、書類に目を通しながら眠そうに目を擦っていたり…何だかとても疲れているみたいだ。おかしいな、ローランの仕事のスケジュールは僕が管理しているけれど、以前と比べて今がものすごく忙しい訳でもないのに…すると、プライベートで何か時間を取られることがあって、ちゃんと休むことができていないんだらうか？ ローランが休日にごどこ何をしているのか、僕はいまだによく知らないけれど、仕事に支障をきたすほど一体何にそんなにかかずに…）

ルネは頭に浮かんだ不愉快な考えに眉を潜め、フォークを持ち直す、あまり口に合わないスパゲッティを意地になったようにかき込んだ。

「…ごめんね、キアラ、僕ちょっと気になることがあるから、そろそろオフィスに戻るよ」

そわそわと落ちつかない様子でテーブルから立ち上がりかけるル

ネに、キアラは意味深なウインクを送った。

「ローランと喧嘩なんかしないでね」

ルネは椅子の背に手をかけたまま、はっと息を吸い込み、固まった。

「ど、どうして、そう思ったの、キアラ？」

「ふふ、あなたってば、すぐ顔に出るんだもの。それに、あなたとローランの恋とも言えない恋の経緯をずっと聞かされてきた私だからね。ああ、これからローランと一悶着やらかすつもりなんだなあって、分かるわよ」

「参ったな、もう……」

ルネは困ったように、手で頭をくしゃくしゃとかき回した。

「別に何も、ローランといきなり正面切って喧嘩を始めるつもりはないよ。ただ、最近のあの人はやっぱり様子がおかしいから、これ以上黙って放置はできないなって思ったんだ。確認すべきことはうやむやにせずきちんと確認するし、間違っていると思ったら率直に意見もする……どんなに煙たがられても、それができなきゃ、僕があの人の秘書でいる意味はないもの」

照れ隠しにふんとした口調で言い返したルネは、おやおやというような顔をするキアラに向かっておざなりに手を振ると、そのまま足早に店を出て行った。

（ローランにも言われたけれど、考えていることが顔に出るっていうのは、秘書としてはやっぱりまずいよね。自分の心は表に出さず、如才なく仕事ができるようにして、取引先などでローランの足を引っ張ることがないよう気をつけないと）

キアラに指摘されたことを気にして、ルネは信号待ちをしている間、歩道に面した店のショーウィンドウに映る自分の顔をチェックしてみた。

大丈夫。別にもう不機嫌な顔はしていない。

（さて、オフィスに戻ったら、まずローランに美味しいコーヒーを淹れてあげよう。あの人がいたら最近、外で飲むより僕が淹れたコー

ヒーの方がおいしいうつて、ランチの後には必ず頼んでくるから…その後、タイミングを見計らって思い切つて聞いてみよう。この頃随分お疲れのようですけれど、仕事を離れたプライベートで、一体何をなさっているんですって)

そんなことを思い巡らせながら、ルネはいそいそとオフィスに向かった。

「…ムツシュ・ヴェルヌ？」

ルネが秘書室に戻った時、隣接する副社長室はしんと静まり返っていた。

壁の時計を横目でちらつと見やり、もしかしたらローランはまだ帰っていないのだろうかと思いつながら、ルネは確認のため部屋のドアをノックした。

「ムツシュ・ヴェルヌ、おられませんか？」

応えはなかったが、何となく気になつたルネは、そのままそつとドアを開けてみた。

「ひっ…」

副社長室を覗きこんだ途端、目に飛び込んできた光景に、ルネは瞬間的に凍りついた。

「ローラン?!」

ルネが見たのは、愛用のデスクの黒い革張りの椅子に沈み込むように座つたまま、がっくりと仰向けにのけぞり、腕をだらりと垂らして、ぴくりとも動かないローランの姿だったのだ。

その時ルネの頭に閃いたのは、心臓発作とか過労死とかいう縁起でもないキー・ワードだ。

「□□□□□、ローラン!!!」

ルネは携えていたスケジュール帳を取り落とし、両手で顔を挟んで悲鳴をあげるや、よろめくようにローランのデスクに駆け寄つた。「ローラン、し、しっかりしてください…駄目、僕を置いて死なないで…あれ…?」

思わず涙ながらにすがりつこうとした、その手を、ルネはローラ

ンの肩にかける寸前で止めた。

もしかしたら既に死んでいるのではと疑ったローランの口から、規則正しい呼吸が洩れていることに気がついたからだ。

「寝てる…」

椅子の背もたれにだらしなくもたれかかり、頭を大きく後ろにのけぞらせ、そうなると必然的に口も開いたまま、魂を飛ばしたルネが大声をあげて走り寄っても気づきもしないで、ローラン・ヴェル又は爆睡中だった。

「全く、もう…驚かせないでくださいよお。眠いなら、ソファに横になってください。こんな紛らわしい恰好されたら、僕の方こそ、心臓が止まるかと思った」

脱力したルネは、その場についてへたり込みそうになる体をデスクに手を突いて支えた。

（それにしても、よく寝ているな。僕がこれだけ大騒ぎしても起きないなんて…）

やっと気持ちを鎮めると、ルネは改めて、熟睡しているローランの無防備な姿を見下ろした。

（あああ…こんなアングルで見ちゃったら、せつかくのハンサムが台無しですよ、ローラン…ナルシストが、他人に鼻の穴まで見せちゃ駄目でしょう）

しかし、こんな間の抜けた顔すらも、一抹の情けなさと共に無性に可愛く思っている自分がまたおかしいやら悲しいやら。ルネはぐつと奥歯を噛みしめながら、ポケットから取り出したハンカチで、ローランの口元で光っているもの拭いてやろうとした。

その時、秘書室の方から物音がし、誰かがルネを呼ばわる声が聞こえてきた。

「ルネ君、ルネ…何だ、いないのか。ううん、約束の時間には少し早いが、さて、ムッシュ・ヴェル又はいらっしやるかな…？」

ルネの心臓が、胸の中で大きく跳ねた。

（あっ）

そう言えば午後から面談の予定が一件入っていたことを思い出したルネは、引きつった顔で副社長室の入口を振り返った。

ローランの有様にすっかり動転していたため、ドアは開けっぱなしにしている。今から戻って閉じようにも、間に合わない。

「ムツシュ・ヴェルヌ、そこにおられますか？」

何も知らない男性社員の声が、まっすぐこちらに近づいてくる。

ルネは、この期に及んでもすやすやと眠り続けているローランの緩みきつた顔を見下ろし、大きく深呼吸した。

（駄目だ。こんな顔、絶対他の社員達には見せられない！）

ルネは両手でローランの顔を挟んで固定すると、えいやとばかり身を屈め、その唇に自分の唇をくっつけた。

丁度ドアの向こうに立った社員の目には、ルネの背中に隠れて、ローランの情けない顔は捉えられない。それどころか、全く意味合いの違う光景が映ることになった。

ひっそりと静まり返った昼下がりの副社長室で、ローランとその秘書が身を寄せ合い、甘い口付けを交わし合っているというようない。

社員ははっと息をのみ、何かに躓いたように立ち止った。しばらく絶句した後、彼は足音を殺して後じさりし、そのまま秘書室を抜けて、外に飛び出していった。

きつとあの社員は、自分が今見た光景を同僚達に興奮気味に吹聴しまくることだろう。

（ああ、これでもう、言い訳も取り繕いようもなく、僕はこの人の『愛人』に決定だ）

これまで、そういう浮いた噂がたたないよう、慎重に行動してきた苦労が一瞬で無に帰ってしまったルネだったが、それでも、間抜け面で居眠りこいているローランという不名誉な噂が社内で駆け廻るよりかは、まだましなような気がした。

（本当に僕は、この人には甘いんだな）

ローランの頭を抱きかかえたまま、ルネがしみじみと感慨に浸っ

ていると、いきなりその腰に人の手が触れた。

「わーっ」

びっくりして悲鳴をあげるルネの手を、また別の手が捕まえた。

「ルネ…どうした、今日はおまえらしくもなく、随分と大胆なことをするんだな」

やっと目を覚ましたらしいローランが、欠伸を噛み殺しながら、まだ少しとろんとした緑の目をルネに向けていた。

「ム、ムツシュ…」

ルネはとっさにどう応えたらいいのか分からず、口ごもった。

（確かに寝込みを襲ったみたいなた状況だけれど、別に僕は、好き好んであなたのキスを盗んだ訳じゃない）

しかし、真実を明らかにして、この格好つけのナルシストを恥じ入らせるのもまた哀れ などと、余計な心配だろうか。

「オフィスでのこういう行為は厳禁じゃなかったのか？ 別に俺は、おまえがいいと言うのなら、いつでもどこでも構わないどころか、大歓迎だが…？」

ローランは動揺するルネの体を自分の方に引き寄せ、その唇を求めて顔を近づけてきた。

（あなたね、自分の評判がたった今危機的状況にさらされていて、それを僕が救ったんですよ！ 分かってるんですか?!）

軽く切れたルネは、固めた拳をローランの頭に振り下ろした。無論、かなり手加減をして。

「やめてください！」

「あいたっ」

ローランは、前に大きくつんのめった。どうして？とでも言いたげに殴られた所を押さえつつ、ルネを振り仰いだ。

「目が覚めましたか、ムツシュ・ヴェル又？」

怒りのオーラを発散しながら腕を組んで仁王立ちしているルネに、ローランは一瞬怯んだようだ。

「ああ」

ぼそりと答えて、居心地悪そうに椅子に座り直し、指先でネクタイを整えた。

「…ムツシュ・ヴェルヌ、近頃あなた、仕事中に少々気が緩んでいませんか？」

こういふ話は、まずコーヒーを淹れてあげて、ローランが機嫌よく話を聞いてくれるモードになってから切り出すつもりだったのだが、ルネはもう黙っていられなくなった。

「別に、休憩中に仮眠を取るなどは言っている訳ではありません。若くて精力的な経営者と言ったって、人間なんだから、時には疲れがたまることもあるでしょう。けれど、ここしばらくのあなたのためみようは、度を越していますよ。今の所気づいているのは僕くらいなものだと思いますけれど、皆を率いる立場にあるあなたが、あんまりだらしない姿を部下に見せるのはどうかと思います。経営者なら、プライベートに何があるうがうまく調整して、自己管理をきっちり行なっていたかなくては」

ルネが口を酸っぱくして言い聞かせるのを、ローランは何やら物珍しそうにじっと見守っていた。そのまま、しばし黙り込んだ。

「ムツシュ、何とかおっしゃってください」

ルネが組んだ腕を苛々と指先で叩きながら追求すると、ローランはやっと、苦笑にも似た表情を口元に浮かべ、言った。

「成程、おまえがそこまで言うのなら、近頃の俺の職場での態度には見過ごせないものがあつたんだろうな。そうか…：我ながら余裕がなくなっているのは感じていたが、まだ大丈夫だろうと高をくくっていた。こういうことは、自分よりも、身近にある他人の目の方がよほど信頼できるな」

ローランはスーツのポケットから煙草を取り出して火をつけ、深々と吸いこんだ。

「そう言えば、あなたが消費する煙草の本数も日ごと増えていますよね…？」

ルネが眉を潜めて指摘すると、ローランは皮肉を込めた口調で答

えた。

「知っているか、ルネ、喫煙によって肺から吸収されたニコチンが脳に到達するのには、4秒とかからんそうだ。疲れ過ぎて反応の鈍くなった人間が緊張感を取り戻すには、手っ取り早い劇薬だな」

「そんなものに頼ると体を悪くしますよ。眠気覚ましなら、僕がコーヒーを淹れますから、煙草は控え目にしてください」

ローランはルネの心配そうな顔を見ながら少し考え込んでいたが、やがて、吸いかけの煙草を灰皿でもみ消した。

それを見てほっとしたルネは、自分が不機嫌になっていた理由も忘れて、にこっと笑った。

「ありがとうございます。すぐにコーヒーをご用意しますので、お待ちください」

ルネが慣れた手順で素早く丁寧に淹れたコーヒーをトレイに乗せて戻ってくると、ローランは、デスクの傍らにあった、本日発売の雑誌をぱらぱらとめくりながら、何やら難しい顔をしていた。ルネが今朝用意して、そこに置いたものだ。

ルネの姿を認めると、ローランは雑誌をもとあった場所に戻し、デスクの上で両手を組むようにして、彼が近づいてくるのを待ち受けた。

「どうぞ」

ルネが目の前にそっと置いたコーヒー・カップを、ローランは待ちかねていたかのようにすぐに持ち上げ、唇に運んだ。

一口飲んでほっと息をつき、目を閉じる彼は、やっぱり心身ともに疲れているように見えた。

「…ムツシュ、よろしければ肩や背中を少しマッサージでもしましょうか？」

「そこまでもしてもらうには、及ばないさ、ルネ…それに、午後から早速面談の予定が一件入っていたらどう？」

「それなら、キャンセルにしておきましたから、御心配なく」

もう遅いかもしれないが、先程飛び出していった男性社員に、余

計なこととは言うなと後で釘を刺しておこう。そんなことを考えながら、ルネはローランに向かって優しく頷き返した。

「全く、おまえは気がきくな。それとも、おまえにあれこれ気を回されるほど、俺の不調が傍から見ている明らかだったのか」

別に、面談のキャンセルはルネが気を回してのことではなかったが、ローランがそれを知る必要はない。だからルネは肯定も否定もせず、黙って微笑んでいた。

「さて」

ルネが辛抱強く待っていると、ローランはくるりと椅子を回して、彼の方に体を向けた。

「おまえも薄々察しているように、俺はここ最近、プライベートな時間に問題を抱えて、忙殺されている。おまえに何をどこまで話すべきかな、ルネ…？」

ルネの顔をまっすぐ見据えるローランは、いつもの明晰さを取り戻していて、あんまり舐めた態度を取ると深々と切り返されそうな緊張感を覚えさせた。

「確認させていただきますが、それは、ルレ・ロスコーのトップにあるあなたが、仕事に差し障りが出てもやむなしと考えるほど重要度の高い問題なんですか…？」

用心深く、しかし小さな反発を込めて、ルネは問い返す。

「棘のある言い方をするなよ、ルネ…だが、まあ、そうだな。俺の優先順位のつけ方は、いつも極めてはつきりしている。自分の職務を疎かにする気はないが、今回のケースに関しては、そっちの重要度が高いということだ」

大方予想はしていたことだが、微塵も躊躇や後ろめたさを感じさせないローランの返答を聞いて、ルネは溜息をつきそうになった。

「あなたの優先順位の中で何がというか、誰が一番上にあるのかわから、僕もよく存じあげています。つまり、あの方絡みのことなんですか、あなたがかかりつきりにならざるを得ない問題というのは…？」

そつだ、ローランを追求しなくても、少し考えてみれば分かることだ。彼が仕事も、自分の身も顧みなくなるほど、全身全霊を捧げて尽くす相手と言え、ガブリエルしか考えられない。

（全くもう、忠犬なんだから…：呆れるくらい、腹が立つくらい、悔しいくらい、ガブリエル一途なんだから）

湧き上がったほろ苦い感情を振り払うよう、ルネは軽く痛み出した頭を片手で小突いた。

「大天使の単なる気まぐれや我が俣に、あなたが一方的に振り回されている訳じゃないですよ。それじゃあ、あなただけじゃなく、僕も含めた、あなたを敬慕する部下達の立つ瀬がないです…：泣きますよ、ほんとに？」

涙の滲んだ声で訴えるルネを、ローランは穏やかな口調でなだめにかかった。

「あいつは確かに我が俣だが、俺に任せたこの会社の業務を意図的に妨害するような馬鹿な真似はしない。あれでも一応ルレ・ロスコの社長だぞ。もう少し信頼してやれ」

「一度も会ったことのない社長を、どうして信頼なんかできるんですか？」

「確かに、それもそうだな」

ルネが食ってかかると、ローランは降参したように両手を上げた。その顔は、どこか楽しげに微笑んでいる。

「どうして笑うんですか、僕は真面目に話をしているんですよ」

「ああ、うん…：分かっているさ、ルネ」

ルネが手を振り回し怒ってみせても、ローランは嬉しそうに眦を下げるだけで、その微笑の理由は明かしてくれなかった。

「もう、いいです…：時間が惜しいので、僕が分かるよう、状況の説明をお願いします」

諦めたルネが先を促すと、ローランも顔を真面目に引き締めた。

「込み入った話なので詳細を説明すると長くなるんだが…：要するにこれは、ロスコー家の中で起こった身内同士の争い…：一種のお家騒

動みたくないものだ。敵も味方も血縁同士だから、大つぴらにするには憚るものがあつたが、ちよつと前から表に出ない所では前哨戦みたいな揉め事や駆け引きが続いていた。それがいよいよなりふり構わない本格的な闘争になりつつある…そして、その中心にガブリエルがいる」

淡々と事実を並べるように語っていたローランが、ガブリエルの名前を口にする時だけ、一瞬火のように感情的になるのをルネは認めた。

「俺はあいつの影だから、全力を尽くしてあいつを助け、いざという時には盾となつて守らなければならない。これは公の立場云々を超えて、俺にとって最も重要な使命だ。仕方ないが、他の雑務は二の次ということになるな」

「影だから…そんな当たり前のように」

黙つて耳を傾けていたルネだったが、ついに、込み上げてくる、どうにもならない感情を抑えかねた。

「ど、どうして、あなたはそこまでガブリエルに尽くそうとするんですか？ 傲岸不遜で強引で、いつも他人を振り回してやりたい放題やっている、あなたは一体どこに行つたんです！ 自分から進んで他人の影に徹するなんて、全くあなたらしくない…そんなことで満足できるなんて、僕には理解できません！」

叫ぶようにぶちまけたルネの台詞に、ローランは眉を寄せた。

「どうしてなんて、おまえが俺に尋ねるのか、ルネ？ お前なら、俺の気持ちを理解できるはずだと思つがな」

「いいえ、分かりません…分かりたくもないです」

ルネは頑強に否定するが、率直に問いかけるようなローランの目をなぜかまともに見返すことができなくて、ぱつと顔を背けた。

白々とした沈黙がしばし2人の間に流れた。そして、頑なに会話を拒んでいるルネよりも、やはりローランが先に口を開いた。

「…なあ、ルネ、予め断つておくが、俺は目的のためには手段を選ばない男だから、おまえには、この先散々苦勞や迷惑をかけること

になるかもしれない。悪いが、俺に惚れた時点でそれは運命なんだから、諦める」

「ハ…ハアツ?!」

瞬間的にかつとなつたルネは、椅子に深々と身を預けたまま悪びれもせず自分の反応を窺っているローランを、勢いよく振り返つた。

「何それ、今から僕に苦勞をかける気満々のくせして、謝っているつもりなんですか?! ええ、あなたからかけられる苦勞なら、僕は大抵我慢できるつもりですとも…どうせ僕は、あなたに心底甘いですからねっ。けれど、それが全てガブリエルのためというのは、かなり引つかりますよ…ええ、大いに不満ですとも! 大体僕は、あなたには全身全霊捧げていますけれど、あなたのガブリエルに対しては、一ミリたりとも恩義も愛情も感じてないんですからねっ」
物凄い剣幕でまくしたてるルネに、ローランは軽い頭痛を覚えたかのように天を仰いで、額をそつと押さえた。

「俺に忠義なのは嬉しいが、その俺が忠誠を尽くしている、ガブリエルにも同じようにはできないのか?」

「嫌です、絶対無理無理…僕は一度に1人の人しか見えません。だから、あなた以外の人に浮気なんかできません」

眉を吊り上げ徹底抗戦の構えで言いきるルネの前に、ローランは困つたように頭をかいた。

「そういう浮気とこれはまた違うだろう…やれやれ、融通のきかん奴め…」

ローランは視線を床の上に落としたまま、しばし何事か考え込んでいたが、ふいに、思い切つたように顔を上げた。

「俺には心底甘いと言うおまえだが、どこまでなら許せるんだろうな。なあ、ルネ、もし俺がおまえを」

「ローラン…?」

ローランは何を言い出すつもりなのだろうとルネは身構えたが、その言葉を口にする前に、彼の携帯電話が鳴つた。

ローランは間が悪そうに顔をしかめると、ポケットから携帯を取り出した。その表示を確認した彼の顔が、厳しく引き締まる。

（あ、ガブリエルからの緊急コールだ。この人の反応も、ガブリエルに関する限り、全く分かりやすいなあ）

電話の相手が大天使では太刀打ちできないなど、ルネはしょんぼり肩を落とした。

「では、僕はこれで失礼します、ムツシュ・ヴェルヌ……」

「あ、ルネ、ちょっと待て」

諦めモードに入ったルネが空になったコーヒー・カップをトレイに戻して退出しようとするのを、意外なことにローランが呼びとめた。

「取りあえず、この雑誌に目を通しておけ。ロスコー家のいざこざについて分かりやすく書かれているぞ。こんなものはまだ序の口で、明日辺りからタブロイド紙がもつと散々な暴露記事をかきたてるだろうがな。きつとオフィスの方にも問い合わせや取材の申し込みの電話がかかってくるだろうから、今からおまえも覚悟しておくことだ」

「えっ……え……？」

ローランは、先程めくっていた雑誌を当惑するルネの手に押し付け、意味ありげに片目を瞑ってみせると、鳴り続ける携帯電話に出た。

「ああ、すまない、ガブリエル……大丈夫だ、こちらは今の所、何の問題もない……」

問い返そうにもローランは既にルネに背中を向けていて、彼の絶対的主との会話に集中している。

いきなりとても遠くなってしまったローランの背中に切ない眼差しを投げかけた後、ルネは大人しく副社長室を退出していった。

そして、秘書室の自分のデスクに戻るや、早速ローランから手渡された雑誌を開いて問題の記事を調べてみた。

「ああ、ローランが言ったお家騒動って、これのこと……？」

特ダネとして、まだ疑問符つきながらも、センサーシヨナルな見出しはこうだった。『

『アカデミー・グルマンディーズ主宰の地位を巡って、ロスコー家に内紛が勃発か?』

ルネは戸惑うように額にかかる柔らかなウェーブのかかった髪を指先でいらいながら、すうつと息を吸い込んだ。

(雑誌の電話取材と違って、ほんとにあるんだろうか…業務に差し支えないか、ちよつと心配だな。他の社員達にも、動揺しないように言い含めていた方がいいだろうし…) はあ、ローランじゃないけど、僕も安定剤代わりにコーヒの消費量が増えるかもしれないや)

この記事に書かれた内容からは、ルレ・ロスコーはこの内紛とやらに直接関係なさそうに思えるが、アカデミー・グルマンディーズ主宰のガブリエルは同時にこの社長でもあるのだ。

先程のローランの言葉を思い起しても、この騒ぎに、ルレ・ロスコーが無縁でいられるはずもなく、自分もじきに巻き込まれていくことをルネははっきり感じ取っていた。

愛とスーブの法則(2)

明くる日からの数日間、ローランが予告したように、あまり行儀のよくないタブロイド紙や雑誌は、名門ロスコー家で発生した身内同士の争いを面白おかしく書きたてた。

どこまでが真実なのかは、所詮三流誌の記事であり疑わしいが、それらを一通りチェックしてみることで、ルネは、この内紛とやらの経緯を大まかに理解できた。

一族を二分して対立しているのは、ロスコー家の長であるジル・ドウ・ロスコーとその孫ガブリエル、そしてジルの弟のソロモン・ドウ・ロスコーということらしい。

そもそもものきっかけは昨年、ジルがアカデミー・グルマンディーズ主宰の地位をガブリエルに譲ると発表したことだった。

天才の誉は高かったが、弱冠23歳の若者が主宰になることに強硬に反対したのがソロモン。アカデミーの副主宰の要職にあり、ジルの引退宣言の直前まで、次期主宰の呼び声が最も高かっただけに、自分が指名されなかったことに憤懣やるかたない思いを抱いたようだ。

ガブリエルが主宰になった当初、アカデミー内でも若い主宰を危ぶむ声は多く、ソロモンを立てようとする動きがあったという。

しかし、ガブリエルが新主宰として初めてオーガナイズした定例会が、アカデミー史上まれに見る大成功を収めてからは一転、彼を支持する声がソロモン派を上回った。そして実権を握ることを断念せざるを得なくなったソロモンはアカデミーを去り、彼が所有する会社や不動産が多くあり、影響力を行使できるボルドーに引きこもった。

(ボルドーがお膝元ってあたりで、このソロモンって人、何だか怪しいなと思って調べてみたんだよね。そうして、いつだったか、トラブルが発生してローランが直々に出向いて行ったホテルも、この

人との関係が深かったことが分かったんだ)

それだけでなく、ガブリエルと共にローランが大改革を行なったルレ・ロスコーにおいても、彼らが乗り込むまで幅をきかせていた役員達の多くが、ソロモン派の親族達だったということも、ルネはアシルから聞き出している。

(つまり、アカデミー・グルマンディーズだけではなく、この会社もロスコー家の権力闘争の渦中にあるってことか。その上ガブリエ本人が名目上とはいえ社長なら、そりゃ、取材の申し込みくらいあるよね)

社員達には、ローランより、これはあくまでロスコー家内でのいざこざであり、社には何の関係もないことだから、動揺せず、通常通り業務を行うよう伝達があった。実際、記者に質問を受けても、何も知らない彼らには答えようがない。

それでも、最初の記事が報道された週は、仕事にもお構いなしに雑誌や新聞の取材の申し込みの電話がかかってきて、ルネも含めた、社員達を閉口させた。

しかし、それではテレビはどうかというと、出版業界の異常な盛り上がりとは対照的にセンセーショナルな取り上げ方はほとんどされていかない。テレビでの露出も多い、今をときめくカリスマ料理評論家ならば、もっと取り上げられてもよさそうなものだ。どうやらあまり身内の恥を公にはしたくないロスコー家が、公共放送に影響力のある、血縁の政治家を通じて圧力をかけたようだった。

(何だか、雲の上の話みたいだなあ。ロスコー家って、一体どれだけ権力持っているんだろ。ローランも姓は違うけど、その親戚筋というなら、所詮庶民の僕とは住む世界の違う人なんだろうな)

たかが美食家の道楽でしかない 少なくともルネにはそうとしか思えない アカデミー・グルマンディーズの主宰の地位を巡って、裕福で、社会的な地位も名誉もある人達が、何故かくも熾烈な争いを繰り広げるのか、一般市民のルネにはどうしても理解できない。

(それに…あるタブロイド紙が特ダネとして大きく取り上げた記事

には、新主宰を快く思わない一部のアカデミー関係者が、ガブリエルを主宰の座から引きずり下ろすため、彼が初めて取り仕切った定例会の妨害工作まで行なったと書かれてあった。そのせいで当初予定されていたシェフが辞退して、定例会そのものも危うく中止になりかけた。代わりにと急遽ガブリエルが引張って来たのが、気難しいことで有名な天才シェフで、結局定例会は大成功に終わり、新主宰は拍手喝さいを浴びた訳だけど。ローランがガブリエルをやたら心配して、何かあればすぐに彼のもとに飛んでいくのは、そんなことがかつてあったせいなのかな…？)

アカデミー内部での裏切りだの、定例会の妨害工作だの、確かにマスコミが喜びそうなスキャンダルだ。最近になってローランが以前にも増してピリピリとして、忙しく立ちまわっていたのは、この特ダネに群がってくるだろうマスコミ対策も含めてのことだろう。

(でも、ローランがあんなに警戒しているのは、やっぱりガブリエル本人に何らかの危険が差し迫っているのを察知したからだろうな。これまでは水面下の争いでしかなかったものが本格的な潰し合いになりつつあるって、彼も言ってたし…さすがに、そこまでは今の所記事にはなっていないみたいだけど…)

この数日間、ローランは外でロスコー家の関係者と会っているか、パリ郊外にあるガブリエルの邸宅に詰めていることが多く、今日も社には姿を現していない。ガブリエルの片腕と世間的にも認識されている彼がここにいるとマスコミ関係者がうるさいので、不在なのはある意味ありがたいが、主のいないオフィスはとても空虚に感じられ、留守を預かるルネの気分は下降線を辿る一方だった。

「ああ、ローランがいないと仕事をやる気にもならないや。書類の整理もとつくに終わったし、昼から何をしようかな…？」

ルネは、中身を確認していた本日発売の雑誌を、デスクの傍らに積み上げている新聞や雑誌の山の上に戻し、溜息をついた。

(ローラン、あなたが今大変な時期なのは理解しますけれど、たまには電話の一本くらい下さいよ。いつ帰るかもしれないあなたを

ここで待ち続けるのは、正直僕は辛いんです)

昼休みに入る前、パソコンのメールをチェックしてローランからの新しいメッセージも届いていないことを確認すると、ルネは気分転換も兼ねたランチに出かけることにした。

(ああ、キアラに連絡して、一緒にランチを取ってもらったらよかったな。ううん、こんな気分の時に会っても、つまらない愚痴ばかり聞かせることになりそうだから、やめた方がいいよね)

同じようにランチに出かける他の社員達に混じって、ルネはエレペーターに乗り込み、一階に下りて行った。

(あれ…?)

一階フロアーに降りた所で、すぐにルネは周囲がざわめいていることに気づき、胡乱そうに足をとめた。

入口の方に視線を向けると、顔なじみの警備員が渋い表情をしてドアの前に立つており、何人かのルレ・ロスコーの社員達と一緒にガラス越しに外の様子を窺っている。

「何かあったんですか?」

近くにアシルの姿が見えたので、ルネは素早く近づいて行き、声をかけてみた。

「ああ、ルネ君」

アシルはちよつと困ったような曖昧な笑顔で、ルネを振り返った。「外に3人ほど、性質の悪いフリーの記者が待ち伏せしているんだ。ああいうのが所謂パパラッチって呼ばれる連中なんだろうねえ。外に出てきたうちの社員を捕まえては、社内の様子を聞き出そうとしたり、拳銃社長のガブリエルはここにいるんだろう、隠したって無駄だと言いがかりのようなことを言ったりするものだから、特に女の子達が恐がつて、外に出られないんだよ」

「何ですか、それ…!」

理不尽なことの大嫌いなルネは、たちまち柳眉を逆立てた。

「社長はずっと社に姿も見せていない、僕なんか一度も会ったことすらないくらいなのに、全く言いがかりも甚だしい! それに例え

社長がここにいらしたとしても、無礼なチンピラ記者に取材なんかさせる訳がないでしょう。アシルさん、あんなヤクザ紛いの連中をこのまま野放しにしていいますか、あなただって一応幹部の1人なんでしょう？ ムツシュ・ヴェルヌの指示を仰ぐまでもありません。社員を脅すような真似をして、これは立派な営業妨害ですよ。警察に通報して、即刻排除してもらいましょう」

興奮気味のルネがうっかり吐いた暴言には気づいているのかいな
いのか、『一応』幹部の若いアシルは温和な顔を曇らせながら、溜息混じりに答えた。

「警察を呼んだくらいでは懲りないと思うよ、ああいう連中は…それに、ガブリエルがここにいるという誤情報が、どこから流れてパパラッチ達の間を広まったようなんだ。ほら、例の記事が出て以来、ガブリエルはテレビからも姿を消して全く所在不明になっているから、取材規定もへったくれもない三流誌に記事になりそうなネタや写真を売り込もうとして、ああいう手合いの動きが活発になっているんだよ。ロスコー家の権力も、パパラッチにまでは及ばないからねえ」

「全く…一体どこの誰が、あんな野良犬達が喜んで集まりそうな間違った情報を」

「それがねえ…誤解を受けても、まあ、仕方がないかなあという気もしないでもないんだよね、その情報に関しては…」

「は？」

怪訝そうに瞬きするルネに、アシルは一瞬逡巡した後、こそつと打ち明けた。

「実はね、さつき僕は表に出て、カメラを持っているパパラッチの1人と話をしてみたんだ。そうしたら彼、今朝この玄関先で撮ったという画像を見せてくれてね。それが、ルネ君、君の姿だったんだよ」

「へっ、僕？」

「僕達ルレ・ロスコーの社員達はもうすっかり君の存在に馴染んで

しまつて、今では、君と社内でお会つても最初の頃のように動揺することはなくなつた。僕も毎日君と顔を合わせているものだから、うっかり忘れそうになつていたんだけど、君の姿形は、事情を知らない人間ならばまず騙されるくらいムツシュ・ロスコーに瓜二つなんだよ。つまり、あそこにいる連中は入社している君を偶然見かけて、ああ、今ガブリエルは社内にいるんだと確信してしまつたわけだ」

ルネはぼかんと口を開けてしばし固まつた後、情けない声で反論した。

「そんな…そりや、遠目では分かりづらいかもしれないですけど、身なりからして、僕はそんなに高級なものを着ている訳じゃないですし、大体ガブリエルが独りきりで地下鉄を乗り継ぎ出社してくるなんて、変じゃないですか！」

「そう思つただけだねえ…外の連中には、口で説明しても分からないみたいだよ？」

アシルは優しい顔立ちに人当たりのいい微笑をうかべて、どこか試すような口ぶりで言いながら、ルネをじいつと眺めた。

「ね、ルネ君、どうしようか？」

ルネはきゅつと唇を引き結んだ。ローランが自ら抜擢しただけあって、この人も、おっとりとして見えるがただの昼行燈ではなさそうだ。

「…分かりました。行つてきます」

ふつと肩で1つ息をついて、ルネは正面玄関の方に向き直つた。

この時ばかりは、自分をこんな姿に変えてしまつたローランを締め殺してやりたいくらいに恨めしく思った。

「あまり無茶しちやだめだよ、ルネ君。君の社員証でも見せて納得してもらつて、丁寧にお願いしたいからいいからね」

にこやかに手をひらひらさせるアシルに見送られながら、ルネは大腿で玄関に近づいた。そうして、心配そうな警備員や社員達の視線を浴びながら、ドアを大きく開いた。

「お、本当に出てきたぞ」

「大天使だ、間違いない」

許可も求めずにいきなりカメラを構える男に、すぐさまルネは切れた。もともと虫の居所は極めて悪かったのだ。

まっすぐ男達に歩み寄ったルネは、男の構えるカメラのレンズを片手で押し返し、凄みを含んだ声で言い放った。

「お生憎さま！ 僕は、あなた達が探しているガブリエルとは全くの別人ですよ。ほら、その目をよく見開いて、ごらんなさい。鼻の形が微妙に違うでしょ、髪だって金髪に染めてるけど、もとは黒髪なのは根元を見れば分かるでしょう？」

青く光る両目を冷たく細めてじりじりと肉薄するルネに、男達は怯んだように後退りした。

「僕はルネ・トリユフォー、ローラン・ヴェルヌの秘書です。あなた方が探しているムツシユ・ロスコーはここにはおられません。この大騒ぎの中、大天使がわざわざルレ・ロスコーを訪問するはずがないでしょう。分かったなら、どうぞお引き取りいただけますか？ 僕も今からランチに出かける所なので、いつまでもあなた方の相手なんかしたくないんです」

まだ疑わしげな男達は、ルネが無造作に突き出した社員証をためつすがめつ眺め、それから、苛々と足を踏み鳴らして待っているルネの姿を無遠慮に見つめた。

「…おかしいな、ガブリエルがパリに向かったって情報は間違いないさそうだったのに…」

「でも、確かにこいつは、ガブリエルじゃないみたいだぞ。なんつか、物凄く可愛いけど、貴族の気品みたいなはないじゃん」

男達がひそひそと囁き交わす声を聞いて、ルネはかちんときた。

「き、気品がなくて、悪かったな！ さあ、分かったならさっさと帰れ、そこにいられると邪魔なんだ、この野良犬ども！」

ルネは顔を真っ赤にし、手を振り回して怒ったが、抗議を受けるのは慣れているからか、男達はにやにやするばかりだ。

ふいに、その内の1人がルネに向かってカメラを構え、素早くシャッターを切った。

「な、何するんですか!」

「せつかくこんな所で朝っぱらから張り込んでたんだ。ガブリエルの代わりに、せめてあなたの写真をもらっておくぜ」

「僕の写真なんか撮ったって、意味はないでしょう…一体、何に使うつもりなんですか?」

当てが外れたことに対する腹いせかと呆れながら問いただすルネに、カメラの男は意味ありげな嫌な目つきをして、言った。

「なあ、あんた…大方、ローラン・ヴェルヌの愛人かなんかだろう? ガブリエルをターゲットに取材しようとするといつも出ばってきて邪魔しやがる、あの切れ者のおかげで、こっちは思うような取材ができず悔しい思いをしてるんだ。ふん、これもヴェルヌらしいと言っべきかな…秘書にするのも大天使にそっくりな男だなんて、主人に忠義なのを通り越して、ほとんど病気だぜ。ううん、これはこれで書きようによつては面白い記事になるかしれんなあ」

それを聞いた途端、ルネは体を硬直させた。「愛人」と揶揄されたのも恥ずかしかつたが、それより何より、こんな下劣な奴らがローランを嘲笑うことが許せなかつたのだ。

(駄目だ、もう我慢できない…!)

ルネの体がふいに沈み、カメラを構えた男の懐にすつと吸いこまれた。

次の瞬間、鋭く空を切った手刀が、男のカメラを高々と弾き飛ばしていた。

「あっ?!」

ルネの動きがあまりに速かつたため、男達には、何が起こつたのか理解できなかつたようだ。

ぼかんとつた彼らが見たものは、落ちてくるカメラをうまくキヤッチするルネの姿だった。

「パパラッチでも、仕事道具となれば、さすがにいいカメラを使っ

てますね。これ、高かったでしょう？ 壊されたら、さぞ困るでしょうねえ」

天使のように軽やかに言い放つルネに、カメラを奪われた男はさっと青ざめた。

「おい、やめる！ ついこの間買ったばかりのカメラなんだぞ」

「ああ、何とかに真珠って奴ですね。あなたも記者のはしくれなら、せつかくの高性能のカメラを下らないゴシップのためにではなく、もつとまともな記事を作るために使ったらどうです？」

新品同然のカメラを本当に壊されるのではと泣きそうな顔をする男に向かって、ルネは片目を瞑って意地悪く笑った。そして、メモリーを素早く抜き取るや、カメラ本体は男の胸に素っ気なく突き返した。

男は慌てて、彼の手から大事なカメラを奪い返した。

「迷惑料として、中のメモリーだけいただいております。僕の肖像権を勝手に侵害したことは許せませんが、このまま大人しく帰ってくれたなら、僕もこれ以上あなた方をどうこうするつもりはありません」

ルネのつけつけとした態度に、他の2人のパパラッチが逆上した。

「こ、この野郎っ！」

怒りのあまり顔を真っ赤にした男達が突っ込んでくるのを、横目で確認しながら、ルネは滑らかに体を移動させた。

「わあ、危ないっ」

のんびりとした口調で言いながら、ルネは初めての1人との衝突をかわし、もう1人が繰り出してきた拳も危うい所でよけた。

「うおっ?!」

ルネが逃げたことで体のバランスを崩したらしい、最初の男はがくんと前につんのめって倒れ込み、もう1人も足も滑らせて石畳の上で転がった。

「ああ、危ない、危ない。気をつけてくださいよ、勝手に転んで怪我をされても迷惑ですからね」

男達は、一体何が起こったのか、どうして自分達が地面に倒れているのか、訳が分からないといったように呆然としている。

オフィス・ビルの玄関から怖々様子を窺っている社員達の目にも、単に間抜けな男達が勝手につまづいて転んだだけとしか映っていなかっただろう。

しかし、実際はルネが、突っ込んでくる男達の勢いを利用して、彼らが自分から転倒したかに見せかけたのだ。柔道というより、これも多少心得のある合気道の技に近かった。

「さあ、別に怪我なんかどこにもしていないんだから、いつまでもそんな所に寝っ転がってないで、さっさと帰ってくれませんか？さもないと、今度はもっと痛い目を見ることになるかもしれませんですよ？」

やんわりとした口調に棘を潜ませて脅すルネを、男達は不安そうに振り仰いだ。自分達に何が起こったのか、いまだによく分からなかったが、これ以上ルネを怒らせるのはまずいということは直感したようだ。

「お、おい、帰るぞ」

カメラを庇うようにして後ろの方で立ちつくしている男に声をかけ、地面からよろよろと起き上がると、パラッチ達は捨て台詞も残さず、すごすごとルレ・ロスコーの玄関先から退散していった。

「ルネ君！」

「大丈夫か、ルネ！」

たちまち、手に汗握ってことの成行きを見守っていた社員達が外に飛び出してきた、ルネの周りを取り囲んだ。

「あんな柄の悪そうな記者を相手にするなんて、可愛い顔に似合わない、勇気あるのねえ」

「殴りかかれそうになっただけ、本当に怪我はしてないのかい？」

興奮気味に声をかけてくる社員達に、ルネはいささか閉口しながら、人垣の向こうで穏やかな笑顔を浮かべて頷いているアシルに、困っ

たような視線を投げかけた。

「ええつと、僕は本当に大丈夫ですから、皆さん、どうかご心配なく。さあ、邪魔なパパラッチはいなくなっただんですから、早くランチを取りに行きましょう。ああ、僕も、あの人達と言い争ったら、お腹すいちゃった！」

さつと腕時計を確認したルネは、まだ物言いたげな社員達をかき分けて人垣の外に出ると、これ以上引き留められる前にはつと駈け出した。

「…ねえ、シユアン、どう思いますか、今の？」

大通りの方に向かって慌てて駈け出していくルネを見送りながら、ひっそりと囁く者があった。

騒ぎのあったルレ・ロスコーのイントランスを眺められる、道路脇に駐車していた黒い車の中でのことだ。

「先程パパラッチ達が転倒したことをおっしゃっているなら、あれは、あの秘書が仕掛けたことですよ。近くで見た訳ではないのではありませんが、おそらく日本の合気道…それも、かなりの達人のようですね」

運転席に座っていた若者が、後ろの座席を振り返りながら、答えた。

「そうですね。ローランが自分で引つ張ってきた人ですから、秘書としてももちろん有能なんでしょうが…それだけではないようですね」

ふふつと楽しげに笑う声を聞きながら、運転手は控え目に尋ねた。「それで、これからどうなさいますか？ あの厄介なパパラッチ達は取りあえず退散したようですけれど、またここに戻ってこないとも限らないですし、あの秘書はランチを取りに出かけて行ってしまったようですよし…？」

「そうですね」

どこか他人事めいた、それでいてこの状況を楽しんでいるかのような無邪気な声で、後部座席にゆったりと身を預けていた青年は言った。

「それでは、ローランの秘書が戻ってくるまで、しばらくオフィスで待たせてもらいましょう。どうも、この車は乗り慣れない上に狭くて窮屈ですから、長い間じっと座っていると疲れます」

「いつものリムジンじゃ目立ち過ぎますから、それは我慢していただかないと……て、駄目ですよ、オフィスの中で待つなんて。もしさつきの記者達が戻ってきて見つかったら、またしても一悶着起きますよ」

「大丈夫ですって、あの秘書が脅しつけてくれたおかげで、当分の辺りは平和になるでしょうからね」

運転席の若者がとめる間もなく、その人は自らドアを開いて、ふわりと車外に降り立った。慌てて運転席から出てくる若者に向かって、悪戯っぽく微笑んで見せながら、付け加えた。

「あなたは外で待っていてください、シユアン。私1人で行って、久しぶりに訪れる社内の様子を確かめてみたいんです」

何か言いたげに唇を動かす若者の口元に指先を突きつけてそつと黙らせると、その人はくりと背中を向けて、折しもそこに集っていた他の社員達もそれぞれ食事を取りに出かけていくオフィスへと優雅な足取りで歩いていった。

そして、約1時間後。

不機嫌そうな面持ちのルネが、秘書室に戻ってきた。

彼は、外で買ってきたチョコレートのパッケージをデスクに無造作に放り投げ、早速メールをチェックした。しかし、ずっと待っているローランからのメッセージは未だに届いていない。

「全く、どこで何をしているのやら……ローラン、あなたが宣言した通り、あなたのおかげで僕はパパラッチどもにガブリエルに間違えられて、大迷惑を被ったんですよ」

ランチの間中、そのことを考えているうちに、ルネは次第に本気で腹が立ってきたのだ。

（そうだ、ガブリエルがスキャンダルを起こしたって、僕個人は何の関係もないはずなのに、どうしてあんな嫌な連中に付きまとわれたり、絡まれたりしなきゃならないんだ！ あなたのためなら、僕はどんな苦勞をしてもきつと許してしまうのだからうけれど、どうして、あなたの好きな人のために、この僕が……）

いらいらと爪を噛みながら、しばしパソコンの画面を睨みつけていたルネだったが、ついに我慢しきれなくなつたように携帯電話を取り出し、ローランの緊急用の携帯番号をかけてみた。

しかし、それでもローランが応対に出ることはなく、留守録の無機質な自動音声か、余計にルネの神経を逆なでするばかりだった。

「ムツシュ・ヴェルヌ、僕です。ルネです。電話下さい」

地の底から響くようなどんよりと暗い声で短いメッセージを残し、ルネは携帯を切った。

「あああつ、もう、本当に腹が立つっ！」

苛々をぶつける相手もなく憤懣やるかたないルネは、両手で激しく頭をかきむしると、いきなり隣接する副社長室に向かって突進した。

「ローランの馬鹿！」

怒りを爆発させながら、ルネは副社長室のドアを蹴破った。丈夫な樫材でできた重厚な扉だからこそ壊れはしなかったが、作りつけの甘い薄っぺらなドアだったら、今の一撃で蝶番ごと吹っ飛んでいただろう。

「一体、あなたは何なんなんだっ！ 僕があなたに惚れているのいいことに、当たり前のように迷惑のかけ放題！ ガブリエルのことなら心配して細かく気を使うくせに、あなたを心配して待ってい

る僕には電話の一本もくれないで…どこをほつつき歩いているんだ、いい加減にしろ！」

もちろんローラン本人は今ここにいないが、まるで彼が座っているかのように、ルネは黒を基調にしたどっしりとしたデスクに歩み寄り、その上にばんと両手を突いた。

「僕はあなたを愛しているけれど、あなたの言うことなら何でも従う、あなたが戻ってくるのをいつまでも忠実に待ち続けているなんて思わないでください。僕のことなんかきつと綺麗に忘れ去って、他の人のために今も必死で働いている、あなたの不在にいつまでも耐えられるほど、僕は忍耐強くもお人よしでもない。あんまり僕の気持ちをないがしろにして、いつまでも放置し続けたら、さすがにあなたに対する愛情も冷めてしまいますよ、ローラン。そうなるから再び僕の心を取り戻そうとしたって、もう遅いんですからねっ」

頭にかつと血が上るがまま、この数日間で胸に溜まりに溜まった嫌な気持ちを吐き出したルネだったが、言葉にした途端、ひどい虚しさに駆られてがくりと肩を落とした。

（ああ、何をやっているんだろう、僕…こんなことをしたって、何の意味もないのに）

自分の今の有様がひどく滑稽に思われて、くつと喉の奥で苦い笑いを漏らしたルネの耳に、その時、まるで今の彼の心情を読み取ったかのような声が聞こえた。

「…そういうことは、あの男に直接叩きつけてやらなければ、何の意味もないでしょう。あなたが言いたいことをいつも胸に秘めたまま我慢していると、そこまでは許してもらえないのだと判断して、ローランはいつまでも図に乗り続けますよ？」

心臓をわしづかみにされたようなショックと共に、ルネは声のした方を勢いよく振り返った。

「恋人とスープは待たせてはいけない、さもないと冷たくなる…確かそんなようなことわざがありましたね」

来客用の幅の広いソファの上だ。

そこに横になっていた何者かが、ルネに向かって語りかけ、それから、両手を上にあげてうーんと伸びをした。

「丁度一時間くらいですね…いい気持ちで眠っていましたが、あなたの怒鳴り声ではつきり目が覚めましたよ」

ルネが呆然と見守る中、ソファの背もたれに捕まって、その人は上体を起こした。柔らかなウェーブのかかった金髪が、ほっそりとした白い指先によってかき上げられ、ふわりと肩に落ちかかる。

「あ、あなた…は…」

ルネは喉をぐくりと鳴らした。まさかという思いを胸に恐る恐るソファに近づき、座りなおして服を整えている金髪の青年の前に回り込んだ。

「あのもしかして、あなたは…？」

ルネの呼びかけに、その人は顔を上げた。蒼穹を思わせる、澄みきった青い瞳が、ルネの戸惑い顔を中心に映してきらりと輝いた。

「はい、お察しのとおり、私です。ガブリエル・ドウ・ロスコー、この社長ですよ」

まるで、ルネとこうして出会えたことが心から嬉しくて仕方がないかのように、大天使は美しくも無邪気な微笑みを、ルネによく似た、しかしよく見れば全く違う、神々しいばかりの美貌に浮かべて、言った。

愛とスープレの法則(3)

(この人が『大天使』ことガブリエル・ドウ・ロスコー…アカデミー・グルマンディーズの主宰であり、このこの社長、そして、ローランの最愛の人)

ずっとその存在を意識してきたガブリエルと初めて直接真見えたルネは、混乱と衝撃のあまり、しばし石と化したかのように固まっていた。

(僕にそっくりだと聞いていたけれど…嘘だ、ちつとも似ていない。この人に比べたら、少しくらい綺麗だと言われたって、僕なんかあまりにも平凡でつまらなく見えてくるはずだ)

確かに顔の造作は一部を除いてよく似ているのだろうが、滑らかなクリームのような肌といい、淡い薔薇色のふっくらとした唇も、根元から混じりけのない金色に輝いている髪も、ここまで綺麗な生き物が存在するなんて奇跡のような、ほとんど人間離れた美しさだ。

(こんな顔を間近でしょっちゅう見てきたわけだから、自然とローランの目も肥えているんだろうな。ああ、今更だけど、僕、あの人を振り返らせる自信なんかなくなってきた)

ガブリエルは、話で聞く限り、ルネより10年上のはずだが、あどけないと言っているほど無邪気な微笑みを浮かべた顔は少年のようにも見えたし、同時に実年齢を遥かに超越した老成した雰囲気もまとっていた。

(実は百年や二百年生きていたとしても少しも不思議でないような…確かに『大天使』と渾名されるのも頷ける。こんな人の身代りになんか、この僕がなれるはずがない…あれ…? おかしいな、それなら、どうしてローランは、わざわざ僕に髪の色まで変えさせて、ガブリエルを真似た恰好なんかさせたんだろ…?)

ふいに湧きあがった疑問をルネが斟酌しようとしていると、彼と

のにらめっこに飽きたのだろう、ガブリエルが小さな欠伸をした。そして、おもむろに手を伸ばしてきて、ルネのころっとした鼻を白い指先でつまんだ。

「可愛らしい鼻ですね」

にっこり笑う天使に鼻をつままれたまま、ルネは目をぐるっと回した。

「ハ…ハアツ…?!?!」

素っ頓狂な声をあげて、ルネはガブリエルの手を振り払いざま、後ろに飛びのいた。

「ななな、何をするんですか?!」

真っ赤になつて鼻を手で押さえ、動揺のあまり震える声で訴えるルネを、ガブリエルはつまらなそうに唇を尖らせ、見返した。

「本気で可愛いと思ったから、つい触ってみたくなっただんですよ。怒ることはないでしょう、私は褒めているんです」

「褒めてって…初対面の人にいきなりあんな突拍子もないことされたら、誰だつてびっくりしますよ」

ガブリエルは悪びれもせず、おっとり首を傾げ、言った。

「ああ、では、あなたは別に怒っている訳ではないんですね。それを聞いて安心しましたよ。ローランのお気に入りの秘書に、出会いがしらから嫌われたくはないですからね」

ルネは何やら毒気を抜かれた気分で、恋敵であるはずの人が砂糖菓子のような甘い笑みを浮かべるのを見守った。

「…失礼しました、ムツシュ・ロスコー。まさかあなたが今日突然社にお越しになるとは夢にも思っていなかったものですから 申し遅れましたが、僕はルネ・トリユフォー…ムツシュ・ヴェルヌの秘書です」

軽い頭痛とめまいを覚えながらも、ルネは姿勢を正して、ガブリエルに丁寧な挨拶をした。

「ふふ、言わずもがな気もしますがね。あなたのことはローランからよく聞いているので、何だか初めて会った気がしませんよ」

ガブリエルの台詞に胸がざわめくのを覚えたが、ルネは問い返したくなる衝動をぐつと堪えた。

「さつきはあなたを驚かせてしまって、すみませんでしたね、ルネ。最初は奥の社長室に行ってみたのですが、久しぶりに中を覗いてみたら、私には身に覚えのないガラクタが色々置かれていて物置みたいなことになっていたので、仕方なくここで待たせてもらってました」

ルネは、額が薄っすらと汗ばんでくるのを覚えた。

「あまり社の業務には関係なさそうな、健康器具みたいなものもありましたねえ…あれはたぶん、ローランが通販番組か何かで見かけて衝動買いましたものでしょう。彼の家にも似たようなものが転がっていましたが、軽い気持ちで取り寄せてもいざ使ってみると気に入らなくて、すぐ放置ということになるんですよ。これ以上ガラクタを増やしても邪魔になるだけだから、よく考えてから買えと言いつけさせるんですがね」

「す…すみません、僕がいけないんです。あんなものを副社長室に置くとは目障りだし邪魔になるだけから、独断で社長室に片付けてしまいました」

恐縮するルネに向かって、ガブリエルは鷹揚に頷いて見せた。

「別に構わないですよ。あんな広い部屋を遊ばせるのも、確かにもつたいないですからね」

「そ、そう言えば、他の社員達は一体何をしていたんでしょう。社長を独りきりでお待たせして、コーヒーの一つもお出しせずに…？」
「今回の訪問は極秘のものでですから、あえて誰にも知らせなかったんです。社員達が騒ぎ立てて、もしも外で張り込んでいるマスコミ関係者に知られたら、うるさいでしょう？ だから私も、大げさなことは抜きにして、正面玄関から普通に目立たぬよう入ってきたんですよ」

「普通に、目立たぬよう…あなたが、ですか…？」

ルネは怪しむような顔をして、思わず問い返した。

「ふふ、実際、社内ですれ違った社員達は誰も、私が何者なのか気付かなかったようですよ？　あなたのおかげですね、ルネ…彼らにとつて、今ここにいるのは、ガブリエルによく似た姿のルネ・トリユフォーだという先入観が強烈にあるものだから、本物のガブリエルが目の前を通り過ぎても気付かなかったんです。そんな訳で、誰にも不審に思われることなく、私はここまで辿りつくことができませんでした」

顔を引きつらせるルネに向かって、ガブリエルは悪戯っぽく片目を瞑って、付け加えた。

「ああ、途中社員に呼び止められて、後で会議室にコーヒーを持ってきてくれないかと頼まりましたが、私は自分でコーヒーを淹れたことなどないので、それは無視しましたよ。あしからず」

「うわあ、申し訳ありませんっ。だ、誰だ、社長を捕まえてコーヒーを淹れるだなんて失礼な頼みごとをしたのは」

「別に謝る必要はないですよ、ルネ。あなたが私を見誤った訳ではないでしょうに…それに、私自身、この状況を楽しんでもいます。何しろ、最近私の身边では皆びりびりしていて、常に誰かに見守られ、独りきりでほっとくつろぐこともできなかつたものですから、ここでしばらくあなたのふりをしながらのんびりできたことは幸運でした。ああ、でも」

ガブリエルはふいに思いついたかのように、軽く両手を打ち鳴らした。

「ね、ルネ、お願いがあるんですが、聞いてもらえますか？」

「は…僕にできることであれば善処しますが、何でしょう…？」

「コーヒーを一杯もらえませんか？　あなたの淹れたコーヒーは格別に美味しいとローランが褒めていたものですから、是非一度飲んでみたいと思っていたんです」

「は…あ…」

ローランはガブリエル相手に、ルネのコーヒーは美味しいと自慢していたのか。何となくすぐつたいような気分になりながら、ル

ネは指先で頬のあたりを引っ掻いた。

「ムツシュ・ヴェルヌのコーヒーの好みなら心得ていますけれど…普通にコーヒー・メーカーで作ったものですから、アカデミー・グلمانディーズ主宰の口にあうものか、保証はできませんよ…?」
「構いません」

ガブリエルは膝の上で両手をピラミッドのような形で組み合わせながら、謎めいたきらめきを放つ青い瞳をルネに向け、ゆるゆると瞼を下げていった。

（それにしても、ローランはつきりガブリエルの傍についているものかと思っていたけれど、今日は違ったんだらうか…? ローランがいたら、大切なあの人に単独行動なんかさせるはずがない。実際、あの柄の悪いパラッチ達とも危ういところでニアミスだったわけだし…今ガブリエルがここにいることをローランが知っているかも、怪しいな。一応知らせておくべきだろうか…?）

コーヒーを用意する間、ルネはデスクの上のパソコンと電話をちらちら見やりながら考えていたが、ローランに知らせるのは後回しにして、取りあえずガブリエルの相手をすることにした。

「お待たせしました」

ルネは、いつもの手順で淹れたコーヒーをガブリエルの前に置き、彼がそれを手に取って口元に運ぶのを見守った。

「オフィスで出すものにしては、なかなかいい豆を使っていますね。鮮度も申し分ないし、ブレンドや焙煎の度合いは、まさにローランの好み通り…これなら、彼が気に入るはずですよ。ここまで細やかな気遣いができるなんて、ローランはいい秘書を持ちましたね」

「恐れ入ります」

アカデミー・グلمانディーズの大天使に褒められて、ルネは嬉しそくに綻びそうになる唇をきゅっと引き締め、慎ましく目を伏せた。

「ところで、ムツシュ・ロスコー…あなたが今日こちらにおいでになることを、ムツシュ・ヴェルヌは御存知なのでしょうか？」

後でローランに報告することも考えて、ルネは用心深く問いかけた。

「たぶん知らないと思いますよ。別にローランにまで内緒にするつもりはないんですが、うっかり話すと自分も付いてくると言い出しそうですし、ただでさえ私の代わりに表に立って、今回のスキャンダルの火消しに回って忙しい、彼の仕事をこれ以上増やしたくはないですからね」

成程、ローランはガブリエルの今回の行動を承知している訳ではない。社員に知らせることもなく、不意打ちのようにここを訪問したのは、ガブリエルの個人的な用件が何かあつてのことか。

「あの…この社長であるムツシュ・ロスコーにこんなことをお尋ねするのは不適切かもしれませんが、よりによって今この時期に、あなたがわざわざ極秘で社を訪問されたのは、一体どのような理由からなのでしょうか？」

ルネの生真面目な顔に含みのある眼差しを向けながら、ガブリエルは至ってシンプルに言った。

「ほとんど名のみ社長の私ですから、別に仕事からみの理由ではありませんよ。私は今日、あなたに会うためにここに来たんです、ルネ」

「え、僕…？」

「ローランの自慢の秘書と一度直接会って、話をしてみたくなくなってます。何しろ、あの人があんなふうに他人のことを褒めるのは珍しいものですから」

ルネはぼかんと口を開けたまま、しばし絶句した。

「ムツシュ・ヴェル又は、そんなにしょっちゅう、あなたに僕のことを話していたということですか…？」

「ええ、それはもう…特定の恋人のいない私に対する当てつけかと思つくらい、大変なのろけっぷりですよ。そこで、ルネ・トリュフォーとはどんな人物なのか、どうしても知りたくなった。本当にローランが語るような素晴らしい人なのか、この目で確かめようと思

「つたんです」

ルネは何だかもう色々信じられなくて、混乱を鎮めようと額に手を置いた。コーヒーが美味しいというくらいの自慢なら聞き流してもよかったが、ローランとガブリエルが自分をネタに楽しげに語らっている図など想像してしまっただけは、彼が冷静でいられるはずがない。

「ムツシュ・ロスコー、ロ、ローランは…教えてください、あの人は僕のことを一体どんなふうにあなたに話しているんですか あ、失礼…」

うつかり素に戻ってガブリエルを鋭く追求しかけたルネは、ぱつと顔を赤らめ、俯いた。

「別に隠すことはないですよ、ルネ。あなたがローランを愛していることは、先程のあなたの絶叫を聞くまでもなく、私もよく知っています。あなたの方の間であったことは、おそらくほぼ百パーセント、私には筒抜けだと思ってもらっていいくらいですから」

「え…う…う…まさか…？」

ルネが目を白黒させながらガブリエルを見返すと、彼はいかにも当然というかのような平静さで深々と頷いた。

「つ…筒抜けって…僕にとっては誰より一番あなたには知られたくないプライバシーを…どうして、あの人は軽々と話すんだ…信じられないっ…!!」

込み上げてくる羞恥心と怒りに身悶えして、ルネが頭を抱えて低く呻くのに、ガブリエルはしまったというような素振りでも口元を押さえた。

「ああ、あなたにしてみたら、これは恥ずかしいことでしたか。気がつかなくてすみません、ルネ…私とローランの間に基本的に秘密は存在しないので、それがお互いの恋愛に関することでも、ついついの癖で右から左へと情報が伝達されてしまうんです。それが原因で恋人が離れていったことも今までないでもないんですが、こればかりは昔からの習慣なので、なかなか改められないですよね」

そよ風のような軽やかさで言い放つガブリエルに、真面目なルネは、相手が社長だということも忘れて本気で切れた。

「習慣だから改められないって、それで終わりですませるようなことですか！ その習慣が非常識だということくらい、あなた方だつて立派な大人なんだから分かるでしょう！ 変ですよ…熱々の恋人同士だつて長年連れ添った夫婦だつて、そこまで仲良くできるものじゃありません。そう言えば、ミラさんもあなた方は一心同体だと評していた。ローランは、自分をあなたの影だと躊躇いもなく言いきるし…一体、あなた方はどういう関係なのか、僕は常々頭を悩ませていたんです。そうだ、この際だから、あなたにも聞かせてもらいますよ、ムツシュ・ロスコー。あなたにとって、ローランは一体何なんです？」

真つ向から投げ込まれた直球の質問に、ガブリエルは悩ましげに眉を寄せて考え込んだ。

「私にとつてのローラン？ さあ、何なんでしょうね、うーん…あえて言うなら、愛犬…？」

「うわあ…マジ…？」

ガブリエルの飼いたい犬みたいだとローランが示す忠誠ぶりを常々冷たい目で見ていたルネは、たちまち頭を抱えてうずくまった。

「あ、嘘です、冗談です。すみません、あなたが、ローランが絡むことだとあんまりむきになるものですから、ついからかいたくなつたんです」

何なの、この人？ 真つ赤な顔をして咳込みながら、涙目でルネが見上げると、ソファから立ち上がったガブリエルが、心底すまなそうに彼を覗きこんでいた。

「あなたは、本当にローランのことが好きなんですよえ、ルネ」

ガブリエルは、複雑な思いを噛みしめているルネの手を取り、自分の座っているソファの向かいに座らせた。

「あなたは、私とローランの関係を知りたいたいですよね？」

打って変わって真摯で誠実な態度で切り出すガブリエルを前に、

ルネは思わず姿勢を正した。

「は、はい…あなた方が親戚関係にあることや、お母さんを亡くしたローランが、ロスコー家であなたと兄弟同然に育てられたことなら、僕も知ってはいますけれど…」

「その通り、私達は、幼い頃からずっと一緒に生きてきました。ローランの母が亡くなった直後、彼の父親はと言えば、子育てには興味のない親権失格者で、早々に別の女性と暮らし始めてしまい、事実上遺棄された彼を引き取って育てようとしたのが私の母のアンジエリク。ローランの母とは親友同士でした。しかし、彼女も2年後に他界、外交官である私の父の赴任先が政情不安定な国だったこともあり、その後は祖父の庇護下に私達2人は置かれることになったんです」

ローランの性格に若干歪みがあるのはその不幸な生い立ちのせいだろうかとかねてから思っていたルネは、彼と一緒に育ってきたガブリエルの語る話にすぐに引き込まれていった。

「ローランには年の離れた姉が1人いますが、そんな育ち方をしたので、彼にとって肉親は縁の薄い存在です。私も、他に兄弟はなく、父親とも長く離れて暮らしていたので、一番身近にいる肉親と言えば、やはりローランでした。あなたは、おそらく私が彼の恋人ではないのかと疑心暗鬼にかられているようですが、それは誤解ですよ」

一番気になっている、核心の部分にずばりと切りこまれて、ルネは一瞬息をとめた。しかし、素直にガブリエルの話を信じる訳にもいかず、勇気を奮い起して、食い下がった。

「でも、ローランがあなたを他の誰よりも愛しているのは、傍から見ていて明らかですよ。恋人じゃないなんて言われても、それじゃあ一体何なのか、僕にはやっぱり納得できません」

「まあ、すぐに結論に飛びつこうとするのはおよしなさい、ルネ。正直に告白すると…今まで私達の間で全く何もなかったわけではないですよ。恋人めいた関係になることも、たまにはありました」

「あああああ、やっぱり…！」

「だから最後まで人の話を聞きなさいって、ルネ…確かに、ローランと寝たことなら何度かありますよ。しかし、実際気持ちの上で、今更彼を恋愛の対象として見られるかという点と違うんですね。私にとってローランは身近すぎるんです。肉親以上、ほとんど自己の延長にあるような存在ですから…」

ガブリエルはふと遠い目になってしばし何かしら考え込んだ後、改めて、ルネに注意を戻した。

「そんな訳で、あの人と私は恋人同士ではありません。しかし、私にとってローランがとても大切に特別な存在であることには変わりません。ですから、彼がどんな人を恋人に選ぶかは、私にとっても重要な関心事です」

自分を見つめるガブリエルの目の奥に、一瞬刃にも似た鋭利な光が閃いたのを見た気がして、ルネは微かに身を固くした。

「あなたの顔を見に来たのは、それが理由ですよ、ルネ…私に外見が似ている相手を気に入ったというのは、もうあの男の病気として大目に見るとして、もしも本当にただ顔かたちが似ているだけの不細工なコピーに過ぎなかつたら、苛めぬいてここから追い出してやるつもりかもしれません。ローランの話聞く限り、あなたはとても優秀で気立てもいい子なのですが…あなたが本当はどんな人間なのか、実際に会ってみないと分からないこともありますからね？」

意味ありげなガブリエルの言葉に何かしら引っかかるものを覚えましたが、今のルネは、それを追求する気にはなれなかつた。

「どうしました、そんな浮かない顔をして？ まだ納得しきれていないんですか？」

「…あなたが、ローランをどう思っているかは何となく分かった気がします。その言葉を信じてもいいと思います。でも、僕が知りたいたいののはローランの気持ちなんです。あなた相手に僕の自慢話をしてるって聞いたって、直接言ってもらったことのない僕には実感がわかないですし、彼が本当に愛しているのは、やっぱりあなたじゃないかと疑ってしまうんです」

「ローランの気持ちを代弁してあげるとは容易いですが…それは私が言うべきことではないでしょうし、たぶん、ローランから直接聞かないことには、あなたは信じないでしょうね」

ガブリエルは眉をちよつとひそめて、しょんぼりうなだれているルネを憐れむような目で眺めた。

「ねえ、ルネ、それほどローランのことが好きなのに、どうして今まで、彼の本心を問いたださそうとしてこなかったんです？ 秘書として彼の傍にいるあなたなら、そのチャンスはいくらでもあったはずでしょう。ローランは、あなたが正面からぶつかっていったなら、ちゃんと向き合って答えてくれると思いますよ？」

「そ、それは」

ルネは言葉に窮して、ガブリエルの瞳を避けるかのように顔を背けた。

「すみません、言いたくないです…！」

ガブリエルはやれやれというように軽く肩をすくめた。

「あなたが見ているローランの行動は常に一貫していて、矛盾は感じられないものはずです。そこから推測して、あなたは彼が私を愛していると思った。それはある意味正しい…確かに、ローランにとってこの世で一番大切なのは私です。これは、彼の恋人になる人にとつては、なかなか受け入れがたい事実になるのでしょうか」

ガブリエルの言葉の意味を量りかね、むしろ挑発されたように感じたルネは、頬をさつと紅潮させて、謎めいた笑みを浮かべた彼の顔を睨みつけた。

「どういう意味ですか？」

「気になるなら、ローランに直接聞いてください。何なら今ここで彼に電話をかけてみましょうか？ 私からの緊急コールなら、彼は最大三秒以内で出ますから」

ポケットから携帯を取り出して、ふざけてダイヤルしてみせるガブリエルに、ルネはとっさに取りすがった。

「や、やめてくださいっ」

「痛っ」

焦るあまり、ガブリエルの手首を掴む手に力が入ってしまったのだろう、彼が美しい眉をしかめるのを見て、我に返ったルネは、慌てて身を引いた。

「申し訳ありません、ムツシュ・ロスコー」

「さすがに握力、強いですね。先程社の前に押しかけていたパパラツチ達は、手加減してもらえて、幸運だったのでしょうか」

「えっ…?」

ルネが不安気に瞳を揺らせた、その時、副社長室の扉が叩かれ、ほとんど同時に大きく開いた。

「ムツシュ・ロスコー、御無事ですか?」

凜と響く声と共に滑るように部屋に入ってきた何者かを、ルネははっとなって振り返った。

「今、部屋の中から叫び声が聞こえましたが、何かあったのですか?」

そう尋ねながらルネに鋭い視線を送ってきたのは、まっすぐな長い黒髪を肩から背中にかけて流した、とても綺麗な東洋人の少年だった。

「ああ、シユアン、何でもありません。ちょっとふざけていただけですから、心配しないでください」

ガブリエルになだめられても、少年はまだ固い表情のまま、ルネをじっと観察している。その目尻の僅かにつり上がった双眸は濡れた石のように真っ黒で美しく、年下の男の子には食指の動かないルネでも、ちょっとドキツとしたくらいだった。

「驚かせて、すみません、ルネ。この子はシユアン・リー…アカデミーの関係者なんです、武道の心得があるもので、ボデイ・ガード代わりに、ローランから私のお守り役を任されているんです」

「ボデイ・ガード…こんな綺麗で華奢な男の子がですか?」

ルネに疑わしそうな目を向けられて、シユアンはちょっと不満そうに桜色の唇を尖らせた。

「ふふ、人は見かけに寄りませんよ、ルネ…こう見えても、シユアンは中国武術の達人なんです。大体、綺麗で可愛いのに最強って言うなら、あなたも同類ですよね…？」

「えっ？」

「さつき外で、あなたが悪質なパラツチ達をやりこめる様子を2人で偶然見ていたんですよ。素人には何が起こったか分からない素早い動きでしたが、あなたがあの時使った技はたぶん合気道だろうとこのシユアンが見抜いてくれました。違いますか？」

ガブリエルは猫のように目を細めながら、青ざめるルネに向かって両手を広げてみせた。

「さすがは、ローランが気に入って、わざわざオーヴェルニュからパリに呼び寄せた人だけありますね。秘書として有能なだけでなく、そんな特技も隠し持っているなんて実に素晴らしい。この所、私だけでなくローランの身边も何かと物騒なので、あなたのような人が傍についていてくれるならば安心です。今日のあなたの活躍ぶりを話したら、ローランはきっと」

「やめてください！」

切羽詰まったルネの叫びに、ガブリエルは口をつぐんだ。

愛とスーブの法則（4）

「お願い、ローランには何も話さないでください！ 僕が武道の達人だなんて、彼は知らないんです。もしも僕の半端じゃない腕っ節を知ったら、ローランはきつともう僕を可愛いなんて思ってくれなくなる…そんなことであの人に嫌われたら、僕、死んじゃいますっ」

ルネはガブリエルの前に身を投げ出す様にして跪き、両手をついて、涙声で懇願した。そんな彼を、ガブリエルはしばし何も言わずに見守っていた。

「…シユアン、あなたは少しの間席をはずして下さい」

ガブリエルが低い声で命じるのに、おろおろと2人を見比べていたシユアンはちよつとほつとしたような顔をして、隣接した秘書室の方に戻っていった。

「さて」

ガブリエルはシユアンの姿がドアの向こうに消えたのを確認し、改めて、がっくりと頭を垂れて床に座り込んでいるルネに向き直った。

「解せませんね、ルネ…どうして、ローランがそんなことであなを嫌うなんて思っんです…？ それはあなたの才能であり、誇るべきものではないですか。ローランだって、きっとそう思うはずですよ？」

「もしも僕とローランの間に特別な感情が何もなければ 僕がただの部下なら、あなたの言う通り、ローランは僕の武道も特技の1つとして何の躊躇もなく認めてくれたでしょう。でも、恋人となるとたちまち話は変わってしまいます」

「変わると言つと、どんなふうに？」

ガブリエルはルネの言わんとしていることがさっぱり分からないというかのごとく、そつと首を傾げた。

「男って生き物は いや、僕だって男なんですけど 少なくとも自

分の強さや逞しさを自負している類の男は、自分よりも強くて能力のある相手をライバル視はするけれど、恋人として心を許してはくれないものなんです。僕のことを最初のうちは可愛がってくれても、正体を知ったら、たちまちドン引きして逃げて行ってしまいます」

「…それは、あなたの経験？」

蘇ってきた苦い記憶に、ルネは床についていた手を、関節が白くなるくらい強く握り、震える唇を噛みしめた。

「そこまで話したなら、いつそ全て吐き出してしまつたらどうですか、ルネ。そうすれば、胸のつかえも少しは下りて、気分は楽になるでしょう」

優しい声に促されてルネがおずおずと顔を上げると、まさに慈悲深い天使のごときガブリエルが柔らかく微笑みかけてきた。

その微笑にたぶらかされた訳ではないが、気がつけばルネは、ぽつんと呟いていた。

「昔、好きだった人に振られたんです」

まるで途方に暮れた子供のような自分の声に、ルネは一瞬顔をしかめたが、抑えようとしても言葉は堰を切つたように次から次へと唇から溢れ出して、とめられなくなった。

「高校時代、僕が柔道を習いに通い出した道場の先輩で…すごく強くて、素敵な人で、僕は密かに憧れていたんです。自分が同性に惹かれる性向があることも自覚し始めていた時期で、だからと言って積極的になんかこうできる程の勇氣もなかった僕は、彼に認めてもらえるよう、気に入ってもらえるよう、熱心に稽古に打ち込みました。もともと柔道も空手も子供の頃からやっていて…少しブランクはあったんですけど、基礎があるから覚えも早い僕に、彼はすぐに注目してくれました。それが嬉しくて、もっと熱心に練習して、僕はどんどん強くなっていきました。子供の頃はただの遊びでしかなかったものが、何しろ先輩に気に入ってもらおうという目的ができた分、そりゃ集中力も増すつてものです。たぶん、僕自身、すごく伸びる時期に差し掛かってもいたんでしょう。自分でも気がつかなかった

才能が一気に開花して、その道場にいた3年の間に黒帯までいたできました。全国レベルの大会にも出場しましたし、当時の僕は、この国のトップクラスの實力を確かに持つていたと思います。天才だと周りに持ち上げられて、皆がこんなに喜んでくれるなら、たぶん先輩も喜んでくれるだろうと思つていたんですが…現実には、そうではありませんでした」

「その人は、強くなったあなたを認めてはくれなかつたんですか？」
「実は、僕と先輩は一時付き合つていたんです。いつも一生懸命な僕を可愛いと思つて、向うから声をかけてくれたんですよ。まあ、付き合つと言つたつて、彼にも同性の僕を相手に躊躇う気持ちがあつたのか、たまにキスしたり抱きしめてもらつたり、その程度の関係でしたけれど…」

「その時点では、彼はあなたを恋愛対象として受け入れてくれていた。しかし、あなたが強くなりすぎると彼の気持にも変化が生じた…つまり、そういうことですか？」

「ええ、その通りです。付き合い始めて最初の頃は、先輩は僕が大会でいい成績を出す度に自分のことのように喜んでくれました。だから、単純な僕は、強くなればもっと彼に喜んでもらえるものばかり思つて、切磋琢磨して技に磨きをかけたんです。ところが、いつの頃からか、彼は、僕が大会で優勝しても、地元の新聞の記事になつても、笑つてはくれなくなりました」

ルネは、今でも鮮明に覚えている辛い記憶に息がつまり、抑えようとしてみてもこみ上げてくる涙にむせそうになつた。

「ある日、全国大会の直前でしたが、肩を痛めてしばらく道場を休んでいた先輩から連絡があつて、彼の家の近くの農園に呼び出されたんです。そこで、いきなり別れ話を切り出されました。僕が理由を尋ねると、彼は、自分が想像していた以上に強くなつてしまった僕に対し、もう可愛いとか愛しいという感情を覚えられなくなつてしまつたんだと言いました。僕を武道家として尊敬するし、その天才を羨ましく思つけれど、恋人として見ることはもうできない。ご

めんと謝られました」

ルネは肩で大きく息をして、気持ちを静めた後、弱々しい声で付け足した。

「その後すぐ、僕は道場をやめ、武道家としての道を極める夢は断念しました。僕に期待をかけていた人達はこぞつとめたけれど、もともと僕が柔道に力を入れた動機は不純なものだったから、そうするのは当然だったと思います。何より、僕は分かってしまったんです。武道の才能は、僕の望むような幸せをもたらしてくれるものではない。初恋に破れた経験から、僕が学んだ結論です」

ルネが語り終えた後もしばらく、ガブリエルはソファの背もたれに身を預けたまま、瞼を半分おろして何事か考え込んでいた。

「…ムツシュ・ロスコー？」

この静寂に耐えられなくなったルネが声をかけると、ガブリエルは目を閉じて、ふうつと胸に溜めていた息を吐いた。

「初恋の相手にそんな酷い振られ方をしたから、あなたは世の中の男は皆そうだと思いきなり、せつかく開花しようとした才能を無駄に腐らせるに至った訳ですか。全くもって、もったいない…その短絡思考は何とかならなかつたものですかねえ」

ガブリエルは額に手を当てて、嘆かわしげに頭を振った。

「僕の主観を申し上げるなら、柔道界から身を引いたことは正解だったと思います」

ガブリエルが手で促すのに従って、改めてソファの上に身を落ち着けたルネは、言った。

「もともと僕は、格闘技は好きだったけれど、それで頂点を極めた訳ではなかつたんです。単純に、強い相手と戦って思い切りぶん投げて一本勝ちした時の爽快感が好きだけで…大体、今の大会なんて、いかに相手からポイントを取るかに重きを置きすぎて、それって本来の武道とは何だか違う気がしますし…少なくとも、僕が自分の幸せを犠牲にしてまでやりたいことはありません」

その点に関しては、ルネは迷いなく、はっきりと答えることがで

きた。

「あ、今でも、ローランには内証でこつそり道場通いはしているんですよ。ただ、これは全く趣味的なもので、日頃たまったうさを晴らすためのものにすぎません。しばらくブランクがあったんですが、それでもやっているうちに勘が戻って、また腕を上げてしまったんだから、僕ってやっぱり天才なんですね。全く役にも立たない才能ばかり持ってて、困ったものですよ」

頭をかきながらははと力の抜けた笑い方をするルネを、ガブリエルは半ば呆れたような半ば同情的な目で見た。

「成程、分かりました。ルネ、それでは別の質問をしますよ。今もローランには秘密で道場に通っていると言うあなたは、この先も彼にずっと嘘をつき通すつもりなんですか？」

ルネの顔がたちまち強張った。

「あなたの先輩は強くなつたあなたを受け入れられなかったから、ローランも同じだと考えるのは、いくらなんでも短絡的過ぎはしませんか？ あなたが昔好きだった人を悪く言うようですが、武道の才能あるあなたを恋人として受け入れられなかったのは、所詮その男の器がその程度のものだったからです。大体、大切な大会の直前にあなたを呼びだしてわざわざシヨックを与えるなんて、武道家ならばすべきことではないでしょう。ローランは、人間性に問題なしとは言えませんが、少なくとも度量は大きい人物です。あなたの秘密を知ったって、そのくらい個性の1つとしか思うものですか」

「で、でも…彼が僕のことをどう考えているのか、今でさえ本心を測りかねて不安でたまらないのに、この上、僕の秘密を彼が知ったらどんな反応が返ってくるかなんて、もう考えたくもないです」

ガブリエルは嘆息した。そうして、我が身を守るかのように両腕を体に回してぎゅっと抱きしめているルネを凝然と眺めながら、冷静に指摘した。

「あなたがローランに対していつも言いたいことも言えずに黙ってしまうのは、その臆病さのせいなのでしょうね。ただ、いつまでも

黙ったままだとローランは、これはあの男の悪い所ですが、あなたに不満はないものと勝手に判断して、迷惑かけ放題のまま、やりたいうちに我が道突き進んでいきますよ？　あなたは、それでいいんですか？」

ガブリエルに痛い所を突かれて、ルネはまたしても答えに窮した。「う…、それは」

今回のスキャンダルについて簡単な説明を受けた際、ルネがちよつと怒って見せても、本気で逆らうことはあるまいと高をくくっているからか、ローランは楽しげに眦を下げるだけだった。あの時の彼の憎たらしい顔を思い出して、ルネは悩ましげに眉を寄せた。

（僕はもつと怒るべきなのだろうか、あの人の横暴を許すべきじゃないのだろうか　たぶん、そうした方が、僕の尊厳を守るためにはいいんだろかな）

ルネはこの問題について真剣に考えを巡らせながら、ゆっくりと答えた。

「もちろん、よくはないですよ…でも僕は、仕事でもプライベートでも、よほど無茶なことじゃない限り、何でもローランの好きなようにやらせてあげたいし、そのための苦勞なら我慢できるかなとも思っています。まあ、さつき、あなたに聞かれてしまった絶叫も僕の紛れもない本音で、確かにもう少しくらい氣遣って欲しいとは思いますが…僕は別に、あの人の感謝の言葉が欲しくて尽くす訳じゃない」

ルネは首を傾げてまた少し考え込んでから、続けた。

「あの人の身勝手や我が侂に振り回されて、たまに本気で投げ飛ばしてやるうかと思うことはあっても、僕がそれをしないのは、その苦勞に見合う何かを、僕があの人からもらっているからなんです。そりゃ、僕にだって、あの人の心を知りたい、もつと愛してもらいたいという気持ちはありますよ。でも、それ以上に強く、あの人のためにと僕を突き動かしている欲求があつて、それが満たされると幸せな氣持ちになれる…ううん、何が言いたいんでしょうね、僕」

次第に頭の中が混乱してきたルネは、途中で理路整然と語ることを放棄して、両手で顔を覆いながら言った。

「こんな甘いこと言っているとますますローランを凶に乗らせそうだけれど、僕は結局、あの人が喜ぶ顔を見たいから尽くしている気がする」

言った瞬間、ルネはげつと思った。自分の満足よりも奉仕する相手の幸せが優先だなんて、これでは、ローランと同じ忠犬体質のようではないか。

ガブリエルに滅私奉公するローランの気持ちなど理解できない、したくもないと思っていたはずの自分がうっかり漏らしてしまった台詞に、ルネは慄然とするしかなかった。

「ああ…そういうことですか…」

やけに納得したようなガブリエルの呟きに、ルネはとっさに伏せていた手から顔を上げた。

「そ、そういうことって…?」

分かったような顔でしきりに頷いているガブリエルにルネが恐る恐る聞いてみると、彼はふいに小さく吹きだした。

「すみません、笑ったりして…いつも他人の評価に厳しいローランが、どうしてあなたをあそこまで気に入って自分の秘書にしたのか、その理由が分かったので、おかしくなってしまうんです」

ガブリエルはくつくつと笑いながら、目じりに浮かんだ涙を指先で拭くと、呆気にとられているルネに向かって、こう言った。

「ルネ、どうしてローランが身を粉にして私に尽くすのかということね…もちろん私を愛しているからではありませんが、それと同じくらい彼が、全力で奉仕している自分のことも大好きだからなんですよ。愛する者のため、我が身に鞭打ち一生懸命働くことが気持ちいいんです。そして私が彼に対していつも我が侘に振舞うのは、そんな彼の欲求を知っているからで…もしも私が、彼の手を借りずに何でも自分でやるうとしたら、生き甲斐をなくしたローランは、きっとがっかりしてしまうでしょうからね」

顔を引きつらせているルネに向かって、ガブリエルは揶揄するように、片目を瞑って見せた。

「ルネ、どうやら、あなたにもそういう性向があるようですね？」
ルネははっと息を吸い込んだまま、しばし固まった後、顔を真っ赤にして反論した。

「そ、そんなはず değildir！ 確かに僕はあの人に尽くすのは好きだけど、ローランのあなたに対する盲目的忠誠に比べたら全然常識的ではありません。僕は別にローランの飼い犬って訳じゃないですし……い、嫌ですよ、そんな同病相哀れむみたいな……」

言いかけて、ルネはまたしても黙りこんだ。

（いや、傍から見れば、僕のローランに対する懲りない忠実さは、やはり犬のように思われていたんだろうか。ローランのガブリエルへの忠実さを目の当たりにするたび苛々したのも、単なる嫉妬を超えて、同族嫌悪が混じっていたりして……）

ローランは彼の絶対的君主であるガブリエルの背を追い、そのローランを熱愛するルネはやはり彼の注意を乞いながら追いかけていく、これこそ正しい犬の姿であるかのごとく。

（いや、そんなことは認めたくないな……冗談じゃない……だって、それじゃあ、僕はガブリエルへのあの人の忠誠を理解できるはずってことになる。どんな時でも主を最優先する、あの人の非常識ではた迷惑な行動を全て許して、受け入れて……？ いくら僕でも、愛する人のため、そこまで馬鹿になれやしないよ）

どんよりと落ち込むルネに向かって、ガブリエルは厳かに告げた。「別に卑下するようなことじゃないでしょう、ルネ。ローランは私に隷属している訳ではないし、あなたもローランの所有物ではない。全て、あなたやローランが自分の自由意思で行っていることで、だからこそ、その忠誠心は、それを捧げられる者にとって、とても得難い貴重なものなんですよ」

「そんなこと言われたって……そりゃ、あなたはヒエラルキーのトップにいて、愛情も忠誠も一方的に捧げられる側だからいいでしょう

けれど…」

情けなそうに頭を振るルネに、ガブリエルは椅子から立ちあがって、近づいてきた。

「ルネ」

「は、はい」

ルネは、目から出かかっていた涙を引っ込め、反射的に顔を上げた。すると、自分を覗きこむガブリエルの美しい顔が、その芳しい吐息がかかりそうなくらい間近にあった。

「私は、あなたを気に入りましたよ。あなたになら、いつかローランを譲ってあげてもいいかもしれませんね」

天使は楽しいな笑みに唇を綻ばせながら、優しく告げた。

「ムツシュ・ロスコー…？」

これまでの話の流れの中で、一体自分のどこをどう気に入っていただけなのか、ルネにはさっぱり分かなかったが、存外に温かく好意的なガブリエルの眼差しに、不思議なほど心が安らぐのを覚えた。その時、副社長室のドアが、今度はさっきよりも控え目にノックされ、シュアンが遠慮がちに声をかけてきた

「あの、ムツシュ・ロスコー…そろそろここを離れませんかと予約したフライトに間に合わなくなります」

「そうですね…分かりました」

ガブリエルは、半分開いたドアの向こうに影のように立っているシュアンにそっと目配せし、もう一度、名残惜しげにルネの顔を覗き込んだ。

「あなたと話すのがあんまり楽しくて長居をしすぎたようです、ルネ」

「フライトって…ムツシュ・ロスコー、これからパリを離れてどこかへ行かれるのですか…？」

頭に浮かんだ素朴な疑問をそのまま口にするルネに、ガブリエルは丁寧に答えてくれた。

「ええ、ローランとも話し合って決めたことですが、しばらく私は

フランスを離れることにしたんです。私がいるとやはりマスコミの注目を集め過ぎて、それは敵の活動を抑えるのに一役買ってはくれるんですが、こちらも動きにくくて不便なことも多いんです」

「敵というと…例のジル・ドウ・ロスコーっていう人ですか…？」

読んでいた雑誌の記事を思い出しながらルネがまた単純に尋ねると、その質問に関しては秘密ですとでもいうかのごとく、ガブリエルはふつくと官能的な唇の前で人差し指をそつと立てた。

「ローランのことをくれぐれも頼みますよ、ルネ」

ガブリエルはふいに真顔になって言い、戸惑うルネの手をぎゅつと握りしめた。

「私の姿が見えないとローランは気分的にどつと落ち込みそうなので、心配です。もしも彼が鬱になっていたら、あなたが私の代わりに慰めてあげてくださいね」

「そ、そんな…あなたの代わりなんて、僕にはとても無理です。外見を少しくらい変えて真似てみた所で、僕では本物の『大天使』のカリスマを再現することは不可能だということは、あなたに会って実感しましたから」

ルネが訴えても、ガブリエルは彼の手を離してくれず、微笑みながら、きつぱりと首を振った。

「無理だなんてとんでもない。私の単なる代役に留まらず、ローランのため、あなたでなければできないことはたくさんあるはずですよ。どうか彼を支え、助けてあげてください…誰かに命じられたからではなく、あなたの自由意思でね」

ガブリエルは、自信なさそうに黙りこんでいるルネの手を離して立ち上がり、ドアの前で大人しく控えているシユアンの方に歩いていこうとした。

その後ろ姿を見送りかけたルネは、思い出したようにいきなり声を張り上げた。

「そ、そうだ…ムツシュ・ロスコー…！」

「はい？」

うるんそうに振り返るガブリエルに、ルネは慌てて駆け寄った。

「すみません、ムツシュ…あなたとローランの間に秘密はないとき言われていましたけれど…お願いします、僕の武道の腕や今でも道場通いをしていることは、やっぱりローランには黙っていていただけませんか？」

今更こんなことを蒸し返してしつこいと思われそうだが、この秘密はまだ当分の間秘密にしておきたいルネは、ガブリエルの確約を取る必要に駆られたのだ。

「何を言い出すかと思えば」

ガブリエルは虚を突かれたように瞬きし、ルネの思いつめた顔を、しばし信じられないものを見るかのような目つきで凝視した。

「ルネ、あなたという人は…賢いのか馬鹿なのか、よく分かりませんねえ」

「えっ？」

ガブリエルはふつと微笑み、不安そうなルネの頭に手を伸ばし、宥めるように撫でた。

「安心なさい、ルネ、あなたが秘密にしたがっていることを、私の口からローランに伝えるつもりはありません。確かに私とローランの間に秘密はないと言いましたが、聞かれていないことを逐一報告する義務も、私にはないですからね」

「あ、ありがとうございます、ムツシュ・ロスコー！」

感動のあまりぱつと頬を紅潮させて、ガブリエルの手をぎゅっと握って振り回すルネを、彼はまだ少し何か言いたげな目で見ていた。「しかし、できるだけ早い時期に、あなたの口からローランにその秘密は打ち明けた方がいいですよ、ルネ…勇気を出して一言言えば、ああ、こんなつまらないことでよくよ悩んでいたのかとあなたは思うはずですよ」

「は、はい…すみません、ムツシュ・ロスコーにまで余計なご心配をかけてしまって…そうですね、いつまでもローランに嘘をつき続ける訳にもいかない…」

またしても深いジレンマに陥りかけるルネの肩を、ガブリエルは優しくかき抱いた。

「大丈夫、ローランがそんなつまらないことであなただを嫌いになつたりするものですか。あなたはとても魅力的で可愛い人ですよ、ルネ、もつと自分に自信を持ちなさい」

「ムツシュ・ロスコー」

ぱつと頬を赤らめ瞳を揺らせるルネの髪に指を滑らせながら、ガブリエルはしばし次に言うべき言葉を考えていたようだったが、ふいにルネの顔から視線を外して、笑いかみ殺した声で囁いた。

「ふふ、自分と同じ顔に向かってこんなセリフを言うのは、さすがの私もちよつと照れますね」

ルネも同感だとばかりに、頷いた。

「僕も、何だか変な気分です」

ルネとガブリエル、兄弟のようによく似た、しかし同時に全く似ていない2人は、目を見合わせて笑いあった。

「次にあなたと会う時には、ローランに自分の口から秘密を打ち明けたあなたが、彼の本当の心も確かめられて、失った自信を取り戻していることを願っていますよ」

そのままシユアンを連れてオフィスを立ち去るガブリエルを見送った後、ルネはしばらく、彼に言われたことについて考えを巡らせ続けていた。

結局、今回のガブリエルの唐突な訪問について、ルネはローランに報告しなかった。ガブリエルの目的はルネ個人であったし、報告することで彼と交わした会話の内容をローランに追及されることが怖かったからだ。

（ローランが、かつて僕を振った先輩と同じ、『度量の小さい男』だとは思わなければ）

ガブリエルにいくら促され励まされても、大好きなローランに嫌われたくなくてずっと秘密にしていた本当の自分の姿を明かす決意は、今のルネにはできなかった。

愛とスープレの法則（5）

ガブリエルがあれからパリを離れてどこに向かったのか、ルネは知らない。

マスコミは、しばらくの間、消えてしまった『大天使』の行方を血眼になって探したようだが、その消息はようとして知れず、ロスコー家の『お家騒動』の動静について関係者から新しい情報が得られることもなかったため、この所報道は落ちついている。

おかげでルレ・ロスコーのオフィスにも、再び平和な日常が戻ってきていた。

もともとガブリエルはほとんど社には姿を現さない象徴的な存在でしかなかったため、別に行方不明であっても業務には一切支障はなかったのだ。

（あれ以来、おかしなパパラッチ達の姿を見かけることもなくなつたし…一時はどうなることかと心配したけれど、ガブリエルが身を隠してくれたおかげで普通に仕事ができる状態に戻れて、本当によかったな）

外の雑音に邪魔されることなく仕事に集中できる幸せを噛みしめながら、ルネは鼻歌混じりに書類の山を手早く片付けていた。

ちらと壁の時計を見上げると、いつの間にか三時過ぎだ。

ルネはしばらく閉ざされたきりの副社長室の扉に目をやった。

（ビジネス・ランチから戻ってきたきり、何も言ってこないけれど…そろそろコーヒーを持って行ってあげようかな）

約束していた訪問客が急病で来られなくなったため、午後からしばらくこれといった予定はないのだが、じつと部屋にこもっているなど活動的なローランにしては珍しいことだ。

（ガブリエルがパリからいなくなってもう10日も経ったのか…僕の場合、むしろ落ちついて仕事ができるようになったくらいだけれど、影と呼ばれるほどガブリエルにべったりだったローランだもの、き

っと生活が激変しちゃったんだろっなあ)

ガブリエルがルネに会いに来た、あの日から三日ほど経って、ローランは以前と同じように社に出てくるようになった。

ガブリエルの代わりに、マスコミ対策やロスコー家の親族間の話し合いなどに忙殺されていた彼だが、やるべきことはやり尽くしてひと段落ついたのでろっ。

(肝心のお家騒動がどうなったのか…最近の記事にも出ないし、ローランも何も言わないから、分からないけれど、ガブリエルがまだ戻ってこれないということは、決して万事解決したわけじゃないんだろっな)

ルネは、正直ロスコー家のいざこざなどどうでもよかったが、それにローランが巻き込まれて危険に晒されるのは嫌だった。だから彼がこうして自分の目の届く範囲にいてくれることに、心からの安堵を覚えている。

(それに僕は、やっぱりローランが傍にいてくれないと仕事にも張り合いがないし、元気が出なくて、いけないみたいだ。ローランの心は今ガブリエルのことで一杯だと分かっているけど、まあ、ここにいてくれさえしたらいいかと思ってしまうくらい、ローランが戻ってきてくれて嬉しい。ああ、これって、まさに正しい忠犬の姿だよね…僕もローランのこと非難できないなあ)

半ば自嘲しながらも、ルネはローラン好みのコーヒーを用意し、いそいそと副社長室に運んで行った。

「ムツシュ・ヴェルヌ、コーヒーをお持ちしました」

ノックの後の短い応えを待ってルネが入室すると、ローランは自分のデスクの革張りの椅子を窓の方に向け、そこに深く身を預けてぼんやりと物思いに浸っているようだった。

肩の方に僅かに傾げられた、その端正な横顔は、窓から差し込む弱い冬の光の悪戯か、妙に青白く生気が感じられなくて、ルネは思わず眉を潜めた。

「ムツシュ…どこか具合でも悪いんですか…？」

心配になったルネは、コーヒーをデスクに置きながら、思わず尋ねた。

するとローランは、茫洋とした顔でルネを振り返った。

「いや、別に……」

暗く沈んだ緑の双眸が、不思議そうに瞬きをした。人を射抜くような、いつもの鋭い輝きはそこにはない。

デスクの上で温かい湯気を上らせているコーヒー・カップに気がついたローランは、椅子を回して体ごとこちらを向いた。

「体調が悪い訳でも、疲れている訳でもないさ。つい一週間程前までは、例の記事の影響を受けて立ち回らなければならず散々だったが、今はそれも落ちついていっている。仕事の方でも、俺の不在中これといった問題は起きていなかったし、どこにも俺を参らせる要因はない」

まるで自分に言い聞かせるように呟くローランは、しかしルネの目から見ると明らかに元気がなかった。

いつも全身から放射されている力強いオーラが消滅してしまったローランは、まるで別人のようだ。

「本当に大丈夫なんですか、ムツシュ……？ 無理を続けた疲れが後から出てきたのかもしれないし、念のため医者にかかった方がよくはありませんか？」

こんな存在感の薄いローランを見たことなど未だかつてなかったルネが、不安を抑えきれずに訴えると、ローランは幾分煩わしそうに手を上げた。

「病気じゃないから、心配するな、ルネ……ただ単に気分が塞ぐだけだ。大体、この気鬱の原因なら、俺にはちゃんと分かっているんだ」
聞き咎めたルネは、眉をはね上げた。

「原因つて、何なんですか？」

ローランは、気のなさそうな溜息をついて、また窓の方に視線を投げかける。

業を煮やしたルネは怒りを買うのを承知で、そんな彼の前に回り

込み、俯きがちなその顔を間近で覗きこんだ。

物思いを妨げられたローランは不快そうに眉を潜めるが、いつものようにルネを怒鳴りつけたり、自分の上に屈みこんでいるその体を力づくで押しつけようとしたりしない。

（やっぱり、おかしい。僕に対して遠慮や躊躇をするような人じゃないのに、怒る気にすらならないなんて…本当に何もしたくなるほど精神的に参ってるんだ。そんなにやわな神経の持ち主じゃないはずだけれど、こんなにながっくりくるなんて、一体何があったんだろう…？）

次の瞬間、ルネの頭にピンと閃くものがあった。

（あ、もしかして ガブリエルがいなくなったせいで、落ち込んでるんじゃない…？）

自らの思いつきをまさかと笑い飛ばしたかったルネだが、目の前でしょげかえっているローランを見ているうちに、直感は確信に変わっていく。

（ああ、大の男が、好きな人とたったの十日会えないくらいで小娘のように鬱になるなんて、あまりにも馬鹿馬鹿しくて考えたくもないよ。でも、病気で疲労のせいでもなく、ローランがここまで落ち込む原因を僕は他に見つけられない）

ルネは奥歯をぐっと噛みしめて泣きたくなるのを堪えながら、目を閉じた。

（私の姿が見えないとローランは気分的にどっと落ち込みそうなので、心配です。もしも彼が鬱になっていたら、あなたが私の代わりに慰めてあげてくださいね）

あの美しい天使がパリから姿を消す前に言い残した言葉が、鐘の音のように脳裏に響き渡る。

（ああ、ムツシュ・ロスコー、あなたの見越した通り…さすがに、御自分の『愛犬』のことなら、よく分かかってらっしゃる）

何とか気を取り直したルネは、再びローランに注意を向け、遠慮がちに確認してみた。

「あの…ムツシュ・ヴェルヌ、差しでがましいようですが、行方知れずとなつているムツシュ・ロスコーとは今でもちゃんと連絡は取り合っているんですよね…？」

「うん…？ 電話なら、報告も兼ねて、ほとんど毎日しているぞ。あいつは今スイスの某所にいるんだが、その行動を把握している人間はこの俺だけだ」

まさか、自らの影とまで呼ぶ、この人にまで何も知らせずに行方をくらましたのかと一瞬ガブリエルを恨みそうになつたルネだが、それは誤解だつたようだ。

（でも、それなら尚更、この人のガブリエルに対する依存ぶりは相当なものだな。電話で声を聞くだけでは、主人の不在の寂しさは紛らせないなんて…ああ、本当に飼い主に置いていかれた犬みたいだ）呆れるのを通り越して哀れを催しながら、ルネは思わず手を伸ばして、手入れが行き届かずに寝癖のついた黒い髪を指先で撫でつけ、艶のない頬を愛おしげに手の平で包みこみ、微妙に乾いていそうな鼻先にちゅつと唇を押し付けた。

どうしよう。可哀想過ぎて、可愛くて、いても立ってもいられない。

「ルネ…？」

職場にべたついた関係を持ちこむことを嫌うルネにしては珍しい、親密な接触に、ローランは少々面食らつたようだ。

ルネはローランの顔を見下ろしながら、慈母のように微笑んだ。

「あなたの不調の原因なら、僕には分かつたような気がします。それについて意見することは差し控えますが、病気であろうとかならうと、そんなふうに打ちしおれたあなたを見てみると、やっぱり心配で仕方ありません」

ルネは再びローランの肩に手を回し、愛しくてならないというようにかき抱いた。

「ね、僕に何をして欲しいのか、言って下さい、ローラン。あなたが元気になるためなら、僕はどんなことでもしますよ…？」

こんな甘い台詞を普段うつかり漏らそうものなら、付け込まれてえらい目にあわされそうだが、今は特別、どんな我儘でも無理難題でも許してあげようとルネは思った。

「うーん：何をして欲しいかといきなり聞かれても、困るな」

お世話をしたいモードのスイッチが入ったルネの溢れんばかりの愛情を前に、しかしローランは視線を逸らして、幾分戸惑ったように頭をかいた。

「おまえはいつも気が利くし、仕事では文句のつけようのないくらいよくやってくれている。ミラの代わりとしてそこそこやれるどころか、期待以上だ。そんなおまえに今更新たな要求をしようにも、すぐには思いつかんが…」

「そうですか？　いつもなら、思いつくまま、どんな無茶な要求でも平気な顔で僕に命じるくせに：あなたらしくないですね、ローラン。せつかく僕が自ら進んで、何でもしますから命じてくださいなんて殊勝な申し出をしているんですよ？」

「俺はへそ曲がりなんだ。嫌がる相手を力で屈服させて従わせるのは好きだが、命じてくださいなんて跪かれると、返って興奮めして、その気がなくなるのさ」

「最悪ですね、その性格。でも、とにかく、何でもいいから言ってみてくださいよ。今の状態のあなたを放っておくことなんて、僕にはどうしたってできないんですから」

なかなか乗ってこないローランに、ルネは焦れたように鼻を鳴らし、拳を握ったり開いたりしながら一生懸命訴えた。

「お前の気持ちは嬉しいが：それなら、もしも俺が今は独りにしておいてくれと頼んだら、おまえは素直に引き下がってくれるのか？」

「あ：す、すみません、ローラン：1人で勝手に盛り上がって、あなたの気持ちは考えず、押しつけがましかったですね」

自分の熱意が余計にローランを疲れさせてしまったのだろうか。たちまちしょんぼりうなだれるルネに、ローランは口元をふっとほころばせた。

「おまえの気遣いは、俺も嬉しく思っているとも、ルネ…だから、そんなに悲しそうな顔をするな」

ローランは言葉を切って、しばし何事か考えを巡らせながら、後悔の念を全身から漂わせているルネを見つめた。

「ルネ、今度の土日の予定はもう決まっているのか…？」

ルネはゆっくりと顔を上げて、ローランはいきなり何を言い出すのだろうと訝しみながらも、正直に答えた。

「え…いえ、家族へのクリスマスプレゼントを探しに行こうかと考えているくらいで、特にこれといった予定はありませんが…」

「それなら、俺と一緒に過ごさないか…？ 休日どこかに連れて行ってやると一度口約束をしたきり、実際にはおまえをまだどこにも誘ってやっていないし、俺の方もたまたま体が空いている。予定のない休日を独りでどうやって過ごそうかと、ちょっと悩んでいたところだったんだ」

「えっ…ええっ?!」

ルネはとっさに何を言われたのか分からず、ぽかんと口を開けて立ちつくした。

「ローラン…もしかして、ぼ、僕を誘ってくれてるんですか…？ あなたと一緒にどこかに出かけるって…本当に…？」

動揺のあまりでもってしまふルネに向けられるローランの眼差しは恋人に向けられるもののように温かくて、ルネの胸を甘く切なく締め付けた。

「おまえと約束したからな…別に、これまで忘れていた訳じゃないんだぞ。ただ、俺が休日らしい休日をなかなか持てなかったというだけで…おまえは誤解しているかもしれないが、俺は、約束は守る男だからな」

「ローラン…」

パリに出てきて間もない頃、心身ともに参っていたルネに対して何気なく言った言葉など、てっきりローランは忘れていると思っていたのに、ちゃんと覚えていてくれたのか。

感動のあまり、声をなくしているルネの手を取り、ローランは笑いを含んだ、甘い声で囁いた。

「あの時は確か、乗馬にでも連れて行ってやろうと提案したが…おまえの希望があるなら聞いておこうか、ルネ…？」

「え…僕の希望ですか…？ あ、でも、いいんですか…そもそも僕が、あなたの気晴らしになることをしてあげたくて申し出たはずなのに、これじゃ逆ですよ…？」

ローランは捕まえたルネの手を広げて、そこに指を押し当てながら、優しく頷き返した。

「俺がお前を誘いたいんだから、別にいいんだ。お前は素直に喜んで、普段は俺に対して言えない我儘を思う存分言えればいい」

「そ…それじゃあ、ええつと…僕って、パリで生活を始めてからまだ観光らしい名所巡りもしてないんですよねえ。クリスマス休暇に実家に帰った時、家族に聞かれて困らない程度に、お勧めスポーツは押さえておきたいんですけれど…」

ルネはひとしきり頭を悩ました後、はたと思いついたように言った。

「あ、そう言えば、セーヌ川のクルーズ船って評判がいいそうですね。僕も一度乗ってみたいと思っていたんですけど、どうですか…？」

「ふうん、いかにも観光客向けで、ベタだが…まあ、おまえが乗ってみたいと言うなら、別にいいぞ。しかし、おまえ、パリに出てきて今まで、休日に一体何をして過ごしていたんだ…？」

「へ、部屋の掃除とか洗濯とか…仕事絡みの勉強に費やすことも初めの頃は多かったですよ。後は、こっちで知り合った友達と買い物や映画に出かけるくらいですね」

柔道教室に通っているとは口が裂けても言えないルネは、適当に誤魔化して、ローランの追及を回避した。

「それじゃあ、おまえの暮らしていたクレルモン・フェランでの生活と大差なさそうだな。やれやれ、パリにいながら未だその楽しみ

方を知らないとは哀れというか、鈍くさい奴だな」

「ど、鈍くさくて悪かったですね。どこで暮らそうが、僕は僕なんですから、わざわざ生活スタイルを変える気もなければ、都会の楽しみをガツガツ追求する気にもならなかっただけです」

ルネは、面白そうに口元をほころばせているローランの顔をちらちらと見ながら、付け加えた。

「でも、あなたが指南してくれると言うなら、もちろん話は別ですよ…?」

「ふん、可愛いことを言ってくれるな…!」

ローランは心底楽しそうな笑い声をたてながら、ルネの手を引き寄せ、その甲に唇を押し当てた。

「ローラン」

ルネが電流にでも触れたかのように身を震わせるのに、悪戯っ子のような目をしたローランは満足そうに微笑み、手を離れた。

「ベタでも、クルーズ船から見る夜景は一見の価値はあるらしいから、適当なディナー・クルーズを探して、予約を入れておこう。まあ、料理の方は、所詮観光客向けだからあまり期待はするなよ…下船した後で、気のきいたバーにでも行くか、俺の家で飲み直してもいいな」

「は、はい…ありがとうございます、ローラン。何だか夢みたいですよ、あなたと一緒に休日をご一緒するなんて…」

目元を赤らめ声を弾ませながら答えるルネは、いかにも擦れていない純な少年のように初心で可愛かった。パリでの生活にすっかり慣れ、仕事上でのマナーも完璧に身につけて、もうあまり素に戻ることも少なくなったルネだが、ローランが相手だといふ無防備になっってしまうようだ。

「大げさな奴だな」

鷹揚に頷き返すローランは、もう先程までのように鬱に捕らわれではおらず、いつもの生気の人割方は戻ってきたようだ。

ルネはもう一度ぺこりと頭を下げながら礼を言い、これ以上彼に

つつきまくられる前にくるりと踵を返して、副社長室を後にした。

こちらはこちらで、その足取りは軽く、必死に堪えてはいるもの、唇は微笑んでいる。

（ローランとデートだなんて、うわあっ、どうしよう、凄く嬉しい！）

初めは突然降ってわいた話に実感がわかず、喜びより戸惑いの方が大きかったが、時間が経つにつれ、幸福感がじわじわ胸の奥から広がってくる。

（それに、あの人、何カ月も前の僕との約束をちゃんと覚えてくれたことも嬉しい…どうせ、その場限りの軽い思いつきで言ったことだからと僕はもう諦めてたのに、意外と義理がたいところがあるんだ。ああ、ローランのこと、僕は誤解していたのかなあ）

次の休日ローランとどう過ごすか、想像するだけで楽しくて、ルネは有頂天になりそうだったが、ふっと、その心に迷いが差した。

（でも、ガブリエルの不在のどさくさに紛れて、こないだの思いをさせてもらっていいのかな。本当なら僕が、ローランを慰めてあげるはずだったのに…あんな可哀想なローランを見たら心が動いてしまっ、全力で彼のお世話をしようと思った。別に、下心があった訳じゃない）

結果としてローランの弱点に付け込んでしまったようで、真面目で潔癖なルネは、一抹の後ろめたさを覚えてしまう。

（キアラにこんなこと話したら、また馬鹿にされるかなあ。遠慮なんかしないで、恋敵のいないこの隙にローランの心をすっかり自分のものにしてしまいなさいって…ううん、確かに、チャンスと言えばチャンスなんだろうね。本当にあの人欲しいなら、僕はもっと狡賢くなって、うまく立ち回るべきなのかもしれない）

しかし、そんな考え方に馴染めないルネは、休日に入るまでの続く数日を喜びと期待の中にも、小さな煩悶を抱えて過ごした。

そして、約束の土曜日。それはルネが頭の中で幾通りもシミュレーションした、どんなデートとも違う展開をすることになる。

愛とスープレの法則（6）

ローランとの『初デート』当日は、ルネの祈りが届いたかのようによく晴れて、この季節にしては暖かった。

普通の観光をしたいというルネの希望を考慮したのだろう、待ち合わせはシャイヨー宮の噴水の傍だ。エッフェル塔の写真スポットとして有名な場所で、観光客がそこら中でカメラを構えたり、ポーズを取ったりしている。

そんな観光客達に混じりながら、ルネも持参したカメラをローランに手渡し、帰省した時に家族に見せるための写真を取ってもらっていた。

「ベタですねえ」

「全くだ」と笑うローランは、機嫌良さ気だ。少なくともルネと一緒にいる休日の一時、ガブリエルの不在の寂しさは忘れているように見えた。

「デイナー・クルーズの乗船時間は18時だからな。それまでは徒歩と地下鉄を使って街を歩き回るぞ」

たっぷり運動することができるからか、やけにはりきっているローランにとっても、ルネに付き合っただけの街歩きはまんざら悪くない休日のつぶし方のようなものだ。

「明日はロスコー家のシャトーに連れて行ってやろう。その昔国王が狩りのために用いた別荘だった城で、周辺の景観は素晴らしい。乗馬を楽しむには、もってこいさ」

「それって、でも…ムッシュ・ロスコーの家なんですよね？」

「そして、俺が育った家でもある。使用人達も皆、顔馴染みだ。そんな訳で、主が不在でも、俺は好きな時に自由に使うことができるのさ」

ガブリエルの名前を出すで一瞬またローランは落ち込むのではないかとルネは案じたが、幸い、そんな気配はなかった。

(ローランが育った家かあ…ガブリエルが主だというのは引つかかるけど、『実家』に連れて行くなんて、それなりに親しい相手じゃないとしないだろうし、これって喜んでいい状況だよな)

エッフェル塔とセーヌ川クルーズ以外はローランに任せただけで当日まで分からなかったのだが、どうやらこれは期待してよさそうだな。幸先のいいスタートに、ルネはともすればにやけそうになった。「どうした、ルネ、おかしな顔をして…」

カメラを再び構えたローランが、怪訝そうに聞いてくる。

「いえ、何でもありません。あ、ローラン、ひとつお願いがあるんですが、いいですか？」

「何だ？」

「独りきりで写真に映っても何だか寂しい気がするんで、よかったら一緒に撮りませんか？」

「ああ？　一緒に記念写真だ？　…全く、女の子みたいなことを言う奴だなあ」

呆れながらもローランは、近くにいた大学生くらいの日本人カッブルに頼んでカメラを預けると、素早くルネの傍に来て、その腕を掴んで引き寄せた。

たちまち、近くの芝生の上に座っていたグループからヒュツと口笛や軽い野次が飛んで来て、ルネは思わず身を固くする。

すっかり忘れていたが、どこか芸能人かと思うくらいに目立つローランと親密に身を寄せ合ってもしたら、余計な人の注意を引いてしまうのは当然だった。べたべたしている男女カッブルならそこら中にいるが、それと同じことを同性相手にできるほど、田舎育ちのルネはさばけていない。

「ちょ…ちょっと近すぎませんか？　カメラを頼んだあのカッブル、少し引いてるみたいですよ？」

「ふん、どこからどう見ても立派なゲイのカップルだが、それがどうした。大体お前が頼んだらだろうが…面倒だから、さっさとすませるぞ」

この男の頭の中には『恥』という概念は存在しないのかもしれない。

ローランはもじもじと後ずさりするルネの肩に手を回して抱き寄せ、今にも頬が触れんばかりに顔を近づけて、困惑顔でカメラを構えている青年に合図を送った。

「笑え、ルネ」

「は、はいっ」

腹をくくったルネが全開にした笑顔をカメラに向けると、お馴染みのシャッター音が響き渡った。

「メルシー」

ローランの腕の力が緩むや、ルネはすりとそこから抜け出し、動揺を鎮めるため噴水の周りをぶらぶら歩いた。

そこに、若いカップルからカメラを返してもらったローランが追いつく。

「ルネ、ほら、カメラだ」

「あ、はい…」

「さっきの写真、なかなかよく撮れているぞ。おまえはやけに緊張していたから、どうなるかと思ったんだが、意外にいい表情で写っている」

差し出されたデジカメの画像 内心の葛藤はおくびにも出さず弾けんばかりの笑顔を作っている自分とその傍らで余裕の笑みを見せているローラン ルネは複雑な気分で見つめた。

「その写真、クリスマスに実家に帰った時、家族に何と言って見せるんだ？ 上司か、恋人か？」

「…知りませんっ」

ルネはぶいっとそっぽを向いて、電源を切ったカメラをコートポケットに入れた。

ローランは笑いながら、怒ったように唇を尖らせているルネの頭をひと撫でした。

「さて、写真はもう十分だろう。そろそろエッフェル塔まで歩いて

行ってみるか」

「…はい」

シャイヨー宮からセーヌ川を挟んで対岸にあるエッフェル塔は、離れて見てもよかったが、すぐ下から眺めても壮観だった。そして、やはり観光客であふれていた。

展望台に登るエレベーターの前には当然のように長蛇の列ができていたが、はなからエレベーターを使う気のないローランに連れられて、ルネは階段を使って第二展望台まで上がった。

「このレストランでの夜景を眺めながらも食事もなかなかいいから、またの機会に一緒に来ような」

「それじゃあ、その時までには、他の友人に誘われるも断ることにします。楽しみにして待っていますから、絶対誘ってくださいね」

微笑みながら頷くルネには、どうせその場限り口約束だろうという疑いは微塵も湧いてこない。

（少し前なら適当に聞き流す所だけれど、今は素直にローランの言葉を信じることができる。次の機会がいつになるかは分からなくても、約束したことはこうしてちゃんと守ってくれる人だと見直したから）

展望台からは、先程記念写真を撮ったシャイヨー宮殿や反対側にはシャン・ド・マルス公園の広々とした緑地帯が見下ろせる。

「…あの公園は、もともと練兵場や閱兵所として用いられていたこともあって『マルスの野』と呼ばれているんだ。近くに今でも陸軍士官学校があるのも、その名残と言えるのかもな」

「向うに見える、高いビルは何でしょうね」

「ああ、あれはモンパルナス・タワーだな。パリ市内では、一番高い建築物だ」

この日は空気が澄んでいて、パリの美しい街並みを遠くまではっきりと一望することができた。

普段は別に、高い場所に登ることに食指の動かないルネだが、ローランと2人で眺める景色は、地上を歩きながら見る街とはまた違

った印象で、飽きずにいつまでも眺めていられそうだった。

またローランが、にわかガイドにしてはなかなか優秀で、興味深い解説をして、ルネを飽きさせることがなかった。

（ふふ、もつとも僕は、目の前の公園の由来に特別興味がある訳じゃないけれどね。たぶん、ローランと一緒にいられることが純粹に楽しくて仕方がないだけなんだ）

こんな幸せな休日をごせるなんて夢ではないのかと、ルネがこつそりほつぺたをつねって見た時、ふいにローランの携帯電話が鳴った。

ローランは夢から覚めたようにはっと息を吸い込んで、ポケットから携帯を取り出す。

「ルネ、ガブリエルからだ」

「……」

一瞬言葉をなくすルネに頷きかけるや、ローランは素早く背中を向けて、電話に出た。その間、三秒も経ってはいまい。

（仕方ないな……いくらデート中だって、ガブリエルからのコールはローランにとって最優先であることには変わらないもの。それくらいは理解しよう。せつかくの休日を一緒に過ごしてくれただけでも僕も満足すべきなんだ）

そう自分に言い聞かせながらも、ルネは胸の奥に何かがつかえたような気分になった。

「すると、お前は今ジュネーブにいるのか。いつまでだ……？ 何だ、今夜にはもう移動するのか」

しばらくローランの背中を眺めていたルネだったが、話が少々込み入ったものになりそうだったので、遠慮して、その場を離れ、展望台の中を一人でゆっくりと回ることにした。

（何だか、いきなり夢から叩き起こされたような気分だ。ほつぺたをつねったりしたのがいけなかったのかな……？）

思わず頬に手を押し当てて、ふっと苦笑する。強化ガラスの向こうの美しい街並みも、急にその輝きを失ったように思われた。

（大天使は今スイスのジュネーブにいる。パリからだ、会いに行こうと思えば行ける場所だな）

同じ柔道教室に通っている大学生が、友達とパリからスイスを経由してドイツまでドライブに行ったと話していたことを思い出しながら、ルネは次第に落ち着かない気分になってきた。

「ルネ」

いきなり背中から声をかけられて、ルネは飛び上がりそうになった。振り返ると、ローランがすまなそうな顔をして立っていた。

「ムツシュ・ロスコーは何とおっしゃってきたんです？ 何か問題が発生した訳ではないんですか？」

「いや、いつもの定期報告だ。一応毎日俺に電話をかけてくれることになってるんだ。ただ、旧友を見舞うためにジュネーブまで来ているという話は聞いたばかりなので、少々驚いたがな。あいつもいきなり気まぐれを起こすから……」

「本当に、それだけですか……？」

「ああ、心配するな、ルネ」

ローランは何事もなかったかのようにルネに笑いかけ、その肩を優しく抱いて、展望台からの風景を指差しながらまた先程の話を続きを始めた。しかし、彼が別の何かに心を捕らわれていることは明らかだった。

（ガブリエルのことになるんだ。ジュネーブはそう遠くない。ローランが会いに行こうと思えば、今からでもすぐに会いに行ける）
いかにも平気そうなローランの横顔を気遣わしげに横目で何度も見やりながら、ルネの心もまた、このデートとは関係のない別の考えに捕らわれていった。

結局どちらもが興奮めしたような雰囲気のまま、その後すぐに2人は展望台を下り、シャン・ド・マルス公園の方に向かって歩いて行き、途中見つけたカフェでランチを取った。

会話はそれなりに弾んだが、ローランの心を半分以上占めているのが誰であるかに気付いてしまった以上、ルネが素直にこのデート

を楽しむことはもうできなくなっていた。

食後のコーヒを飲みながら、ローランがちらつと腕時計を確認するのにも、ルネも同じように時間を確かめてしまう。

まだ14時を少し回ったところだ。おそらく、今からすぐにローランが自宅に戻って、そこから車を飛ばしてジュネーブに向かったとしても、ガブリエルを捕まえることは可能な時間だ。

「…時間がどうかしたのか、ルネ？」

考えていることが顔や態度に出やすいルネのことだから、目敏いローランに気付かれても、当然だった。

「あ、いえ…別に…」

ルネは一瞬、適当に誤魔化そうかと思った。何食わぬ顔をして、このままローランとのデートを続けたって、よかった。

愛するローランと2人きりで過ごす初めての休日。彼との距離をもっと縮めたいなら、その心を自分のものになりたいなら、このチャンスに逃がすべきではない。しかし。

(ああ、僕って、本当に馬鹿がつくくらいにお人よしだ)

思わず、溜息がルネの口について出てしまい、ローランはますます怪訝そうに眉を潜めた。

「ね、ローラン、あなたがこの休日を僕と2人きりで過ごすことと決めてくださったこと、僕はとても嬉しかったです」

心を決めたルネは、ローランが口を開くより先に切り出した。

「でも、考えてみたら、そもそも僕はあなたを元気にしたくて、そのためなら何でもするから言ってお下さいとお願いしたんです。そして、その気持ちは今でも変わっていません」

「ルネ？」

ローランは、いきなりルネは何を言い出すのかと怪しむような戸惑い顔で、その名を呼ぶ。

「ローラン、僕を相手に気を使ったり遠慮したりするなんて、あなたらしくないですよ」

ルネはテーブルの下で膝を掴む手に力を入れ、心の中で自分を励

ましながら続けた。

「ガブリエルに会いに飛んでいきたいなら、そう言ってお下さい。いつものように、『悪いが、ルネ、俺はガブリエルが最優先なんだから我慢しろ』と命じられれば、僕は、今からあなたがジユネーブまで素っ飛んでいくとしても、笑って見送りますとも」

ローランは瞑目し、軽く息を吸い込んだ。

言うべきことを一息に言ったルネは、むしろ清々としたというように、からっと笑って見せた。

「大体、ガブリエルに会いたくて気もそぞろのあなたを独り占めにして、何も感じずに笑っていられるほど、僕はずるくはなれません。本当はそれくらい狡賢く立ち回れば良かったんですけど、そういうタイプではないんですよ、残念ながら」

軽く肩をすくめて、ルネはカップに残っていたコーヒーを一息に飲み干した。

「…ルネ」

しばらく何も言わず、食い入るようにルネを見つめた後、ローランはやっと口を開いた。

「そこまで言われたら、俺はもう、言い訳も何もできないな」

ローランの顔に痛快そうな笑みが広がっていくのを黙って見守りながら、ルネは満足と共に一抹の寂しさを噛みしめていた。

ローランが椅子から立ち上がるのに、ルネもつられて立ち上がった。

ローランは、テーブルを回ってルネのもとにいくと、その体を引き寄せて深く抱きしめた。

「ありがとう。この埋め回せは、必ずする」

ローランの大きな手が頭の後ろに回り、背中に回ったもう片方の手が言葉にできない想いを伝えようとするかのようにぐっと力を込めてくる。ルネはとっさに目を閉じて、こみ上げてきそうになった涙を堪えた。

「気をつけて行ってらっしゃい、ローラン。くれぐれも気が逸り過

ぎて、事故を起こしたりしないでくださいよ」

「そんなへまはするものか」

ローランは喉の奥で笑いながら、ルネから身を離した。コートを椅子から素早く取り上げて、そのまま急ぎ足で店を出て行った。

自分のもとから去っていく愛しい男を手を振って見送り、その姿が完全に視界から消えた後、ルネは力尽きたように再び椅子に座り込み、頭を抱え込んだ。

（あーあ、話がうますぎると思ったんだよ。まあ、でも、仕方ないかあ。僕はやっぱりローランが好きなんだもの。あの人は今一番求めているのが大天使なら、会わせてあげないわけにはいかないよ。ジュネーブで大切なご主人様に思う存分頭を撫でてもらって、すつきり爽やか、元気な顔で帰ってきてくれたら、それでいい）

そうは言うものの、やはり落胆せずにはいられないルネは、しばらくテーブルの上に突っ伏したまま、死んだように身動きしなかった。

カフェの店員が恐る恐る様子を見に来て、やっと顔を上げたルネは、気分を切り替えようとびしやりと頬を両手で打った。

「さて、これからどうしようかなあ」

せっかくだから、家族へのクリスマス・プレゼントを探しに行こうかと思いつながら、コートを着て、何気なしにポケットに手を突っ込んだルネは、そこにローランから預かったクルーズ船のチケットが入っていることに気付いた。

「ああ、そっか…これも、もういらないな」

一瞬破り棄てようとしたのを思いとどまり、乗船場所と時間を確かめた。

「せっかくだから、1人でも行こうかなあ。前から一度乗ってみたかったんだし、せっかくフルコースの食事もついているのに、捨てるのは勿体無いよね」

ルネは再びそのチケットをポケットに直して、カフェを出た。

1人で歩くセーヌの河岸は、ついさっきまでローランと歩いてい

た時に比べると魅力が半減してしまったような気がした。

ルネは適当な場所で地下鉄に乗って、家族へのクリスマス・プレゼントを探しに、ギャラリー・ラファイエットなど市内の大きなデパートに行つて、時間を潰すことにした。せつかくだから観光の続きをしてもよかつたのだが、何だかその気も失せてしまったし、教会などの建築に格別興味がある訳でも、美術館でじっくり名画を鑑賞するほど絵に関心がある訳でもなかった。秘書としての教養を身につけるためには、それらも必要なかもしれないが、今は、ローランにつながる仕事のこととも思い出したくない。

ギャラリー・ラファイエットは、クリスマス・プレゼントを求める買い物客やたらと騒がしい中国人観光客らで想像以上に混み合っていた。

あまり人混みに慣れていないルネは酔いそうになつたが、それでも何とか家族へのプレゼントを手に入れることはできた。

(母さんにはカシミアのセーター、父さんには革の財布、兄さんにはライター……義姉さんには、頼まれてたエルメスのスカーフを買つたから、それでいいよね。あ、ついでにチョコレートやお菓子もお土産として買っておこう)

買い物をするのが紛れるというのは、女子にのみ許された特権かと思つていたが、そうでもないようだ。クリスマスの装飾のなされた明るい店内で、予め家族から電話で聞いていたリクエストと照らし合わせながら商品を選んでみると、沈みがちなルネの心もいくらか浮き立った。

しかし、ついつい財布の紐が緩んで、余計なものまで買ってしまふようだ。

よせばいいのに、ワイン売り場にも立ち寄つて、ネットで調べかねてから飲んでみたかつたレア物のジャック・セロスを見つけた途端、衝動的にレジに走つてしまい、更に荷物を増やすことになつた。

大型デパートを上から下までくまなく練り歩いて、ルネがやっと

外に出た時には、外はとつぷり日が暮れていた。

（ううん、今からアバルトメンに荷物を置きに帰るのも面倒だし時間もないし、いいや、このままクルーズ船に乗り込んじゃえ。どうせ気兼ねする相手もない、独り飯になるんだしさ）

一瞬ローランに置き去りにされてしまった我が身に気がついたルネは、寂しさで胸を塞がれそうになる。

（ううん、今更愚痴なんてこぼすもんか。ガブリエルに会いに行ってくださいって、この僕からあの人に言ったことなんだから）

そう、自ら送りだしたのと置いて行かれたのでは、天と地ほどにも意味合いが異なる。だから、絶対に認めるものか。

ルネは顔をぐっと上げ、歯を食い縛った。そして、両手に大荷物を抱えたまま、よたよたと地下鉄の駅を目指した。

本来ならばローランと2人で楽しむはずだったディナー・クルーズ。

ほとんど満席の船内で、ルネは今、独りきり、そのテーブルに着いている。

ローランが予約してくれたのは、一番前方に位置する、テーブルも二つしかない端の席で、こんないい場所を自分だけで陣取っているのは申し訳ない気がしたくらいだった。

横目でオルセー美術館を見ながら船は出港し、ディナーも始まる。（あ、ノートルダム寺院だ。ライトアップされて綺麗だな。やっぱり一度見学に行っておけばよかった）

アントレのフォアグラをちぎったパンに乗せて口に運びながら、ルネは、窓の外を流れていく美しくも荘厳な建物に見惚れていた。

ワインは白を一本。これもローランが頼んでくれていたようで、ルネの知らない銘柄だったが、なかなか美味しかった。

周りのテーブルはほとんどカップルばかり。やはり、気にならな

いと言えば嘘になる。

（本当なら、僕もローランと一緒にここに座っているはずだった。もしも彼がここにいたら、僕は、他のテーブルの様子なんか全く気にも留めなかつたに違いない。川から眺めるパリの夜景は綺麗だけれど、彼と2人で眺めたなら、もっとロマンチックな気分浸れたんだろうな）

楽しげに談笑しながら食事をするカップルやグループ客達と違って、独り飯のルネのペースは早くなりがちだ。

給仕がやってくるのを待つのも面倒なので、そのうち勝手にボトルからグラスにワインを注いで、次の料理が運ばれてくるまでの時間を窓の外の夜景に集中することで何とかやり過ごす。

（駄目だ…後悔なんかしない、愚痴なんかこぼすまいと決めていたのに、ここに座っていると嫌でも自覚してしまう。どんなに格好をつけたつて、僕は結局ローランに置き去りにされたんだ。あの人は僕を振り返りもせず、まっすぐガブリエルのもとに飛んで行った）
ルネは、ふいに込み上げてきた感情を抑えかね、両手で顔を覆った。

動いた弾みで、テーブルの下に押し込んでいた荷物に足が当たり、デパートの袋が横倒しになる。

「あっ」

慌ててルネは、椅子を引いて身を屈め、荷物をもとに位置に戻した。

（クリスマス休暇は実家で過ごして、年が明けたらすぐにパリに戻るつもりだったけれど、いっそのこと、もうここには戻らない方がいいかもしれない）

家族へのクリスマス・プレゼントの包みに触れながら、ルネはふっと考えた。

（何だか、僕、ローランを追い続けられる自信がなくなってきた。あの人が喜ぶ顔が見たくて、尽くすのはいい…でも、永遠に振り返ってくれない人をいつまでもただ追い続けるのも、時に虚しくなる。

僕の心は、今はあの人への熱い想いでいっぱいだけれど、このままじゃ、いつか、その熱も冷めてしまいそうだ。愛想が尽きるまで傍にいてやるなんて考えたこともあるけれど、それよりは今、あの人のもとを去った方がいいかもしれない。そうしたら、ローランと一緒に働いたパリでの日々も、いい思い出となって残るから…もつとも、思い出にできるくらい、個人的に親密な時間を過ごしたことは少ししかないんだけどね)

ルネはしんみりとなりながら、グラスに残ったワインを一気に飲み干した。

(ローランにとって、僕は何なんだろ…ガブリエルとは比較にならないとしても、少しは大切に思ってくれているんだろうか)

船の前方に、金色の光に包まれたエッフェル塔が見えてきた。

(ああ、ローランと一緒にあそこに登ったんだなあ)

エッフェル塔や隣接するビル群、セーヌ川に映る金色に揺らめくその影は、昼間見た風景とはまた趣を変えて、溜息が洩れそうになるほど美しい。

次第に、エッフェル塔は船の近くに迫ってくる。

その姿がふいにぼやけて見えなくなったのに、ルネは自分の目が涙でいっぱいになっているのに気がついた。

(わっ、やば…)

とっさにナプキンを持ち上げて、人知れず涙をぬぐったその時、ルネの携帯の着信音が鳴り響いた。

「す、すみません」

近くのテーブルの客からうつろんなような目を向けられたルネは、慌てて鳴りつづける携帯を引っ張り出し、その表示を確かめた。

「えっ…ローラン…?」

ルネは瞠目した。心臓が一瞬止まったかと思った。

(ガブリエルと一緒にジュネーブの休日を楽しんでいるはずのローランが、今頃どうして…?)

戸惑いながらも、ルネは通話に出た。すると、耳に馴染んだ、口

ーランの艶のある低い声が聞こえてきた。

(ルネ、今、どこにいる?)

ルネはしゃきんと背筋を伸ばし、おろおろと周囲を見渡ししながら、携帯を半分手で隠し、こっそり囁いた。

「あ、あの…今、例のクルーズ船に乗ってて、ディナーの最中なんですか…」

(何だ、おまえ、独りでディナー・クルーズ船になんか乗ったのか) 誰のせいだと一瞬噛みつきそうになるのを堪えながら、ルネは言い訳した

「どうしようかと思ったんですが、せつかくあなたに予約してもらったチケットがもつたいなかったの…」

ローランは、電話の向こうで苦笑とも溜息ともつかぬ息を漏らした。

「あのローラン…あなたは今、どこに…ムツシュ・ロスコーと一緒にじゃ…」

おずおずと確かめようとするルネの声を遮るよう、ローランは問うてきた。

「クルーズが終わるのは何時だ?」

「ええつと…確か、21時15分着です。オルセー美術館の傍の船着き場です」

「分かった。それに間に合うよう、迎えに行く」

「ハ…ハアツ?!」

素っ頓狂な声を発し、電話を掴んだまま思わずテーブルから立ちあがってしまうルネに、またしても多くの視線が突き刺さる。ルネは焦りながら、椅子に座りなおした。

「ロ、ローラン、それって一体…?」

ルネは気を取り直して携帯に向かって問い直すが、せつかちなローランは既に一方的に通話を切っていた。

(迎えに来るって、どういうこと…? まさか、ローランはパリに戻ってきているのか…?)

キツネにつままれたような気分で、ルネはしばし携帯電話を睨みつけていたが、やがて諦めたようにそれを再びジャケットのポケットになおしこんだ。

いつの間にかディナー・クルーズは終盤に差し掛かっていた。

テーブルの上にはほとんど手つかずで残っていたシヨコラのムースを再び口に運んで、ルネがぼんやり考え込んでいるうちに、夜景の向こうに再びライトアップされたオルセー美術館が見えてきた。

クルーズ船から降りたルネは半信半疑、辺りを見渡した。

クルーズ客達がそれぞれ帰路に着く中、ルネがゆつくりとオルセー美術館に向かって歩いていくと、斜め脇から車のクラクションが鳴り響いた。

反射的に振り返るルネの視線の先には、見たことのある、濃い緑のルノー車が止まっている。

ルネは大荷物を両脇に抱えながらも、全速力でその車に駆け寄った。

「ローラン！」

ルネが見る前で、車のドアが開き、粹な黒のスーツに身を包んだ男の姿が現れる。

「ルネ、ディナー・クルーズはそれなりに楽しめたのか？」

顎をしゃくつて、河岸に停船しているクルーズ船を示しながら横

柄な口調で尋ねるのは、真正銘ローラン・ヴェル又だった。

「しかし、大荷物だな、ルネ…クリスマススの買い物か…？」

「ど…どうして、あなたがここにいるんです、ローラン?!」

まだ目の前の現実が信じられなくて、上ずった声で問いたですルネに、ローランはうるさそうに手を上げた。

「俺がパリに戻ってきたことに、何か文句でもあるのか、ルネ？」

「だ、だって…あなたはムッシュ・ロスコーに会うため、ジュネー

「ブに行つたはずでしょう？」

「ジユネーブには行つたぞ。ガブリエルにも会つた」

「そ、それなら、なぜ…？」

ローランはやれやれというように肩をすくめ、呆然と立ち尽くしているルネに歩み寄り、その顔をじつと見下ろしながら囁いた。

「なぜなら、俺はおまえと約束したからだ、ルネ。せつかくのデートを途中で中断してしまつたし、楽しみにしていたディナー・クルーズにも間に合わなかつたのは悪く思っている。しかし、今夜から明日の1日をかけて、その埋め合わせは十二分にするつもりだ」

ルネは問い返す代わりに、ぱちぱちと瞬きした。

「言つたはずだ、ルネ、俺は約束を守る男だ」

驚きのあまり声も出せないでいるルネに向かってローランは微笑みかけ、その腰に手を回して深々と抱き寄せると、とびきり甘い声で付け加えた。

「俺にとって、価値ある相手と交わした約束ならば、尚更な」

「ローラン…」

ローランの胸に頬を押し付けられたルネは、彼の愛用のコロンの甘くセクシーな香りを吸い込みながら、うっとりとして囁いた。

（ローランは戻ってきてくれた。僕との約束を守るため…僕のために…！）

ルネの心臓は、その胸の奥で感動のあまり打ち震えている。

（ああ、畜生畜生、好きだ…僕はローランが大好きだー！！）

エッフェル塔の天辺から世界中に向かって叫んでいる自分の姿を想像しているルネの顔をローランの手が上げさせ、素早く下りてきた唇がルネのそれを覆った。

（ローラン、あなたを愛してる）

ルネはローランのキスに応えるよう、彼の唇を夢中になって吸った。

力の抜けたその手から、デパートで買った荷物がどさりと地面に落ちる。

「ああっ、奮発して買ったジャック・セロスが！」

ルネは一瞬で我に返った。自分を熱烈にかき抱こうとするローランを突き飛ばして、地面に座り込み、血相を変えて荷物の中から取り出したシャンパンを確かめる。

「大丈夫…ああ、瓶は割れてないみたいだ…よかった…」

高級シャンパンのボトルを嬉々として抱きしめているルネを見て、ローランはちよつと寂しそうな顔をした。

「それにしても、ローラン…ムツシュ・ロスコーとはちゃんと話をすることはできたんですか…？ 僕との約束をこうして守ってくれたことは嬉しいですけど、ガブリエルと一緒に休日を過ごした方が、あなたはよかたんじやないですか？」

「俺は、一目あいつに会って、その声を直接聞いて、それで満足してきたからいいんだ。スイスに留まって休日をあいつと過ごすつもりは、初めからなかった。あいつにとつても、まさか俺がジユネーブにやってくるなんて予定外のことだからな。一体何しに来たんだと呆れられたところか、俺が、おまえとのデートを途中ですつぽかして飛んできたと知って激怒していた。全く、あいつに殴られたのは久しぶりだぞ」

「ムツシュ・ロスコーにな、殴られたんですか?! パ…パーですすか、それともグー？」

「容赦なく拳で殴られた。あいつのパンチは結構効くぞ…今でもちよつと顎が痛い」

ルネは慌てて、ローランのハンサムな顔に傷が残っていないか確かめた。

「よかった、痣にはなっていないですね。しかし、ムツシュ・ロスコーって、きつい方なんですね…そうは見えないのに…」

「仕方ないさ。ガブリエルがしばらく身を隠すことは俺も了承してしたはずなのに、実際会えなくなると我慢できなくなったなんて、情けない話だ。ルネ、おまえにも余計な心配をかけて、すまなかった」

「い、いえ、僕は別にいいんです。あなたが、元気を取り戻してくれさえしたら、それで……」

ルネは、ガブリエルに会えたものの、その叱責を受けたことでローランが返ってダメージを受けていないか心配したが、昨日までとは打って変わって、彼は生気を取り戻していた。

「本当に、ムツシュ・ロスコーは、あなたにとって必要不可欠な方なんです。一目会って、ぶん殴られて帰ってきただけでも、満足だなんて……」

半ば呆れ、半ば悔しいような腹立たしいような気分になりながら、ルネは言った。

（本当は認めたくないけれど、ローランのそんな気持ちは、僕には理解できる。僕だって、ローランがいない間、仕事も何もする気にならなくて、毎日が虚しかった。ローランが傍にいてくれれば、それだけで、僕は……）

我ながら、全く現金なくらい、一人ぼっちにされた恨みつらみも綺麗さっぱり忘れさせて、今のルネは幸せだった。

「まあ、いずれにせよ、クリスマスにはあいつはパリに戻ってくるからな。それまでの辛抱だと思えば、俺も、あいつの不在の物足りなさをやり過ごすことができそうだ」

「クリスマスは、あなたはムツシュ・ロスコーと一緒に過ごされるんですね？」

肉親とは縁の薄いローランにとって、最も家族に近いのがガブリエルなのだと思えば、それも仕方ないのかなと、ルネはこっそり自分に言い聞かせた。

「別に、2人きりで過ごすって訳じゃないぞ」と、ルネの胸の内のもやもやと見抜いたかのように、ローランは言った。

「年に一度、クリスマスに一族の主だった人間が集まるのが、ロスコー家の慣例なんだ。国中のロスコーやヴェルヌ、リュリとかが一堂に会し、親睦を深め、一族の発展のため結束を誓い合う。もちろん、ガブリエルの爺さん……ジル・ドウ・ロスコーも一族の長として、

隠居していたブルゴーニユからパリにやってくることになっている」
「へえ…なかなか盛大な催しになりそうですね」

「しかし、今年のクリスマスは親睦を深めるどころか、荒れるかもしれないぞ。ガブリエルがホスト役として会を取りしきることになっているし、それに、ボルドーに引きこもっている、あの男も恒例のクリスマスの集まりだけではどうしても出席しないわけにはいかな
いからな」

「つまり、ジル会長の弟のソロモン・ドウ・ロスコーのことですね…？」

ルネは考え深げに首を傾げながら、ローランの腕を心配そうに指先でそつと擦った。

「敵対している者同士が、クリスマスを名目に直に顔を合わせて…何事もなく、終わればいいですけど…？」

できるものなら、ローランを守るために自分もついていきたいと思いつながら、ルネは囁いた。

「心配するな。ジル爺さんや他の親族の目もある…ソロモンが、どれほどガブリエルのことを疎ましく思っているか、あいつの懐の中ではおとなしくしている他ない。むしろ、この機会に心理戦を仕掛けて追いつめられるだけ追いつめてやるさ」

ローランは一瞬酷薄な光を緑の瞳の奥底に閃かせたが、再びルネに顔を向けた時、その表情は穏やかなものに戻っていた。

「さて、そろそろ行くこうか、ルネ。こんな河岸でいつまでも話して
んでいたら、体が冷えるだけだ」

「は、はい…でも、行くつて、どこに…？」

「食事はもう終わったなら、俺のアパルトメンに直行するか…？
明日は少し早起きして、約束通りロスコー家のシャトーに連れて行
つてやる」

「ああ、それなら丁度よかった。このシャンパン…あなたの家で、
2人で飲みませんか？」

「ジャック・セロスのプラン・ド・プランか。ふうん…おまえに似

合いそんなシャンパンだな」

「飲んだことないので分かりませんが、それ、僕に似合いそうなんですか…?」

首を傾げて素直に問い返すルネの髪をくしゃりと撫でて、ローランは笑った。

「それは、一緒に飲みながら、確かめればいいだろう? 時間が惜しいから、もう行くぞ、ルネ…俺は、早くお前と2人きりになりたい。それとも、お前は違うのか?」

揶揄するようにローランに言われて、ルネはちぎれんばかりに首を左右に振った。

「もちろん、僕だって、そう思っていますとも。というか、クルーズ船の中では、どうしてあなたはここにいないんだろって、周りのテーブルのカップルを羨ましげに眺めては、独り寂しく手酌でワインを飲んでいたんですからっ」

「…独りでデイナー・クルーズ船になんか乗るからだ。しかし、それも俺の責任だな。寂しい思いをさせた分、今夜はたっぷり可愛がってやるから、もう許せ」

赤くなつて俯くルネの手を取り、ローランはきゅっと握り締めた。「は…はい」

ルネもまた、ありつたけの思いを込めてローランの手を握り返した。

寒いはずのセーヌの河岸にいても、ルネはもう少しも寒いとは思わなかった。

顔を上げれば、愛する人が今はちゃんと傍にいて、ルネだけを見つめて優しく微笑んでいる。

胸の奥が、火が灯ったかのように暖かくなり、体中にそれが広がっていくのを覚えながら、ルネはローランと2人きりのとびきり甘い休日続きを始めるのだった。

Blanc de Blancs (1)

クルーズ船の停泊所で再会した後、ローランと一緒に、彼のアバルトメンで飲んだジャック・セロスのプラン・ド・プランは噂以上に美味しかった。

「セロスは、あまり冷やし過ぎない方がいいんだ」と言って、氷を詰めたワインクーラーに突っ込もうとするルネをやりわりたしなめて、ローランが白ワイン用のグラスに注いで勧めてくれたそれを飲んだ途端、ルネはその香りの虜になってしまった。

「でも、ねえ…このシャンパンが僕に似合っつてというのは、どうしてなんですか？」

ローランの寝室の1人寝するには広すぎるベッドの端に腰かけて、グラスの中の繊細な泡に見惚れ、その香りの余韻の長さにつつとりしながら、ルネは傍らの愛しい人に甘えた口調で尋ねる。

「ああ、そう言えば、そんなことを話したかな。思いつきで漏らしたことで、それほど深い意味はなかったんだが…」

ルネの追及に、ローランはちよつと困ったような曖昧な顔をした。2人一緒にシャワーを浴びた後のこと。額に落ちかかる濡れた前髪を指先で弄いながら考えこむ彼は、いつもと違って年相応に若く見え、ルネに奇妙な親近感を抱かせた。

「一般的にブレンドを前提として作られるシャンパンの中で、プラン・ド・プランというのは、白葡萄酒のシャルドネのみで造られたシャンパンのことだ。混じりけのない白の中の白というイメージが、おまえに似あっている気がした。数ある作り手の中から、自分が納得するいい物を作るためには手間を惜しまず、あくまで自然農法にこだわるセロスに惹かれたのも、お前らしいと言えばおまえらしい。まあ、後半は後付けの理由だがな」

「あまりピンときませんけれど、それって、あなたの抱く僕のイメージなんですか…？」

「ああ…清冽で潔癖、混じりけのない純粹さの中に、とても強い芯を持っている」

ローランが確信のこもった口調でそう言うので、ルネは眉根を寄せながら、神妙な面持ちでもう一口シャンパンを飲んでみた。

「やっぱり、よく分かりません。大体僕には、このシャンパンのような高貴で清冽な印象はないと思いますし…白の中の白と評されるほど、いくら田舎者の僕だって清らかじゃあないですよ?」

疑い深げなルネの肩に、ローランの手がそつと乗せられた。

「そう感じるのは、おまえが自分の本質に関して無自覚だからさ、ルネ。他人の目などあてにならないなんて、頭から思いこまないことだ。それは時として、自分では気づくことのできない、おまえの別な一面を映し出す鏡の役割を果たしてくれる」

ローランは戸惑うルネの体を引き寄せて、噛んで含めるように言い聞かせた。その顔は微笑んでいるが、瞳は真剣そのものだった。

「そして俺は、誰よりもおまえのことをよく見ている。おまえの本当の姿を知っている…その俺が言うのだから、間違いないさ。おまえに、このシャンパンはあっている」

ルネは思わず、彼に何もかも見透かされているような恐れを感じて、目を逸らしてしまった。

いつもと違う親しみを抱かせても、やはりローランはローランだ。油断をして素に戻り過ぎると、ひた隠してしている秘密や過去を、彼に知られてしまいかねない。

（ああ、やっぱり僕は、この人に自分の本性を知らせる気はないんだ。このままじゃまずいと頭では分かっているけど、大の男を簡単にぶん投げる僕を見た時のローランの反応を考えると、そこで思考停止してしまう）

一瞬、咎めるようなガブリエルの顔が脳裏に浮かんだが、ルネはそのイメージを慌てて打ち消した。

「ルネ、どうした?」

「い、いえ…軽いプレッシャーを感じただけです。あなたが抱く僕

の清らかなイメージを崩さないよう、せいぜい努力しますけれど、どうしても無理なものは無理なんですから、あんまり過大な期待はしないでくださいよ」

ローランの笑いを含んだ低い声がルネの頭の後ろでし、その手がルネの手からグラスを取り上げて、ベッド脇のサイド・ボードに置いた。

「馬鹿：無理などしなくても、おまえはいつも、俺の期待以上だ」
ローランの逞しい腕が深々と抱きしめてくるのに、用心深く身を固くしていたルネはほっと息をつき、目を閉じた。

（成程、ローランは途中ですっぽかしたデートの埋め合わせをする気満々みたいだ。当社比で糖分5割増しくらいかな）

意地悪くそんなことを思いながらも、ルネが彼との2人きりの甘く熱い夜に溺れていくのに、さほど時間はかからなかった。

「ルネ、ルネ、ワインが足りないから、キッチンに行ってもう一本ジャックの手土産の赤を取ってきてくれ」

ぼつと物思いにふけていたルネは、傍らの父親にいきなり声をかけられて、一瞬軽く飛び上がりそうになった。

「う、うん。ついでに、リンゴのブランデーも持ってこようか」

動揺を押し隠してテーブルから立ちあがるルネに、クリスマスの御馳走とワインをお腹にたらふく詰め込んで上機嫌の父が、赤ら顔を綻ばせながら言った。

「ああ、そりゃあ、いい。うちの自家製のブランデーをきゅっと飲めば、消化がよくなるからな」

彼と同じく赤い顔でテーブルを囲む家族・親戚一同の中から、ルネを追うように立ちあがったのは、義理の姉のカミーユだ。

「それじゃあ、私はチーズを用意するわね。デザートはもう少し後でいいでしょう?」

毎年恒例のクリスマス・ディナーの二日目、この夜トリュフォー家のテーブルに集まったのは8人。隣村に住む大叔母夫婦も含めて、子供の頃からよく見知った間柄だが、帰省したルネに再会した時は、皆一様にその変貌ぶりに仰天していた。

「…それにしてもまあ、ルネはすっかり垢抜けて、綺麗になったねえ。こんな言い方をしちゃなんだが、カミーユより美人じゃないか」「都会に出たら、あいつも少しは変わるだろうとは思っていたが、まさかたったの3カ月そこそこで、あんな別人みたいになるとはびっくりしたよな」

ルネが部屋を出た途端、まだ彼の新しい姿に慣れていない人達が、我慢しきれなくなっただかのようにそれぞれ感想をもらし始める。

「馬鹿ね、パリで生活を始めたというだけで、人があそこまで変わるものですか。たぶんルネには、新しい恋人が出来たのよ」

勘のいい従妹の1人がずばりと言うのに、ルネは反射的に部屋の方を振り返りかけた。その肩を、義姉のカミーユがぱんと叩いた。

「気にしないの、ルネ。皆、単純に、あなたの变身ぶりにびっくりして、興味津々なだけなんだから。三日も一緒にいたら見慣れて、きつと話題にも上らなくなるわよ」

色づいたリンゴのように丸い頬が可愛いカミーユはさばけた性格で、義弟の風変わりな性癖にもこだわらず、仲良く付き合ってくれる。

ルネがパリで新しい恋を見つけたことをちらつと漏らしたら、「あら、よかったじゃない」と喜んでくれたが、どんな相手だと深く追求してくることはなかった。そんな適度な距離感が心地いいと、いつもルネに感じさせる相手だった。

「それにしても、相変わらず皆よく食べるよね。大叔母さん特製のフォアグラもあつという間になくなったし、あの大きなガチョウもほとんど食べ尽くされてさ。この調子でチーズとデザートまで全部

平らげるんだろっね」

「親しい者達でワイワイやりながら美味しいものを囲むと、自然と食が進むのよ。明日は明日で七面鳥がメインの御馳走が控えているけれど、これ以上もう食べられないとか言いながらも、結局例年通り、三日間共全ての御馳走を制覇してしまっんでしょっね」

「そして、クリスマスが開けてしばらくは、皆ダイエットと節制に励む訳だ」

ルネとカミューは顔を見合わせて、くすくす笑った。

「身近な親戚一同介してのクリスマスなんて、僕にとつてずっと当たり前前の行事だったけれど、遠く離れた都会での1人暮らしを始めたいかな、今年はいつもと違って新鮮で、それに、ありがたいことだなぁって感じられるよ」

ルネはふと、クリスマス休暇の前日にローランと交わした短い会話を思い出しながら、しんみりと呟いた。

クリスマスは実家で何をして過ごす予定なんだと尋ねるローランに、ルネは、毎年変わらない、トリュフォー家のクリスマスの過ごし方を語って聞かせた。

身近な親戚が一年に一度、プレゼントやワインを手に同じ屋根の下に集まる。家族による手作りならではの趣向を凝らしたテーブルセッティング。野菜や暖炉にくべるまきを運び込む男達。おしゃべりしながらの食事の準備。やがてキッチンから漂ってくる、何とも言えないいい匂い。

たくさんのご馳走とたくさんの笑顔に、お腹も心も一杯に満たされて…。

特別な所は少しもない平凡すぎるルネの一家のクリスマスの過ごし方に、ローランはじつと黙って耳を傾けた後、ぽつりところ漏らしたのだ。

『俺には経験がないのでよく分からないんだが、クリスマスというのは本来そう過ごすべき、楽しい家族行事なんだろうな。おまえの話し方を聞いていると、そう感じる』

別に羨んだり僻んだりとしているわけではない、ローランが素直に漏らした感慨に、ルネはその時はつと胸を突かれた。

ルネとは比較にならないほど裕福な環境で育ったはずのローランだが、肉親にだけは恵まれなかったのだ。

『せっかくのクリスマスだ。仕事のことは綺麗さっぱり忘れて、思う存分楽しんでこい』

ルネに向かって屈託なく笑いかけるローランの目には、どこか眩しげなものを見るかのような表情があった。

（今頃ローランも、ロスコー家のシャトーで、親戚一同を介した盛大なクリスマス最中のはずだけど……それは、僕にとつてのクリスマスとは全く違った意味合いのものなんだろう。おまけに今年は、内紛の当事者の敵同士が顔を突き合わせる訳で、ローランも立場上かなり気が張る席となっているはずだ）

久々の実家でのにぎやかなディナーを楽しみながらも、心優しいルネは、遠く離れたパリにいる大切な人の上に幾度も思いを馳せていた。

ローランはガブリエルの盾となってソロモン一派と神経を擦り減らせる心理戦を繰り広げているだろうに、自分だけが、こんなに温かい団欒の席にいて心癒されているという現実に、どうにも落ちつかなかった。

（ああ、もしもクリスマス休暇に入る前、ローランが僕に、パリに残って欲しい、一緒にロスコー家のクリスマスに来てくれと言ったなら、僕はせっかくの家族行事も今回は参加を取りやめて、迷わず彼について行っただろうな。ううん、本当は、彼からの言葉がなくなっただって、僕はついて行きたかった。ああ、相手が上司だからって、変な遠慮をしちゃったな。正直に、僕もお供させてくださいって、ローランに訴えればよかったんだ）

そんな想像をしながらほそをかむ、ルネのジーンズのポケットで携帯電話がごろごろと鳴り始めた。

キッチンのテーブルでチーズを盛りつけていたカミーユがその手

を止めて、降り返る。

ルネはびくつと身を震わせた後、とっさに取り落としそうになったワインをテーブルの上に置き、鳴り続ける携帯を素早く引っぱり出した。

「は、はいっ」

喜び勇む気持ちが声に出ていそう、ルネは焦ったが、耳に飛び込んできた懐かしい声に、そんな気持ちもすぐに吹き飛んでしまった。

「俺だ」

やはりローランからだ。どうしてだが、ルネには、電話の主が彼だった場合、直感的にそうと分かる。

「ムツシュ・ヴェルヌ…どうされたんですか…？」

万が一にもローランから連絡があった場合に備えて、肌身離さず携帯電話を持ち歩いていて正解だった。ルネは、感激のあまり声が詰まりそうになりながら、そつと囁きかけた。

「いや、特に用事があった訳じゃない。単にお前の声を聞きたくなっただけだ。せつかくの休暇中に電話をかけてしまって、すまないな」

ローランらしくない優しい台詞に、ルネは一瞬胸をときめかせるも、すぐに我に返った。

「すまないなんて、とんでもない…ローラン、そちらの状況はどうなんですか？ あなたの方こそ、今頃はロスコー家のクリスマスパーティーの最中のはずでしょう？ それをうつちやって、僕に電話をかけたくなるような問題が発生した訳じゃないですよ…？」

ローランは電話の向こうで黙り込んだ。おそらく真面目に考え込んでいるのだろう、ルネが不安になるほど長い間沈黙した後、ようやく彼は口を開いた。

「問題ならそれなりに発生しているが、全て折り込み済みのものだから、別段俺が動揺するようなことじゃない。すると、俺はやはり、単にお前の声が聞きたかっただけなんだな」

まるで、今初めて気がついて驚いたといつかのごとく、新鮮そうな口調でローランは言う。

「ローラン」

ルネの胸がきゅんとなった。

「お前の所のクリスマス・ディナーは、どうなんだ？」

「ええ、今夜は八人の家族親戚が集って、わいわいと楽しんでますよ。明日はもう二人従兄弟が増えるので、十名になりますね。うちのダイニングが一杯になりそうです。これでもかというくらいの御馳走が出て、それを何時間もかけて、皆と一緒におしゃべりしながら食べて……僕、確実にちよっと太って帰ると思います」

携帯の向こうで、ローランが心から楽しそうな笑い声をたてた。

「俺の下で仕事を再開したら、心労のあまり、すぐに痩せるから心配するな」

トレイの上にチーズとワインのボトルをのせたカミューが傍らをすり抜けていきざま、ルネに向かって目配せをした。

ルネはぱつと頬を赤らめながら、彼女に向かって唇でメルシーと形作った。

「あの、ローラン……実は、僕も丁度、あなたの声を聞きたいと思っていた所だったんです」

独りきりとなったキッチンの片隅に立ちつくしたまま、ルネは握り締めた携帯に向かって、ぼつりぼつりと語りかけた。

「あなたの顔が瞼の裏にちらついたり、あなたが2人きりの時に僕に囁いた言葉を思い出したり……家族との楽しい団欒の最中に、度々顔が緩みそうになって困りました」

「そりゃあ、聞き捨てならんな、ルネ。家族そろっての理想的なクリスマスを過ごしているながら、心ここにあらずだなんて、けしからん話だ」

「そうは言っても、今頃あなたはどうしているのだろうと考えだすにとまらなくて……ねえ、ローラン、そちらのクリスマスは、僕に電話をかけて現実逃避したくなるほど、最悪なものなんですか？」

ルネの追及に数瞬の間また黙りこむと、ローランは苦笑混じりに答えた。

「いつもの仕事以上にストレスになることは間違いないな。詳しいことは、休暇明けにまた話すが、ガブリエルの奴が、皆の見る前でソロモン相手に口論をエスカレートさせて、激高したソロモンは物凄い剣幕でジル会長共々ガブリエルを罵ったんだ。今まで公の席では和やかに振舞っていた2人だが、今夜を限りに、宣戦布告したよ。うなものだな。集まった親族達は色めき立って、事態の收拾をつけるのに苦労したぞ。おかげで、今夜の会食は予定よりも早く終わった。今頃親族達はそれぞれ、ソロモンとガブリエル、どちらの側に着くか頭を悩ませ、顔色をうかがい合っていることだろうさ」

「…そんな大変なことがあった直後なら、あなたはガブリエルの傍についていたんじゃないんですか？」

「おまえが、そんな心配をするのか？ 俺がガブリエルの世話ばかりに明け暮れるのに、常々不満を抱いているものとはかり思っていたが…？」

ルネの気遣わしげに問いかけに、ローランはちよつと呆れたような、不思議そうな声を出した。

「だって…仕方ないですよ、あなたがどんなにガブリエルを大切にしているのか、僕は散々思い知られていますから。ガブリエルとソロモンの口論に、あなたが乱入しなかつたことだけでも意外なくらいです。かなり我慢なさつたんでしょう？」

「全く、おまえの洞察力には恐れ入るな。まあ、もともとソロモンという男は鼻もちならない嫌な人間だが、いくら俺だって、それをあからさまに表に出すことはしないさ。それでも、あの陰険な男がガブリエルに暴言を吐くのをすぐ傍で聞きながら、殴りかかりたくなる衝動を堪えるのには結構な努力を要した、ということは認めよう」

「ふふ、どこかの政治家みたいな言い回しをしますねえ。そういう回りくどい表現はE N A仕込みですか？」

「ん、そうか…？ 今、周囲にいる親戚達は、それこそ所謂エナルクと称されるような政治家や実業家、高級官僚といった連中ばかりだから、その言い回しがちょっと移ったんだらう。俺自身は普段、回りくどい話は好まん」

ローランは心外そうに言って、軽い咳払いをした。

「ガブリエルは今、ジル会長の部屋に呼び出されて、2人きりで話し合いの最中だ。そんな訳で突然1人になる時間が出来たら、お前のことが思い出されて、電話をかけたくなった。家族団欒に水を差すのも悪いかと思ったが、とにかく声だけでも聞きたかったんだ」
ルネに指摘されて意識したのかもしれないが、ローランは、今度は極めて率直に、そう言った。

「ローラン…」

仕事で傍にいる時は滅多にこんな優しい言葉をかけてくれないローランなのに、今はまるで、遠い場所にいる恋人に語りかけるかのような甘い囁きで、ルネの心をぐらぐらと揺さぶってくる。

（あなたは今、自分の秘書としての僕に話しているんですか、それとも…仕事を離れたプライベートな時に声を聞きたくなるくらい、僕個人を求めてくれてるんですか…？）

そう尋ねて確認してみたいような誘惑にルネは駆られたが、それを口に出すにはまだ勇気が足りなかった。代わりに、彼はこう言った

「あの…僕、年が明けまで実家でゆっくりするつもりでしたが、予定を早めて、あさつてにはパリに戻ろうと思います」

「…何故？ 俺に遠慮することはないんだぞ。休暇をもらうのはおまえの正当な権利なんだ。おまえは自由に、何でも自分の好きなことをして過ごせばいい」

「電話で話していたら、あなたの顔が見たくて、矢も盾もたまらなくなっただんです。家族団らんはもう充分味わいました。自分の好きなことをして過ごすのが休暇の正しい使い方なら、僕はあなたの傍にいたいと猛烈に思っただんです」

「……………」

ルネは携帯電話の向こうの気配や息遣いに耳を澄まし、ローランが今どんな顔をしているのか想像した。

おそらく、目をぱちぱちさせて、どう応えたらいいものかと考えあぐねるかのように、指先で顎のあたりを引っ搔いていそいだ。

「でも、あなたがせっかくの休暇中にまで僕の顔なんか見たくないというなら、強引に押し掛けたりはしませんよ？」

「いや、そんなことはないぞ」

即答した後、ローランは押し黙った。

「あなたのお傍に戻ってもいいですか、ローラン？」

ルネが控え目な口調ながらも懸命に囁きかけると、ローランはやれやれというような溜息を漏らした。

「俺の下に帰ってくれば、また俺の身勝手に振り回されることは分かっているだろうに、物好きな奴だな、お前も…いいぞ、帰ってこい。俺はたぶん、ロスコー家のシャトーにまだ留まっていると思うが、おまえがパリに着いたなら、迎えに行こう」

「は、はい。ありがとうございます」

携帯を通じてライターの音が聞こえ、ローランが煙草に火をつけて、深く吸い込むのが分かった。

煙草をふかせながら何事か思案を巡らせているローランを、ルネは辛抱強く待ち続けた。

「なあ、ルネ、おまえが俺に甘いのは俺に惚れているからだ、生憎俺は、おまえが寄せてくれる純粋な好意に値する人間ではない。

一体どこまでなら、おまえは俺を許すことが出来るのかな」

半ば独り言のようなローランの呟きに、ルネは眉を潜めた。

「えっと…ローラン、何をおっしゃっているのか、よく意味が分からないんですが…」

不安のさざ波が胸の奥深くに立つのを覚えながら、ルネは問いかけ、ローランは口をつぐんだ。

奇妙な緊張をはらんだ静寂が、しばし流れた。

「パリに戻って来い、ルネ」

ふいに、今までとはどこか違う、決然としたものを秘めた口調で、ローランは言った。

「帰ってきたら、俺はお前を片時も離さず、傍に置くつもりだから、そのつもりでいる。俺に対するおまえの気持ちが変わらない限り、な」

ルネは息を飲んだ。片時も離さず傍に置くとか、これはまるで愛の告白のように聞こえるが、そうなのか、何かの間違いではないのか…？

「は…はあ…」

あまりに唐突過ぎるローランの告白に、ルネはどんな反応をしたらしいのか分からず、戸惑うばかり。よって、ローランの口調に込められた、どこか諦めにも似た虚無的に響きにも気付くことはなかった。

「Je vous aime」

返事に窮して固まっているルネの耳に、ローランの艶のある低い声が囁きかけ、ちゅっと唇を鳴らす音が届いた。

(愛しているって…あー、ローランの口から聞いたの初めてだなあ。あれ、今、ちゅっとか聞こえなかったっけ?)

しばし魂を飛ばしていたルネはかつと目を見開き、慌てて携帯を掴み直した。

「ちよっ、ちよっとローラン、今、なんて言いました?! ていうか、キス…」

今聞いたあれこれが信じられなくて、ルネは血相を変えて確認しようとしたが、こんな時までせつかちなローランは既に通話を一方的に切ってしまった。

「あああつ、今のあれがキスだったなんて、うかつだった!! 僕も返す気満々なのに、なんで勝手に電話を切っちゃうんだよ、ローランの馬鹿!」

頭を抱え、地団駄踏んで悔しがった後、不穏な気配を感じてルネが後ろを振り向くと、いつまで経ってもキッチンから戻ってこない

ルネの様子を見に来たのだろう、おませな中学生の従妹が顔を覗かせていた。

「彼氏からの電話？」

「はは、まあね。僕に会いたいから、早く帰ってこいだってさ」

「まー、らぶらぶじゃないの、すっごーい。ねえねえ、皆、ルネったらねえ……」

興奮に顔を輝かせてダイニングに飛んでいく従妹の後ろ姿を見送りながら、ルネはほっと肩で息をついた。

「ローラン、僕に伝える時間くらい、くれたっていいのに……」

ルネは白い頬を上気させながら、とつくに通話の切れた携帯を顔まで持ち上げて、ここにはいない人にこっそり耳打ちするかのよう
に言った。

「僕も、あなたを愛していますよ。だから決して、あなたの傍を離れはしません……ずっと一緒にいさせてください」

そして、その翌々日、ルネはローランとの約束通り、彼の傍に
いるため再びパリに戻っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9948q/>

花束と犬とヒエラルキー

2011年10月1日12時13分発行